

圍棋神髓

242
420

202-420



1200800034520

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

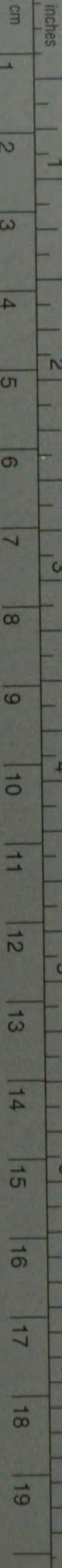
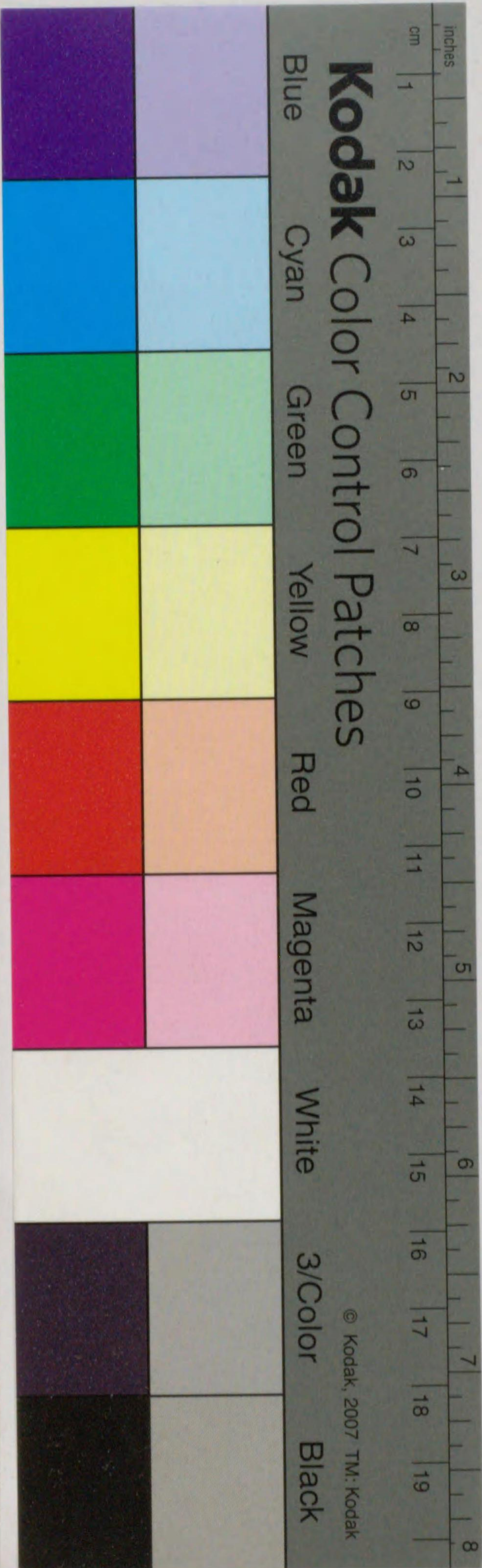
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



402
420

圍棋神髓

日

天

申

圍

會

棋

名人本因方秀俊講述

圍棋神髓

布石法

五先局三十局

大正
5. 3. 17
丙午

名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓



布石法

互先局三十局





師哉秀坊因本世一十二第人名

Vertical Japanese text, likely a name or title, written in a light blue or grey ink. The characters are somewhat faded and difficult to read precisely, but appear to be arranged in a vertical column.



圍棋神髓の巻首に

一 圍棋神髓は、第二十一世(名人)本因坊秀哉師の心血を傾注されたる圍棋全部の詳解なり。

一 圍棋神髓は、廣月絶軒、全責任を以て筆を執れり、然も斷じて私を其の間に挟まず、一に忠實なる傳達者たりし事を確言す。

一 圍棋神髓は、高等圍棋研究録の名を以て明治四十一年に稿を起し、今大正四年の秋を迎へ、前後八閱年、千支萬障を排して茲に尠然たる冊子を完成して斯道の寶典ならしむるを得しは、主として講究倦むを知らざる名人秀哉師の道に忠なるに由ると雖も、又大方幾千の同好會員外護の賜ならずんば非ず。

一 本書の完成と共に脱稿せんと欲して果さざりしは、圍棋術語解これなり、他日機を得て世に問ふ事あらん。

一本書網羅する所、布石法互先三十局、二子二十局、三子十五局、四子十五局計五百二十五頁、○互先定石、一間夾、二間夾、三間夾、○高目 ○目外計四百八十頁

置棋定石 總計 二百三十四頁

附錄 十番棋 六十四頁

一中に就き互先定石中の大斜定石は豫約の如く、近き將來に別冊として世に公にす可し。

一研究餘論は當初合本中に加ふ可き考なりしも、元來これ隨感隨錄的のもの、今日より見て慊焉たるもの多し、他日補訂改竄して本書の讀者に頒つ機あらん。

大正第四秋 今上登極大典舉行の日

東都神田街四絶軒に於て 廣月 凌誌

兒が弱冠の頃、初めて圍棋の道を手ほどきし玉はりしは、我母なりき。東都移住の後、老の身に世途の幾苦辛を嘗めさせまつりて限りなき不孝を重ねぬ。兒が數年間病床に起臥するや、研究錄の中絶して累を全國幾千の會員に及ぼさん事を日夜焦慮し玉はりき。今や本書完成して之を告げまつらんとするも在まさず。謹みて一帙を四年以前七十五歳にて世を去り玉ひし我母の御靈に捧ぐ。

大正第五年の春

絶軒

ての問題も随て起らぬ筈である、勿論或る一隅に黑白の何れか「小目」若くは其の他の二點に一子を下したと假定して、之を名づけて「定石」と言へぬ譯ではない、次で敵が第二着を「目外」若くは「高目」に掛つたとして此の形を指して、是亦同じく「定石」と呼んで差支はないが、然し此等を定石とすれば、其は極めて單簡な定石といふものであつて、適切にいへば實は定石の基礎とすべきものである、其で定石として趣味のある意味は少くとも第三着以後でなければ生じて來ぬ。

所が布石法としての眼から見ると甲隅我一着、乙隅彼一着、已に既に多大の興味を生じて來る、其から先は互に一着々々敵の謀を撃ち或は其の謀の上を行き或は謀の裏を搔き、時には正々堂々の陣を布き、時には奇兵を放つ等、其の間眞に苦心慘憺、棋の面白味も亦實に茲にあるのである。

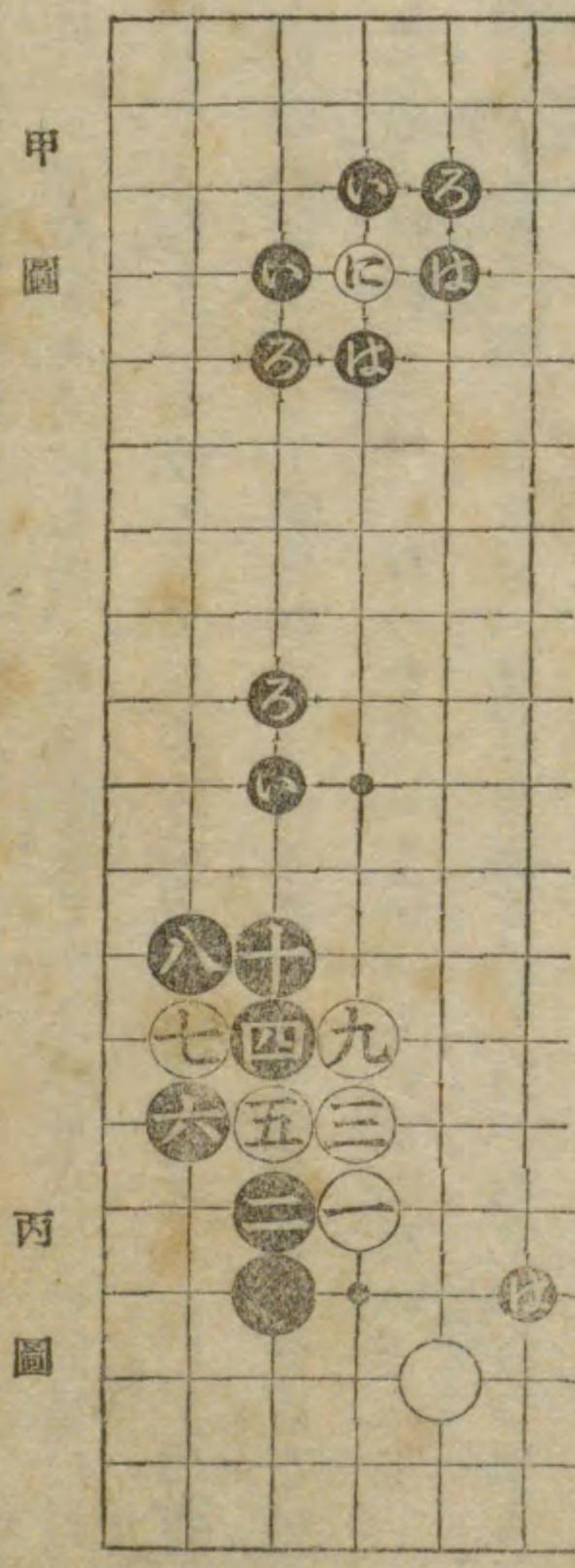
(乙圖) 黒一は「小目」と稱する點で、一隅に根據を占める側から見れば無比の好着點である、其實例を以て證すると、圖の通り白が二と迫つて來た所で、若も黒が是非其隅の主點(隅の主點とは一ノ一、二ノ二、三ノ三、等を指す)を保有(瑕つかずに保持する意)しやうと考へたならば何時でも●に尖みつけて其の目的を達する事が出来る。

然るに白二「目外」の點からは黒が「小目」一の點に掛つた時●と打つて此の要點を占める(占めるとは自己の子で其點を消し之を敵に與へぬ様にする意)事は出来るが、「小目」の時の様に此の點を保有する事は出来ぬ、之は位地が「小目」に比して、隅の主點に一路遠かつて居るからである。

以上は隅の根據を主として「小目」と「目外」どの位地を比較したのであるが、次に中邊及側邊への發展といふ側からいふと、「小目」と「目外」どの價値が全く相反する事になる、即ち次の

(丙圖) 「小目」の黒からは「目外」の白に對し直ちに積極的の之に壓迫を加へる事は出来ないが、「目外」の白からは何時でも圖の通り黒に迫撃を加へておいて、此の勢力を利用して自分は悠然として、方面に大領域を形造る事が出来る、「目外」の位置は「小目」に對し何時でも圖の通り急壓を加へて低地を這はす事の出来るのは此の「目外」の

特長である、其で「小目」の立場からいふと「目外」から、威壓を加へられる弱點があるから、方面の大拓きは不可能(若し方面に大拓きをする、忽ち「目外」の白から圖の通り壓迫されて形を凝らされた其の結果は若くはは不用に等しいものとなる之が拓きの不可能といふ理由である)の事であるが、「目外」は必ずしも圖の通り以下の手順を運ばずとも何時でも運べるといふ條件の下に悠然として、方面を形造る事が出来る、之が側邊に發展する方面から言うて「目外」の「小目」に優る所以である、若丙圖「小目」黒が「目外」以上の活動、例せば●の點から白を威壓しやうと思へば、白一の點に尖の一着を加へた後でなければならぬ。



(局先互法石布)

(丁圖) 「高目」の位地は「小目」及「目外」と全然趣を異にして、隅及根據といふ事は殆んど間接の目的であつて、先づ大勢を制しやう、外面で活動をしやうといふ様な趣がある、尤も此「高目」に打つておいて更に敵の應手によつては戊圖の様に振替つて隅の利益を占める様な變化も無いではないが、其は場合或は趣向に由つて轉化したので最初「高目」に打つた主眼といふものではない。

(己圖) 星即ち⑤の點は置棋として黒の子を布く點であるが、又互先棋に於て白が此點に打つ事もある、然し打つ點は同じとしても置棋に於ける勢子の意味と互先局で白が打着點として擇ぶ意味とは、全然別である、即ち置棋として黒勢子の⑤の一着は全局に亘つて變化を制限し局面を狹隘にして黒の利を計るといふのが主眼であるが、互先棋で白が打着點として擇ぶ意味は、成るべく形の決らぬ様、(紛らさう、變化を多様ならしめやう)そして自然に敵の先着の効果をば消滅せしめやうといふ意味で打つのである。

概括して言ふと

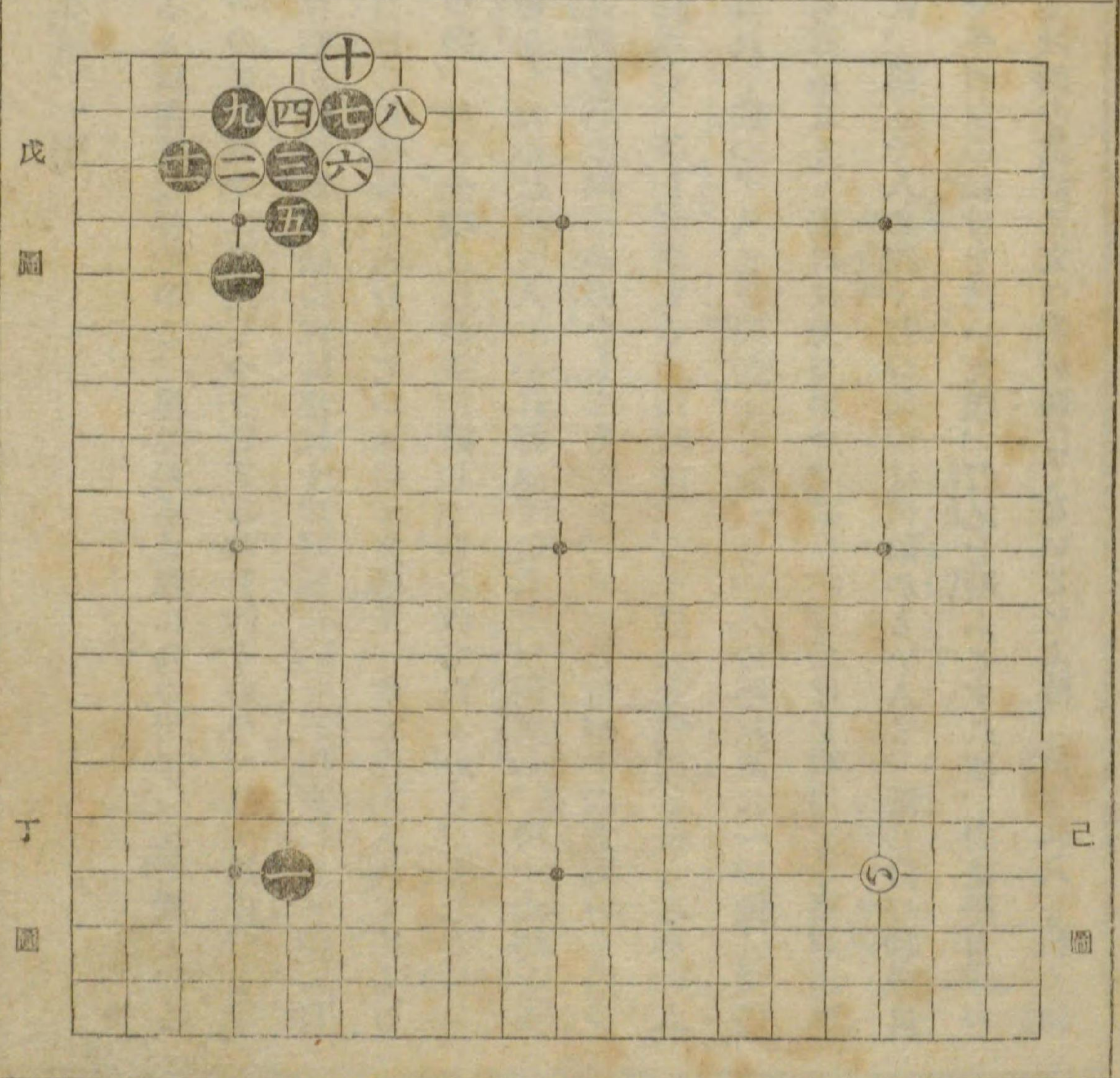
「小目」は一隅の根據に就ては理想的の好着點である、從て「締」(完全に一隅を占領する)をするには「目外」の點に「小斜走締」「高目」の點に「一間高目締」若くは第二路に「大斜走締」と三種の「締」を任意に擇ぶの自由を持つて居る、之に反し△第二路(小斜走締の點より更に一路進んだ點)との意。「目外」の位置から締る正當の場所は「小目」の一、「高目」も同じく「小目」の一より擇べぬ。

して見ると「目外」及「高目」は「締」といふ事に就ては「小目」に較べて多少窮屈を感じねばならぬ位置に在る。

併し「小目」は側邊の發展に大に缺ける所がある、之に反して。「目外」は側邊に向つて非常に發展する事が出来る。

「高目」は中原を主として是亦外勢を張るに便利な位置である。

この「小目」「目外」「高目」の三點は各々一長一短があつて其の優劣可否は定め難いが、然し根據の無いものが中原に鹿を争ふ事が不可能であるとするれば布石の初に黒が第一着の點として此の「小目」の位置を擇んで根據を定めるといふ事は理の當然である尙微細の理論は他日の機會に譲る事とする。



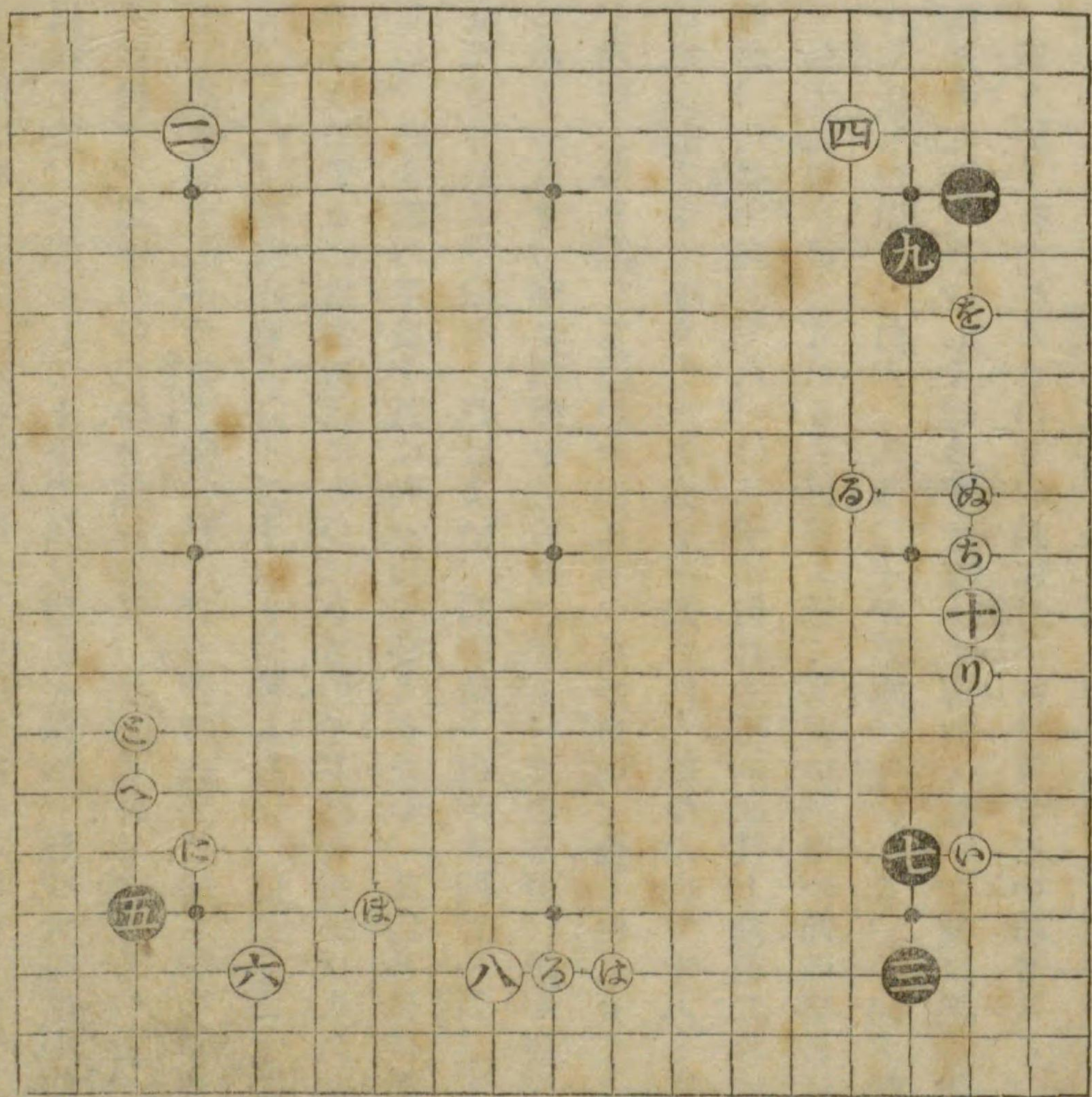
~~~~~(局先互法石布)~~~~~



布石の部 互先第一局

此圖の最初の布石は方今盛行はる、所謂秀策流である、黒五の手は單に九の所に尖んで置くのもよい、其は白が九の點に懸けて、一の黒を低地に壓迫しやうとするのを防ぐので、且又四の白を攻めるといふ意味にもなる、が又次に白が⑤の點に掛つた時黒は十の好點に⑥を三間夾に攻め傍ら自己の拓が出来る、乍併先づ明隅に自己の優先權を占むるといふのが肝要で、次に白から六と掛られたが、其は自ら主となつて客を待つ姿、既に先鞭は己が手に歸してをるのであるから、よし手扱した所で敢て悪くはない、黒七と高締をしたのは次に八の點に打つて白六を三間夾し、旁々大場を占めやうとの意であるが、(此の七の高締は⑥の點に小締をしても可い)で若し白が十の方面から迫つて来たならば、黒は無論八の點に白六の一子を夾撃すると同時に、右下隅に大模様を張らうといふ趣向に出るのである、本圖は白が其れを嫌つて八と三間拓をした、この八の手は更に一路進んで③の點或は④の點に拓いた所で黒から打込まるゝ恐れは先づ無い、其は④の掛けを利用する事が出来るからであるが、然るに本圖の様に、忍んで八と狭く打つたのは何故かといふと、若し白が④或は⑤に拓いた際、黒は⑥の點に尖んで先づ白の掛けを防いだ後、打込を覗ふとすれば、白は勢ひ③の邊に守らねばなるまい、即ちこの受動的の位置に立つ事が面白くないといふ時、故らに入と狭く拓

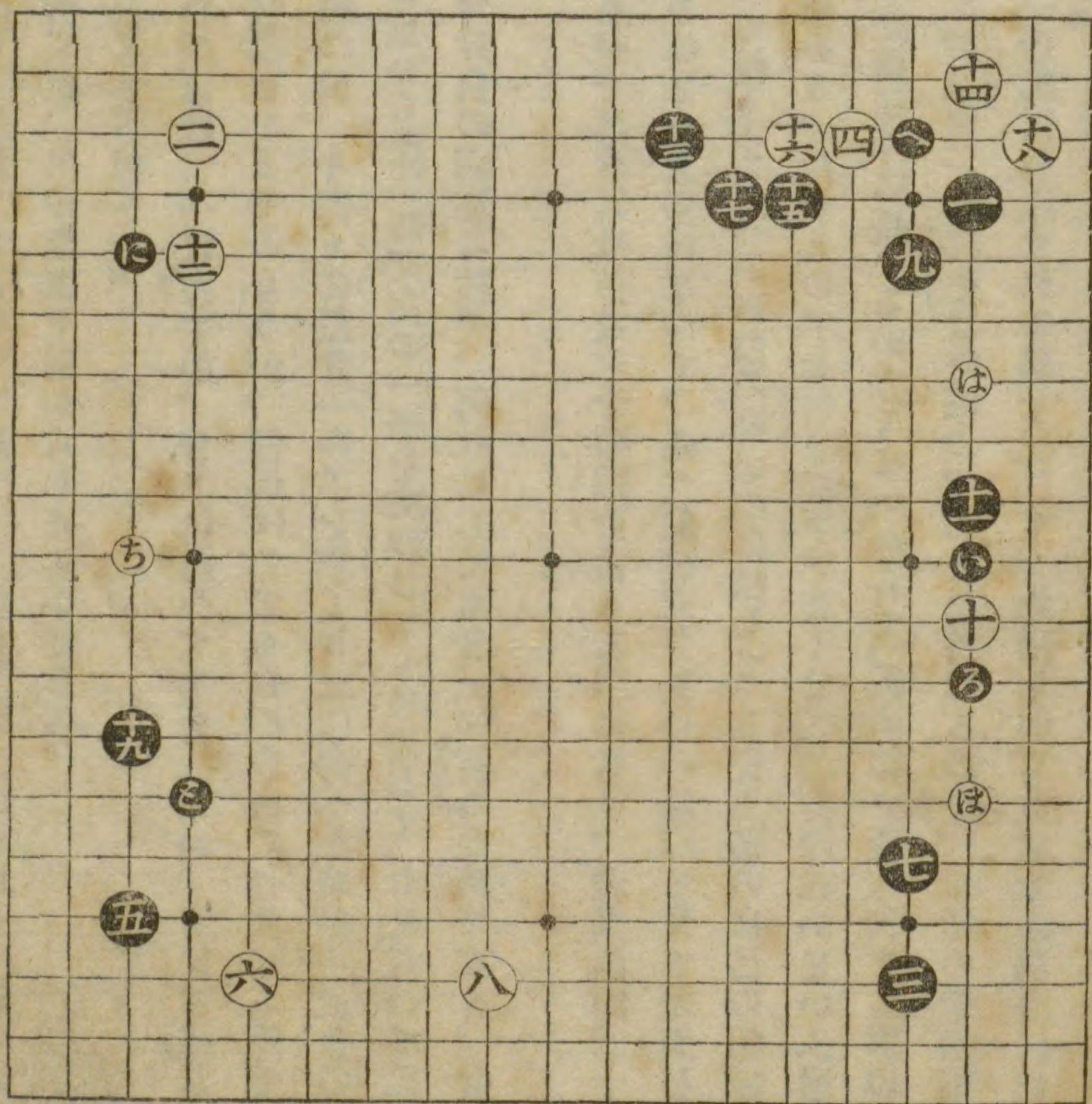
して置きて次に⑥若くは⑤に打つて黒五の一子を夾撃せんどの趣向に外ならぬのである、次に白十の着點は⑤若くは此の十の點より外にはない、假りに一路進むで⑦に打つたとすれば、黒は得たり賢しと、直ちに⑧の點に詰め返して星下の好點を占むる事になる、又白が⑨に打つたとしても、黒は直ちに十の點に詰めて来るから、其時⑩に單關した所で、一向上下兩隅の何れの黒にも感じを與へない、といつて⑪に二間拓をした所で、白の活動は既に制限されて居るから、是亦面白くないといふ事が解る。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~


然らばこの十の手で十二の點に締つては何うか、成程一隅の締りは大きいには違ひないから敢て悪いとは言へぬが今黒に⑩の好點を奪はれては、一舉にして上下の黒は聯絡を保ち、且つ大規模の地域を生ずるといふ形勢となるから、先づ白十、黒十一の交換を遂げた後、十二と締るべきもので、之れが極めて當を得た打方である、もし亦白が十の手で星下⑩の點に打つた時は黒は即ち⑪に詰め白が⑫に拓いた時に掛つて打たねばならぬ、初圖の通り白十黒十一と交換した後、白が此處を手拔せず、直ちに十の一子の行動を起さうとするには勿論⑬に打つべきもので其應接折衝は次圖廿以下廿五迄の様な結果となるの外はない、白十四の手は十五に尖み出す事もあるが、其場合には黒は⑭に尖み付けて、白の二子を攻め立てるといふ手段をとればよい、圖の通り白が十四と小斜走する意は一、九、十一の黒が地形をしてゐるからまづ隅に根據を造らうとするのであるが、黒も亦十五と掛け彼が根據に着手するならば、我は大勢を制して彼が中原に向つての發展を全く阻止めやうといふ手に出るのである、そこで白は黒十七の手で全く中央方面を閉塞されて終つたので十八と尖んで牢固不拔の根據を造つたのであるが、此の十四、十八、の二子は何れも極隅に接した第二線丈に根據といふ事には確かな手である。黒十九の手は一寸見ると位置も低く又緩い様なが此の場合に最も適した手である、假に之れを⑮に斜走した所で、白六、八の二子の距離が狭いから、一向影響を及ぼさぬのみでなく、白から⑯に拓かれた時、黒少しく浮き形となりて面白くない、故に黒は先づ堅固に二間拓きをしたのであるが、斯う堅く打たれると白も容易に星下には打てない事となる、何故なれば「締」「掛」「拓」の次に來る「詰」即ち一着で「拓」と「詰」との兩様を兼ねる着手は攻守の兩意

味に活動かねばならぬ、然るに本圖の様には黒が隠忍して五、十九と二間拓をした以上は、今白から⑯の點へ自己の二、十二の二子の拓を兼ねて「詰」を打つたとしても前述の理由で黒に一向響かないのみならず、其の黒が堅固な丈け、其だけ却つて、白自らの今拓いた地域が薄弱を感じ、即ち黒から反對に打込まれるといふ恐があるからであるつまり黒の十九は白の二及十二の二子との關係上打つたもので斯ういふ布石となると⑯の邊は黒から打つても白から打つても面白くなくお互に急を要せない所となる。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



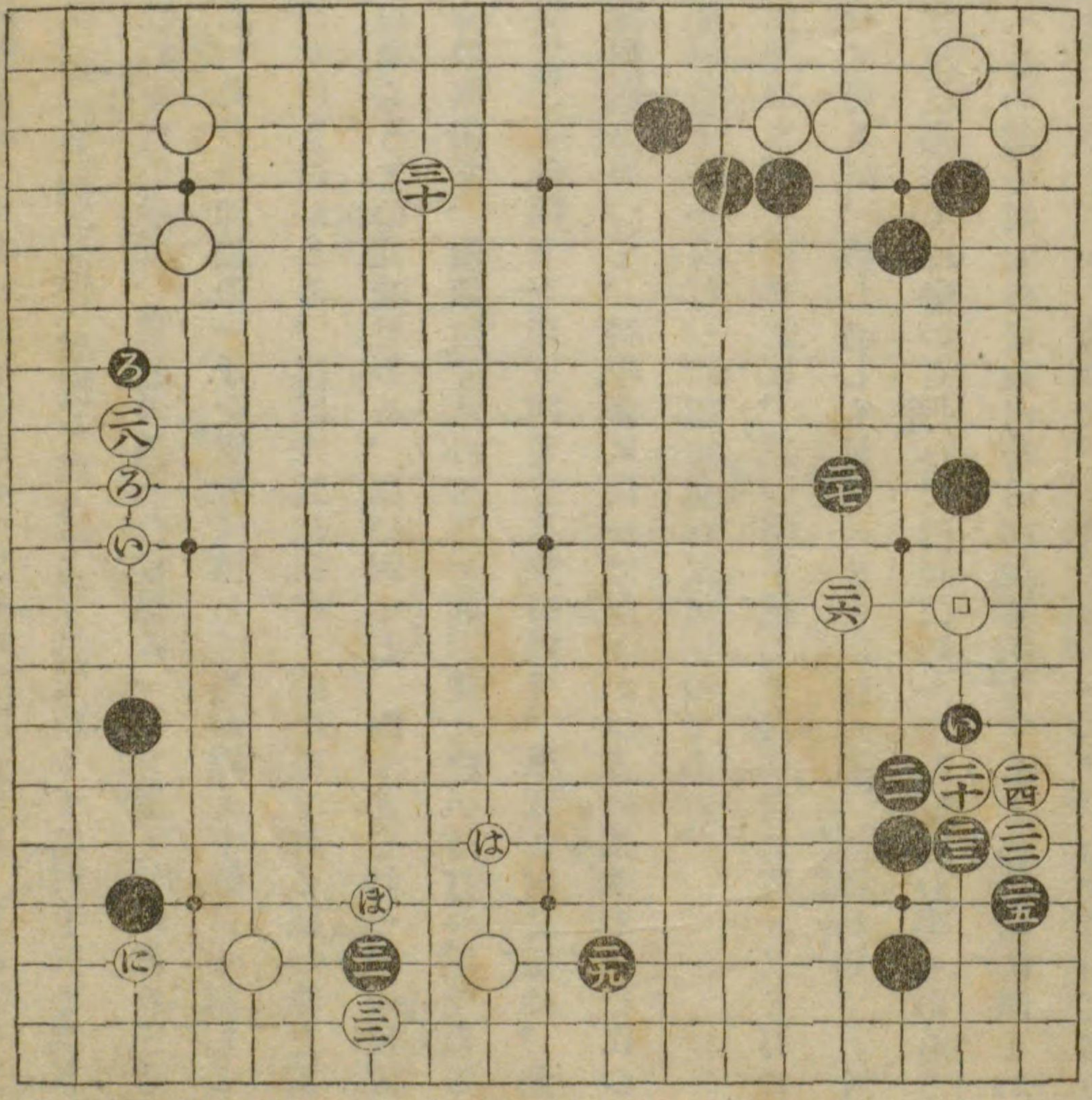
白廿の手は口印白一子の凌ぎを打つ傍ら、厚壯ならんとして居る「一間高締」の黒の地域を侵害するの目的である、之に對して黒廿一と押すは、白の位置を低からしめる手である。

(問) 黒廿一の手を以て廿三に押へたならば何うか。  
(答) 其は善くない、若しかく押へれば白は廿一に押すか、廿二に縛ねて手を抜くか、若は手抜して他を打つか、三者其の一任意の行動をとるであらうが、何れにしても白の自由に打たれる譯で廿一の手に比して黒の不利たるを免れぬ、今假りに黒廿一の手を以て廿三に押へた時白手抜きの結果を想像して見ると、之を只單に黒から口印白の一子を夾撃さるゝに比して、廿と打つて黒に廿三の點に應せしめただけ、夫だけ白の利益な譯で、何れにしても廿三に押るは理でなく、廿一と押すのが正當なのである。

黒廿七の手は㊦に掛つて打つ事もあるが、其時には白は三十の點を占める事になり、若又黒が三十の點を占めれば白は二十八の點を占めるといふ事になつて、此二點は双方見合の場所と見て差支ないが、本圖の布石としては廿七と打つて飽くまで右側の白の弱いのに乗じて、右側上部の自己の領域をも擴めやうといふ趣意を示したのである、白廿八の手を何故星下㊧若くは㊨に打たぬかといふ事は、前頁の説明に悉した通り左下隅の堅固な黒に接するが宜くないからで、敵の堅い邊に接する事の良くないのは則ち布石上の通則である、黒卅一の打込は時機の宜しきを得たもので、一種の牽制策である何故なれば若し白が黒から卅一の點に打込まれる事を恐れて、此所を守らうとする場合には㊩に單關するとか、或は㊪に頂けて凌ぐとか、何れかの策を取るであらうが、㊫と小さく圍つて守

る様な事は決して無い、で黒が圖の通り卅一と打込むで、白卅二との交換を遂げて置いて手を抜いて、後に至つて白が㊬と頂けて三十一の一子を取り切つた(次圖の通り)ものとすれば、今假りに卅一、卅二の交換が無いものとして考へて見ると白は確かに㊭と初めに圍つたと同様、萎縮した手を打つた譯で、従つて黒卅一の手は充分に活動て居る、(又次圖黒四十三と衝き當つた時白四十四に應せしめたのも矢張卅一の効果で)此く白を牽制して狭い所に多數の子を費さしめた其の効力は、實に與つて此の卅一の一子の活動に在ると言はねばならぬ。

る様な事は決して無い、で黒が圖の通り卅一と打込むで、白卅二との交換を遂げて置いて手を抜いて、後に至つて白が㊬と頂けて三十一の一子を取り切つた(次圖の通り)ものとすれば、今假りに卅一、卅二の交換が無いものとして考へて見ると白は確かに㊭と初めに圍つたと同様、萎縮した手を打つた譯で、従つて黒卅一の手は充分に活動て居る、(又次圖黒四十三と衝き當つた時白四十四に應せしめたのも矢張卅一の効果で)此く白を牽制して狭い所に多數の子を費さしめた其の効力は、實に與つて此の卅一の一子の活動に在ると言はねばならぬ。



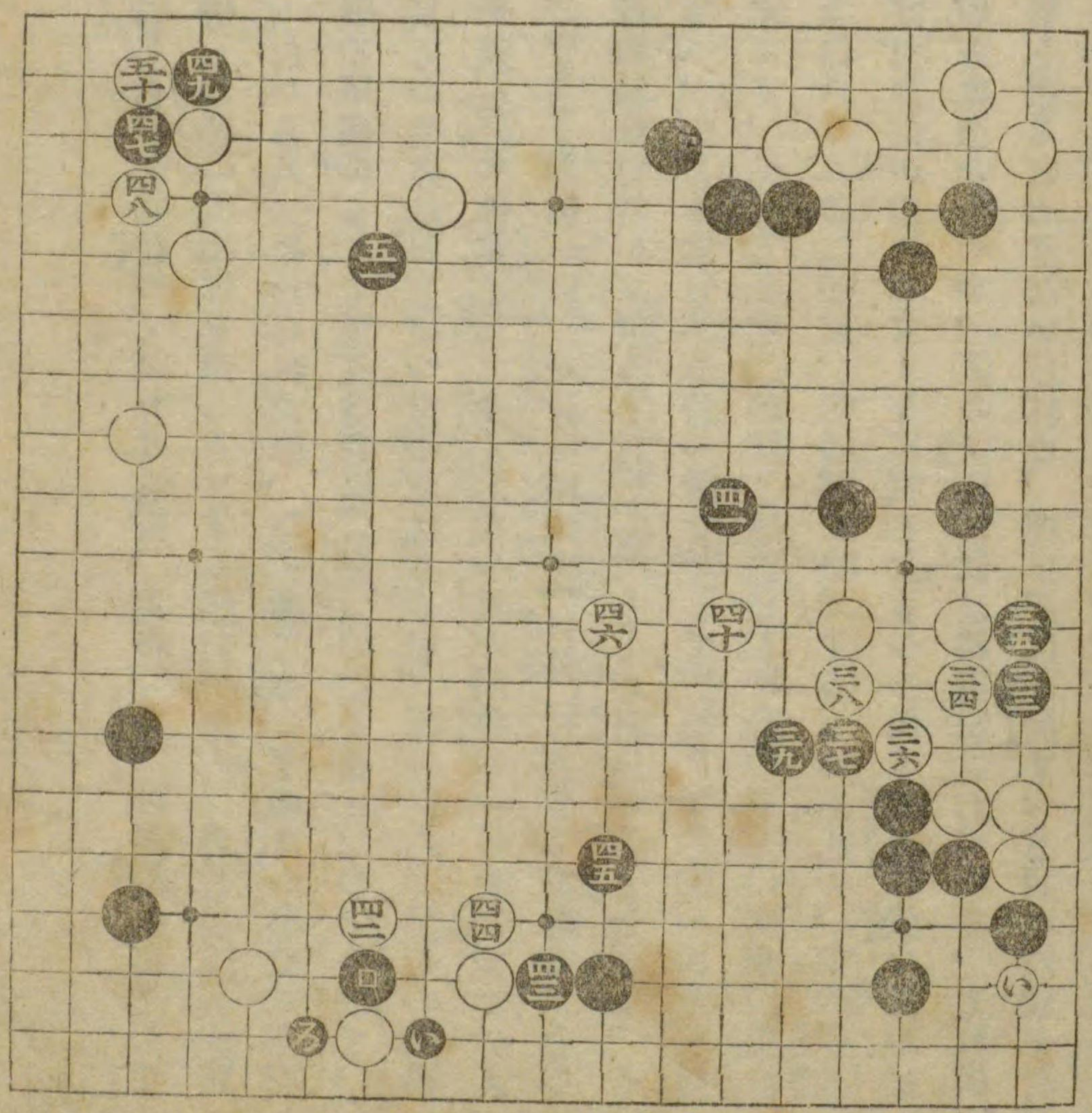
(局先互法石布)



黒卅三以下卅九に至るまでは、白の缺點を覗つて其根據地を削らうとする手順である、又白四十二は口印黒の一子を取り切つたと同時に、暗に右側の白に聲援を與へて居るが、かくて黒四十三と突き當り白をして四十四と立たしめたのは頗る宜い手で、前述の通り白は黒の一子を提る爲に都合三手を費して居るのである、繰返して言ふが此の口印黒の一子を犠牲に供して黒が絶えず敵を牽制して打ち廻すといふ此の手段は、尤も注目すべき値がある、黒四十五は白から(四)に夾まれる隅の味を消し自己の地域を擴めつゝ、右側の白に迫まらうとの意味である、黒が四十七、四十九と打つたのは五十一と打つて白の地を消さうとする時の準備で、前圖白廿八の拓きが圖の様に狭い時打つ手である(若廣ければ打込があるから隅へは打たぬ)この四十七以下四着は意味高遠で、畢竟如何なる時、如何なる場合に打つて適應するかが研究問題であつて、初學者には一寸解りかねるが講義の進むにつれて漸次會得せらるゝ事であらう、先づ五十一から打つ伏線と見れば可いのである。

補言、黒が前圖卅一と打込むで、白卅二との交換を遂げ、其の儘手抜して後に白に四十二と打たしめた姿は、布石の研究上善いとなつて居るが、然し必しも只卅一と打込むだ儘、放擲かして置くものとのみは限らん、實戦の場合には黒は(五)若くは(六)から押へて白卅二の一子を提込む事もあらう(尙此場合(七)から押へるか(八)から押へるか其の兩着の差如何等の詳説は稍もすると部分論に傾くから更めて「三間拓打込」の條下で細説する事とする)其の結果は黒は實利を占め、白は外面に勢力

を張るといふ事になつて、何れが利、不利とも斷言は出来ぬ、それから前圖白卅二の手であるが、是亦棄石に打つたので、上面は尙發展の余地があるが低地は發展の餘地がない、であるから其發展の盡きた方を犠牲に供するといふのは、尤もな話して、場合によつて白が四十二に頂けたとすれば矢張其も棄石に打意味であつて、上面から連絡しやうと思ふ時は下に頂ける、下から盤らうとする時は上に頂けるいつも打つ手の反對の方面に意味がある事を忘れてはならぬ。



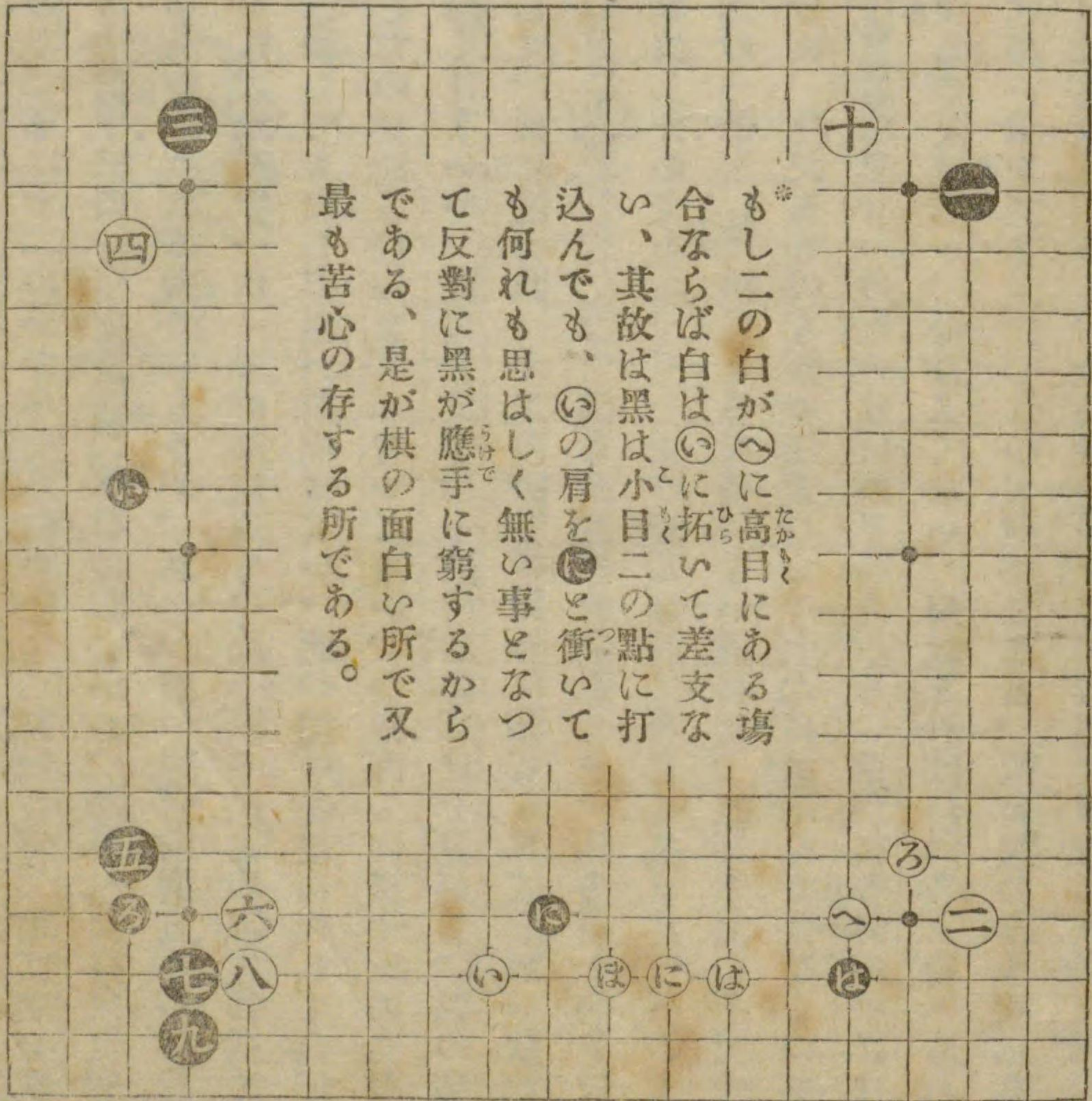
(局先互法石布)



互先第二局

黒五と目外しに打つた意味は、白が若し七の點に掛つて來たならば、例の「目外」の特長を利用して  
 ③に三間夾して白四の一子を攻め、傍ら自己の大模様を造らうとする趣向である、若し黒五が一路  
 低く④に小目に打つたものとすれば、白から八と掛かられた際、黒に⑤と夾む手のない事は、布石  
 總論に説いた通りであるが、畢竟其等の關係からして黒五は特に「目外」の點を撰んだのであつて、  
 是が抑々策戰の第一歩である、白六はこの黒の趣向を破つた手ではあるが、此の白六、黒七の交換  
 は白の方が不利である、本來ならば普通「掛」の性質として少くとも一隅の利益の一半を頷つといふ  
 主意で（白に七と打たすのが黒の手段にもせよ）彼が隅三々に一路遠く「目外」に打着したを幸、七の  
 點に進撃す可きである、に關らず本圖の結果に就いて見ると、黒が五、七と小斜走の締りを以て、こ  
 の一隅の地域を安全に占領して居る所へ、白より六と不急の一着を下して、黒に手を抜かれたと同  
 じ形である、又之を理論上より詳説すると、黒、七、九の二着は、牢固として動かす事の出來ぬ根據  
 を造つた者であるに、其代償たるべき白六、八の二子は、唯外面に發展するといふ丈で、何の根據  
 もない浮いた子となつて居る、然らば白は何が爲に見すゝ不利と知りつゝ、此く高目に掛つたかと  
 いふに、成程黒は實利を占めて根據の方は申分ないが、其の活動範圍は略制限されて居る、これに  
 反し白八、六の二子は漠然として虚勢を張るに過ぎないけれど、亦中原に發展すべき廣い區域を有  
 つて居るから白の資格としては後に至つて利用する事が出來るとの意で、且つ此處白が先手である

のを利と見て打つた即ち一種の  
 策戰と言ふ可き手である。次に  
 黒九と下つた時、白が普通の様  
 に⑥に拓かないで、一の黒に對  
 し十と掛つたのは、是には大に  
 説がある、即ち二の白との關係  
 問題で、白若し普通の様に⑥に  
 拓いたならば次に黒から⑦に掛  
 かれた際、白は打方に困る、  
 白の態度として⑦に尖むのも緩  
 いし、⑧に夾むで見ても三間拓  
 の連続した愚形で面白くない、  
 又⑨に二間夾として見ても益々  
 有望でない、さりとて⑩に三間  
 夾とするのは⑩の白との關係上  
 愚なる事は今更辯を要せぬ所で  
 ある、乃ち此場合白は⑩と拓い  
 た爲に却つて應手に窮する事と  
 なる、其故此處は手抜して徐ろ  
 に黒の動靜を覗つたのであるが



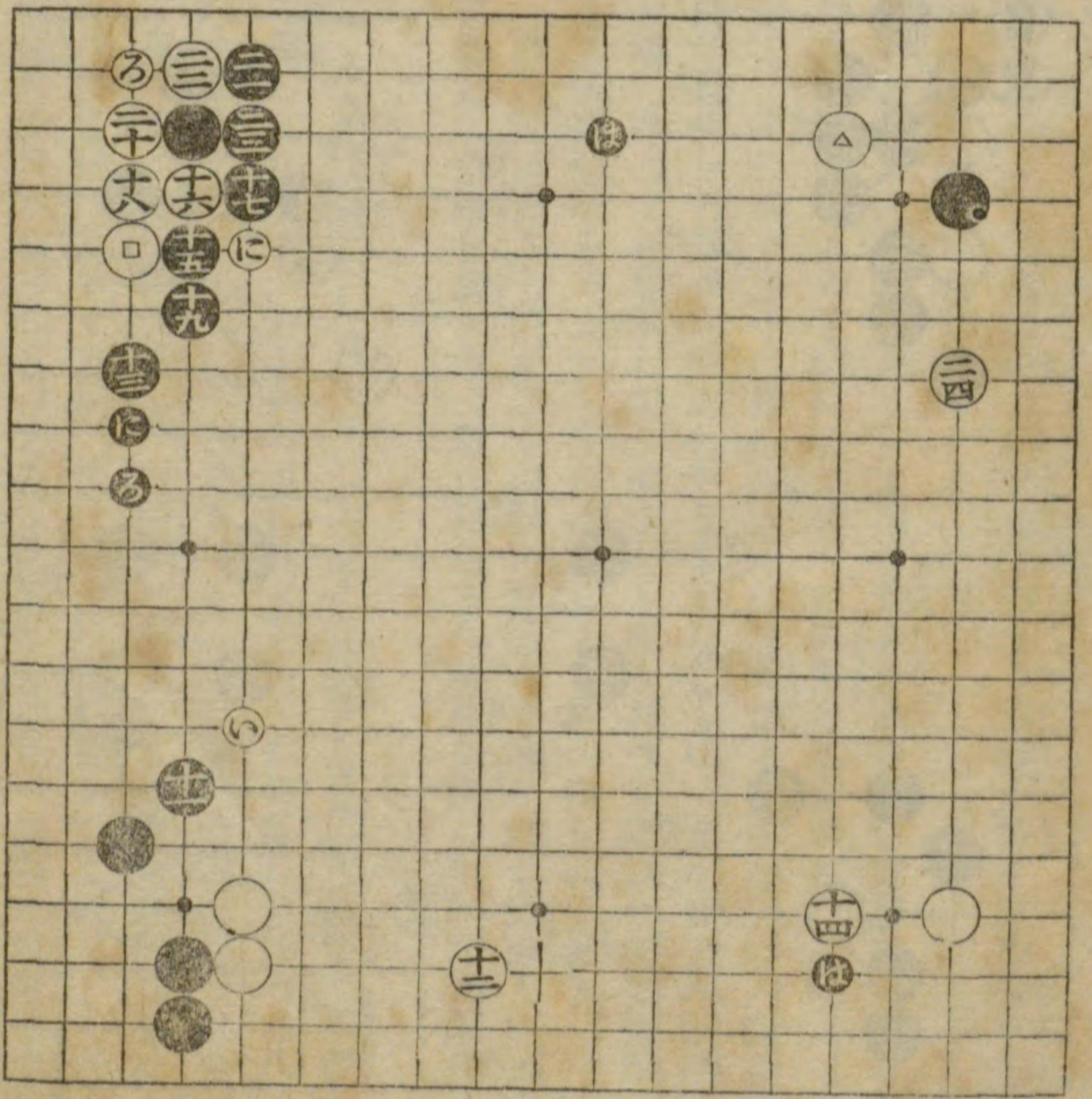
もし二の白が⑥に高目にある場  
 合ならば白は⑥に拓いて差支な  
 い、其故は黒は小目二の點に打  
 込んでも、⑥の肩を⑦と衝いて  
 も何れも思はしく無い事となつ  
 て反對に黒が應手に窮するから  
 である、是が棋の面白い所又  
 最も苦心の存する所である。

~~~~~(局先互法石布)~~~~~


黒十一の手は次に十二の點から打つて白の二子を夾撃するか、或は⑤に夾んで口印白を攻めやうかといふのであるが、場合により十一の手で單に十二の點から夾み白が⑥に二間飛の時、黒は之を顧みずに⑦に掛つて打つのも悪くはない、黒十三の一間夾は急に過ぎはしまいか、⑧の二間夾或は⑨の三間夾の方が穩當ではないかと諸君の疑はれる所であらうが、思へ、黒が單に前圖五である時でさへ⑩の夾みを意味するものであるに、今や十一の一子が加はつて、此一隅の黒は非常に強固となつた時機であるから、よし十三に急撃しても決して悪い道理はない。此の黒の急撃に對して白が忽然其の銳鋒を避けて十四と他に轉じたのは頗る輕妙な手と言つて可い、勿論直ちに黒十三の急撃に應じて、口印白の一子を動いても悪くはないが、此場合は寧ろ一隅の活路だけを見越し、黒の勢力を集注さすの考で十四と高縮りをして、前に述べた、十二の拓きの爲めに稍もすれば不利の状態に陥り易い形を整備したのである、で白に手援された上は、黒も亦其の機を逸せず、此方面の利を收めねばならぬから十五と頂けて白を壓迫したのである、白十六の緯ね込みに對して黒は必ず外側より十七と押う可きである、但し黒十五の一子を征に握らるゝ憂のない場合は、黒は十七の手で十八の點から截るのであるが、此る場合は、白たるものも豫め注意して、十六に緯込んでならぬ事は勿論である(互先一間夾定石手抜の部參看)黒廿一の懸粘は所謂手筋である、兎角初心者の中には此手を以て、不用意にも廿二の點に下るのを見るが、是はよくない、何故なれば白に⑪と押へられた時、黒は廿三の點の截りを防々爲に尙一着を要する事となつて後手となる、故に黒の最も利益な粘ぎ方としては斯く廿一と懸粘ぐのが最良の手である、此の時白手抜すれば黒より直ちに⑫に緯ね

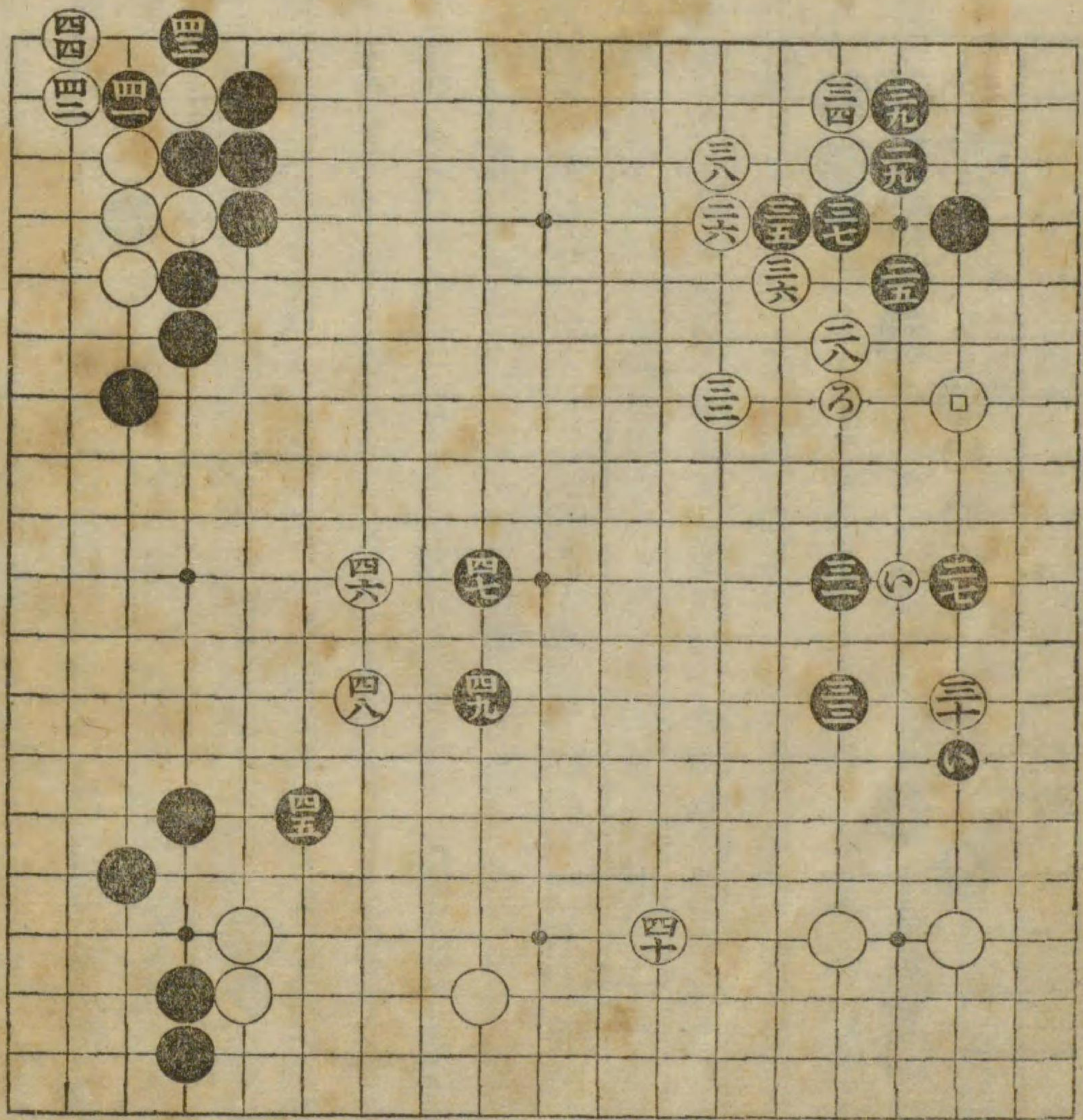
られ隅の白に活路はないから、白は廿二と當て、先手を取つて他に轉じたのであるが、白は必ずしも廿二に當てねばならぬ事はない、⑬に截らうといふ餘地を存して置いて單に⑭に下る手もあるが併しそれでは後手になる、若し此の時黒先手を得れば必ずや⑮に夾ひで△印白の一子に迫ると同時に大地域を造らんとする策に出るであらうから、白は其を嫌うて廿二と當て、先手を取つたのである。

此は互先定石一間夾の部第十
五頁を參照すれば解る。



局先互法石布

黒廿五の尖みは要點で、若し此點を白から塞がれる事になると黒は漸く一隅に其活を保ち得るにしても、爲に多大の損失を忍ばなければならぬ事は、置棋定石兩斜走掛「三手扱の場合と同様である、初心者は稍もすると活さへあれば充分であるといふので、漫りに手扱する習慣があるが、其は太だしい不心得である、其損失を償ふに足る好點が他にあれば兎も角、先づさういふ場合は極めて稀であるから、特に初心者爲に注意しておく次に白廿六は廿七の點に二間拓



をするのも可い、

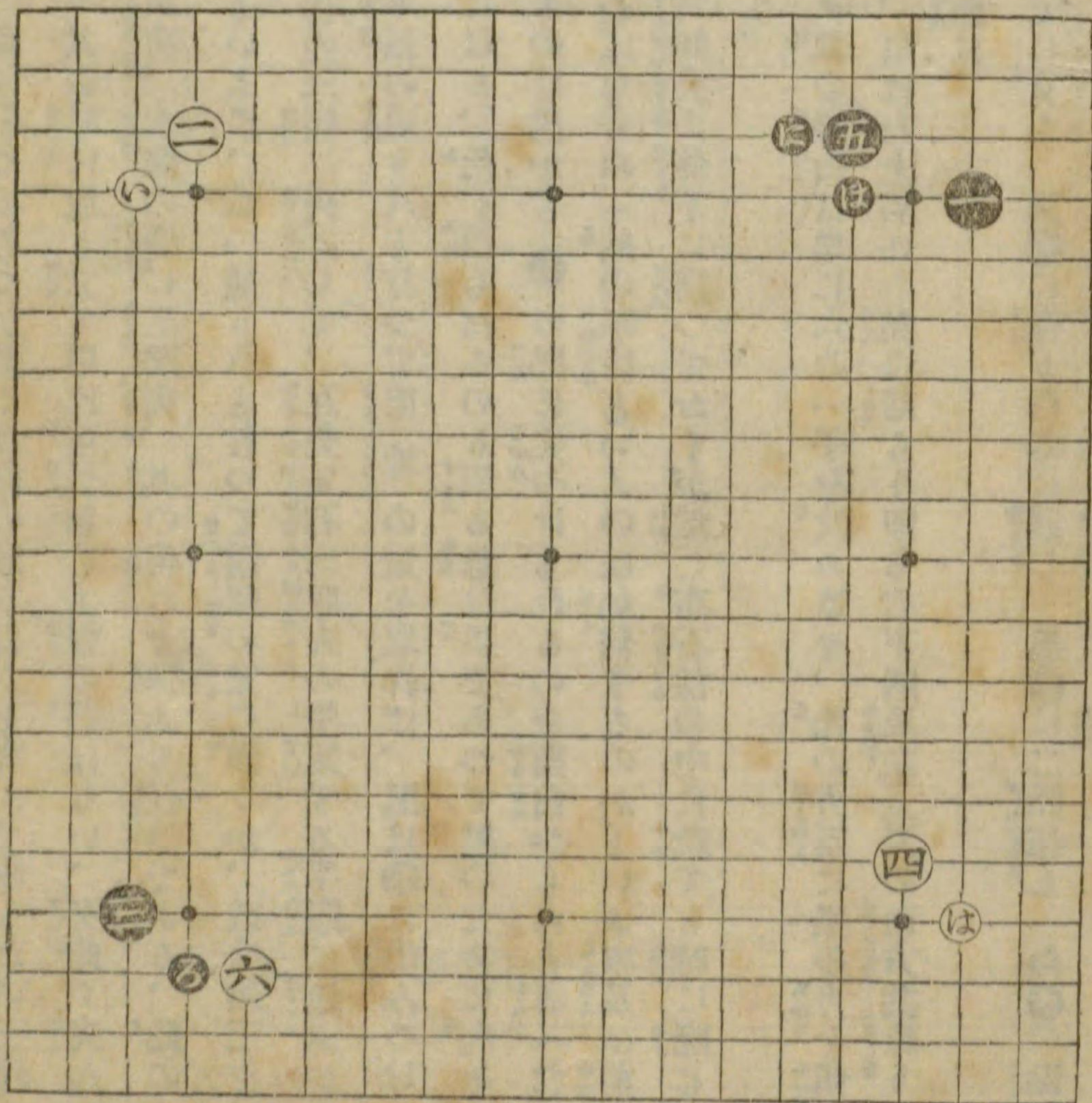
問、此の白廿六の手で二十七の點に拓くのは、右下隅の締との釣合上何うも位置が低く且つ狭い様である、で之の手で(星の點)に斜走したならば如何であるか、
 答、此ういふ龍大な地域へは何れ敵から打込んで来るものといふ事を豫め念頭において居らねばならぬ、其の打込まれた場合に白が廿七の點に在るのと(四)にあるのは非常な差がある、乃で假に白廿六を(四)に斜走したとして、次に黒が三十の點に打込んだと想像すると白(四)が一路高く踞明の形になつて居るため、若白が黒卅を外面から壓迫しやうとしたならば、黒は廿七の點の下即ち第二線へ小斜走して次で右下隅に向つて一間飛して(必ずしも此う打つと限つた譯ではないが)忽ち根據を造られる、さりとて根據を造らすまいとすれば易々と中原へ出られて終ふ、其で若も白が廿七の點に二間拓して居る際であると黒が三十の點に打込んで来た處で根據といふ事には殆ど得る所がないから、白も亦之に急撃を加へて、黒に打込まれ地域を削られただけの代償を得るのは敢て困難ではない、
 白二十八と打つて黒の出路を塞ぎ、二十九と隅に應せしめておいて三十と詰返した手順は頗る要領を得て居る、若し廿八の手で(四)に單關したならば、右上隅の黒に感じを與へるの度が、此の廿八に比して、緩いから黒から(四)と拓かれる手順となつて太だ不利益である(注意)即是の(四)に打つと廿八に打つと僅々一路の差が緩急二様になつて、終に得失霄壤の隔りを來すから注意せねばならぬ
 黒卅五、卅七、の二着は打たずに單に卅九に押へておく方が、後に多少の味が残つてよい、
 又黒四一、四三の截提も、即今是非共運んでおかねばならぬといふ急場でもない、此等は實戰の局に當つた時に能く考へて取捨せねばならぬ(互先定石一間夾手扱第六十三圖の参考圖参照)

互先第三局

黒一の一子を右上隅右側小目に打つたのは古來の格式に從つたので(研究餘論參照)
白二は直に黒一に掛つて打たうと或は他隅の何れの點に打たうと其は隨意であるが、唯此の場合左
上隅左側の小目(三)に着手せないのは、黒と同姿勢に陥るの弊を避けたのである、以下黒三が此く左
下隅に打つとして特に(四)の點を避けたのは白二に對しての同姿勢、白四が右下隅に就て(五)を避けた
のも同じく黒三に對する同姿勢を避けた手である
此の黒一から四迄の同姿勢云々に就ては(研究餘論)に一應説明してあるから參照せられると略其の
理由は判明する

黒が五と締つたのは大場であると同時に白に對する一種の命令手である、
(此の大場といふは此の場合に於ての黒に取つて(廣い領域を造る)極めて利益の多い着手點といふ
意味である、命令手とは、此の手を黒が打つた以上は白は次の着手を或る一定の點に、是非共打
たねばならぬといふ理合を含んだ手を指すのである)
何故是が白に對する命令手であるかといふと、黒が此く五と一隅を締つた時に、白亦同じく二若く
は四の何れかの隅を締るとすれば黒は當然次に右下隅の三を締るといふ手順になつて、何處迄も白
は一手宛後れて行く氣味合が残るから、白は此の不利を避けるため六の手で自己の締りをするに
先だつてまづ黒の三に掛りを打たざるを得んといふ譯であるから、翻つて言ふと黒五が白六の行動

を制限して居るといふ事になる
扱黒五の手の締り場所であるが
是は必しも圖にある五の一點と
のみには限らぬ、(三)に大締若く
は(四)に高締をするも任意である
又締る隅は此の一の(右上隅)に
限つた譯ではない、趣向によつ
ては左下隅即ち三の隅を任意に
締つてもよい、
要するに黒は白六の掛りを何れ
の隅に掛らしたならば便利かと
いふ事を能く考へて自己の策戰
次第で任意に締る隅を擇ぶがよ
い此際白としては黒の命令に服
從して黒が五と締れば六と掛り
黒が若し五の手を六の點(左下
隅)に締らば、白は五の點に掛
るより外はないのである。



(局先互法石布)

黒七の手は、九の點へ掛るか或は八の點に掛つて打つか若くは圖の通り白六を夾んで攻めるかの三種の打方があるが、何れも正當の打方で其の間に取り立て甲乙可否を言ふ程の差はない、又此く夾んで打つにしても●の一間夾、●の二間夾、●の三間夾、其の何れを擇ぶも任意である、此の三間夾に對して白は如何に應じるかといふに、圖の通り八と打つて兩縮の策に出るか、或は黒三を●の一間夾返、●の二間夾返し又は●の三間に夾返して、互先定石三間夾の指定する手順に運ぶかの二方であるが、白此處を手抜して本圖の通り八と打つて兩縮の策を取れば、黒は●に尖みつけ白六を●と立たして●から煽る手順になる、此く煽られるのも頗る急な手であつて黒のために利を得らるゝ事鮮少でないから、白たるものは黒から●の點に尖つけられるのを面白からぬと考へたならば八の手の時に何とか手段を爲ねばならぬ（此の手段といふのは如何するかといふ事及び前述の三間夾に關する詳細は互先定石三間夾の條下に譲つておくが然し布石法の中に就ても時に應じ機に觸れて順次に説明する事もあらう。

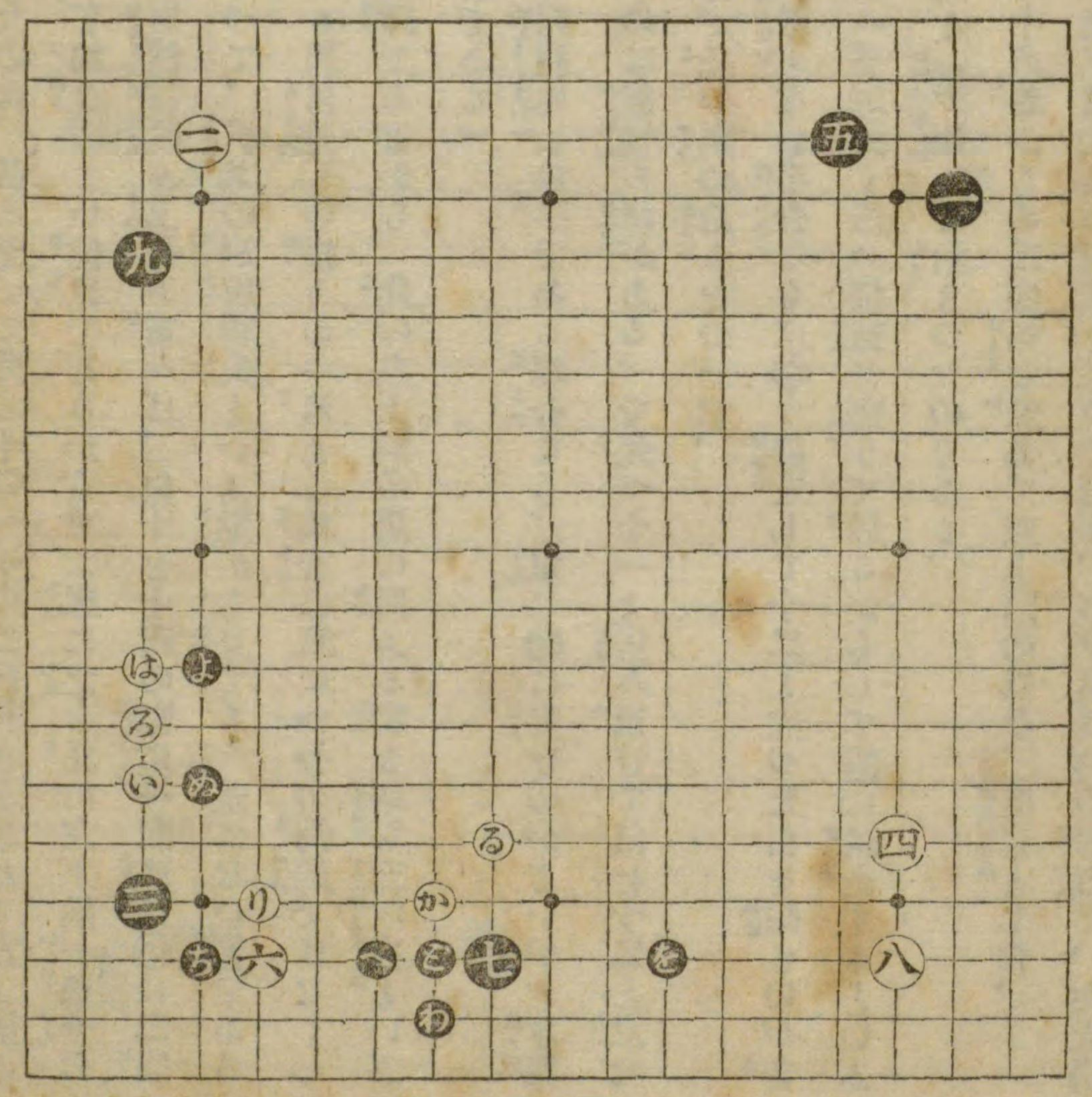
『註』白八は兩縮の策であるといふ其の理由は黒に六の一子を攻めさせ、此の方面に黒の力を傾むけさせて、自然の手順を以つて、白は左上隅九の點に縮らう即ち右下隅及左上隅の兩方共縮りを打たうといふ策である、其の手順は

白八の時 黒●に尖み頂け 白●に立ち 黒●に煽り白●に冠し 黒●に二間拓し 白●の點に頂け 黒●に縮ね 白●に引いた時 黒●に飛ぶ 此が普通の運び方である

乃で白の手番となつて九の點に縮るといふのが自然の手順になる

若又白が●以下●迄打つて此く局面の進行するのを望まぬならば、黒が●と尖み頂けた時直ちに手抜して九の點に縮るもよい、其の時黒は●の點に縮ねて白六の一子を擒にするがよい、

白兩縮りの策が行はれたとしても決して其れは黒の不利益といふ譯ではない、白六の一子を攻めた自然の結果として黒の勢力は増大して居るから白に兩縮をさせた代償は十分取て居るが本圖は白の策を破つて●と尖み頂ける手で、白の將に縮らうといふ點に九と掛つたのである、



(局先互法石布)

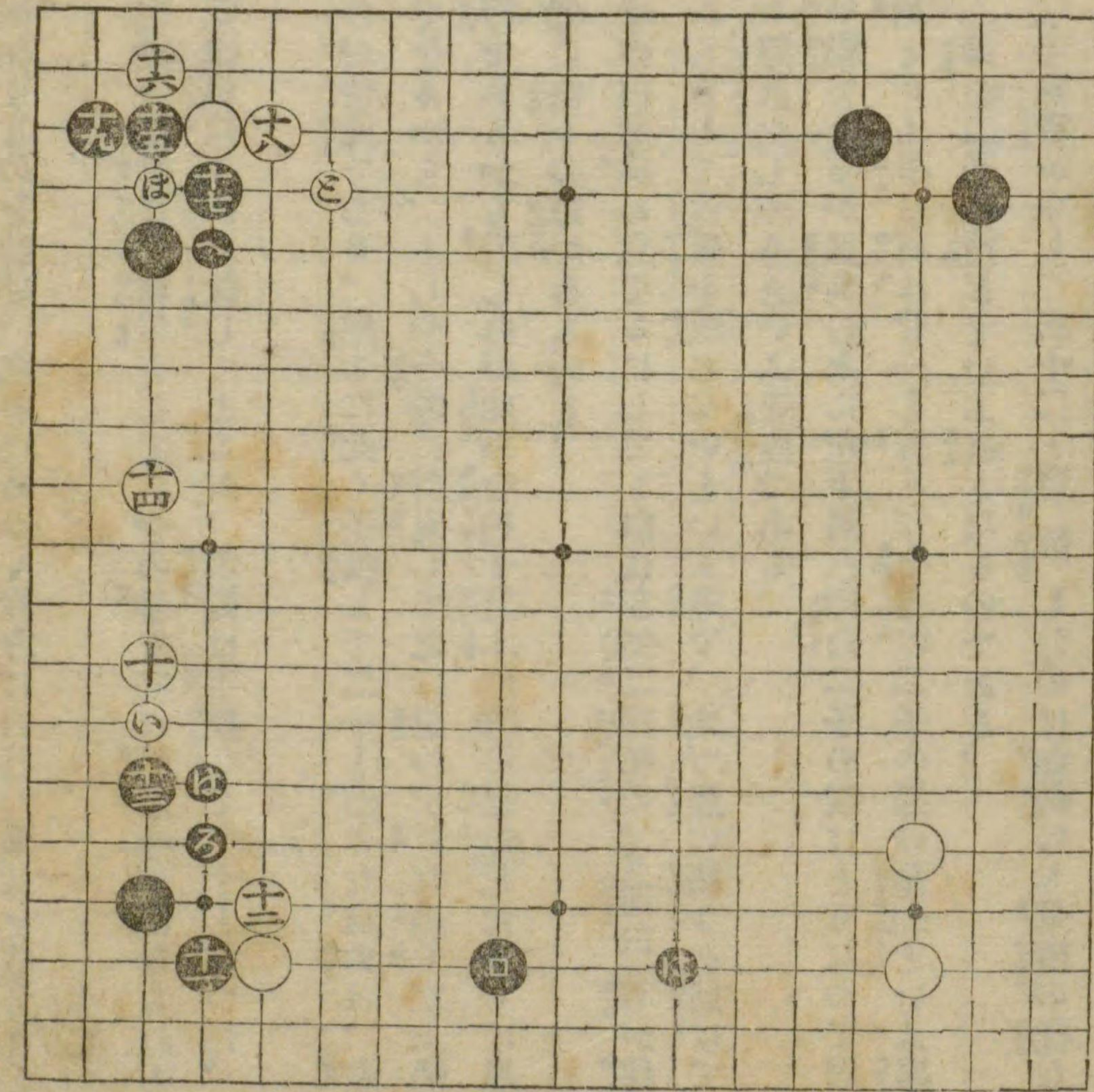
白が十と打つて黒を三間夾返しとしたのは、後に至つて此の十の一子の二間拓きを兼ねて左上隅の黒を十四と打つて三間夾とするに恰好都合のよい位置であるからで（單に之を此の左下隅一部分のの見解からして互先定石三間夾の定法に運ぶ上から言へば、白十を十三の點に一間或は⑤に二間の夾返しを用ゐるやうと其は隨意であつて、又其の利害得失といふ點から見ても大差はない筈であるが本圖の通り左上隅に白小目に對する黒目外しの掛りの一着ある場合は單に部分の問題ではなくして大局即布石上の關係が生じて來る譯であるから、此の左上隅の黒に與ふる響き即ち三間夾といふ事を考へに置いて此く十と打つたのである）

黒十一は若し白十が一路近く④に二間夾返しの手である場合ならば單に⑤に尖むのがよいが、本圖は三間の夾返しであるから⑥に尖むのは緩慢の嫌がある、で先づ十一と尖み頂けて白を十二と立たせて之を重くしておいて十三と飛んで此の隅の治りをつけた、

此の十三の手は他に何等布石上の關係のない場合ならば⑥に斜走して十二と立つた白を煽るのが普通であるが、本圖の場合では白十の一子が近く黒の根據を窺うて居るからして⑥に斜走するといふ事は如何にも味が悪いから此く十三と單關して治まつたのである、

乃で白は十四と打つて（前述の通り）十の着からの二間拓を兼ねて左上隅の黒を三間夾とした、此の場合局面を見渡すと、右上隅と左下隅は黒の領域となつて居り、右下隅は白の獨占で、左上隅

は黑白相對峙して居る、然るに孤り下側には印の黒たゞ一子孤立して居る、此際黒は左上隅の一子を動く可きか將又下側の一子を動く可きかが問題である若し黒が十五の手を以つて下側の黒を⑦に二間拓をして此の方面に備へを立てたならば、白は直に⑧に尖み頂け黒が⑨に立つた時⑩から煽り立てるといふ急な手段を取るであらう、黒は此く白から急に迫られるのを嫌うて之を拒ぐ傍ら自己の根據を造るがため



（局先互法石布）

白二十の手は下側孤立の黒が⑤に二間拓するのを妨げ、之を攻めつゝ、右方に自己の地域を造らうといふ着手である、

問 白が(前圖黒第十五以下十九迄の)左上隅應接の結果として二十の手で⑤に斜走せねばならぬといふ事は互先定石一間夾を三々項第四頁以下に詳説してあるが、本圖は手抜して二十と打つた、其の理由及利害得失如何、

答 白二十の手は無論⑤に斜走するのが普通である、然るに此く手抜して二十と詰めた理由は、左側①印白の夾が三間であつて緩んでをるから、よしや今⑤に斜走して之に迫つて見た處で左上隅四子の黒はさほど苦痛を感じない譯であるから若し白が此場合杓子定木に⑤に斜走したならば黒は前述の理由で此處に手を抜いて⑥に拓くの恐があるのと、

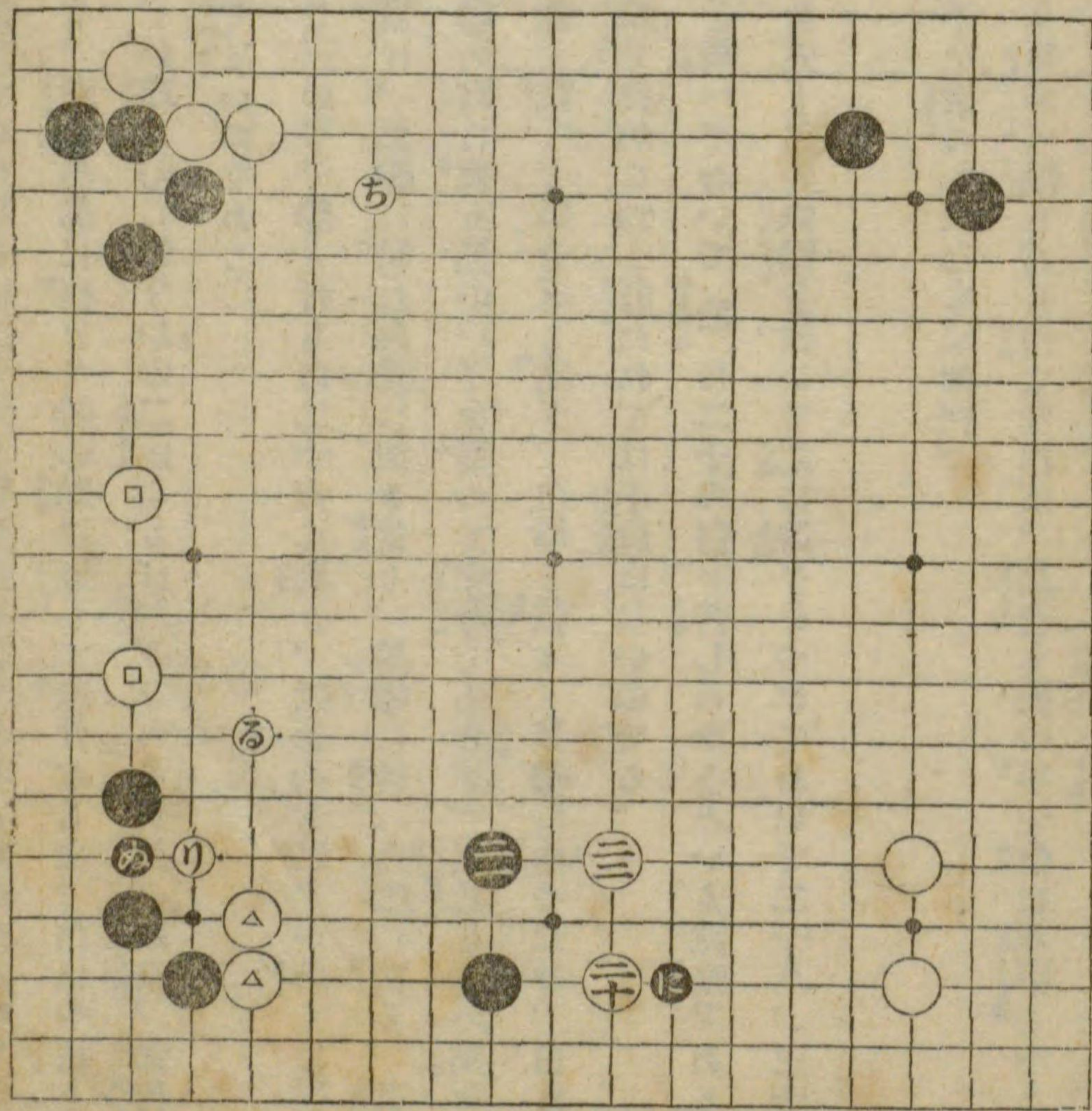
今一つは假に黒から此の左上隅三子の白を攻め立てるにしても白は左側二間拓の(①印白)石が堅固であつて別に顧慮する處がないからさして苦痛を感じないといふ譯で、先づ黒の拓きを妨げて二十と之に迫つて右方の我が模様を厚壯にしやうといふ手段である、

白廿二は益々自己の領域を擴充する好點であるが又其の上に左下隅△印白二子の援けともなつて居る、何となれば白二十、二十二の堅固といふ事は直に廿一と飛んだ中邊の二子の黒の薄弱といふ事を意味し、此の黒の薄弱はやがて隅△印白二子の凌ぎといふ事となるのである、

問 黒が二十一と飛んだ時白が隅の二子を動かさずして二十二と單關したのは如何にも危険の様なり如何

答

白が隅二子の白の活路といふ事を氣遣つて二十二と飛ぶ手で①に黒の缺點を覗き黒が②と應じた時③に打つておくといふ事は至極穩當の様ではあるが、さうすれば黒は必然廿二の點に冠して來るであらう若黒から廿二の點に來れば折角二十と詰めて右方へ形造らうとして居た白の領域は非常に削られて當初の策も水泡に歸する事となるから、隅△印白の凌ぎを見越して圖の通り二十二と飛んだのである(然し黒からヨシ廿二に冠せられたとしても初めに黒から④に拓かれて居るのに反し此く白二十と一着のあるだけは儘に白の有利には相違ない)



(局先互法石布)

黒若し廿三の手を以つて、直に①に掛けて来たならば二十六と窺き黒をして廿七と粘がしめ次で②に頂ければ中原へ出るのは容易である、若又黒③に掛けす④の點に冠して来たならば、白はやはり廿六に覗けばよい其時黒は廿七に粘るか或は⑤に押すかの二途あるばかりであるが其の結果、如何に變化しても白の凌ぎに於いては差支ないのである

(凌ぎの手順の中一例を示せば黒廿三の手で⑥と打ち白二十六に覗き、黒廿七と粘るか若くは⑦と押すか何れにてもよし、白⑧に頂け、黒⑨に綽ね白⑩に衝き當り、黒⑪に押へ白⑫に曲る、其時黒⑬の點を粘いだならば、白は⑭の點に截り黒の一子を提つて充分であるが、黒若し⑯の點を粘がずに⑰と粘いだならば、白は⑱と截り、黒廿五と粘ぎ、白⑲と截り、黒⑳に曲つた時、白は廿八と當て黒がよしや㉑と行びた處で白から㉒と打たれては手段はないのである、

黒二十三は先づ此の方面の白に打撃を與へておいて徐に二子の白を苦しめやうといふ意味であるから、白も亦其の機を察して廿四、廿五と黒の缺點を衝いて之に凌ぎをつけておいて二十八、三十と中原へ出たのである、

問 黒若し三十一の手で㉓に白の一子を擒にしたならば如何。

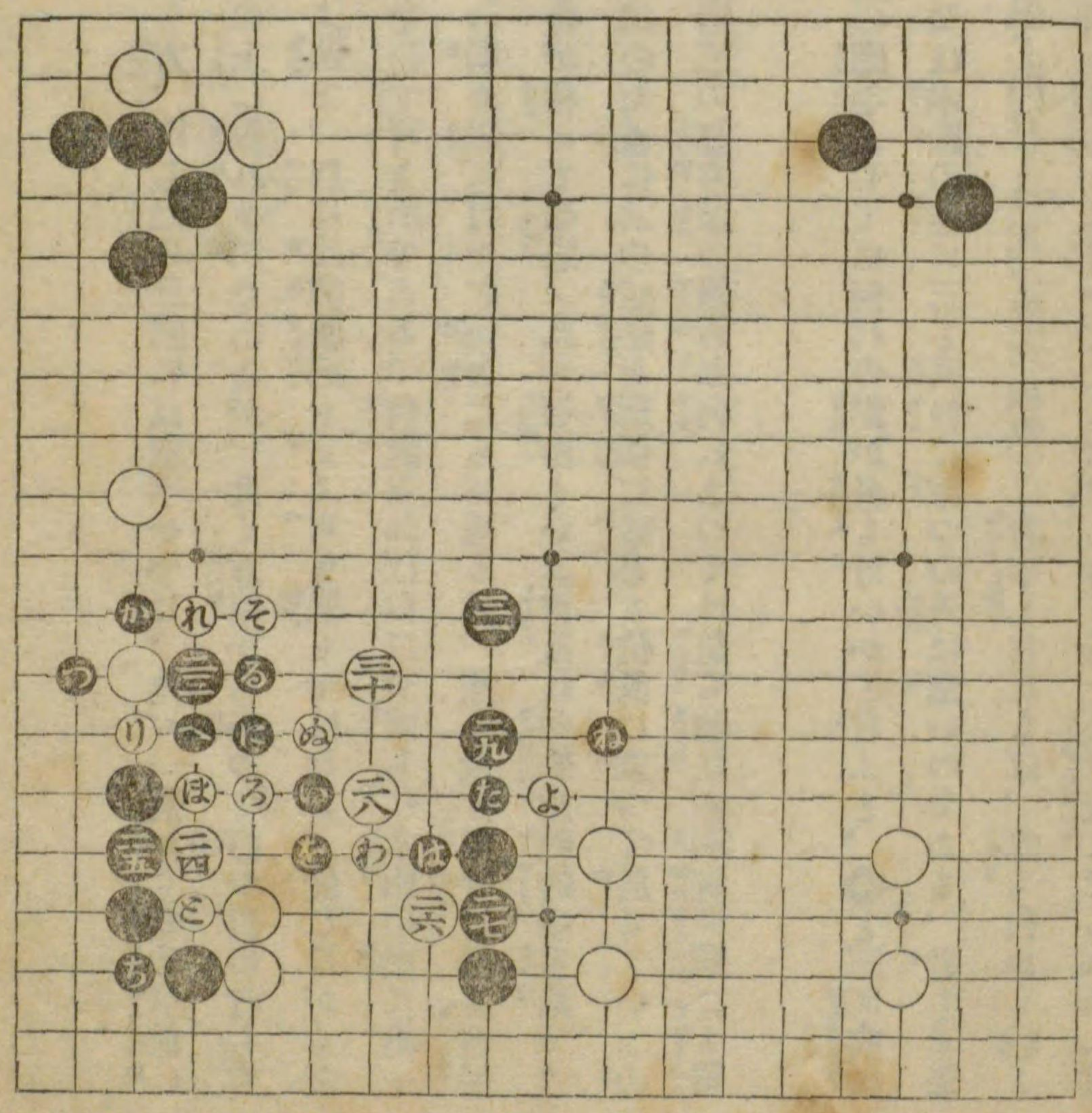
答 三十一の點は全局の勝敗に關する重要な點である何となれば、黒若し此の手で他に着手しやうものならば忽ち白に㉔と覗かれ黒㉕に粘いだ時卅一の點に掛けられて非常に苦しまねばならぬ其

の結果は量る可らざる損失を招く事となるからである。

問 黒卅一と打つた時白は次に何れの點へ着手すればよいか

答 先づ㉖に綽ねて白の連絡を計つておくがよい、或は㉗に綽ねる手で㉘の點に綽込む理もある何れにしても連絡といふ事には差支はない。

白㉙の點に綽込み、黒㉚の點に截り、白㉛に當て、黒㉜に行び、白㉝に押し、黒㉞に曲り、白㉟の時、黒㊱に綽ね、白㊲の點に粘いだ時、黒は㊳の點に白㊴の一子を提り、白は㊵と鎖し、乃で黒の手番となつて㊶に打つて自己の勢力を加ふると同時に白の大地域を削らうとの手順になる。



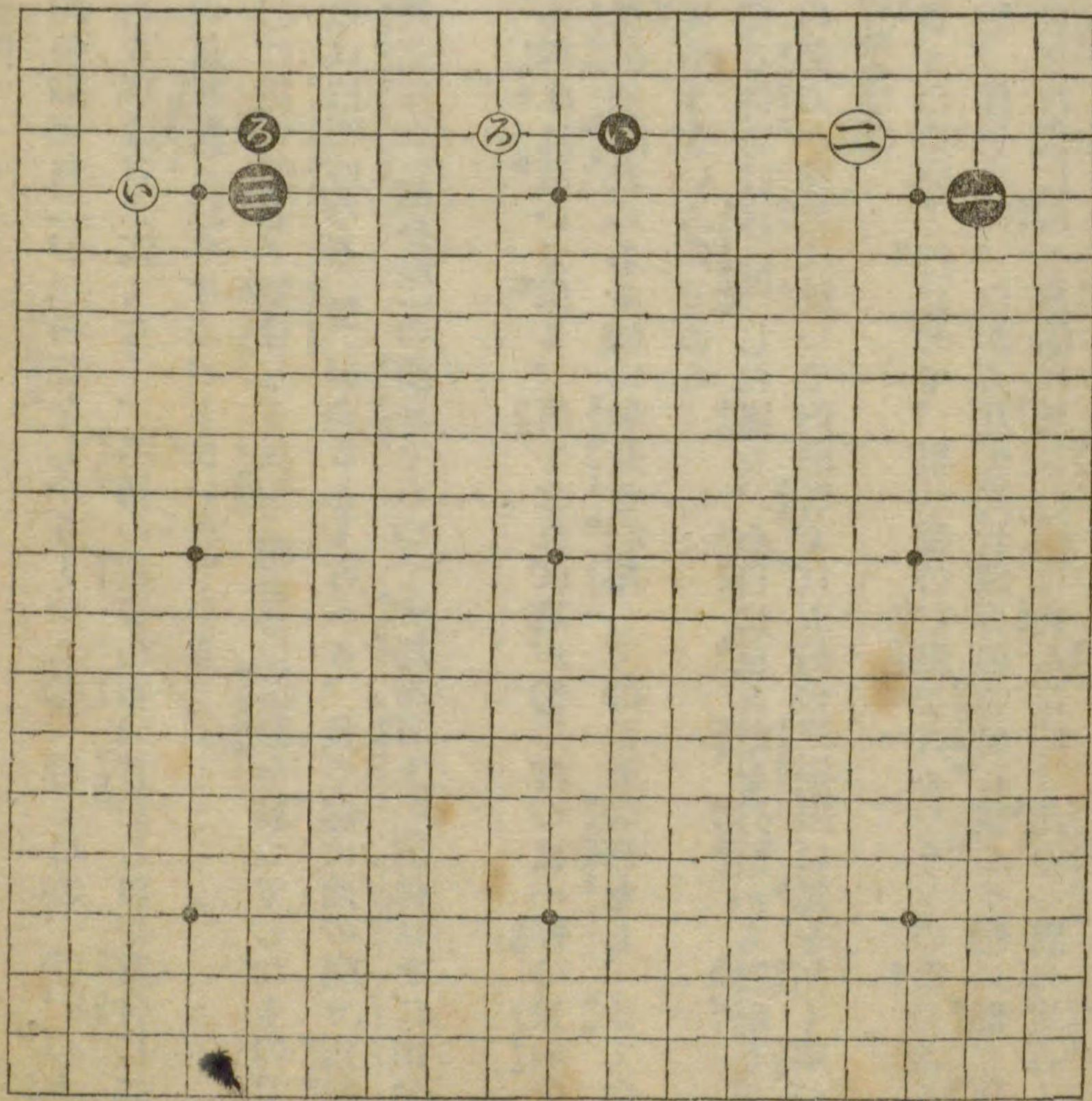
(局先互法石布)

互先第四局

黒一に對して白が直ちに二と掛る打ち方、即ち他の三隅には着手せずに、先づ一隅から戦争状態にでも移らうかといふ有様も屢々實戦の上に現れる所であるが、此く首頭から掛つて打つ白の打ち方は白の方寸に存する一種の策戦といふ迄で、別には是非善悪を言ふ可き限りではない、然しながら之に對する黒三の手は最も慎重の考慮を要す可き所である、何故なれば白二が直ちに本圖の様に黒一に對して掛らずに、關係の間接な他の明き隅に打つた場合ならば兎も角、此く最も露骨に最も直接に此の隅を争うて來られた上は、場合が極めて切迫（此の切迫といふ言葉は勿論比較的の言葉で、他の隅に敵が打着したに比べると白二のために其の威壓を痛切に感じる位置に立つて居るといふの意）して居るから、次の應手即ち黒第三の打着點の適否如何によつては忽ち相互の利害問題に大關係を生ずる事となるからである。

然らば白に此く二と掛られた時、黒の應手としては何れの點が最も好いかと言ふと、●と三間夾に打つか、或は○と目外しに打つか、又は本圖の様に三と高目に打つの外は無いのである、若しも黒が此の三ヶ點を撰ばず他（例せば右下隅若くは左下隅の或點）に着手したならば、忽ち白から○と目下に打たれ、黒が之に對して若し○と目外しに掛つたならば忽ち白に○と三間夾にせられる（其

の白○の一子は●に對する三間夾と白二の拓きとを一舉兩得する好位置となる）此ゝる便益を布石の當初に於て白に與へるといふ事は黒の大苦痛といはねばならぬ、此は上述の三好點に黒が打たずして、他に着手した場合、白から餘義なくされて不利を招かねばならぬ理由を述べたのであるが、然らば黒が三の手で撰ふ可き●、○、三、の打着點が何故最も好いかといふ理由を以下圖を更めて講述する事としよう。



(局先互法石布)

前述した黒の撰ぶ可き最良の打着點の内

●は白二に對する三間夾であつて、此の點は白二が二間拓をしやうといふ④（若くは⑤、①、の大拓き）を妨げて之を攻撃する好點である事は言ふ迄もなく、本圖の様に布石の首から白が露骨に二と迫つて來た以上は之に酬ゆるに●の三間夾を以てするのも良い着である、

④は、（前述●は白の露骨なる攻撃（二）に對す同じく露骨なる反撃（●の三間夾）を以つてしたものであるが）、前者に比較すると●に打つのは稍巧妙なる趣があるとも言へる、且つ●は此の隅で爾後如何程手数が進んだ所で、其は畢竟互先定石（部分戦）の領分であつて大局布石上の關係はまだ出來ないのであるが、

⑤の目外に打つに至つて初めて布石の趣味は涌いて出る、何となれば黒が●に打つは一種の策戦で次に若し白が⑥に掛つて來たならば目外の位置にある●の特長を利用して●に五間拓をし、兼て白二を三間夾にする一舉兩得の計に出やうといふのである、

（目外の特長とは布石概論及互先定石概論に詳述した通り、小目に在る敵を外から壓迫して自然に勢力を造る事が出来る、其の勢力を豫約に於いて四間若くは五間の距離に地を拓く事が出来るのである（布石總論第三頁丙圖参照）

本圖の通り三、と高目に打つのも矢張り白に⑦と打たせて、黒は●の好點を占めやうとの策である何故なれば、黒一、白二、黒三、白④、黒●の時、白から互先高目定石の常法に従つて●の點に頂け、黒●に抑へ白⑧に引き黒●に掛粘ぎ白⑨に覗き黒●に粘ぎ白⑩に尖んだ時、此の一隅の定石として黒は必然●に拓かねばならぬ順序であるが此時已に●の點は白二に對する三間夾として當初に

打つてあるから、黒は此際一着を利ける手順となつて、●に尖みつけ、白を⑩と立たせ之を重

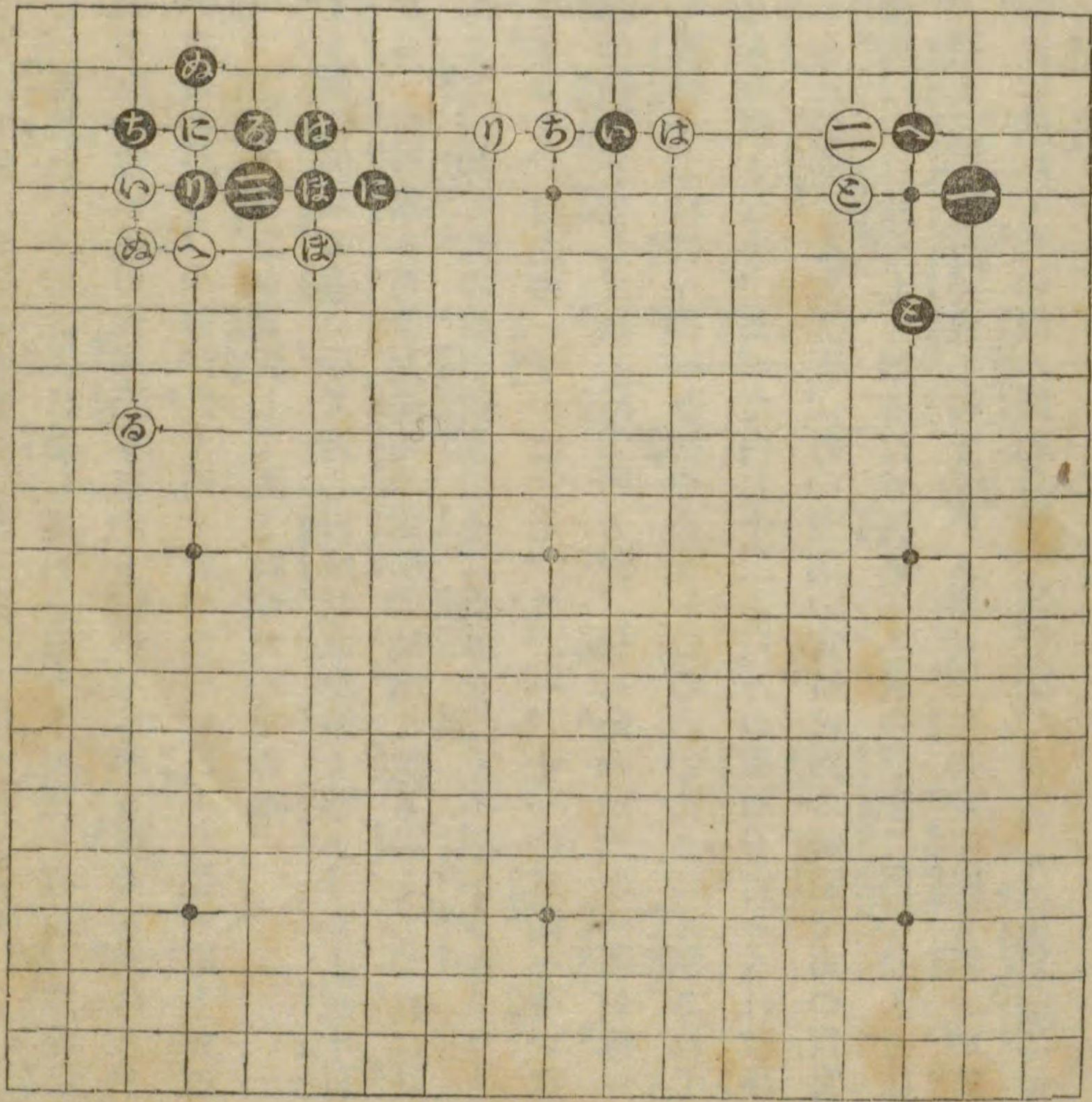
くして●から煽るといふ急な攻勢を造る事が出来る事となる、

『註』黒三、白④の時黒が●と拓く手を以つて●に頂けて此の一隅を普通の高目定石に形づけやうとするのは其は失敗である、

何故なれば黒が若し●と拓かずして●と頂けたならば忽ち白は手抜して⑪に大拓きをされる、

次で黒●に突き當り、白⑫に引き、黒●に掛粘ぎ、白⑬に拓くの手順となつては●の好點に一舉兩得の着手をしやうといふ

當初の考案は全く水泡に歸して終ふの結果となるからである。

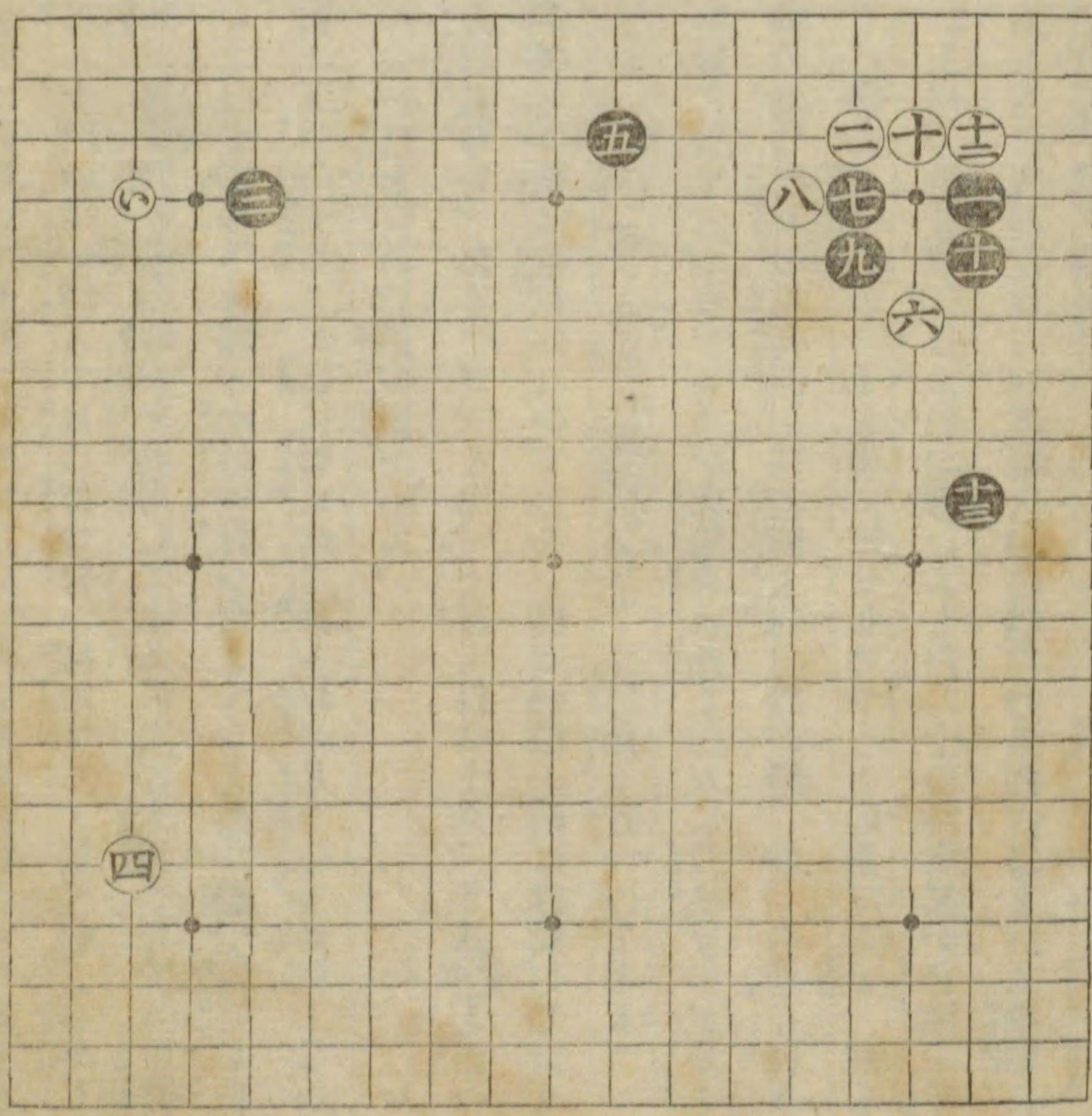


（局先互法石布）

白四は本圖の様に必ずしも目外しに打つとは限らぬ、趣向次第で他に打つても差支はない、黒五、が白二を此く三間夾にしたのは、前述三の手の説明に悉してある通り最初三と打つた當時己に五に打たうとの心算である、隨て此の五の點は黒の豫想通り白から㊦の點に來る來ぬに拘はらず黒に取つての要點たる事は免かれぬのであるから、今白が此く四と打つた手が直ちに黒の應じねばならぬといふ急迫の場所でないを幸、當初の考案を實現して五と打つたのである、

『註』白六の手は所謂大斜百變と稱する變化の頗る多い手で若し詳細に之を説く事とすると數十頁を費すも足りないといふ譯になるから、當然來る可き互先定石説明の時機に讓る事として茲に其の變化と得失とを説く事を省略する方が却て此の布石研究の土に混雜を招くの患が少からうと思ふ、本圖黒十三迄の結果によつて見ると、白六の一子が黒の七、九、一、十二の雙關を覗いたと同様殆んど冗着に等しい頗る不利の結果を呈して居る様であるが、然し此の白六の一子が無ければ白十と伸びた時黒は十一の手で當然十二に押へ得べき筈であるを此の六のために牽制されて十一と窮屈にも双關して居らねばならぬ事となり、却つて白に十二と三々の要所を占められた事になつて居る、のみならず當初白二を三間夾とした黒五、(打つた其の當時は頗る好着であつた筈の)の一子は本圖の結果によると堅固な白に接近して居るだけ極めて不利の状態に陥つたと言はねばならぬ、其で此等の打方の是非得失消長を詳述し盡すといふ事は即今の處時間と紙とが許さぬといふ譯であるから本研究の進むに連れて此の根本問題(黒五の時白六と打つ可否得失等)を自然に解決し得らるゝ時機に達する事と信するのである (絶)

第十三手止



「注意」

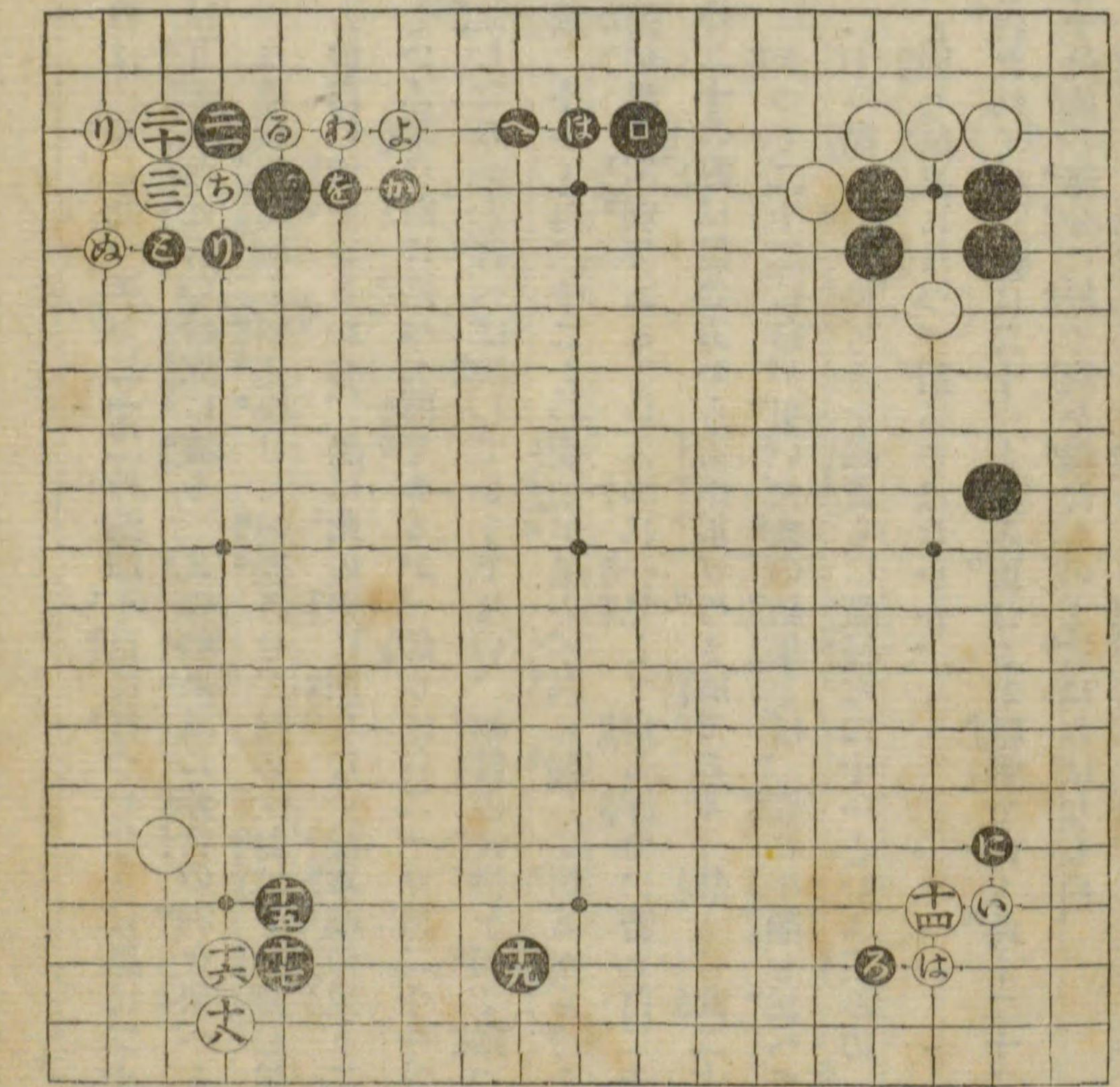
本圖即互先第四局は古人の擲棋から材を採つて來たのであるから、之を模範的布石法として見ると多少瑕疵もないではないが、其の代り讀者の教訓となる點も多いのである、尙向後一々は斷はらぬが、凡て布石法に掲げる材料は或は古人及近代上手以上の擲棋、其から秀甫秀榮兩師の石立、又は秀哉師の撰定等諸種の中から採る事にする。

白十四の一着は本圖の通り星に打つか或は高目にでも打つの外はない、何故此場合㊦若くは㊨と小目に打つ事が出来ぬかといふに、白若し十四の手を㊦と小目に打つたと假定すると黒に㊦と目外しに掛られ、次に白十六の點に締つた時、黒は例の㊦の特長を利用して十九の點に大拓きをする順序となつて頗る白の不利益である、然らば白十四の手を㊨の小目に打つたとすると黒に㊦と目外しに掛られては此の黒㊦の一子から右上側に五間の大拓きが已に行はれて居る結果是亦頗る面白くない此ういふ場合は白として先づ星に打つのが已を得ぬ自然の數である、

黒十五は十六の點に掛つて打つても差間はない、此く十五、十七、と打ち白に十六、十八、と打たす事は隅の實利といふ點に於て黒の不利たる事は免がれぬのである（研究録第一輯に詳説してある通り）が黒の趣向が中側に地を造らうといふ時（若くは他に趣向の存する時）此く打つのである。

白二十の打込みは普通なれば二十二の點に掛て打つのであるが此場合は此く三々に打込むのが最も宜しきを得て居る、其の理由は、本圖の様な配石の場合若くは本圖上側の黒が㊦、㊦の邊に在る場合大場を占めて居る其の口印黒若くは㊦若くは㊦の一子を愚に歸せしめやうとの策である、然らば如何して此の白二十の一子のために上側の黒が愚になるのかといふと白二十の時若黒が普通の手段で㊦と外面を包んだならば白から忽ち㊦に尖み頂けられ黒㊦白㊦黒㊦白㊦といふ手順になつて茲に黒の形造らうとして居た大領域は全く蹂躪されて終ふのである、乃で黒は白の策に陥ら

第十四手より第二十二手迄



ぬ様二十一と尖頂けたのである
 『注意』白二十の手を直ちに二十
 二の點に小目に掛つて打つと
 いふ事は宜しくない、其理由
 は前圖若くは前々圖で詳述
 した通り、黒が高目に三と打
 ち次で五と白二を三間夾にし
 た策に陥る譯となるからであ
 る（白二十の手を若し二十二
 に打たば黒に甘と頂けられ、
 白㊦に縛ね黒廿一に引き白㊦
 に掛粘いだ時、黒の將に拓か
 うといふ方面には已に口印黒
 の一子が在つて此の一子は前
 圖十三迄の結果白の堅きに接
 して一旦不利に歸して居たの
 が再び活動する結果を來す事
 となる、

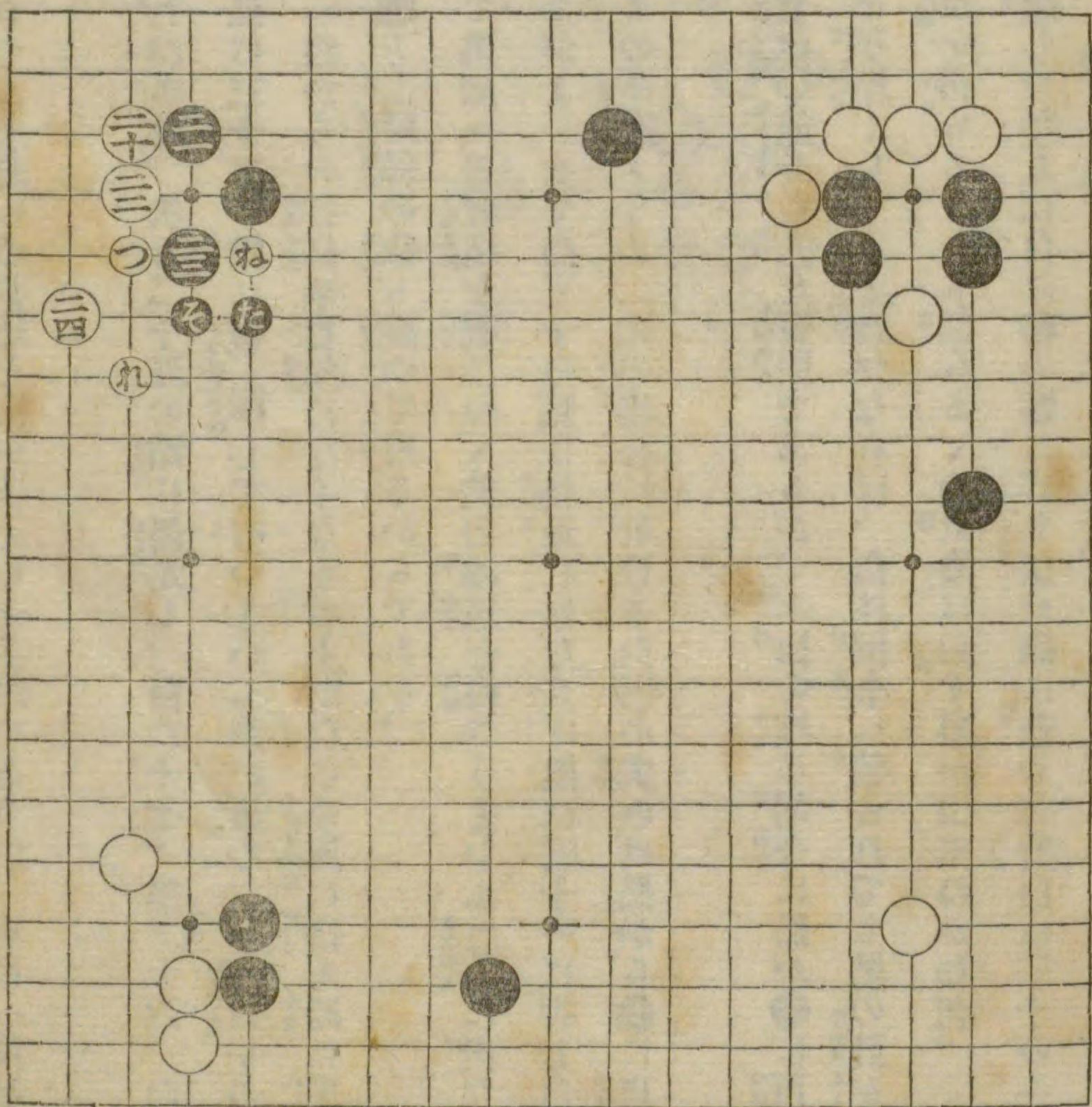
前圖白二十の手の残説

白が二十の手を此く三々に打込んだのは、若し此の手で二十二の點即小目に打つたならば黒に二十の點へ内頂けされて（内頂け外頂けは互先高目定石の研究に譲る）其の結果黒に非常の利を與へる事になるから、其を避けたのと今一つは黒に外面から斜走掛けに包圍させて黒の大封域を蹂躪し黒當初の五の一子を愚に歸せしめやうとの白の策であるから、黒は此の策に陥らない様本圖の通り二十一と尖頂けて之に備へたのであるといふ事は前に述べた所であるが、然らば白二十は黒二十一の尖みのために所期の目的を達せず失敗したのかと言へば決してさうでない、相當の代償を得て歸つたといふ事になつて居る、其理由は黒二十一と白二十二との交換が黒の不利に歸して居るからである、此黒二十一、と白二十二との交換が黒の不利であるといふ事は一見して解る譯で、若し白二十が二十二の點に初め打つたならば此の二十の點は黒の方から當然頂け可き所である、然るに此二十の要點を白が占め二十一の尖み頂けに至つて二十二に白が引いた此の結果をば、假に手順を更へて言ふと、白二十二と小目に打ち黒は二十の點に頂け得可きを殊更らに緩慢な二十一といふ尖みの一着を下し白に二十の點に行ひさせたと同じ結果になつて居るではないか、要するに此ういふ場合に白に二十と打たれては、黒は二十一と尖み頂けるが穩當で白も此く二十二と引いた上は黒二十一の代償として十分此の部分に於て利を得たものと言はねばならぬ、黒二十三の手は必ずしも此く打つとは限ぬに單關するも又は斜走するも任意である、黒若

し二十三の手でに飛んだなら

ば白は二十四の手をに二間飛して居ればよい、黒若しに斜走しても白の應手はやはり此二十四でよい（但黒がと斜走して白が二十四に應じて居る時は後に白からに頂越す手が残て居る）本圖の様な場合に白が二十四の手をに行びるはよくない其は黒に調子を與へて其の勢力を加へしむるばかりである、此ういふ場合は白二十四の斜走が一番輕くて好いのである。

第二十一手より第二十四手迄



(局先互法石布)

黒二十五以下二十九迄の手は白を攻めつゝ上邊への打込を防がうといふ手段であるが、更に一策をいふと

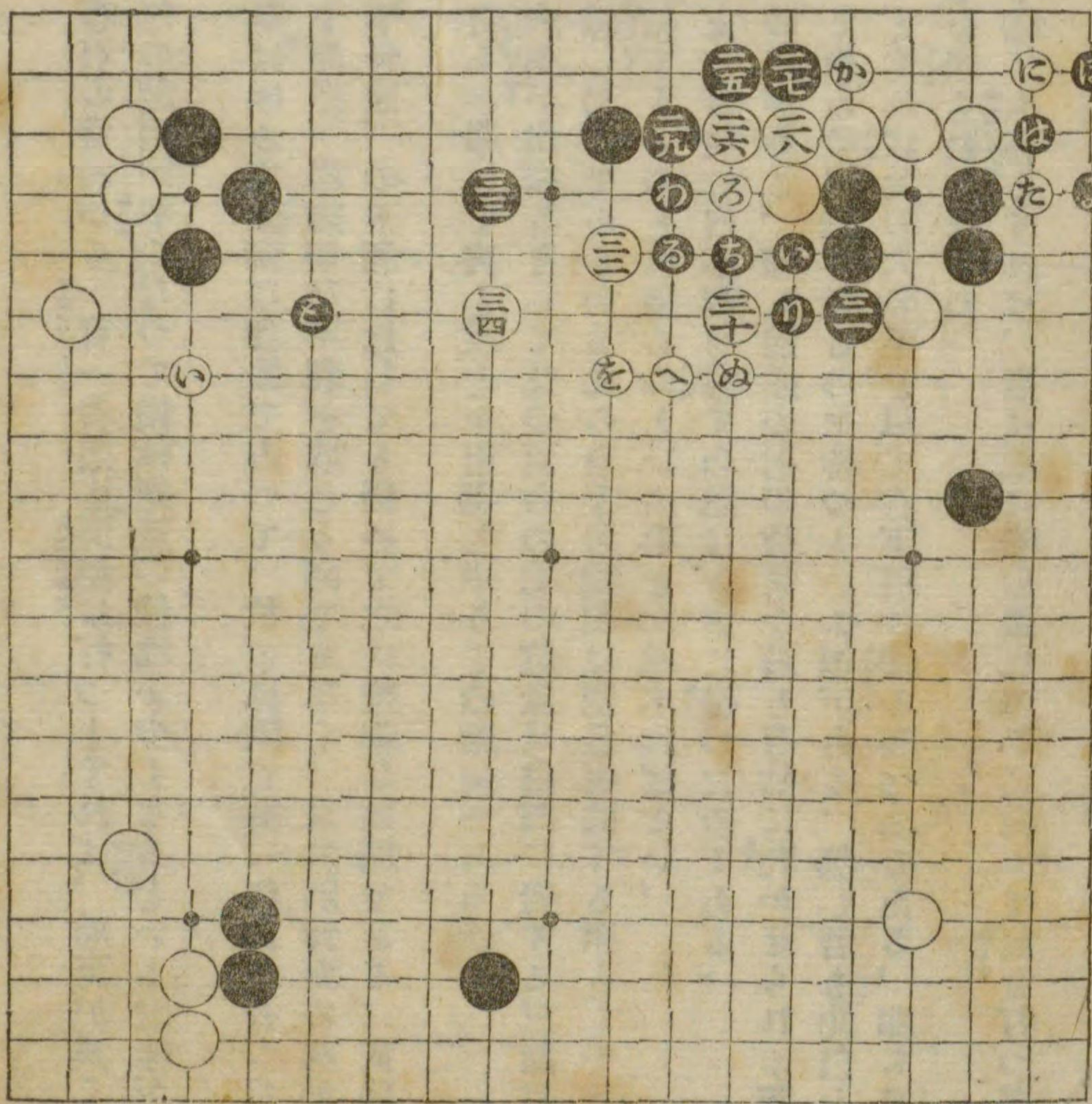
此の二十五の手で●に曲り白を○に行びさせ、次で二十五の點に斜走し、白二十七、黒二十六、白二十八、といふ手順に運んで然る後黒は三十二の點に單關して打つといふ方が黒のため面白いのである、何故なれば此くすると黒地へ白からの打込は自然になくなり右上隅白の中原に出る路は閉塞し得た譯で後に至つて黒●白○●黒●と二段綽の味も残つて居るからである、

若し又本圖白三十の手で○に斜走して黒地への打込を覗ひつゝ其の地域を侵さうといふ打方に出たならば黒之に應じ三十二に單關するがよい次で白三十の點に斜走したならば黒は三十一に押し白が○に尖んだならば黒は●に斜走するの手順となる（此の場合に於ける白○の尖みは黒から●に頂越して切られるのを防いだのである）

○問、是は稍々布石の範圍を超えて實戰の領分に入た質問であるが、本圖の様な場合に黒が●に頂越し之を截らうと見せて右側の黒を手厚くしやうと爲たならば、白は例令へ截られても黒の計を破るものであらうか、或は黒に利益を得らるゝとも截らるゝの危険は犯す事が出来ぬか如何、

○答、本圖の様な場合黒若し●に頂越したならば白は○の點に打ち黒が●に截つた時白は三十の子を○に行びるがよい、次で黒が●に並んだならば白は○に單關しておき、黒が●に二子を粘い

第二十五手より第三十四手止



(局先互法石布)

で白の縁を截断した時、白は●に抑へておけばよい、勿論此く截断されて終つた以上は後に黒から●、●、と二段綽をされる手は残つて居るが其時は白は●に截り黒●にうけて茲に切争が開始される事となるのであるが白は近く活劫種のあるのに反し黒は殆んど勝敗を堵して掛らねばならぬから此ういふ切は黒として容易に出来るものではない其時機の進むに際して白は●の點に一着を下しておく位に止まるのである。

互先第五局

白二は少しく不利の傾がある、其は布石の當初から一着一着黒と同型に打つとすれば、局面が狭く成り易い、言葉を変えていへば、變化の範圍が窄くなつて縦横劃策の餘地が少くなるといふ意味が生じてくるからである。

「注」此の白二の着手の不利といふ事は極めて微細な理論であつて、彼の隣隅正面に相向ひ合つた時の敵との同姿勢（餘論第四頁以下参照）程痛切な不利を感じる譯でもなく、又隣隅背面の我が既着手との同姿勢（餘論第十頁以下参照）の不利に比しても極めて之は些細な問題である、尙殘説は餘論に於て再述しやう（絶）

黒五は白に⑤に掛らせておいて七に打ち一舉して夾と攻とを兩得しやうとの趣向である。

「注」目外の五からは常に七方面へ大拓が出来るを以て此の場合の七の位置は白四に對する三間夾となる此等の理由は、既に再三詳述した所であるから此の着手の説明は爾後省略する事としやう唯場合によつては目外必ずしも大拓するものとは限らぬといふ事を記憶すればよい。

白六は掛りをなし得られる左下、右上、兩隅の内不利を醸すの恐なき方に掛つたのである。

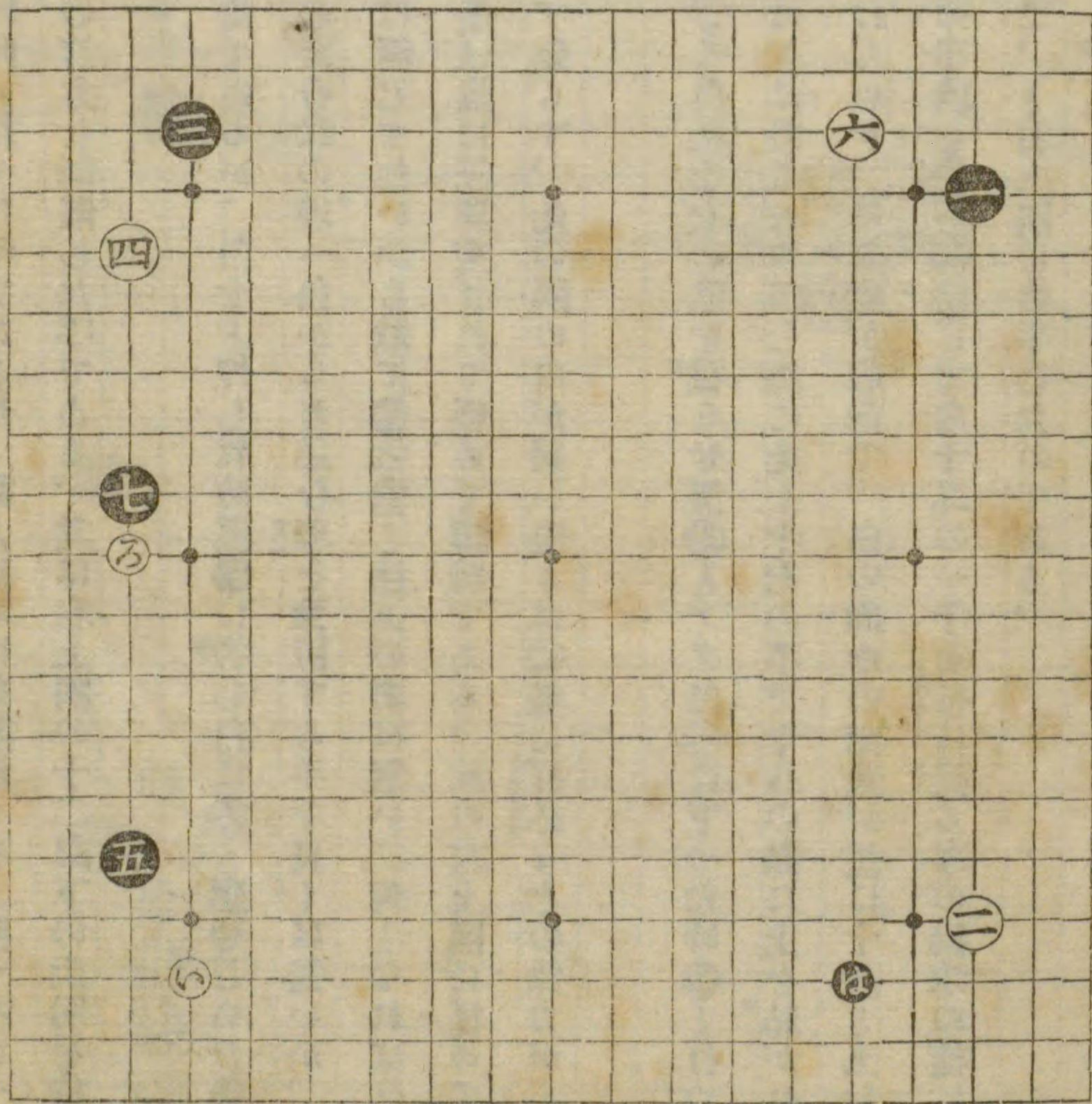
「注」左下隅へ掛れば敵の策に陥るの患がある、即ち前述の七の位置を最も有効に利かせられる譯になる、で先無難の方へ六と掛つて徐ろに戰機の至るのを待つといふ趣がある、然し若も此白を假に黒と位地を轉換して居るものとすれば此の六の手を以て右下隅に締る事勿論である、即ち黒と白との着手に自然と差のある事を悟らねばならぬ。

黒七は⑦の點に締るもよし、白若し⑧に大拓をすれば、黒は次に⑨の邊に白二に向つて掛を打つ手順となつて白は不利である。

「注」黒五から七へ大拓の手の良着たるに拘はらず、何故白四から⑧方面への大拓きが良くないか

第七手迄

と言ふに、本來着手の順序からいへば明隅に先着を下す價値は言ふ迄もないが、掛る可き所があれば「掛」締る可き隅があれば「締」る此の「掛」「締」の二つは第一位に屬す可き要點であつて、中邊への拓きは第二第三の打着點である、只黒七の如きは一手で攻守兩得の好點であるから許されるので、左下隅⑥の點への締若くは右下隅白二に對する掛なるものは中邊の拓よりは重要であるといふ道理は何所迄も動かぬので、唯彼を先にし是を後にする事のあるは、畢竟場合のためと見なければならぬ又稀に趣向即ち策戦上第一位を後にして打つ事がある、次圖黒七の手、白八及十二以下の手の如きは即ち其れで、急に敵に迫つて利を占めやうといふ様な時に多く行はれる。



(局先互法石布)

白八、十、の二着は黒の策に乗せぬ様此く打つたのであるが、其と同時に對隅即ち右上隅へ次に十二と打つ上に於て豫め黒の或る一種の打方を制限した手である、其は右上隅の十二以下の説明を待つて明了する譯である

○問 白八の時黒九と應じるのは定法であるが、白十と押しした時黒九に押し白に九と應せしめた後に尖むといふ定石に出た方が此の場合九の邊へ白から打込む理を豫防する手で良くは無いか、

○答 此の場合白より九邊に打込理は斷じて無いから敢て九と運ぶの要は無、何となれば已に左上隅に掛つてある目外の白一子は黒に三間夾されて極めて薄弱である、此の左上隅に極めて鞏固な白の勢力でも出来た上はイザ知らず、此の隅の白が弱い限りは九邊に打込などの餘力がある可き筈はない。

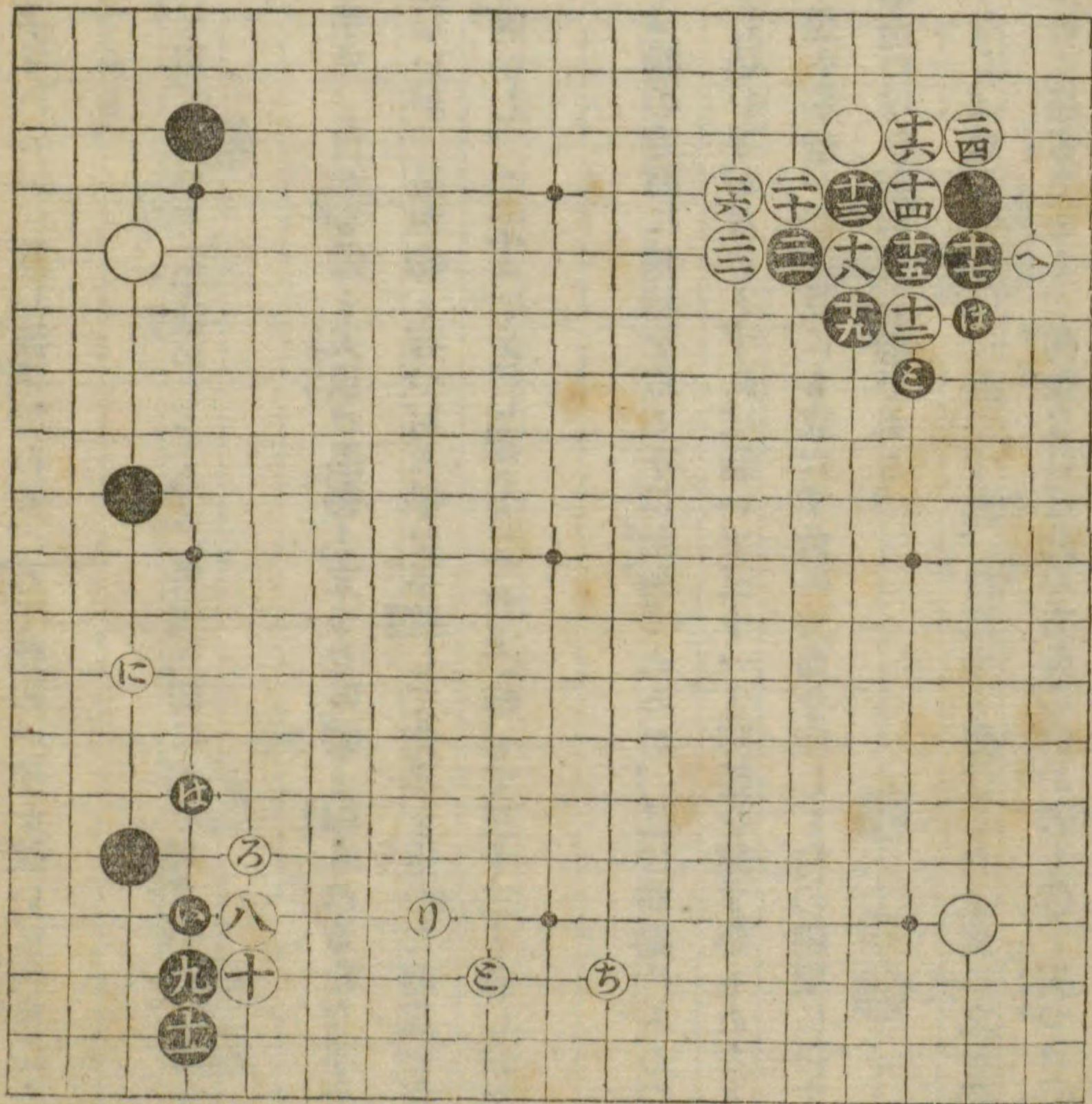
黒十七、趣向によつては十八の點を粘ぎ、白に十七の點を截らせ黒九とアテ白九に下つた時九と打つて白十二の一子を征に提る手段に出ぬとは限らぬ、但し黒に此く十七の手で十八の點に上を粘がれたとしても敢て白の不利といふ譯ではないが、唯其處が趣向で、白の胸中の劃策が黒に十八と上を粘がれるを不便と感じた時、其の黒の手段を豫め制限して白十二の一子を征に提る事の出来ぬ様に先づ以て八、十、と打つて然る後十二、と右上隅に着手したのである、

黒十九の手で二十の點へ十三の一子を行び出す手と本圖の通り十三の一子を捨て、打つ手とある、

其の利害得失の詳解は大斜定石の部に譲る事とする。

「注」本來言ふと白八、十、と運んだ上は九に三間拓をしておくのが普通であるが、特に趣向のある場合若くは他に急を要する點のある時は手拔するのも決して差支はない、本圖の如きは右上隅を打つ趣向として茲に子を運び後に至つて、九、十の點に打つて當初に打つ可かりし九の一手を省略し得るといふ順序になつたのである。

十三の所へ一子提る 十八の所粘ぐ △第廿六手迄



(局先互法石布)

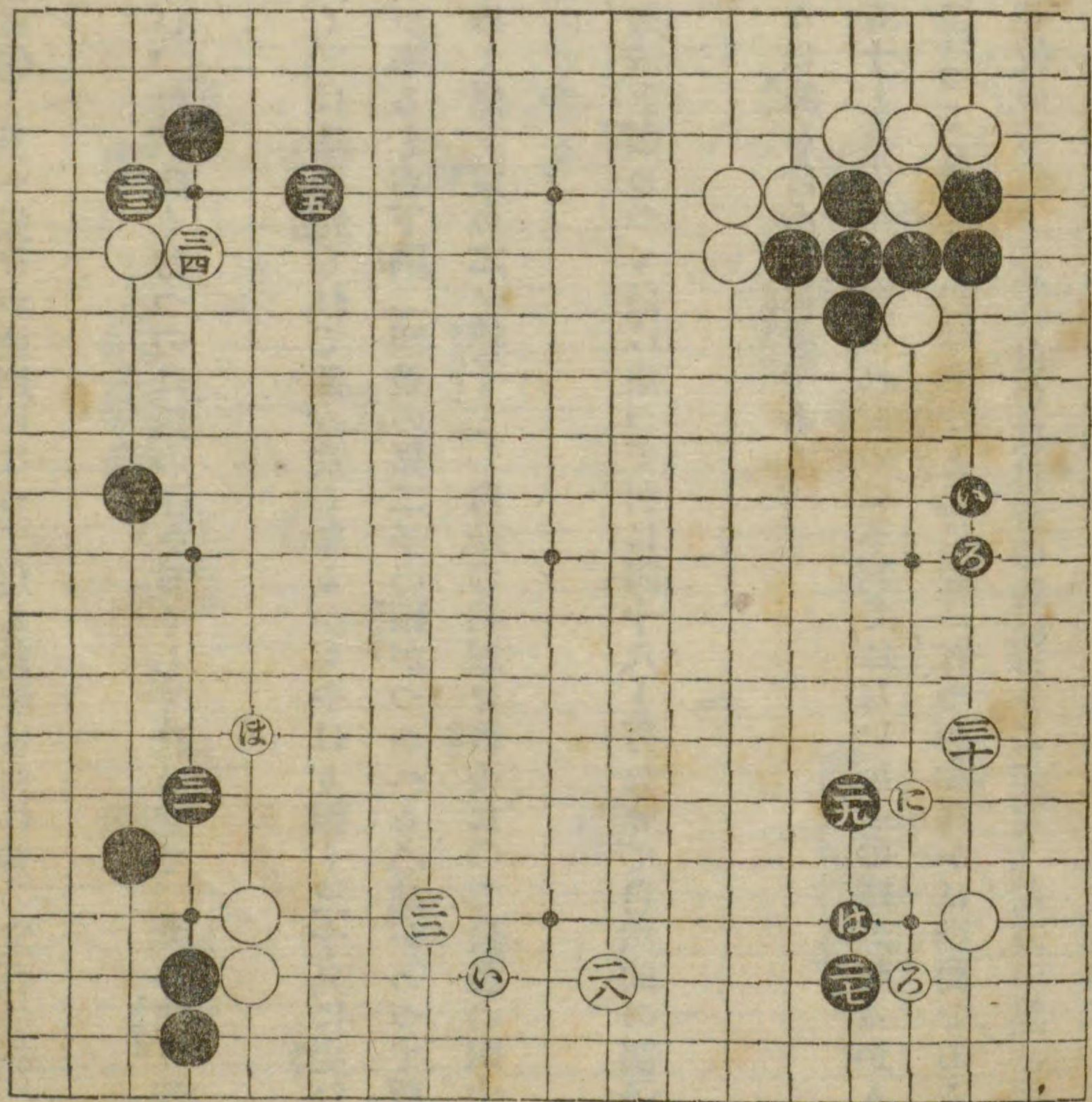
黒二十七の手を⑤に打つのは普通の手であるが、然し後手である、乃で此の一手を抜いて何處迄も先手を取つて打ち廻さうといふ趣向である、
 白二十八は黒二十七に對する三間夾を以て兼ねて(手抜のしてある)普通三間に拓く可き⑥の一着を間に合して置かうといふ着手である、
 黒二十九は三間夾定石として常用の手で、白から⑦と尖頂け黒⑧と立つた時⑨と煽られる急な手を一時緩くし、防いでおく手には相違ないが、最初⑩と打つ可き手を手抜して先手を提つた趣意を何處迄も貫徹して三十一の守を先手で利かし、(三十二と白に應じさせた上)轉じて三十三と急に白を攻撃する手順なる策源の手である、

問 黒三十一の時此の手で⑪若くは⑫の方面に地域を造る手は如何であるか、已に前説にもあつた通り左側の黒地へは急に白から打込む手がないとすれば急いで三十一と防備を施す要もあるまい、其よりは折角築いた右上隅の黒の堅壁が何の役にも立たず此の方面を空しく白の跳梁に任すといふ状態になるのを防いで、⑬邊に子を運びたい様である。

答 當初黒二十七の手で⑭に打つならば兎も角、已に黒二十九、白三十と運ばした上更に之を⑮、方面から行かうといふ考は極めて愚劣である、何故なれば此の方面の白が若も⑯と尖つけ⑰と斜走して居る形ならば是から⑱の方面に子を運ばれるのは中々白が手厚い形勢となるから辛

第三十五手迄

抱が出来にくい、三十と飛んだ形は位地が低いから敢て苦にならぬ、乃で此の方面は白の來るに任せておいて先三十一と自分の地の缺點を補ひ此の處を手厚くしておいて⑳邊の打込を覗い白に三十二と備へさせて然る後三十三と急所を衝いたのである、此の黒三十一は單に白からの打込を防いだ手と見てはイケぬ前説にも陳べた通り此の場合殊に白からの打込はないが⑳の邊に臨まれて位地低く之に應じなければならぬ事になる、即此の三十一は先手を以つて㉑の高壓を防いだものと見ればよろしい。



(局先互法石布)

白三十六の手を若し⑤に打てば、黒は⑥と星へ尖むが通則になつて居る此等は何れ其の定石の部に就て詳解する事であらう、
 白三十八の手は或は④に打つてもよい、白が此く打つのは黒の子を重くして攻め立て、其の間に利益を占めやうとの意である、

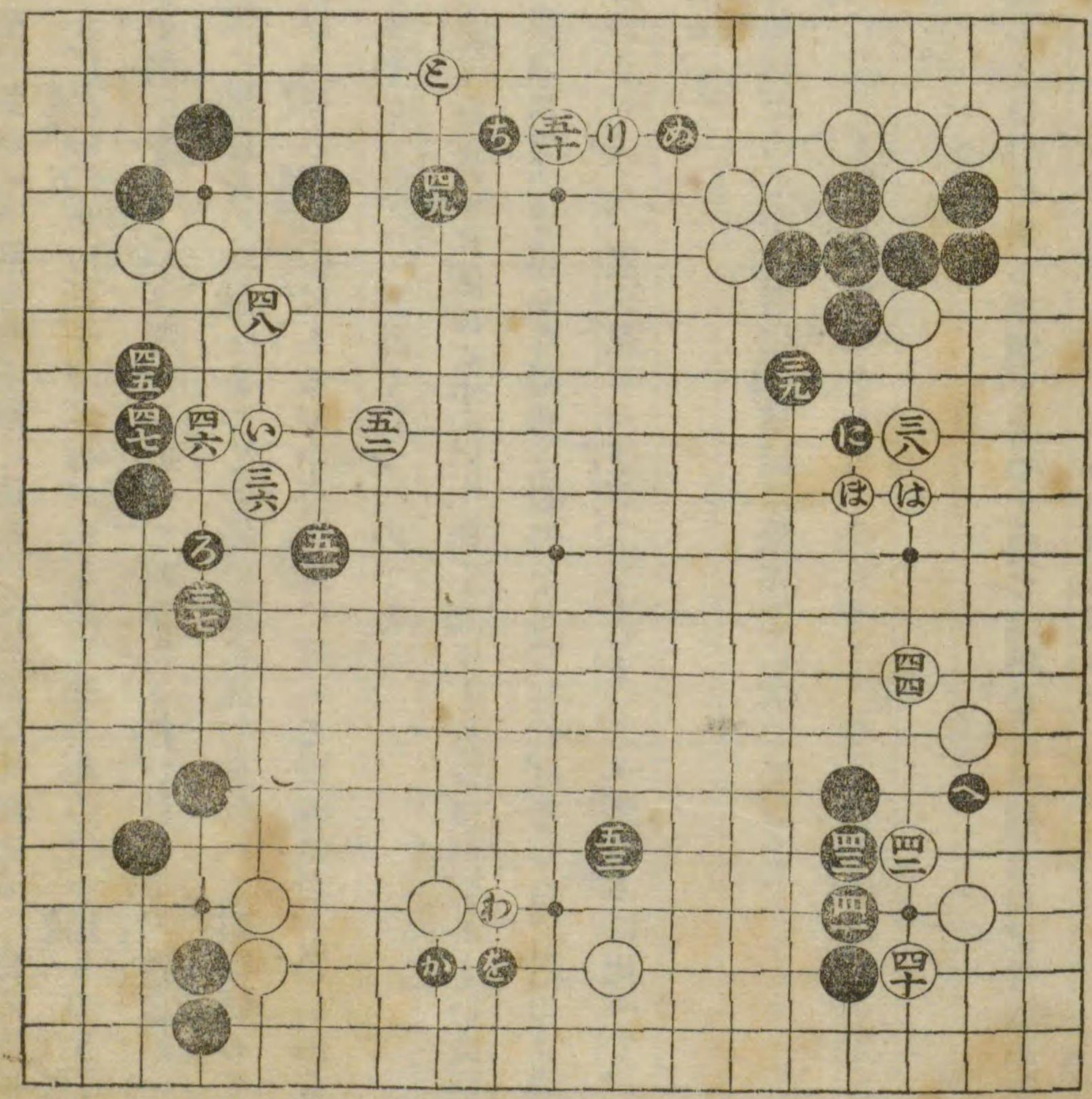
黒三十九は⑦に頂ける手もあるが此くしては⑧に縛られて益々重くなるからやはり軽く三十九に尖むのがよろしい、ばかりでなく⑨に白が来ると右下隅二間飛の黒二子の頭がつかへる心地があつて面白くない、白四十以下數着は先手を以て黒を責め之を棒子とし自分の地域を治めたので最後の四十の尖みで⑩の頂越の味を無くしたのである、

黒四十五は白の眼形を奪ひ、自己の地域を擴めつゝ白に迫つて白に四十八と打たせて自然的の調子を以て四十九と打つたのである、
 黒五十三は攻守兩様の意味に於て種々の味を含んだ良着である。

注 黒四十九と高く打つて白から五十と其の裾を窺はれるのは不利ではないかとの疑が起るかも知れぬ、勿論此の四十九の手を⑪に打つておけば、白は五十と急に茲に打つか如何かは疑問であるよし白が應じるとしても、⑫に打つ位のもので、其は白が彼自身の防備をした迄で、左方の黒は何等大した影響は受けぬ譯である若又黒⑬に打ち白が⑭に應せぬとすると黒は後に⑮迄進撃する手

順にもなる、

然るに本圖に就て見ると四十九が一路高く四線に在るため白に五十と彼の好點に打たれた其上に此の黒の明き裾に向つて更に⑯と侵略せられる手になつて居る乃で單に此の部分のみで見ると黒四十九は確に不利な手に違ひないが、此ういふ一部分の疑問も全局面を通觀すると茲に初めて合點が行く様になる乃ち布石法研究の効果は此ういふ場合に於て現はれるのである。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



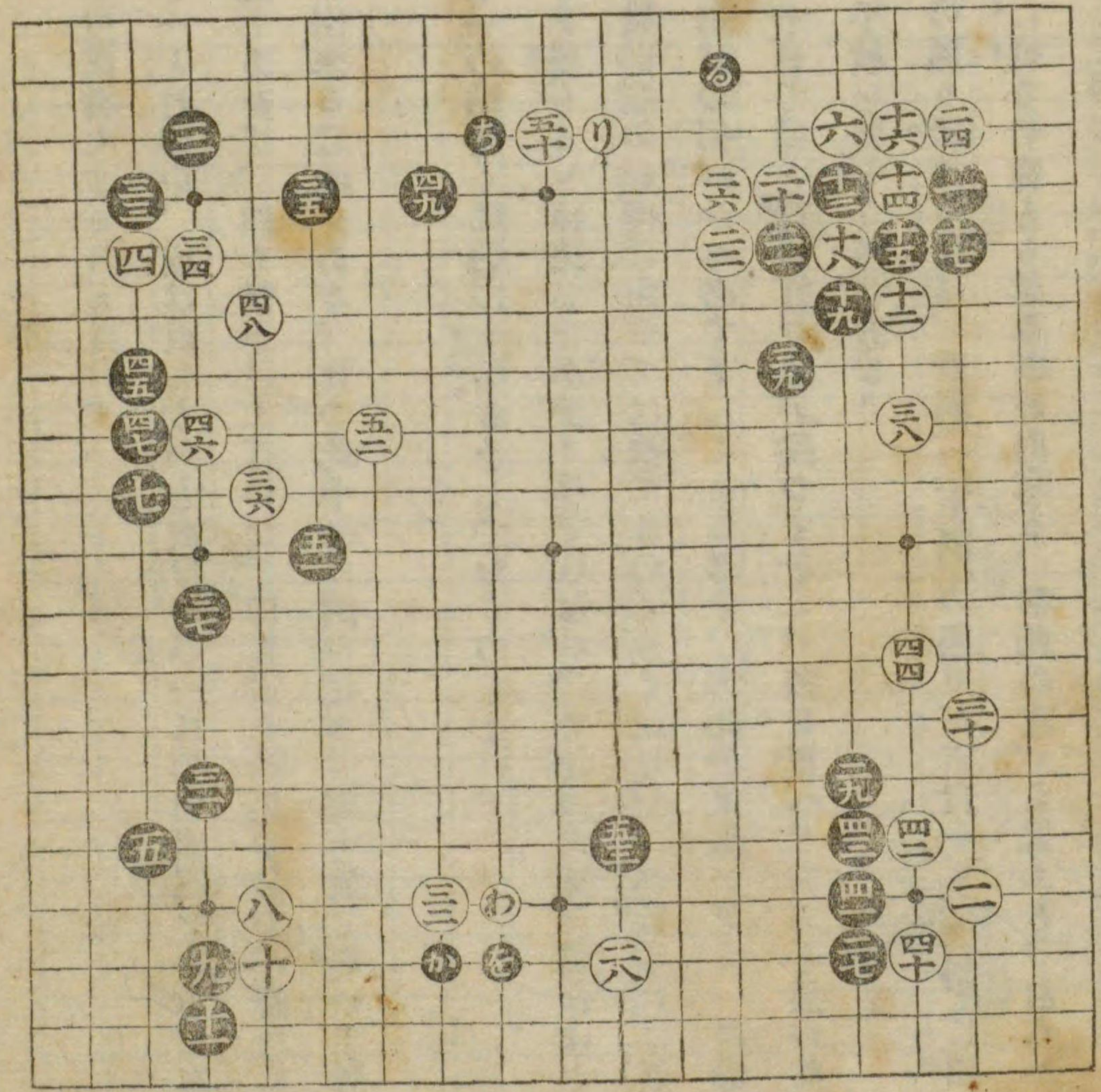
『補説』 此場合に於ける局面の状態は黒は右下隅及右上隅に眼形の無い重い石がある、白の方は黒四十五によつて根拠を奪はれたまだ形の熟せぬ五子の危石がある其で先づ此の白を煽りつゝ子を運んで遙に右上右下の黒に聲援を與へやうといふ手段を取つて四十九と打つたので、若之が一路低く○の邊にあるとすると其は單に黒自身の防備とあつて中邊の白に感じを與へる事は極めて稀薄であるが此く一路高くあるだけ（裾の隙く悞はあるが中央方面に與へる影響は少くないから黒は先此場合全體の勢力均衡といふ事から此く一路高く打つたのである、然らば、黒が中央方面に重き注意を拂つて居るに關はず白が、此く五十と打つは如何かといふ疑も或は起るかも知れぬ、然し其は黒白双方の立場から局勢を観察をしなければならぬ、黒の立場は前説の通りであるが、扱白の方からいふと、黒に熟せぬ子が（右上右下）二ヶ所あるに比べて、白は左上に一ヶ所あるばかりである、又黒には左側に三十目以上の確な地域があるが白右側の地域は餘程之に劣つて居る、乃で黒四十九が此く一路高く裾明になつて居るのを幸として、先五十と打つて自分の地域を定めると同時に黒の裾を覗うたのである。

「白五十を萬一手扱すると次に黒からは○に走る手順となつて白は其時後手で應じねばならぬ然らざれば更に○邊に走られて白は多大の損害を蒙らねばならぬ事になる」

黒五十一と薄弱な白に迫つて五十二と應せしめ自己勢力を中原に展し遙に右上右下の黒と呼應し、更に五十三と打つて下側の白に感じを與へつゝ、自己の勢力を加へたのである此場合若白が手扱すると或は黒から激しく○と打込まれ白○と押した時、反對に○の方へ行びられ白地は全く蹂躪される悲境に立たねばならぬ。溯つて「黒四十九が若○に在れば位置が低いから白五十は直に應答せぬかも知れぬが此く四十九と高く來られては白たるもの辛抱が出來ぬ」

第一の手より再掲

○十三へ一子とる ○十八の點を粘ぐ



~~~~~(局先互法石布)~~~~~


互先第六局

黒九の手は單に十一と打つて白六を三間夾とするのも良い。

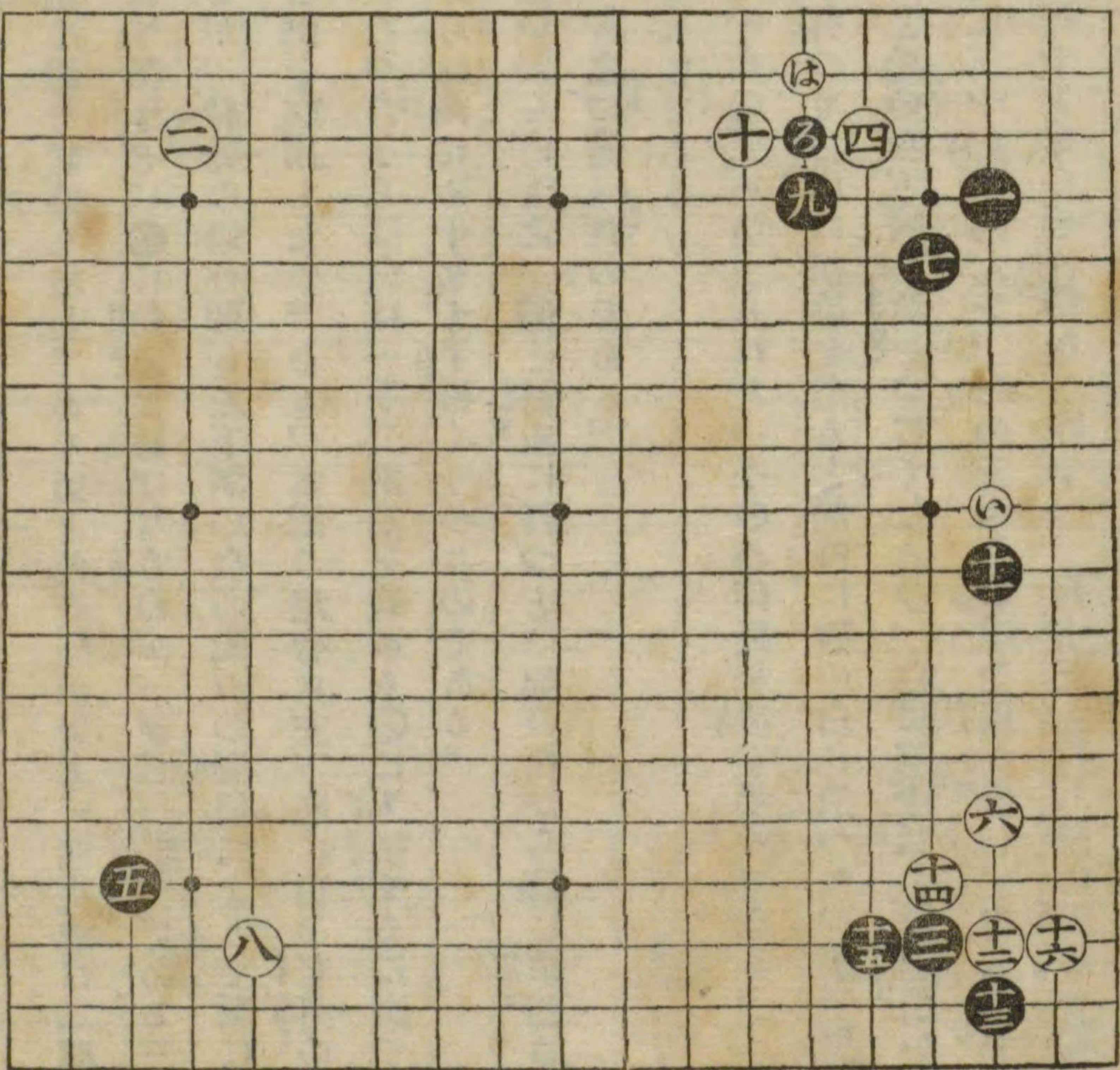
「注」此の九と掛けておいてから十一と打つか、或は直に十一と夾むかは一に趣向問題である、本圖は先づ九とかけ白に十と低く應じさせて、然る後十一と打つた、即ち右上隅黒の勢力が優秀になつて居るだけ廣き拓きも安心の出来る意味がある、且つ此十一は例の拓きと夾と兼て利いて居る譯である、

白十は必ずしも飛ぶには限らぬ、十一の點若くは⑩に大拓きをしておくのもよい。

「注」黒九の時白手抜して四の一子を捕らるゝは決して小サイ手ではない、で先づ大抵な場合は十と飛んでおくのであるが、然し策戦計劃の如何に由つては捨てるのも悪くはない、何故なれば茲に手抜する一着は之の代償として局面の何れかへ必ず下してある譯で、尙此の處黒が更に一着と打つた後に於ても白からは時機を見て⑩と緯ね打つ味が残つてをる、語を更へて言ふと黒が此の一子を確に提りキルには尙多少手數を要する譯である、

尙溯つて言ふと、黒九を先手で圖の通り掛けるには、對隅(左下隅)の黒五が若白から「大斜」に掛けられた時上を粘いで白一子を征に提る準備とも見る事が出来る、即此の意から言ふと、白八から黒五を大斜で高壓する手を豫防して居るものとも言へる(是は前第五局白八の手以下の説明と

第十六手迄



同意であつて只隅の位置と黒白、の立場とを變更したものと見て茲に應用すれば思半に過ぎるであらう、唯此場合白の趣向が白八から黒五を大斜にかけ普通の手順に運んだ末黒が上を粘いで白一子を征に提られても厭はずして大斜に掛けると言へば、其は除外と見ておけばよい、

白十二は先手凌ぎである。

「注」若是を前局の様に二間飛すると更に尙手を費さねばならぬからである、

黒十七を此く二間拓にしたのは左下隅白の掛が目外に在るからである。

「注」互先定石一間夾の部第一圖及第二圖で詳述し盡してある通り此の隅が若も一間夾或は二間夾である時は殆んど場合の如何を問はず黒十七は斜走せねばならぬが、茲は三間夾である三間夾の時と雖も普通は矢張りであるが、特殊の場合即ち左下隅の白の配石の關係によりて稀に二間拓する事がある、茲は則ち此の特例を應用したのである、本圖の場合は左下隅に白の目外の掛がある、此場合若も黒が十七を打つたならば白は一手で兩功を收めるに大拓するに決つて居る、乃で黒は白に此の好點を占められぬため十七と手堅く守つたのである。

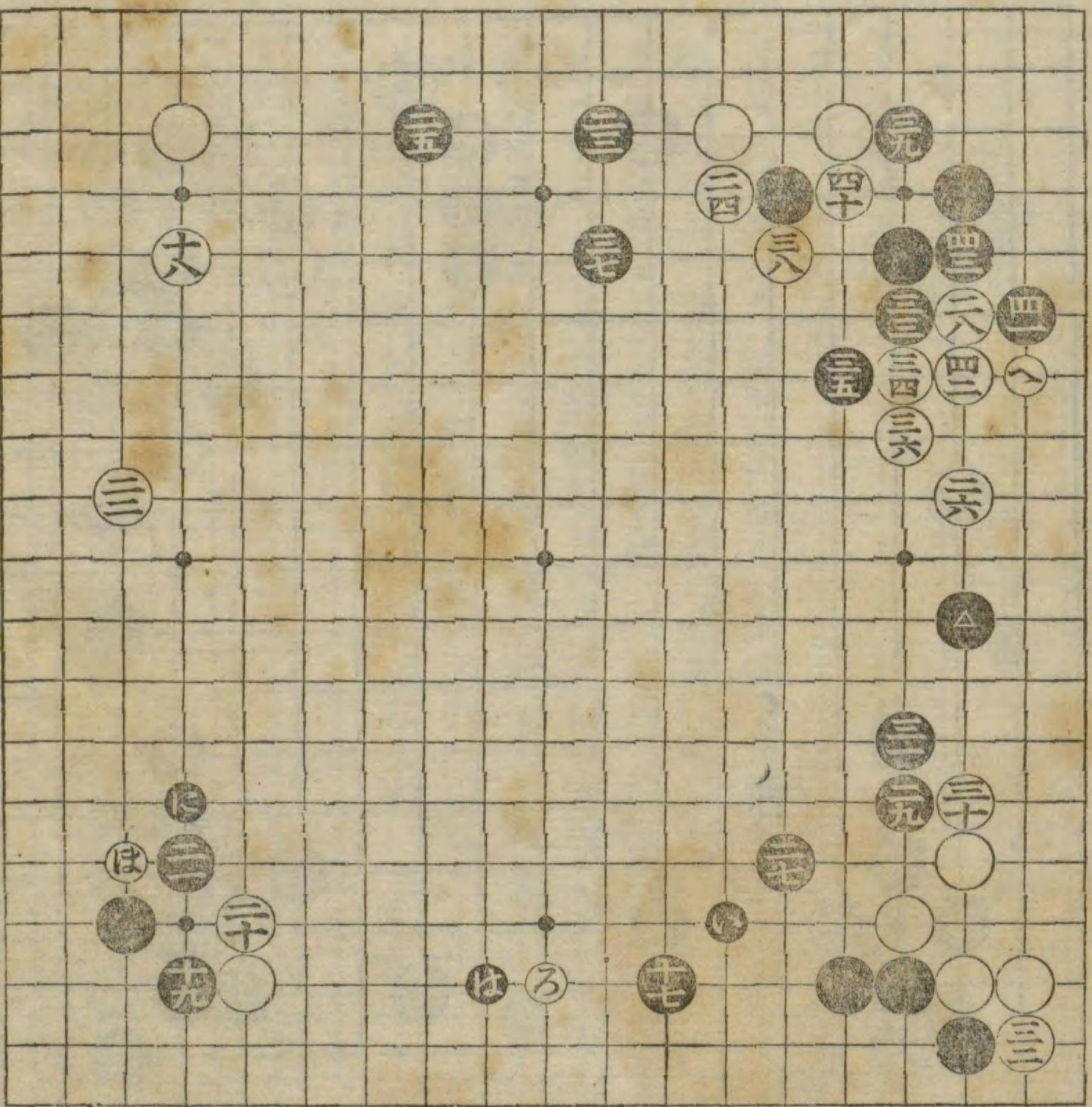
黒二十一と尖んだのは黒の夾がないから若も之を斜走に打つと、他日白から頂越される味があるから、手堅く二十一と打つて之に備へたのである。

黒二十五は手順を以て白の地域を削つたのである。

黒二十七は先づ包圍の勢を示して白二十六のため追まられた一子の△印黒を凌ぐ手段である。

「注」黒二十七の時、白は先二十八と打つて自己の根據を造ると同時に隅の白に迫つた、所で黒は之を顧ず先手を以て二十九、三十一と此の右下隅の治をつけてしまひ、白に三十二と手を引かせて次で三十三、三十五、と押し、更に三十七と飛んで、白の三十八の手を逼り出し、尙又三十九と隅の實利を收める手を兼ねて白に四十と守らせ、轉して四十一、四十三と打ち白の眼形を奪ふと同時に隅の守を堅くした、此の二十七以下四十三迄の打廻し方は實に一分一厘も隙のない手で

第十七手より第四十二手迄



~~~~~(局先互法石布)~~~~~

あつて、局面の空漠たる當初に比べると手数も漸く進んで居り形も稍出来て居るだけに解が出来易く、翫味すると無限の興を覚える處である、只茲で初學者のため特に注意を要するのは黒四十一と夾んだ時白四十二と堅く粘ぐのが本理で、此手でと押へ黒に四十三とアテられてから四十二と粘ぐは遠理である、此は數々現れる形で詳細は「置棋定石白大々斜走掛第四圖參考甲圖」の説明と異曲同調であるから彼の説明を参照せられるがよい。

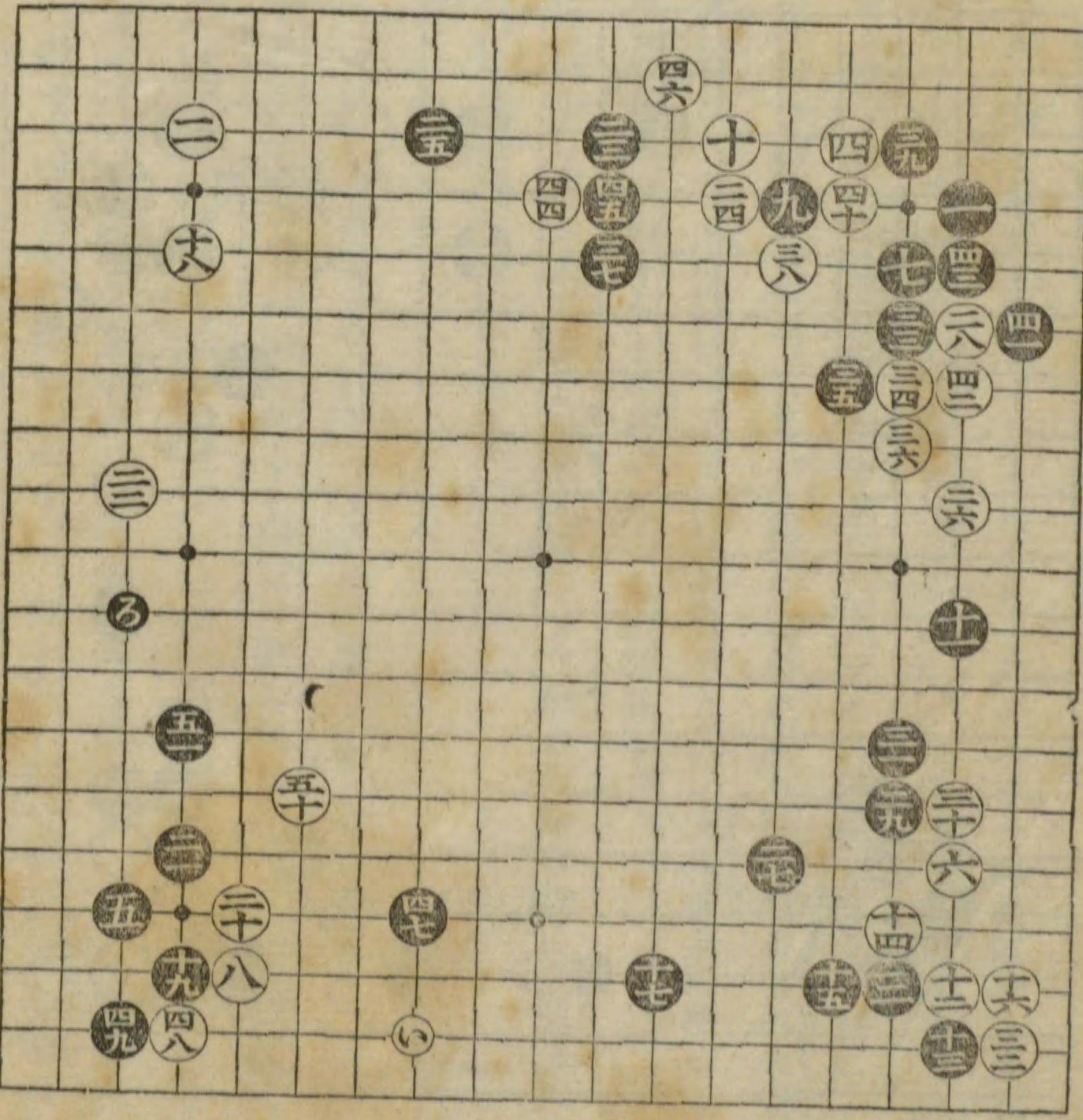


白四十四と覗き次で四十六と黒

の根據を奪ひつゝ、自活を計る手段で尙多少の味が残つて居る、黒四十七は(四)と低く打たせる手段で若し白低く(五)に来たならば其の方面は顧慮せずと一パイに詰るの手順に出るがよい。

「注」白四十四と覗き四十六と尖むのは棋家の所謂る手筋といふものである、若四十六と打つてから後であると白がたとひ四十四と來ても黒は之に應じないかも知れぬ、即ち同じ打つ子にしても手順といふ事が最も重要なのである。

(再掲) 第一手より第五十一手止



### 互先第七局

白八は黒の爲めに六の一子を(一)と三間夾に攻められるのを防いだ手で、然し白の立場としては必ずしも此く黒からの夾を恐れねばならぬと言ふ譯は無い、趣向に由つては(二)と左下隅へ掛つても悪くはないのである。

「註」黒七迄の布石の大意は今迄に講述してあるから省略する、今此の八の手で白が(三)に掛つたとして、其の時は如何打つか、左上隅へ(四)と掛るとしても白(五)が目外に掛つて居るから面白くない、又白(六)を(七)に夾むと言ふ事は白六が同じく目外に在るから不可能である(此の理由は目外の特長云で屢々詳述してある)

さりとして(八)若くは(九)に尖むといふ様な緩慢な事は出来ぬ、此場合最も適切な着點は(一〇)に白六を三間夾として兼て右上隅一、七からの拓きとする、乃て之の反面から言う(白の策戦計劃は別問題として)黒(二)の夾を防ぎ其と同時に黒一、七からの拓を妨げて八と打つのは至極穩健且つ適切な着手と言はねばならぬ。



第一手より第八手迄

(一、布互先)



「註」白十の手は普通の應手である、若も黒九が●と手堅く尖んだならば、白は十と打つ手で一路  
 □印白へ接して②と小斜走に圍はねばならぬのは、已に講修者の熟知せられる所であらう、若も  
 此の十の手で白が④に掛つたとすれば無論黒に⑤と夾まれて不利を蒙らねばならず、又十三の點  
 に縮るとしても緩慢であつて決して適切なる手とは言へぬ。

黒十一の手は次で左上隅へ十三と掛つて△印の白を上側低地に壓迫しやうといふ手である、或は此  
 の十一と打つ手を以て單に十三と掛るのもよい。

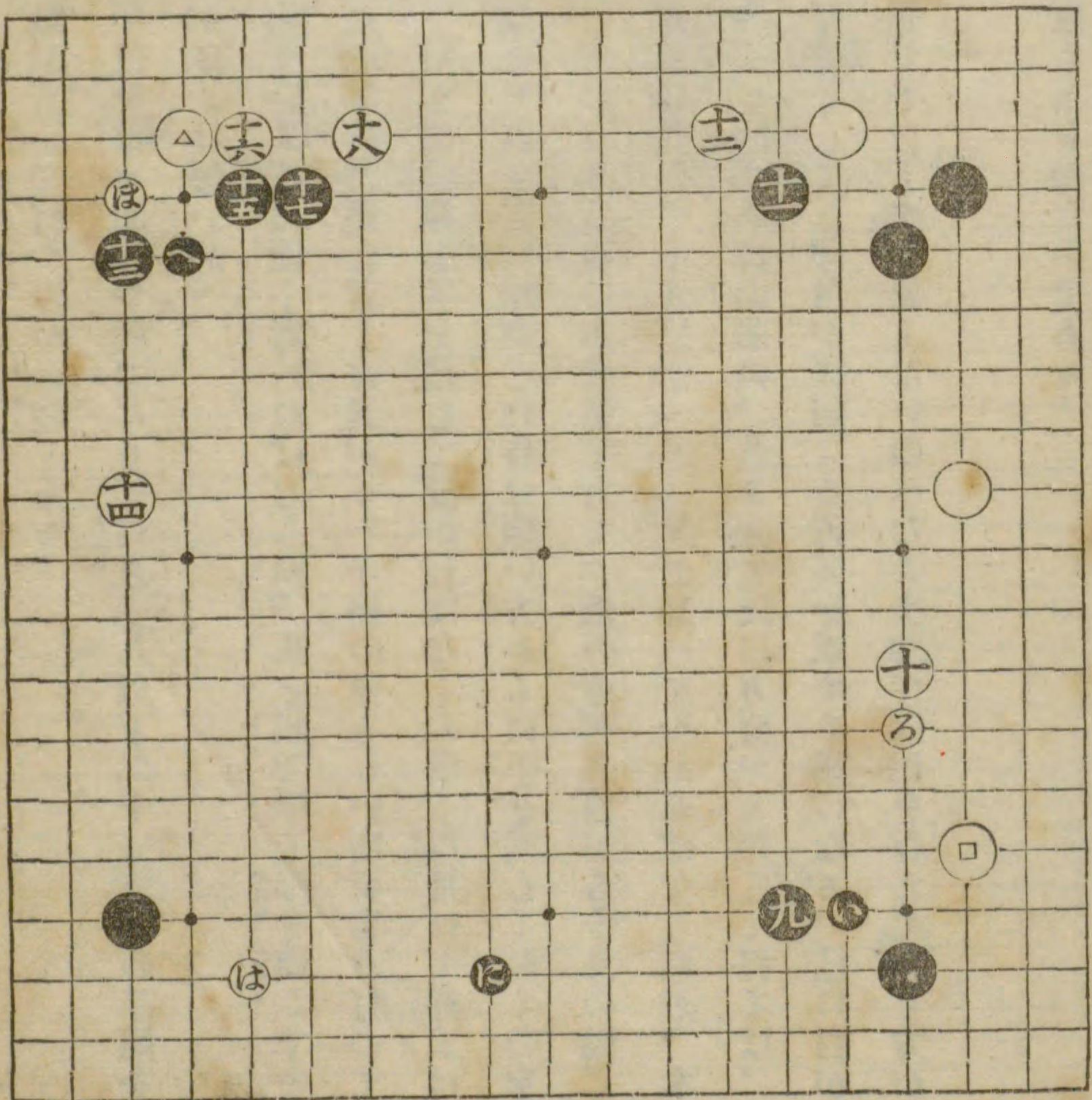
「註」然らば黒十一の手を以て十三から掛つても同じ結果になるかと言ふと然うは行かぬ、何故な  
 れば、黒十一の手で十三の點に打ち、白が之を十四の點に夾んだ時、黒が轉じて十一の點に掛け  
 たとして、其の時白が若も十二の點に應じたならば本圖の結果と同様になる譯であるが、白は十  
 二と飛ばずして茲をば手を抜いて④と尖頂け黒を●と立たして十七から煽つて攻立てるといふ例  
 の策戦に出られる手がある、其で若も白を低地に這はさうといふ黒の考なれば必ず本圖の様に十  
 一から先きに掛けねばならぬ、

乃で本圖は黒の策戦通りに運び得たのである茲で注意を要するのは、若も白の胸算が低地に壓迫  
 されるのを嫌うて居た際ならば兎も角、然らざる限りは此の黒の考が遂げたといふ事を以て直に  
 其が白の不利であると言ふ事は出来ぬ、

(二、布互先)

(三、布互先)

第九手より第十八手迄



何故なれば本圖の如きは黒は  
 白を壓して形勢の雄大を致し  
 て居るとは言へ、黒の前途は  
 まだ未知數である、之に反し  
 て白は低いながらも又窄いな  
 がらも確固たる實利と不拔な  
 る根據を占めて居て此の黒  
 の雄大と對抗して居るからで  
 ある。  
 といふ譯であるから、本圖の  
 通り運ぶが利か或は黒十一の  
 手を先づ十三に打ち白十四黒  
 十一となつた時、白から④と  
 尖頂られ黒●白十七(方圓新  
 法所載の通)となるが不利か、  
 其は一得一失であつて必しも  
 孰が利不利といふ事は斷言は  
 出来ぬのである。



黒十九と押す手で●若くは三十六の點から詰て打つのが本理である。

△問、●若くは三十六の點から△印白を攻めて打つ趣向ならば尙且十九以下二十五までの手順を逐うて上側に胸壁を築いておく方が良くは無いか。

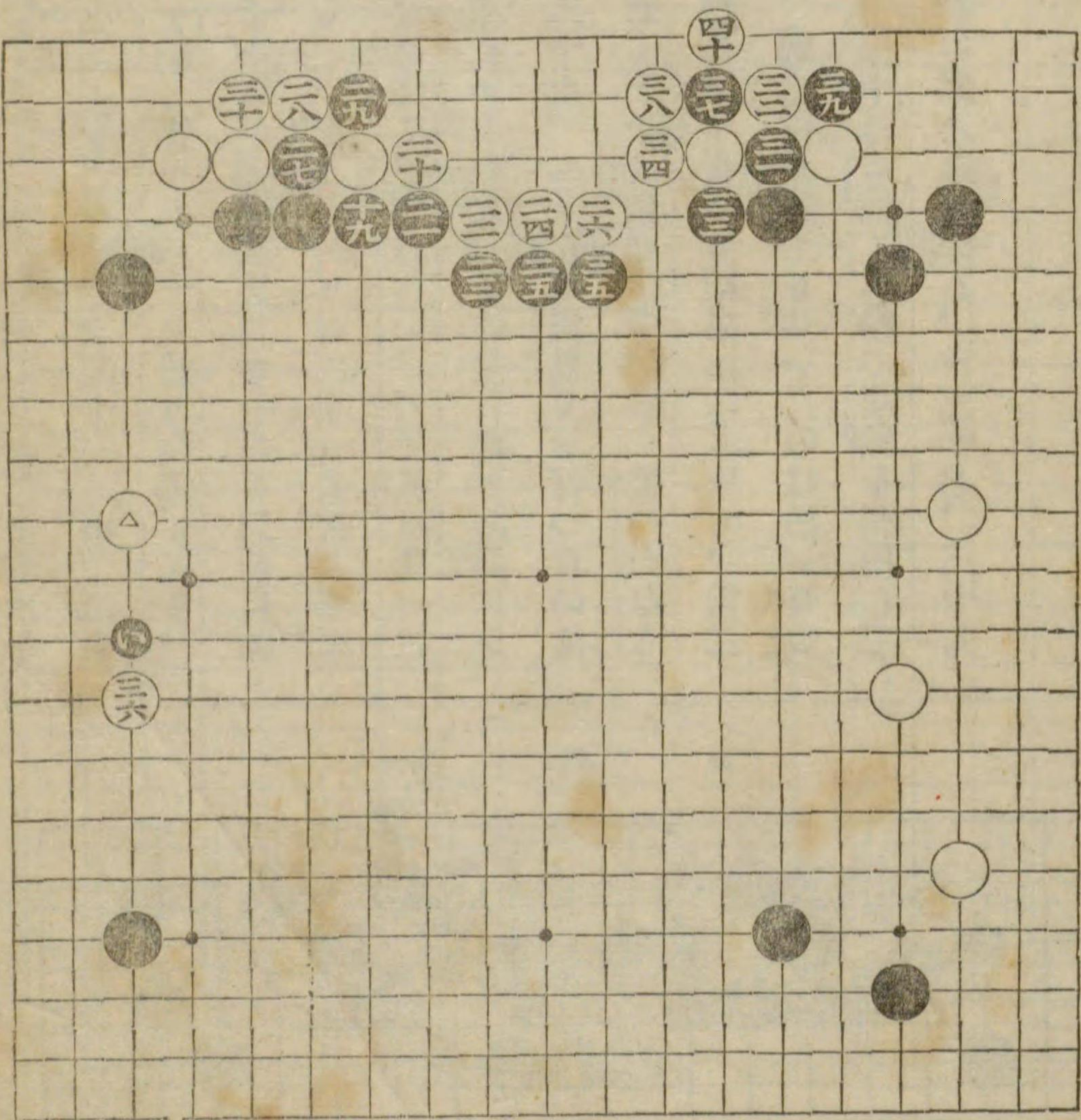
○答、其は一應道理の様であるが、此ういふ所は能く考へねばならぬ。凡そ棋で早く形を熟さすといふ事は最も嫌ふ所で、餘程必要に迫られた場合若くは其がモハヤ何の望もない所で寧ろ打つて終つた方がよいと言ふ様な時で無い限りは、飽迄手を残して置かねばならぬ早く形付けて終ふは禁物である（勿論之は黑白互角の場合で若も強弱相對した時は強い方からは手を残しておくのを利とし、早く形付けて終ふのを弱い方の利とするのが普通である）此の際若も白から十九の點に押されて黒が困るといふ事なら其は是非共先づ十九二十一と一撃を加へておかねばならぬが、本圖の場合白は容易に十九方面から押して出る事は出来ぬ、若も強て此の方面から押して打てば、打つだけ黒の勢力を増長させ其の影響として△印白が痛切なる苦痛を感じる事になる、已に白が容易に來られぬと極つて居る所へ強て手を下す必要もないのみならず却て餘地を存しておく方が可いといふ道理である。

黒二十七と出て二十九と截るは最も宜しきを得た手である。

「註」黒が十九、二十一と押す手で先づ二十七、二十九と出截る可きか、或は本圖の様に二十三、

(四、布互先)

第十九手より第四十手迄

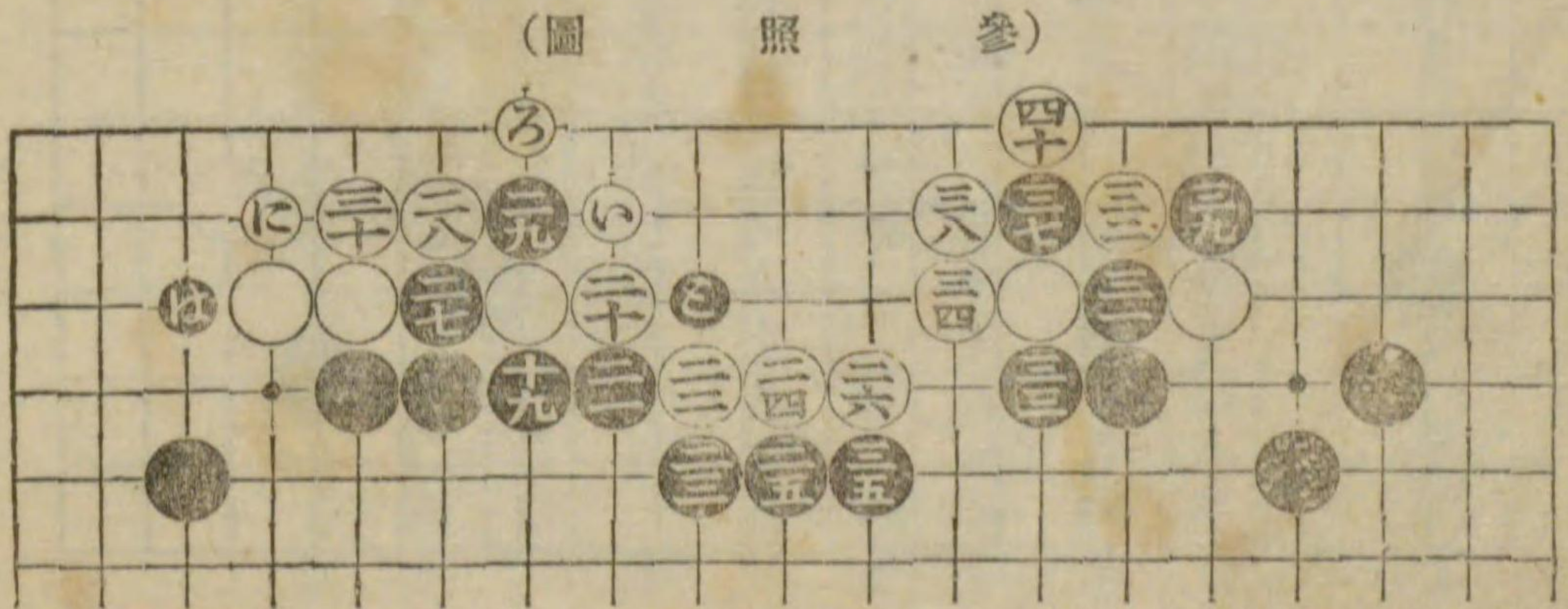


(五、布互先)

二十五と打つて置いてから二十七、二十九と出截るがよいかは、手順の前後損得の關係といふ事に就て非常に緻密な考量を要す可き重大な問題である、勿論之は場合の如何と趣向即ち策戦の如何といふ事を條件として研究せねばならぬ問題なのである、本局の如き黒が最初から白を上邊一帯の低地に壓迫しやうといふ趣向に出る居るのであるから、本圖の手順を以て最も其の宜しきを得たものと言はねばならぬ。



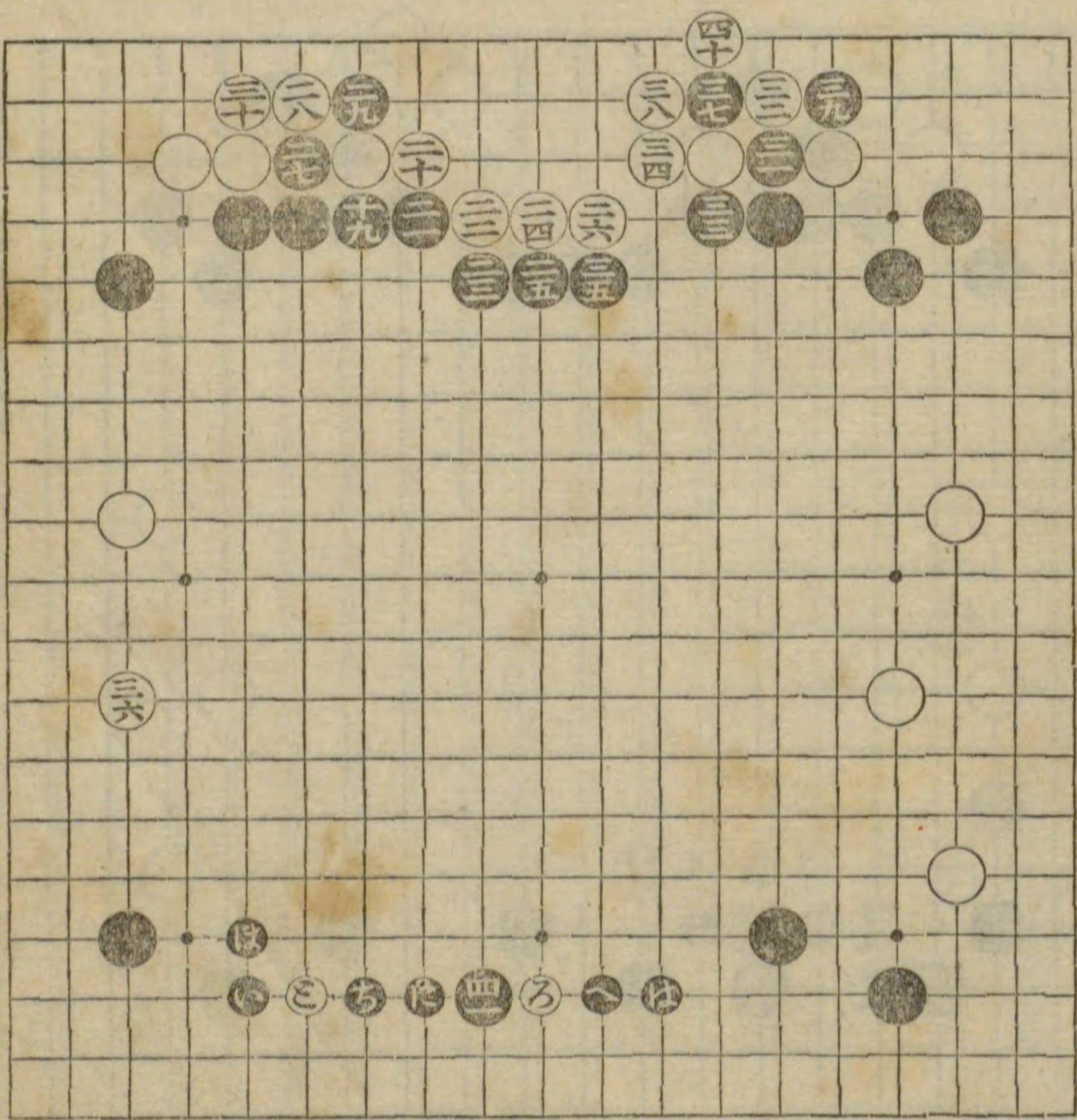
乃ち此の一部分に就て手順の前後によつて、利害得失の差の起る理由を解剖して示すと、最初黒が十九と上から押す手で二十七と出て二十九と截つたものとすれば白は之を①と抱へ黒三十と截り白②と提り、黒③白④と運ぶのは普通の手順であるが、本圖黒二十一の手以前に此の手順の運ばれたものと假定すると、次で黒がヨシ二十一と押して来たとしても、白は決して二十二と應ずる必要はない、乃で黒は先づ二十一、二十三、二十五と押して来たから白たるものに應じぬ譯には行かぬ、此く應じさせておいて二十七、二十九と出截りを打つたのは黒の巧妙な手段で、此の時白が若も三十と粘ぐ手で⑤と提つたならば前説通り二十二以下の三子を愚に歸せしめる結果になるから、白は義理にも⑥と提る譯には行かぬ、則ち白が三十と粘いだしたのは黒が奇貨おく可しと乗ずる處で、三十一、三十三と飽く迄⑦の斷點を利用して三十五と白の出路を鎖し茲に當初の素志を貫徹し、尙三十七、三十九の截迄も利かしたのである



(圖 照 參)

(六、布互先)

黒四十一は最も宜しきを得た着點である、何となれば若此の手で⑧の點に小斜走締をしたと假定すれば、白に星下⑨に打たれて黒は次の打着點に窮する事となる、其の故は黒⑩、白⑪の次黒が⑫と打つは狭きに失して面白からず、然りとて⑬と打つは⑭この均衡上位置低くして打ち難しといふ趣があるからである又黒四十一の手にて⑮に高締りをするとせば次に白に四十一の點に打たれて見合つて居られるの不利益がある(見合とは白四十一の點に打ち黒若し⑯から詰れば白⑰と拓き、黒若又⑱よりせずして⑲より詰れば悠然として⑳の點に拓かれる)之は已に詳述した見合ひの好點といふのである。



(再掲)第四十一手迄

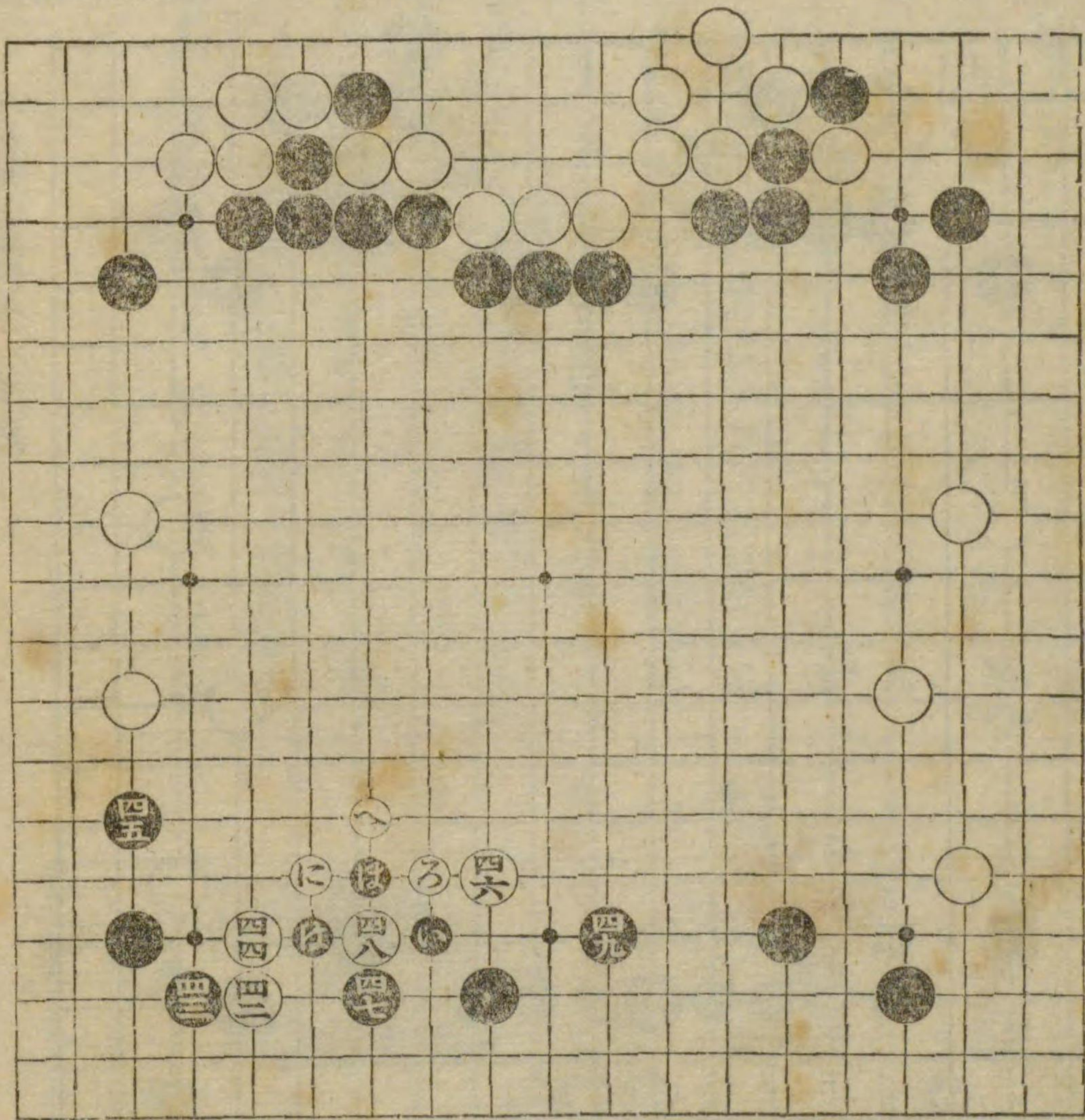
~~~~~(局先互法石布)~~~~~


其で黒は白から當然来る理のあ
る要點を先づ占めて四十一と打
つた、此の際白が四十二と掛る
は三間夾の宀に陥る譯で不利益
な事は勿論であるが、此の場
合外に佳い着點も無いからであ
る、黒四十七は白の根據を奪つ
て之を浮かす手段である、白が
之に應じて激しく四十八と頂け
たのは黒若と縛て来たならば
と押へ黒白に黒白と應
じ四十二、四十四の二子を捨て
、打たうといふ輕妙な趣向の手
である。

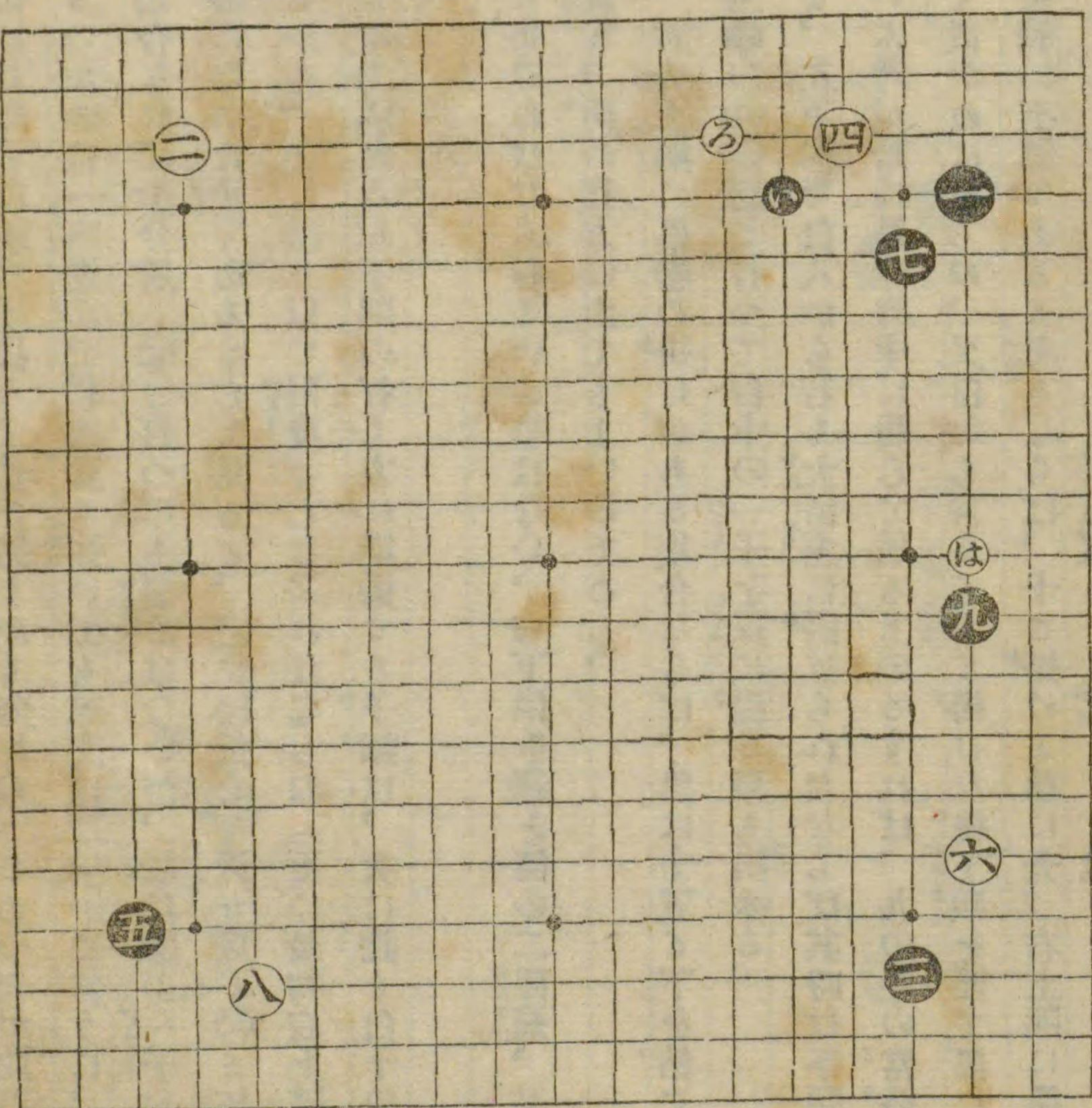
互先第八局

黒九を第六局の様に先づと掛
けて置いて打つのも、本圖の通
り單に九と拓くのも、其は對局
者の趣向次第であつて孰が善い
とも悪いとも言ふ事は出来ぬ、
が然し黒がと掛けた時、白亦
必ずと飛んで之に應じるもの
とすれば其はの掛のある方が
善い譯であるが、黒がと掛け
たからと言つて白必ずしも之に
應じる者とは限ぎらぬ、或は手
抜してと拓くかも知れぬ、其
で黒若最初に先づの掛を打つ
考ならば、其は白に手抜されて
と拓かれても差支ないといふ
成算の上でなければならぬ。

第四十二手より第四十九手止



第一手より第九手迄



「註」前述の黒九の手で先づ⑤と掛けた時、白或は手抜して⑥と拓くかも知れぬ」とあつたが此の白の拓き場所は必ず④の點に限るのか或は一路進んで⑦と廣く拓いても差支はないかと言うに、右上隅の黒が單に一、七とある場合なれば十分廣く⑧と打つのも悪くはないが、既に⑤の一手が加はつて右上隅の黒の勢力が旺盛になつた後であるとして見ると、之に接近して餘り廣く⑧と拓く事は害ありとも決して利は無いから、先づ⑥を以て限度としなければならぬ（更に最初右上隅に黒⑤の掛の一手が有ると無いとは對隅たる左下隅の打ち方に關係する子細は、次に説く白十の手以下の説明を見よ）

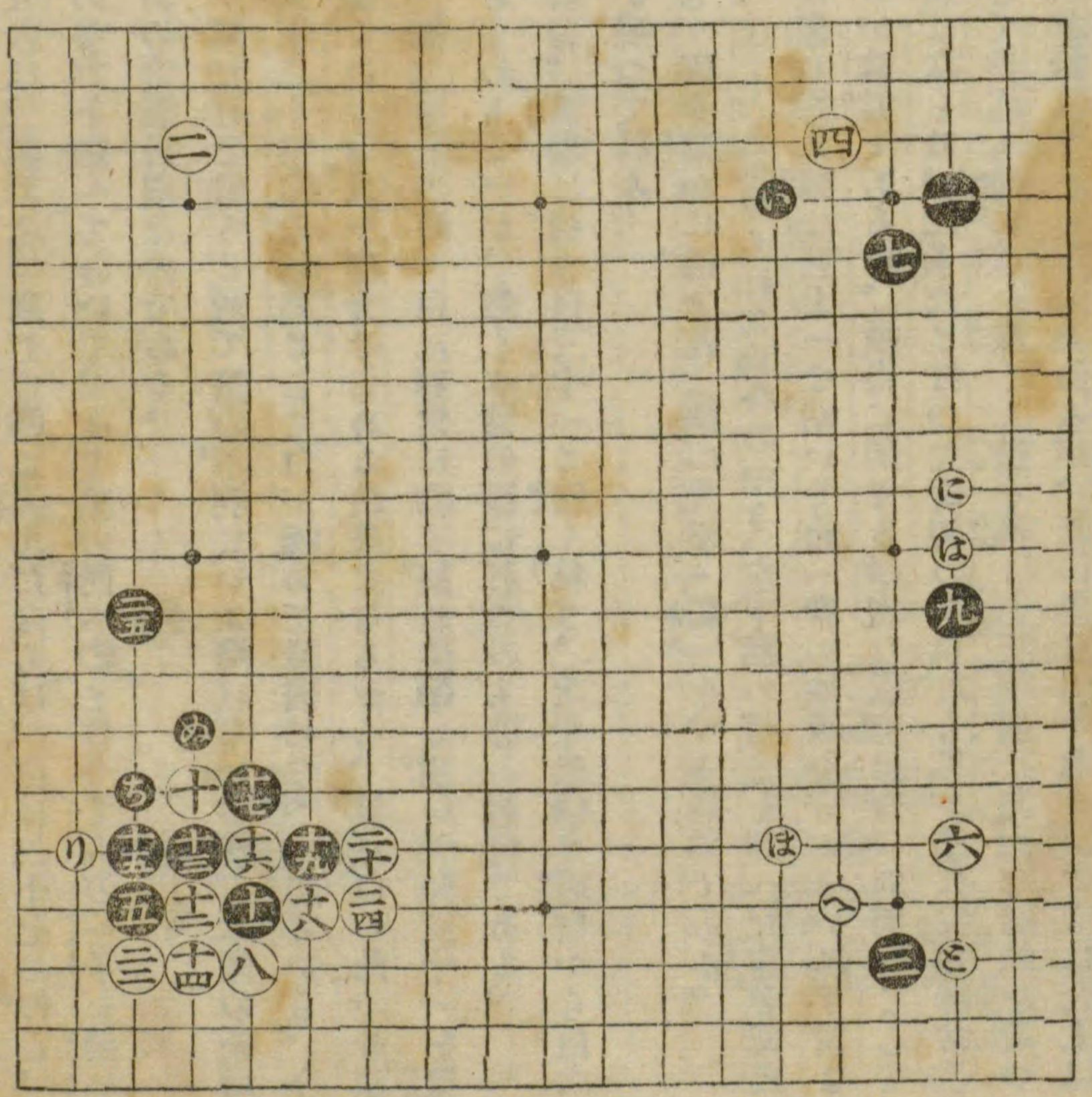
白十は必しも此く左下隅へ大斜走に掛けねばならぬといふ事はない、右下隅を③と例の二間飛、又は④の斜走掛或は、⑤と三々の頂凌等、何の打方に出てもよいのである、白から十と大斜走に掛けられた時、若右上隅に黒⑥の掛けがある場合ならば、黒は十五と下を粘ぐ手で十六と上を粘ぎ次で白十五、黒⑦白⑧と打つて白十の一手を征に提る事も出来る。

「註」更に此の意味を詳しく言うに、左下隅で白八から若も大斜走に掛けられたならば其時は手順を履んで十六と上を粘がう」といふ考が暗に黒の胸中に萌して居るものとすれば、九の手の當時に於て先づ⑥と一着の掛を施して置かねばならぬ、又白から言うに十と掛けた後手順を経て黒に十六と上を粘がれるのが自己の策戦に不便であると考へるならば、十と掛ける前に先づ右上隅に黒⑤の掛がありや否やを能く見極めた上でなければならぬ、只漫然として掛けるのは宜しくない。

⑤十一に一手提る⑥十六に粘ぐ 第十手より第二十五手迄

然し上に述べた所は凡て趣向上の話であつて、決して可否の上の問題ではない、白が十と掛ける手も、黒が之に應じた後本圖の通り運ぶのも、又は前説の様に十五の手で十六と上を粘ぐのも皆普通の定石であつて何れを是とし何れを非とするといふ譯では無いのである、隨て本圖白が十と掛けたのは⑤に黒が無いから其で掛けたといふ意味で無い事も明である。

黒の立場から言へば、白十以下の手順に運んだ後、(若⑤に黒があつて)十の一手を征に提る事が出来れば、十五の手で十六と上を粘ぐ方が(一見不利の様に見えるが)場面の打ち易くなるといふ趣がある。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



白二十六の手で此く一間に夾返したの、黒が之に應じて⑤と尖んだならば、白は二十七と押し、黒⑥白⑦黒⑧白⑨と茲に四着の勢力を加へておいて、次で黒の間へ⑩と打つて六の一子を働かせて黒の地域を蹂躪しやうといふ白の策戦計劃なのである、

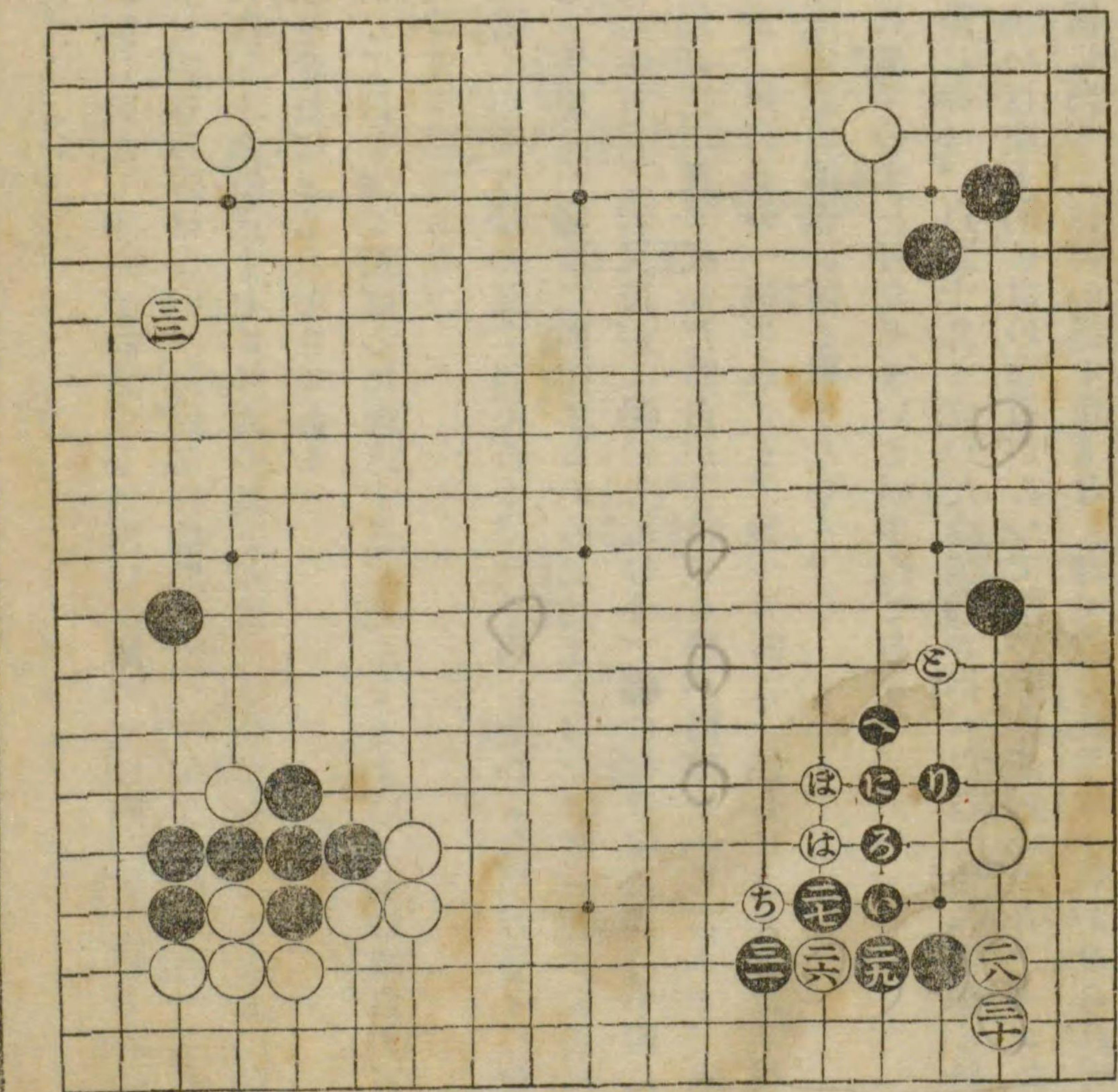
假に此く打つたとしても單に此の一隅だけで言うて敢て黒の不利といふ譯はないが然し本圖の全局から打算すると、已に左下隅に八以下二十四迄の結果として白が極めて鞏固になつて居るから、今若白の趣向通り運ばせるとすると益々白の地域を膨大せしめる結果となるから、黒は白の此の策戦を破つて二十七と打つたのである。黒二十七の時、白は尋常に⑪と絆ね黒⑫と引いた時三十一を堅く粘いで下側一帯の地域を守つておくのもよいが、然し本圖の様に打つのも亦一趣向である。

「註」黒二十七と頂けた時白⑬と絆ね、黒⑭に引き白三十一と堅く粘ぎ、次で黒⑮と肩側から白六を壓したとしても尙隅に白の活が残つて居る。

白二十八及三十は下側を犠牲に供して隅を確かに活き左上隅の先手「締」をする趣向である。

「註」初學者稍もすると、本圖黒に二十七と頂けられた場合の如き、左下隅の勢力を加へた意を完成する事にのみ腐心して黒二十七に應じ⑯と絆ね三十一と粘いで此一帯の地域を守るといふ手段より一步も外に出る事を能うせぬのが常態であるが、損得に關する緻密な成算は假に別問題として本圖に於て臨機轉換の妙を覺らねばならぬ、二十六と打つた當初の考は若も黒が⑰に尖む尋常手段に出たならば二十七⑱と押し飽迄も茲に濠を深くし壁を高うして下側に龍大な封域を造つておいて更に⑲と間に打つて遺利を拾はうとしたのであるが、既に黒に二十七と頂けられた上は茲に尋常の應接をして居たのでは極めて位置の低い形になる患がある、其より寧ろ此の一部の利

第廿六手より第三十二手迄



を敵に與へておいて、我は二十八、三十と隅に完全な活を造つておき先手を以てまだ敵影の見えぬ左上隅に獨舞臺の占領を擅にしやう、さすれば右下隅及左上隅で得る所は下側で失うたものより勝ることも決して劣る氣遣ひはないと見極めて忽ち轉換した妙味は實に津々たるものである、且つ夫れ下側で二十七以下の黒が如何程跳梁した所で左下隅の白が極めて堅固であるから下側の黒の跳梁は單に彼自身の跳梁に止るので我には一向痛痒を感じぬからである。(若も左下隅の白の勢力が薄弱であつたならば黒二十七の時爰に勢力を加へて左方の薄弱に備へねばならぬ事勿論である)



黒三十三は三十九の點に二間に夾んでもよい。

「註」若黒三十三の手で三十九に二間に夾んで来たを假定すると白は本圖の様に隅へ斜走する譯には行かぬ、(○)と飛頂るか或は卅五と尖むの外はない、何故なれば黒二間に夾んだ時白(隅)三十四へ走れば黒に三十五と掛けられ白三十六黒三十七と外部の黒を非常に厚壯なものにする上に自分(○)と尖んで小さく隅に後手活をせねばならぬからである。

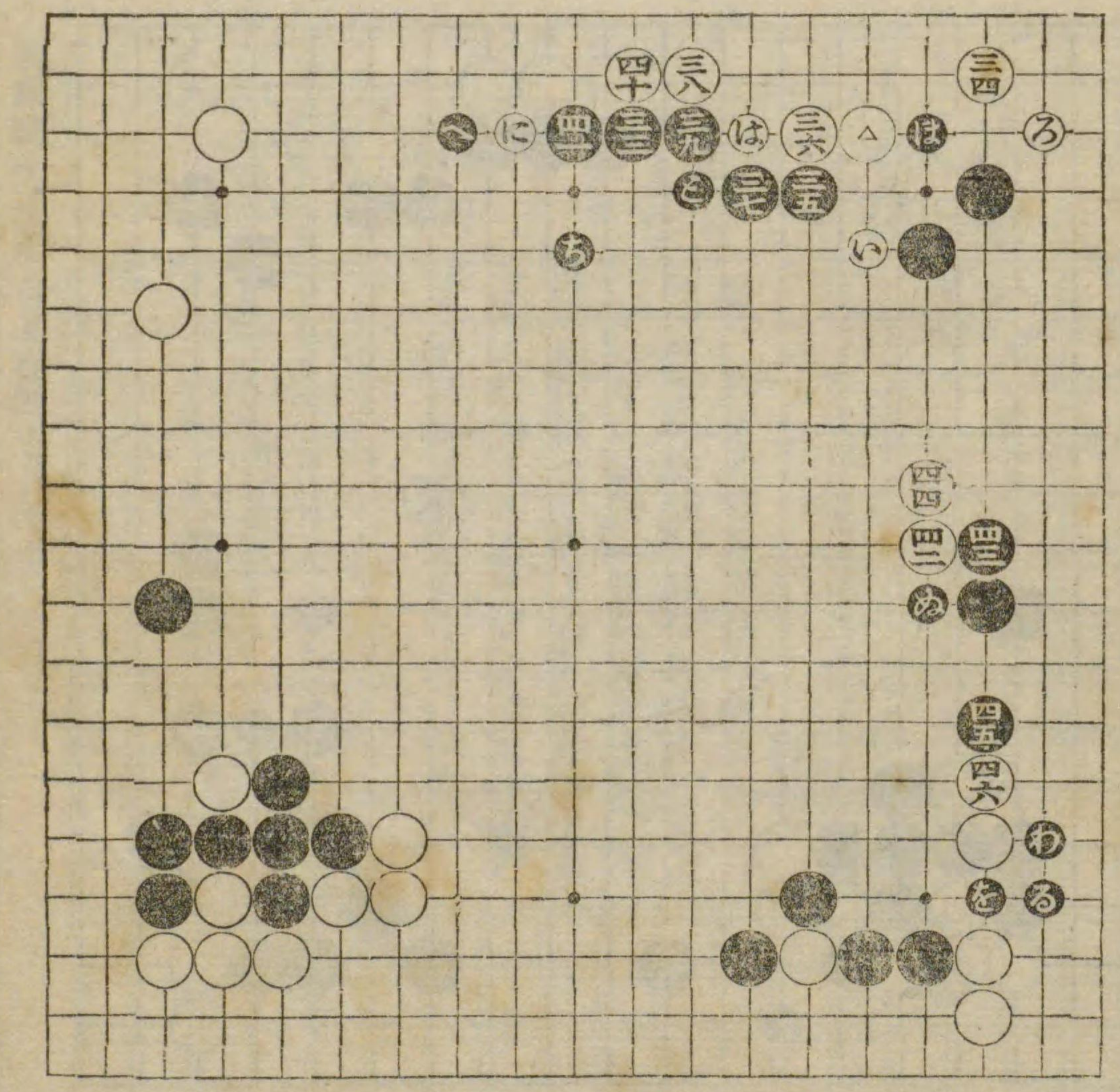
黒は又三十三の手で先づ三十五と掛けて白を(○)と飛ばした後三十三と夾んでもよい、其の時白が三十七へ行びたならば黒は(○)へ二間拓する手順である。

「註」黒が三十三と夾んだ時、白が動く場所(○)か三十四である、三十四に走れば本圖の通りになるが若し(○)と飛ばせば黒の應手は(○)に尖頂るか(○)に二間拓するか(○)の二途よりない、黒が(○)と尖頂れば白は(○)の點から黒三十三を夾攻めて打たう若又黒が(○)に尖頂けず(○)に拓けば白は三十四に走らうといふ手である、偕又黒が最初三十三と夾んだ時白が手抜する事が出来るかと言ふと、本局の形勢では断じて手抜を許さぬが、單に此の一隅のみとして論ずる時は(場合によつては手抜せぬとも限らぬ、其の應接は三間夾定石の講義に譲る事としやう。

黒三十九は場合の手である、且つ(○)に先手の尖を打たせまいとの手段である。

「註」白三十八の時普通は黒四十の點に押へ、白三十九と立つた時黒(○)と抑へ白(○)と尖み黒(○)と斜走に掛粘ぐ手順であるが、本圖の場合は左上隅に白の布石があつて黒の勢力が無いから、ヨシ此の手順に運んで見た所で左上隅方面に向つては何の得る所もなく却て(○)の先手尖を利かせられて右側の黒地が裙明の弊を殘す事になるから此場合特に三十九と打つたのである、

第三十三手より第四十六手迄



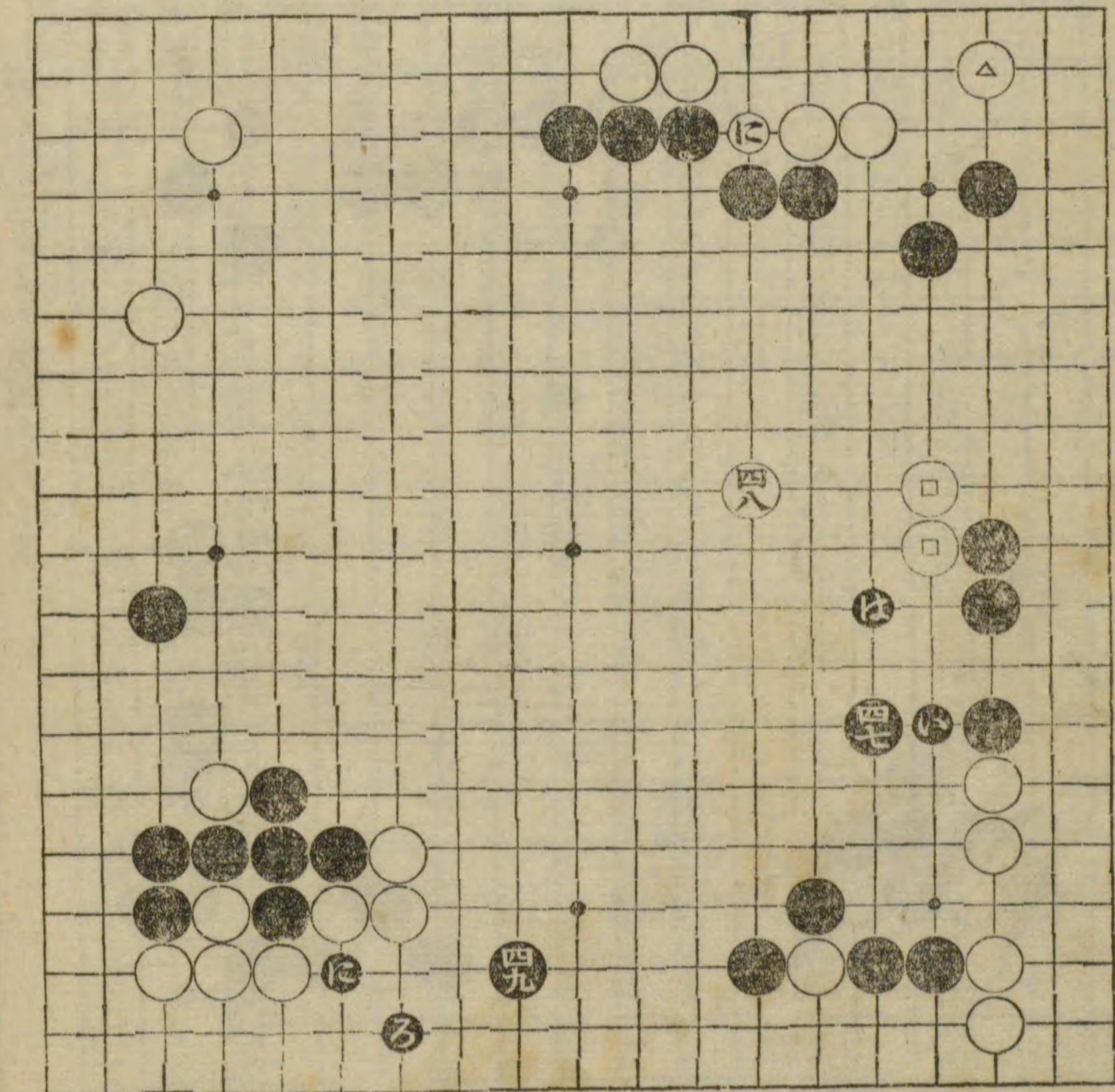
(局先互法石布)

白が四十二と地域の侵畧に來た時、圖の通り四十三と應じるか或は(○)と立つかといふ事は實戰の際屢々出遇ふ問題である、此の場合は右下隅に向つて四十五の單關が何時でも利く處であるから(即茲に黒四十五白四十六の交換が已に行はれて居るものとして見れば)次で白四十二の來侵に逢うて此の窄い所へ(○)と立つよりは四十三と行びた方が良いといふ事は直に解る。

「註」右下隅に向つて黒四十五の飛びが何時でも利いて居ると言ふのは、其時白若手拔すれば忽ち黒に(○)と置かれて白(○)に押へれば(○)へ截られる若(○)に粘げば(○)に盤られるから此の隅では白に活が無い、乃で黒は四十六と衝當つて之を凌いだのである。



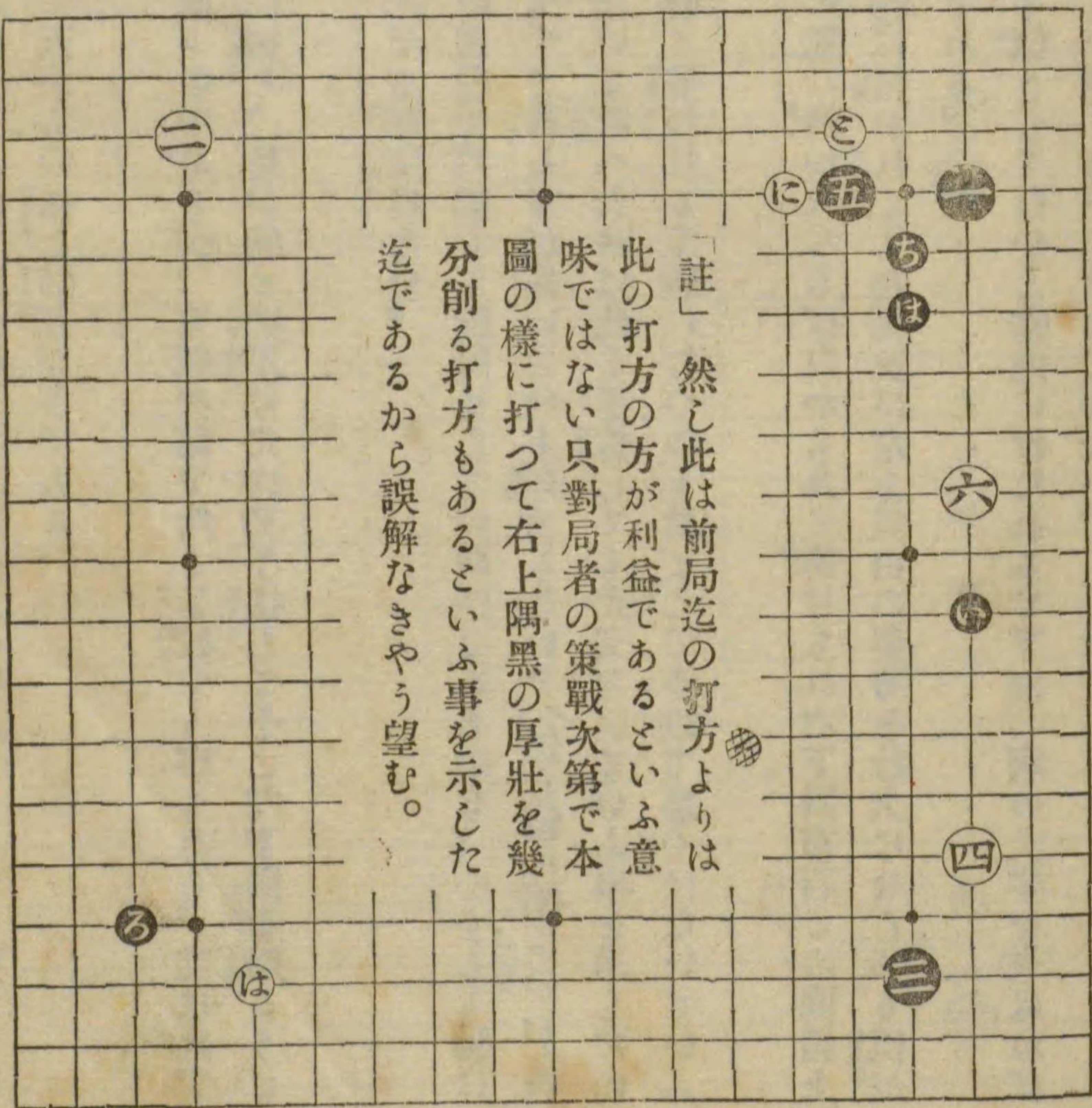
黒四十七は●の行を働かしたの  
 で、白四十八は四十二、四十四  
 と敵地を削つた手を軽く引上げ  
 る手段である、黒四十九は次で  
 ●の截断點を覗うて●の斜走を  
 利かすといふ手を含んで居る。  
 「註」抑々白が初め(三十四)と  
 △印白へ走つた時からして□  
 印白(四十二、四十四)の侵略  
 の手を見越して居るので若も  
 早く●の邊に黒の單關でもあ  
 つて□印白の消が利かぬと極  
 つて居れば、白は三十四と隅  
 へ走る前(●)と飛んでおい  
 て黒の形を旺盛ならしめぬ工  
 夫をせねばならぬのである。



第四十七手より第四十九手止

互先第九局

白四は若前局迄に示した打方に  
 すると右上隅の黒が手厚くなり  
 易いから、其を妨げやうといふ  
 趣向である、即ち白四の一子を  
 黒のため●に三間夾させまいと  
 いふ手である(若夾まれたとし  
 ても前圖よりは打易い)  
 黒若五の手で●に來れば白は●  
 に掛らう、若又五の手を以て●  
 に夾まば白は●と高く打つて黒  
 をして●と應じさせやうとの考  
 である、即(如前局)黒一白二黒  
 三白●黒●白四黒●と尖まれる  
 よりは今茲にいふ白●と高く打  
 つて黒に●と應じさせやうが白●  
 の一子が壓迫を蒙らぬだけでも  
 打ち易いといふ事は明である。



「註」然し此は前局迄の打方よりは  
 此の打方の方が利益であるといふ意  
 味ではない只對局者の策戰次第で本  
 圖の様に打つて右上隅の厚壯を幾  
 分削る打方もあるといふ事を示した  
 迄であるから誤解なきやう望む。

第六手迄



白六は⑤と星下に打つても或は更に一路控へて⑥の點に打つても此の場合何れでもよい、要するに黒⑦の三間夾を防ぎ、兼て右上隅一、五からの拓を妨げた手である、

黒七は明隅へ八の點に打つてもよい、白八は普通なれば黒七に應じて⑨と圍ふのであるが、策戰次第で此く手拔する事もある、其は此場合若黒が⑩と打込んだならば⑪と二間拓し、黒が⑫と尖頂けた時又手拔して十と左下隅を締らうといふ趣向なのである、

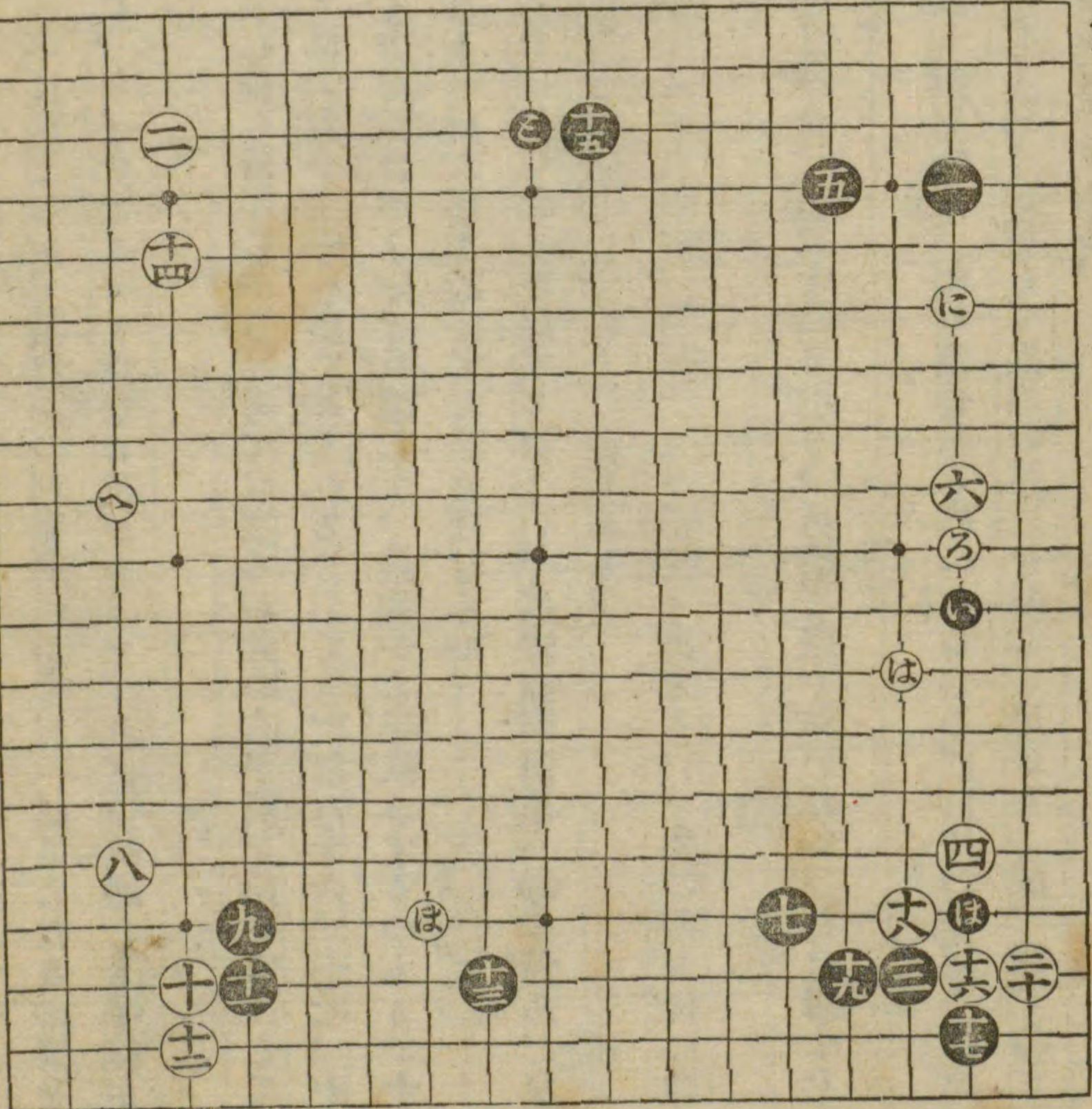
黒九は⑬と打込んで前述の手順に運んでも差支はない。

「註」白八で⑭の手拔も是亦可否の問題では無くて趣向としての問題であるから、必ずしも⑭に圍はねばならぬといふ事もなく、又十と締る方が善いといふ譯でもない、(但し⑭に圍ふのが普通である)白が左下隅を十と締りたいと考へた時は此く手拔しても差支ないといふ事を示したので、随つて黒九の手で⑮と打込み⑯と尖頂ける手順に打つのも黒として亦敢て悪くはないといふ道理にもなる、

黒九が此く高く打つたのは、若十の點に掛つたならば白から九と掛けられ右下隅布石との關係上位置が低くなつて面白くない、又⑮に拓かれても左側及び左上隅白の姿勢を壯大にせしめる悞があるといふので此く高く掛つたのである。

黒十三此の場合手拔きは出來ぬ、若手拔きして白から⑰邊に打られると下側の利の大半を失はねばならぬ結果になる、黒十五は一路進んで⑱と星下に打つてもよい、

第二十手迄



白十六は茲に根據を造つて他日黒から⑳と打込まれた時の備にしやうといふ手である。  
「註」白二十は決して手拔は出來ぬか如何かは問題である勿論之は場合による、普通は必ず下る事になつて居る、其は隅の實利相互の根據の得失惹いては自他勢力の消長にも大關係があるからで、若茲を手拔して黒から二十の點へ縛られるといふ事が單に白の根據を顛されるばかりでなく、反面に於て未だ根據の確定せぬ黒に新に根據を得しめるといふ様な場合であれば決して手拔は出來ぬのである。

—(局先互法石布)—



然し本圖の如きは、黒は下側布置の一下子と相俟つて已に姿勢の整うて居る所で、此の二十八黒から縛るといふ一着は白の根據を奪う手にはなるが、黒自身の利害關係から言へばさしたる必要を認められぬ所であるだけに若も他に、ヨリ大なるヨリ急なる點があるとするれば白は必しも手拔が出来ぬといふ道理もない。

更にモ一つ此ういふ意味がある、白は他に着手しやうと考ては居るが此の右下隅を此の儘にしておいて黒から⑤と尖頂けられるよりは、(假令二十へ黒に縛られるとしても)寧ろ十六、十七、十八、十九の四着の交換を遂げておく方が割合がよいと見越して、最初から手拔きするつもりで十六、十八と打つ場合(如此場合)があるといふ事も心得ておかねばならぬ。

黒二十一の時白若⑥と一間に詰めて來れば黒は⑦と單關するがよい、其時白亦同じく⑧と飛んだならば黒は⑨と二間に高壓して左側白地の壯大を消しておく打方もある。

△問 黒二十一、白⑩黒⑪白⑫黒⑬となつた時は、白はマサカ手拔も出來まい、此の所如何に應接す可きか。

○答 其時白は四十三と頂け、黒⑭と縛ね、白二十二と引き、黒⑮と堅く粘いだ時、白は四十七と打つて連絡する位のものであらう。

黒三十五は普通の着手としては⑯と曲る所なれど、此の場合若し⑰に曲るとせば白に⑱と縛られ此の白⑱の一下子が手順上加はつた結果は右上隅に影響して黒地の厚壯を減じる恐がある故、態⑲と曲らず三十五と打つて下側の厚壯を計つたのである。

(白十六より二十迄再掲)第四十九手止

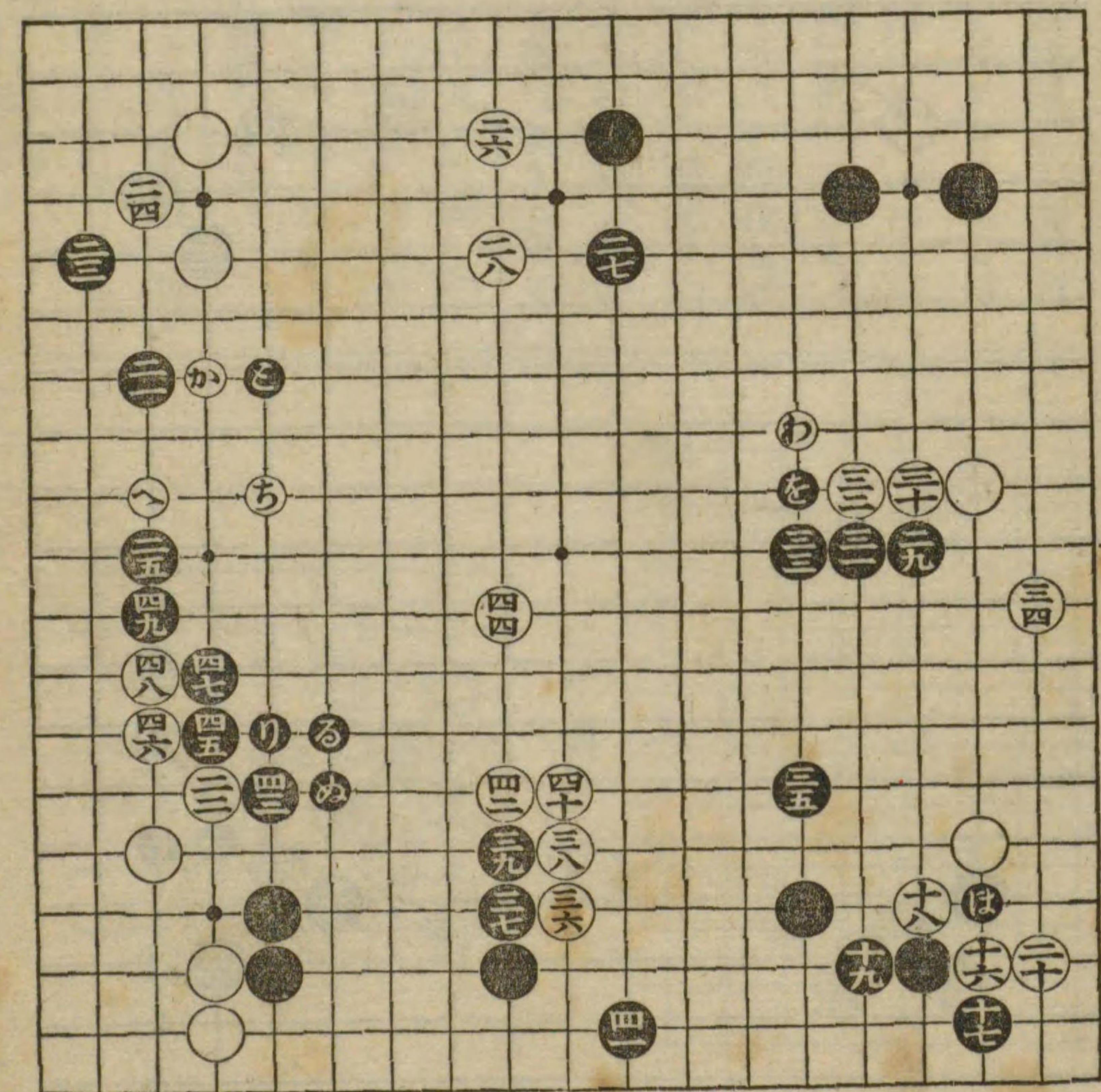
溯つて黒二十九の一下子は白の模様を削る勢を示して自然に自己の形勢を壯大ならしめやうといふ考案から出て居るのである。

「註」 白三十六以下四十二迄 黒の模様を消しておいて四十四と軽く引上げるのは慣用手段である。

黒四十三の時白若⑲の點へ縛ねれば黒に⑳と縛返され自然の調子を以て茲に黒の勢力が加はる結果、惹いて三十六以下四十二迄の四子の白が薄弱になる思がある。

△問 白五十の手は何の邊から運ぶか。

○答 ㉑と頂けて黒の應手を試る位のものならん。





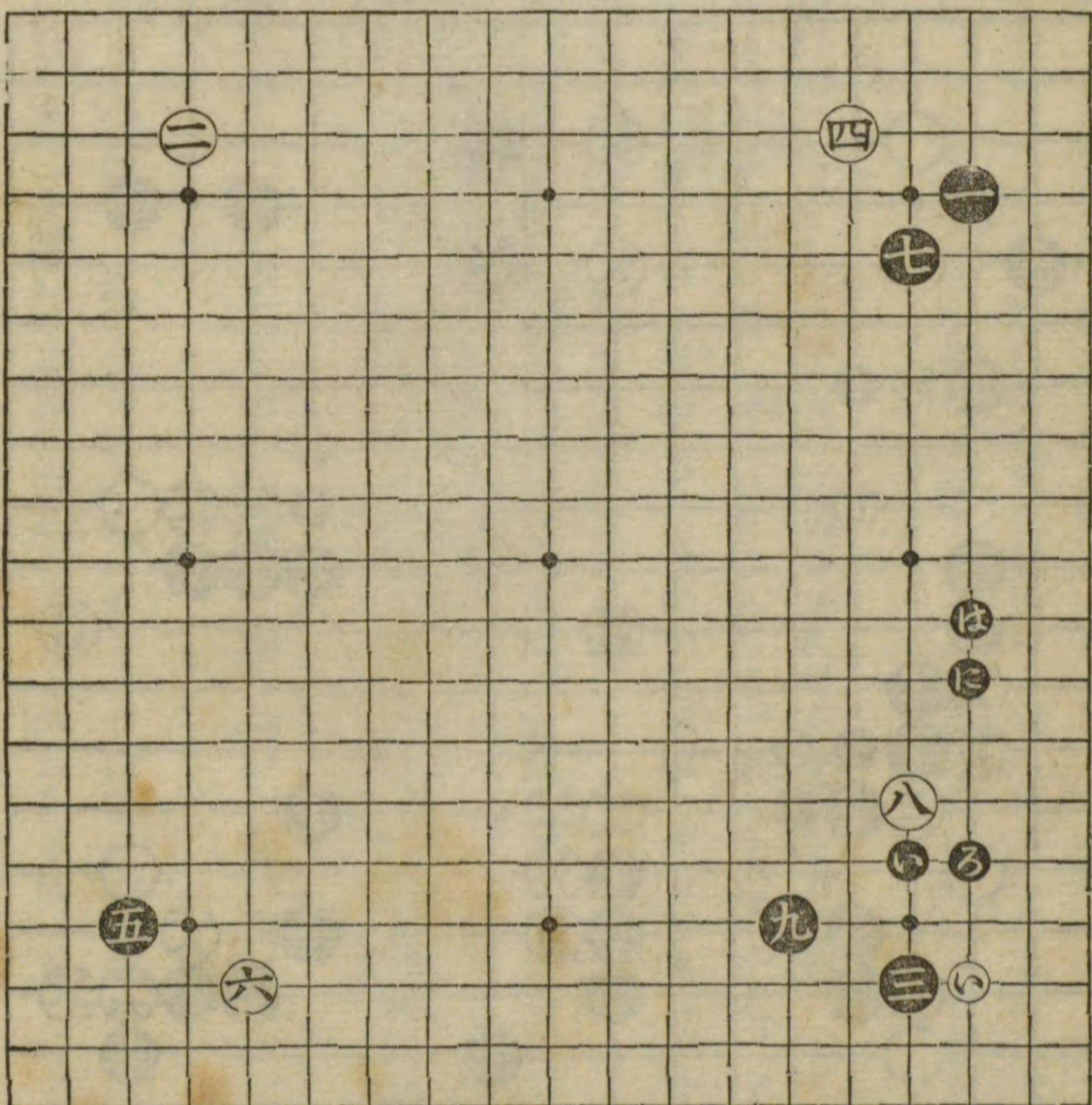
互先 第十局

黒七は右下隅を(七)と一間高く締めるか或は(八)と普通小斜走に締つておくのもよい。

白が八の手を此く二間に掛つたのは、若も普通に(九)の點へ斜走に掛ければ忽ち(八)の好點に拓、夾、の兩用を兼ねた手を黒から打たれる、白は其を嫌つて此く打つたのである。

黒九は尋常の應手である、是は白に(九)と三々に頂けられるのを凌ぐと同時に下側に地を造らうといふ手である、若し右側星下へ白に拓かれるのを嫌は、黒は九の手を以て(八)と小斜走に夾返しておいてもよい、其でもやはり(九)と白に頂けられる手の凌ぎを兼ねる。

第九手迄



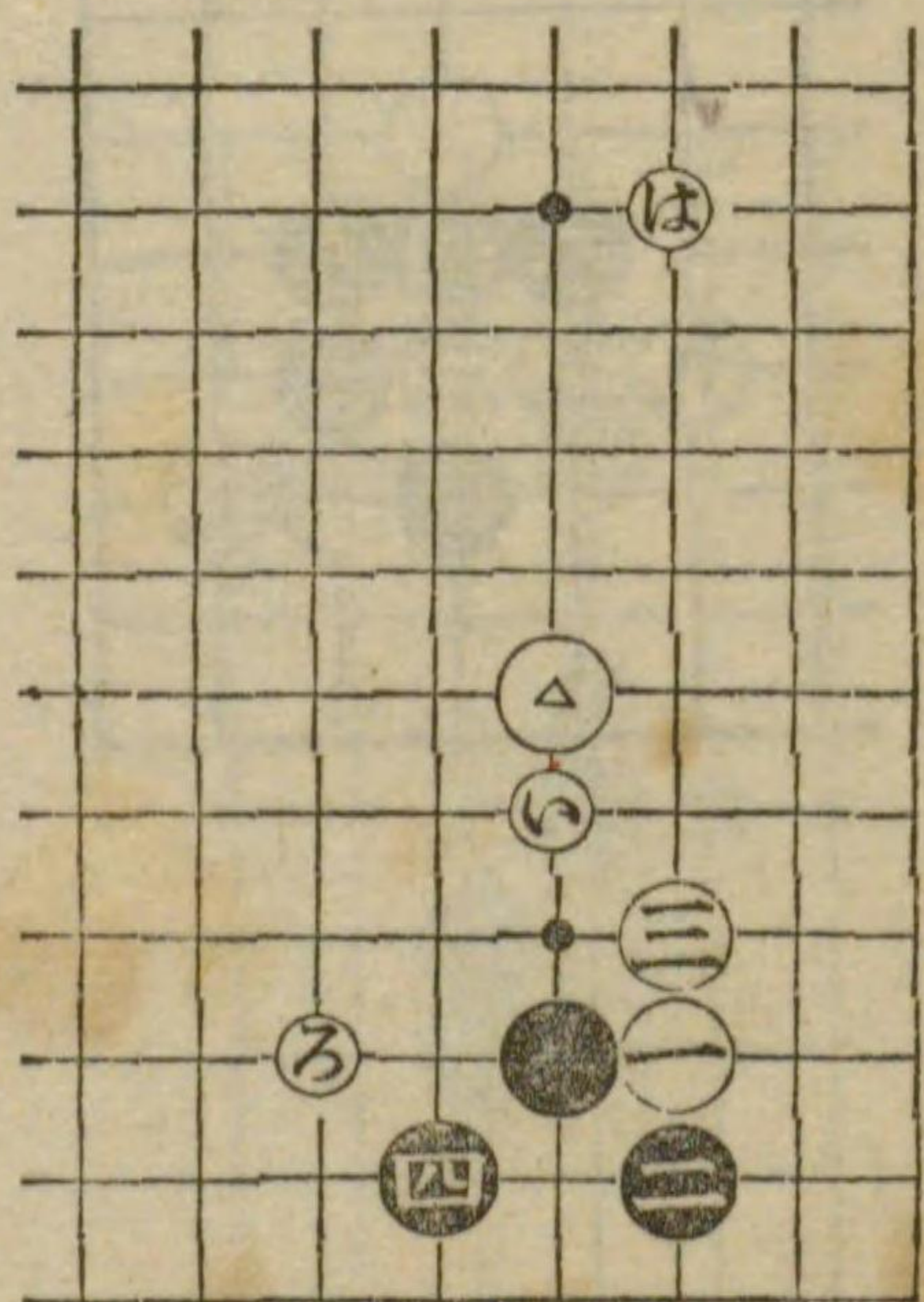
前圖右下隅の變化七種(參考)

黒九を手抜した時、此の隅に向つて白は果して如何打つて来るか、又黒は其に如何に應接す可きか、其の結果如何といふ事を以下五種の「參考圖」として示さば

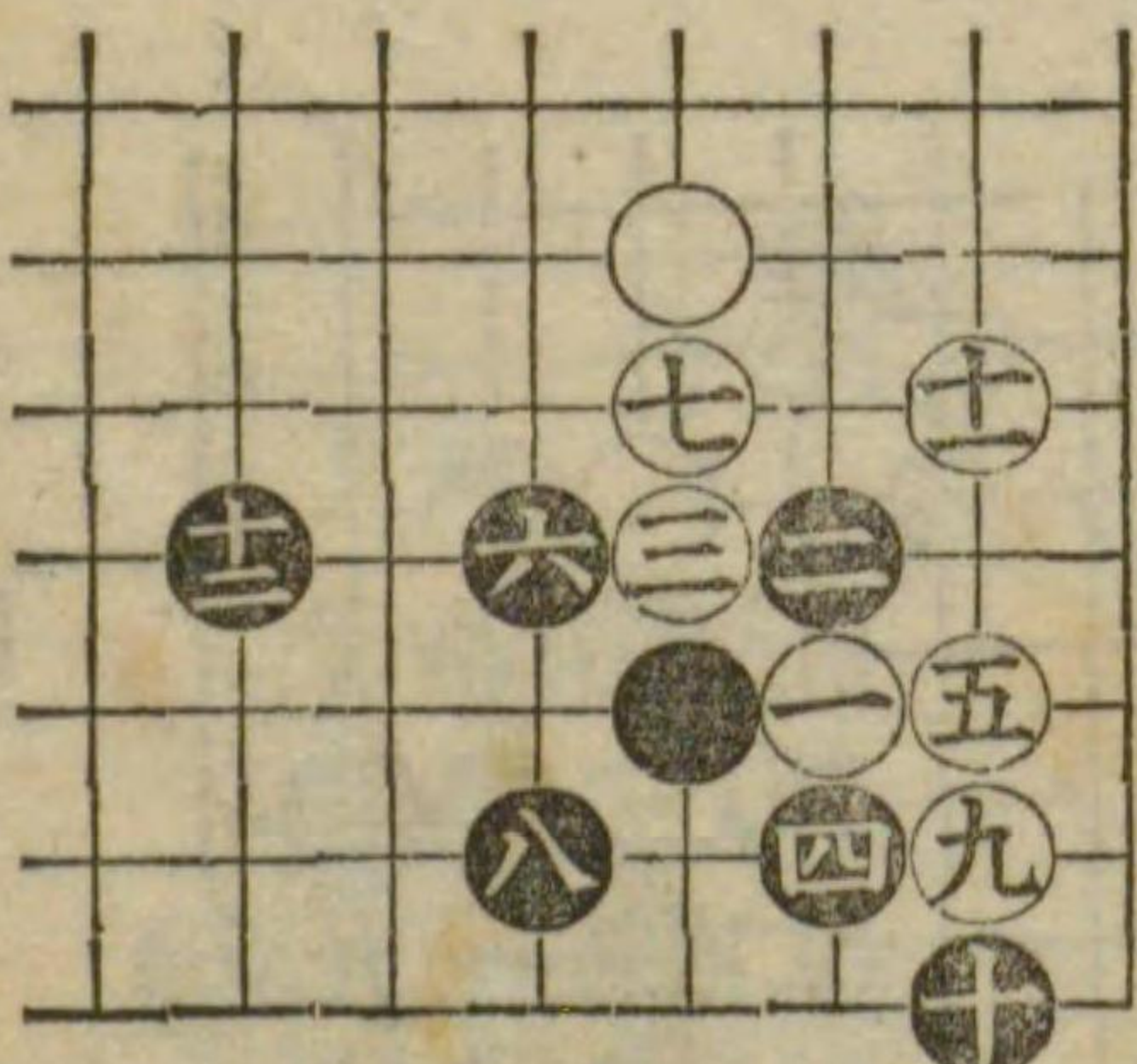
(甲圖) 白は十中の八九必ず一と三々に頂けて来る、其時黒若普通「高目内頂」の形に倣うて二と綽ねれば白三と引き、黒四と掛粘ぐものと假定して、倍此の結果を見ると黒の形の低く萎縮して居るのに反し、白の形は活躍して居る、即次で白は(九)から黒に迫るものとしても、或は(八)と星下に拓くものとしても(△印)の白一子が(九)の點にあるよりは此く「二間高掛」の位置にある方が良いといふ事は一見して解る、然らば白一に應じた黒二の着點が不利益なのは無論である。

(乙圖) は黒が二の一子を犠牲に供して先手を取り以つて十二と備へて此の方面から白に迫られる事だけを防ぎ得たのであつて(甲圖)には優つて居る。

(甲圖)



(乙圖)

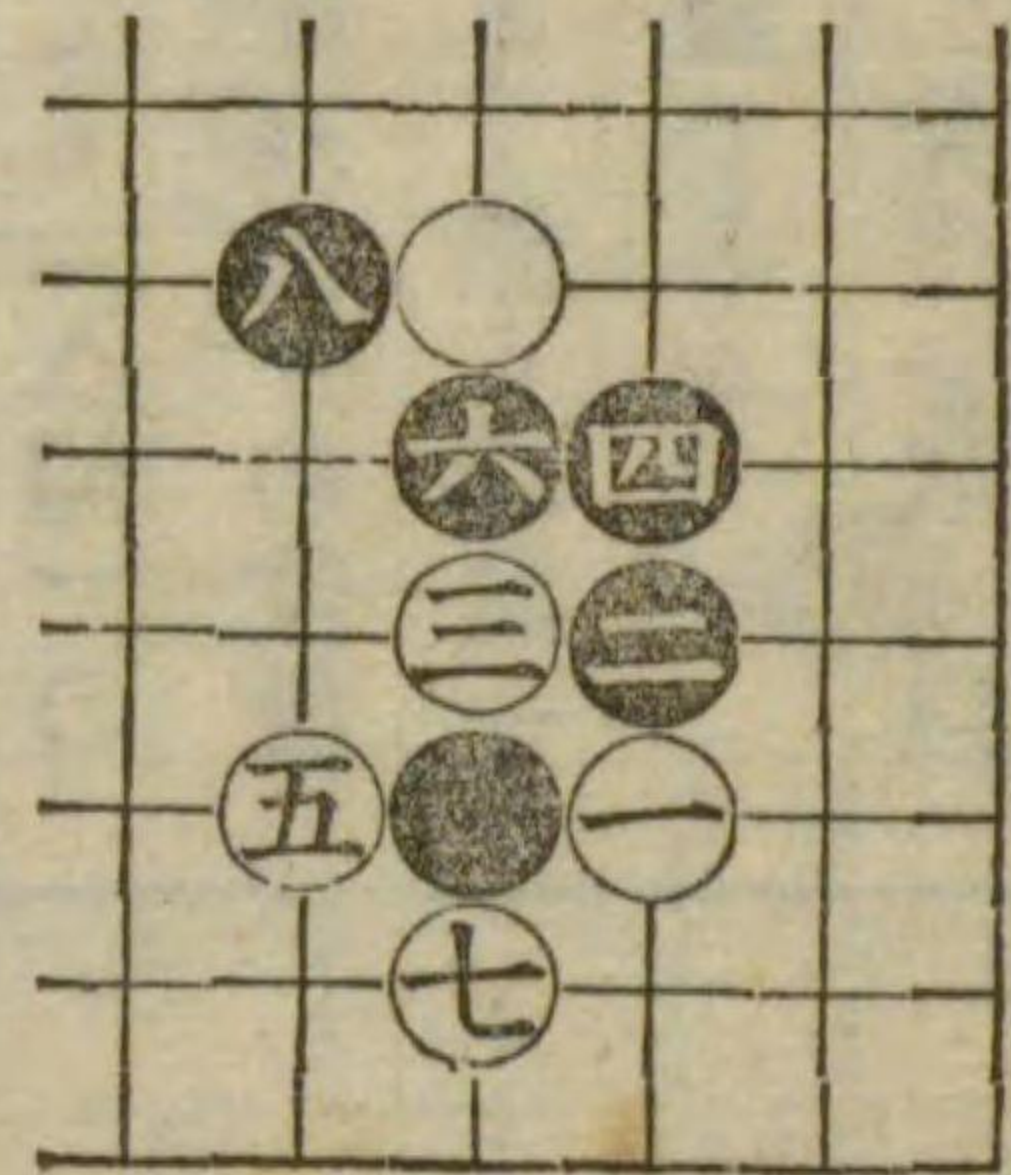




(丙圖) 此く振替に打つ事も場合によつては悪くもない、然し白は實利を占めて居る、黒は未成品である、白は先手、黒は後手、黒が一手後れて行た處否手扱した處であるから是は餘義ない譯である。

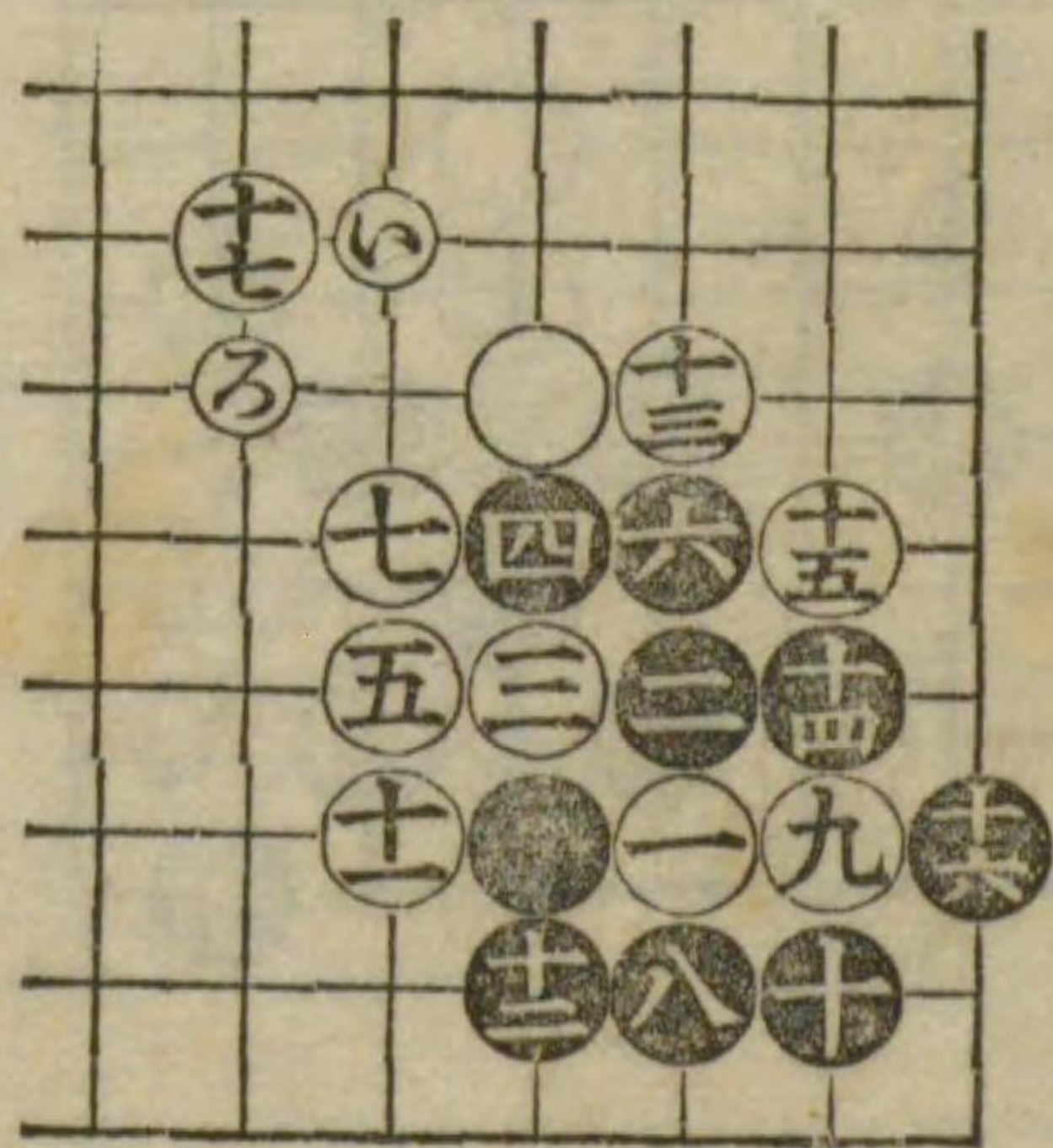
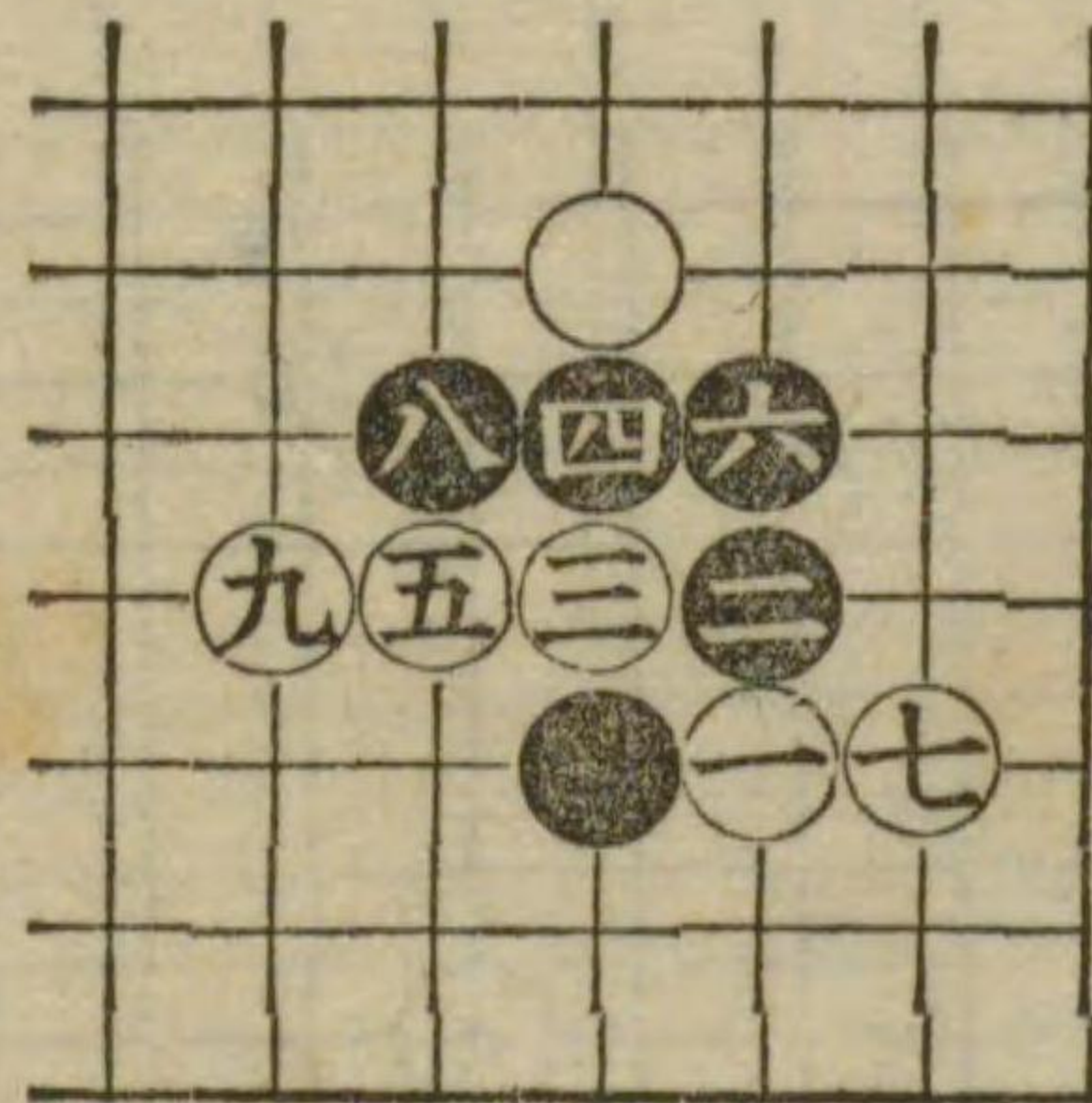
(丁圖) 本圖は白が一、九の二子を犠牲にして外部雄大な姿勢を造り得たのである、十七の斜走は若くは⑧の掛粘を一步働かした常用の良着である。

(戊圖) は(丙圖)と異曲同調の手であつて黒は下の一子捨て、上の白一子と振替つたのであるがやはり黒の不利である。



(丙圖)

(圖 戊)

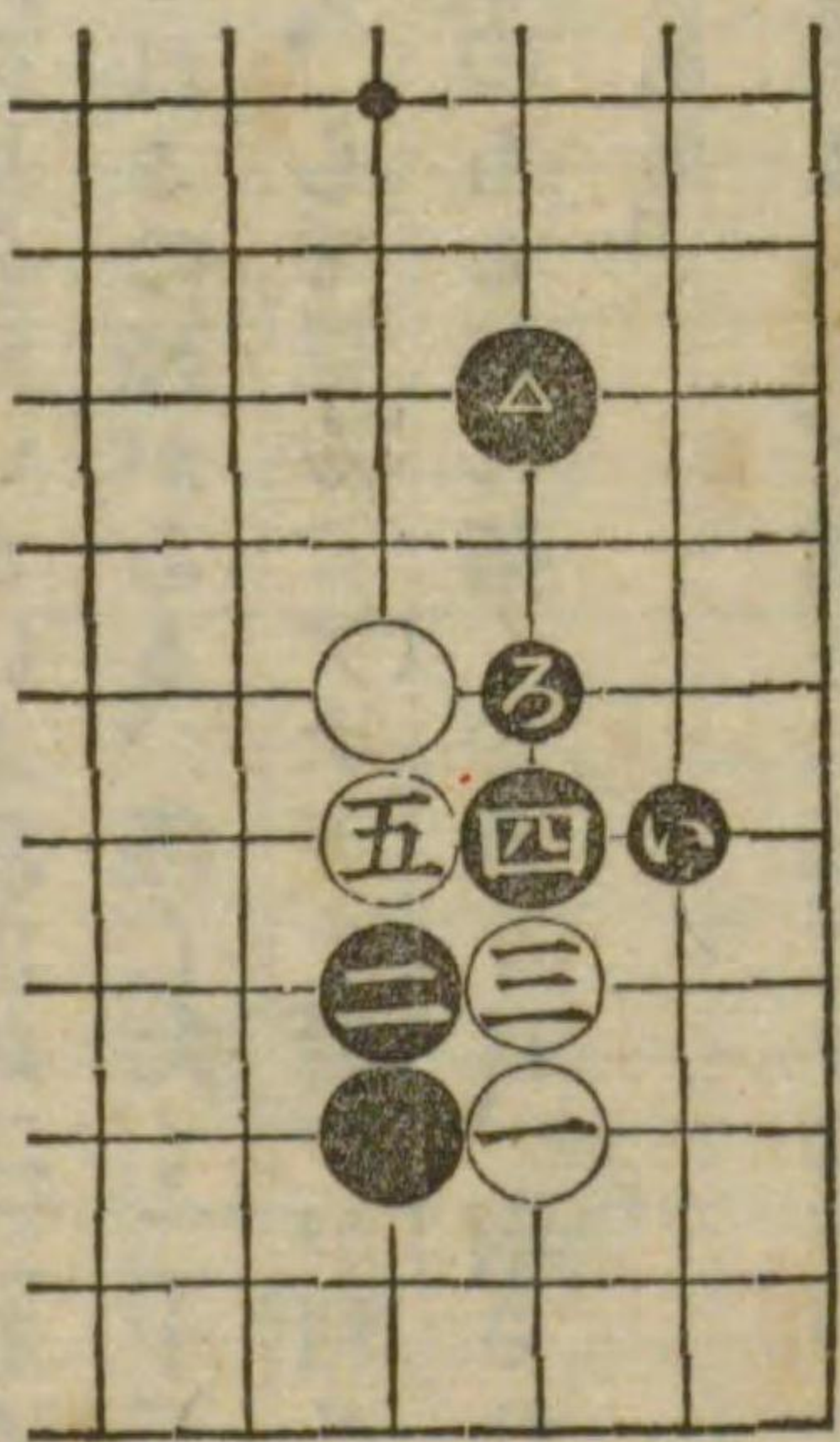


(丁圖)

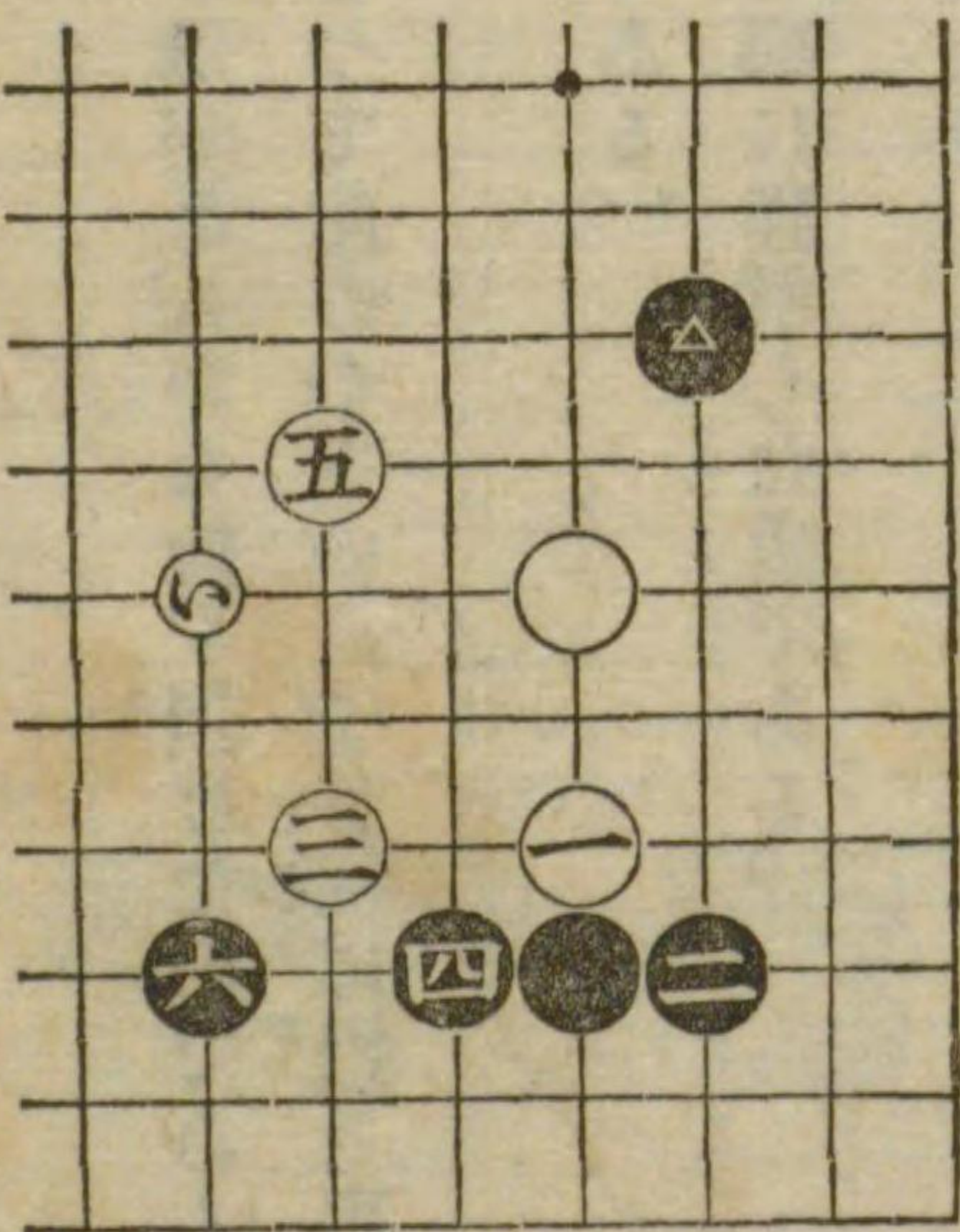
(天圖) 以下二種は黒が白を(△印)へ小斜走に夾返た後、白から一と頂けて來た時の應接である、既に夾返の一着が近く迫つて居るに拘はらず一と頂けるのは抑々白の無理であるから、此く不利の結果を招くのは當然の事と言はねばならぬ、此くなつては白は後手で一隅に小サク活るより致し方はない、

黒は六の手で⑧と下つても可或は⑧と押して居てもよいのである。

(地圖) 白は此く一と頂て打つ手もある、其は封鎖されて隅に後手活をするのを嫌ふ時で、是とても唯凌をしたといふ迄で、實利はやはり黒の手に歸してをる、五の手は時として⑧に打つてもよい其は、五と打つ手は(△印)黒の方へ感じを與へて居るが若し⑧と打てば六の方向に響を與へる事無論である。



(天圖)



(地圖)



黒は九と打つて白に十と好點を占めさせる代償に十一と打ち、白六に對する二間夾とし一方三、九からの拓きを兼ねたのである。

「註」黒十三の手を若し十四の點から尖頂ければ手抜されるの恐があるから此く頂けたのである、白が十四の手を十五の點へ縛込まぬのは對隅に黒七の手があつて此の十三の一子を征に提る事が出来ぬから、餘義なく不利を忍んで十四と行びたのである。

(此は互先定石一間夾及二間夾の部で屢々繰返し説明した所である)

白十六以下二十二迄の應接は古來の定石として已に互先定石の部に詳解した通である。

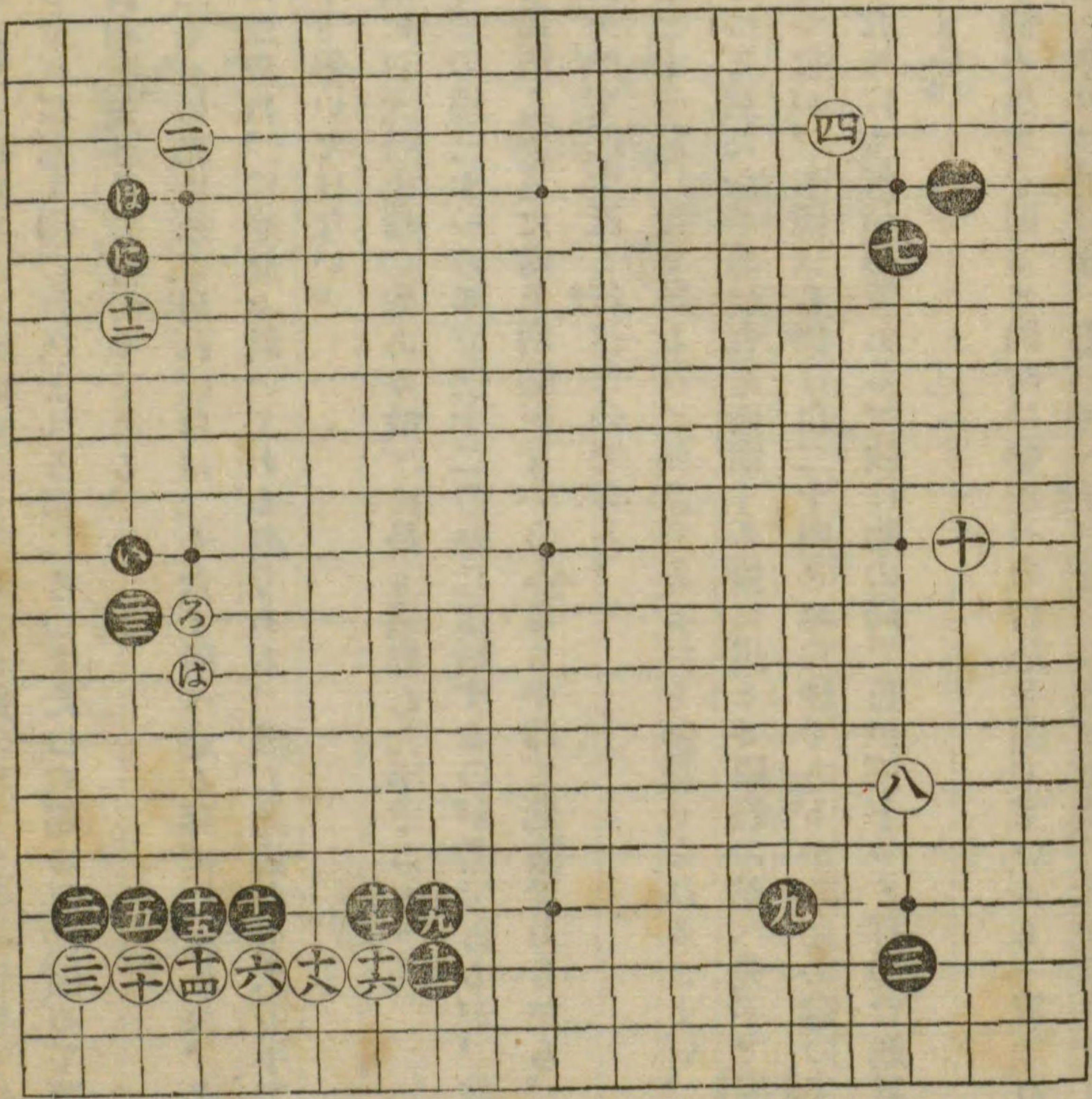
(互先定石二間夾手抜の部参照)

黒二十三の手は一路進んで星下に●と打つ方が善い様に見えるが矢張り此く四間拓の方が此の場合に適應して居る。

「註」此の黒二十三の一着を●と打たず此く一路控へる方が此の場合良いといふ理由が二三ある、其は若し一路進んで●と打てば後に白から○と肩側から消されるの恐がある、然し此く二十三と窄く控へてあれば白も○と消しに来る必要を認めぬであらう、して見るとアナガチ廣いが利とも窄いが不利とも斷言は出来ぬ、要は敵に消されぬだけの策戰のある時に拓くか若くは、消される事を承知の上工夫があつて廣く拓くといふ注意を要するのである。

其からモ一ツ茲で●と打たぬ理由は白十二の一子が低く來て居るから可成之に接近せね方がよいといふ意味と、又白二、十二の締が大斜走締で多少緩んで居るから、場合と策戰の如何によつて

第二十三手迄



—(局先互法石布)—

は後に●若くは○と打込んで白の實利を蹂躪する見込もある、果して此の策が後に遂行し得らるゝものとすれば、其の結果は左上隅の白が外部を包んで堅固になる、して見ると其の堅固な白に●と一路接近して在るよりは二十三と一路遠い方が安心であるといふ様な趣きもある。

語をかへて言ふと黒二十三の時已に、二、十二の締りの隅(左上隅)へ黒が打ち込まうといふ機が伏在して居るといふ事も出来る。



白二十四の手で二十五若くは三十一の點へ何故打たぬかといふと、若白が此の手で上側へ着手すれば黒は●と拓かすには居られぬ、さすれば忽ち●に打込まれる形になつて此の右側の白は極めて薄弱を感じる事になる、白二十六は實利を先きにした着手である。

「註」黒二十五の夾が若一路窄く三十一の點に来て居れば白は二十六と隅へ走る譯には行かぬ、必ず二十七の點へ尖出さねばならぬ道理は、從來屢々説いてある處である、然し此場合廿六の手で先づ三十八と一間に拓いておく手も無いではない。

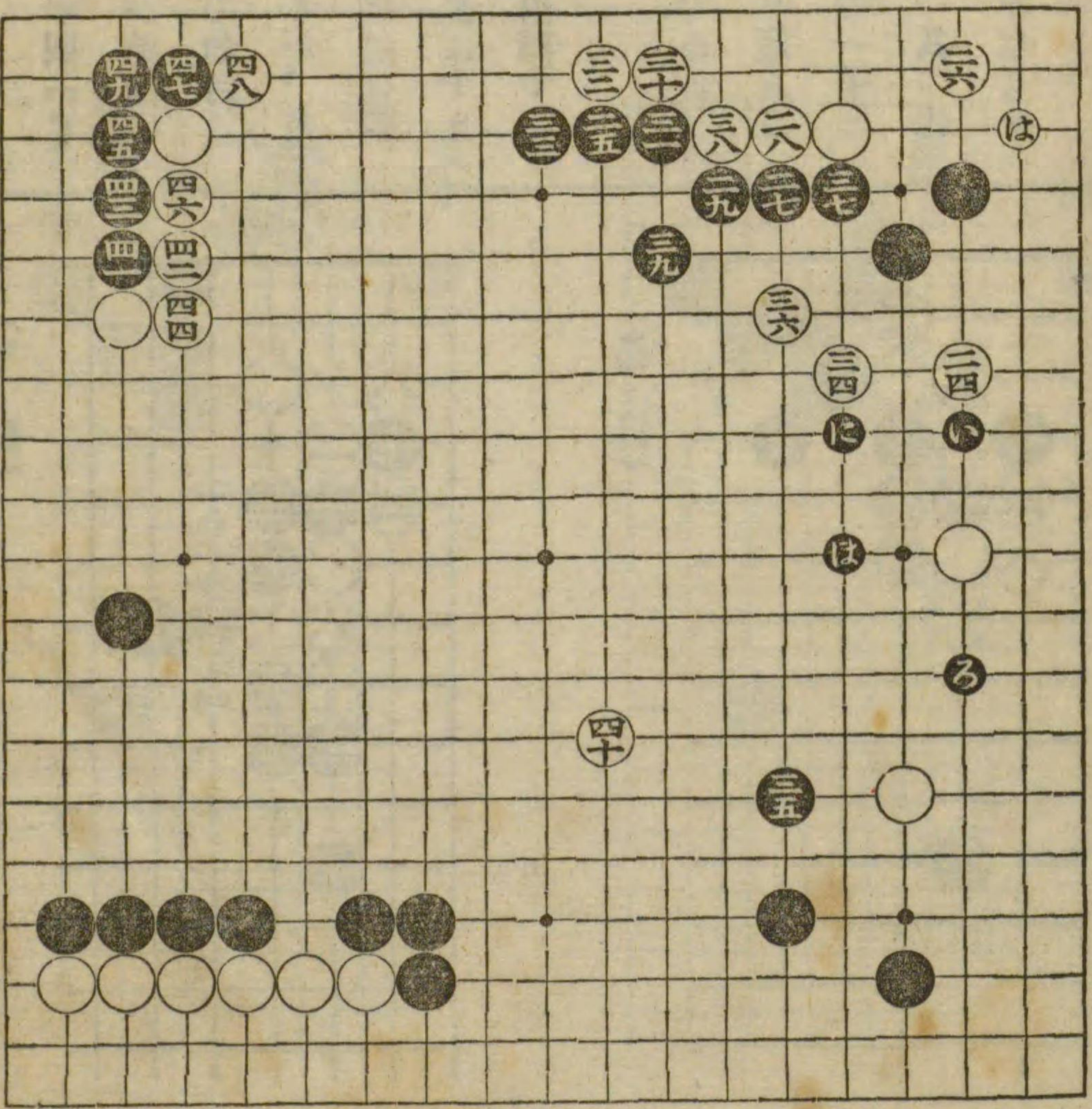
黒三十一の手は此の場合（即左上隅に白大斜走締の備ある故）に最も適應した手である。

「註」普通三間夾の時に出来る此の形の時三十一の手で三十二の點に遮断するのが常であるが、茲は左上隅に白石の備へがあるから遮断して見た處で利益がないのみならず却て危険であるから、態と三十一と打ち白を三十二と游がせて三十五と行びたのである、

此の形は近く布石法互先第八局第七十一頁に出て居るのと同意であるから參看せられるとよい、但彼の場合は右側が已に黒地になつて居たから黒は普通遮断する策に出ると隅●の點へ先手で尖まれるのを併せて嫌うたのであつたが、本圖は右側は白二十四と來た後であるから此の●の尖は黒に取つては何でもない（白のためにも無價値である）故に此の局で黒が三十一と打つた趣意は單に左上隅だけの關係と見ればよい。

白三十四の手で三十五の點へ飛び下側の黒地を削ると同時に●邊への打込を拒ぐといふも一策である（若白が三十四の手で三十五の點へ來れば黒は●、●の邊へ子を進めて幾分上側の黒を援護する

第四十九手止



と同時に右側の白地を侵略する手順に運ばねばならぬ）  
黒三十五は下側の我が地域を厚壯にすると同時に●邊へ打込をしやうといふ手である。  
「註」白三十六と黒の斷點を覗き、黒に三十七と打たせ自然の調子を以て三十八と自己の缺點を補ひ先手を取つたは巧な手順である。

白四十は軽く臨んで下側黒地の雄大を消さうといふ手である。  
「註」黒四十一以下の應接が色々ある其の二、三、を次に參考圖で示さう。

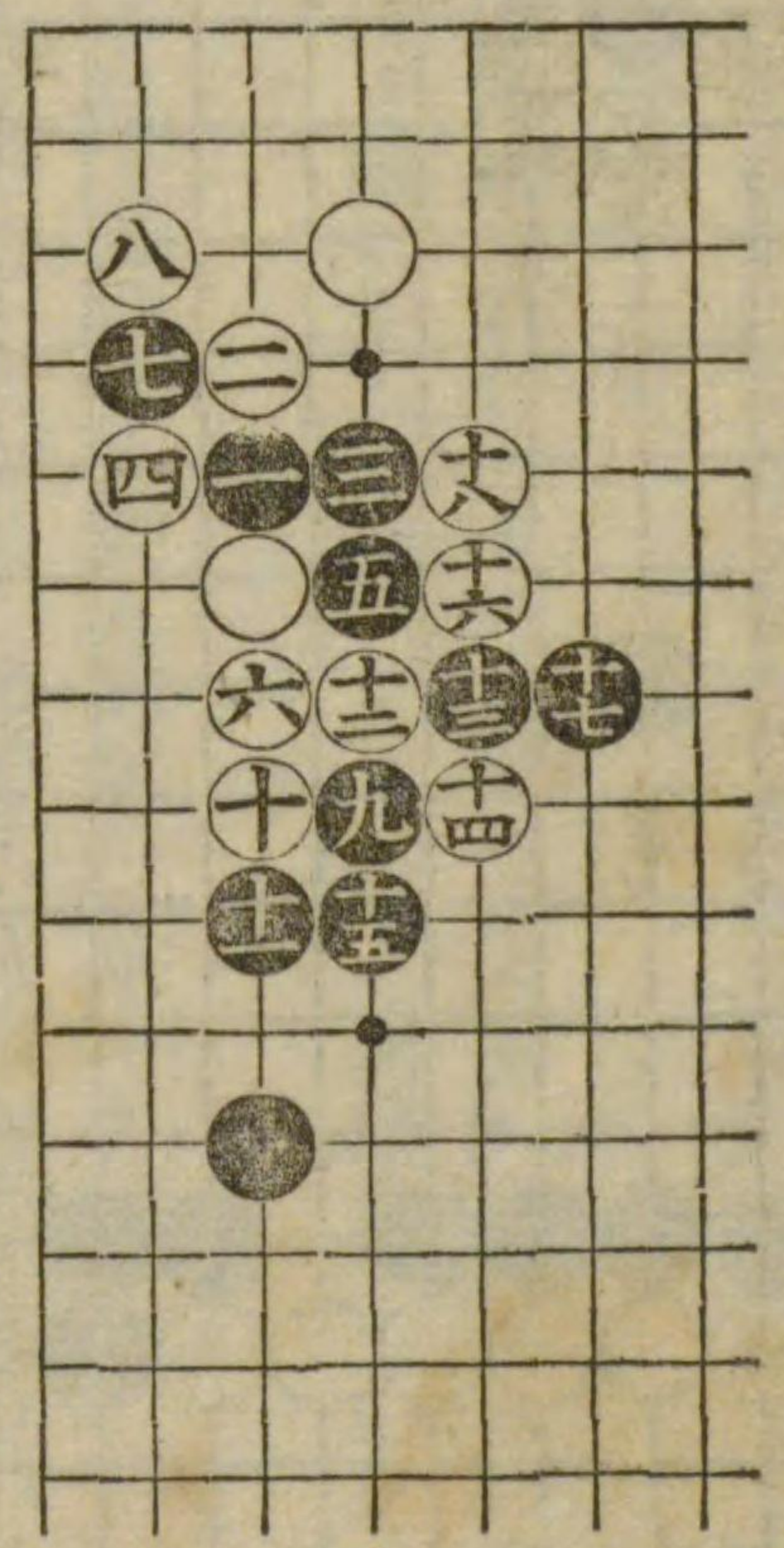


(參考圖) 四種

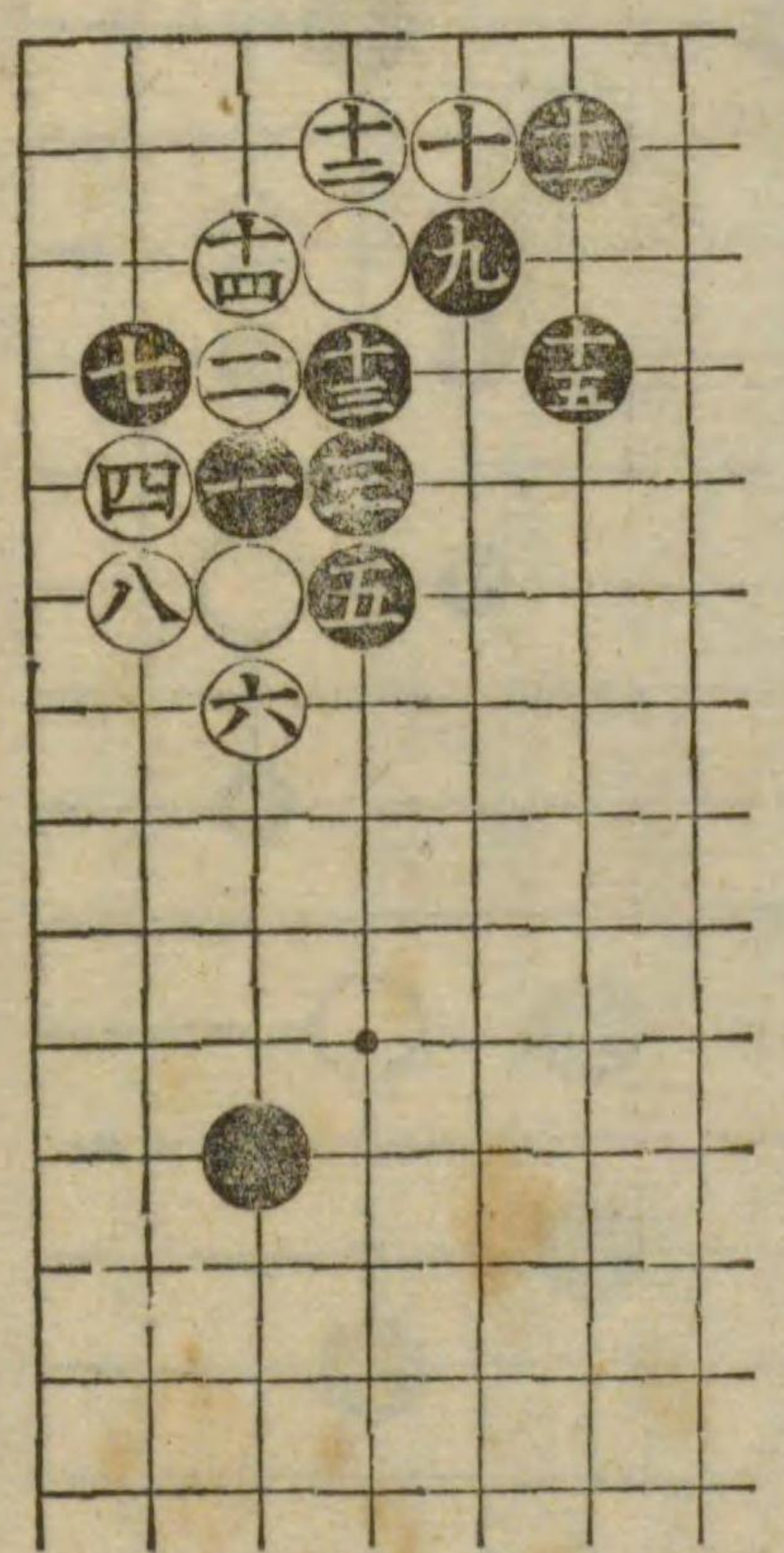
(甲圖) 前圖左上隅黑四十一の手で本圖一と頂けて來た時、白は之を二と夾む方が前圖の結果に比して勝つて居る、以下應接の如何によりては局面に種々の變化をも呈するが、若し本圖の様な結果になるものとすれば白は隅に於て少からぬ實利を占める代りに黒は十九の先手を以て此の鐵壁を利用して中央四十の一子を苦しめる事が出来る。

(乙圖) 前甲圖白八の手からの變化である、本局の大勢から言ふと白は本圖の通り運ぶ方が白六の鋒を包まれぬだけ中央四十の一子の聲援となつて居て打よいかも知れぬ、其の代り隅の實利は前圖に比して小サイのみならず上側に少からぬ黒地が出来る。

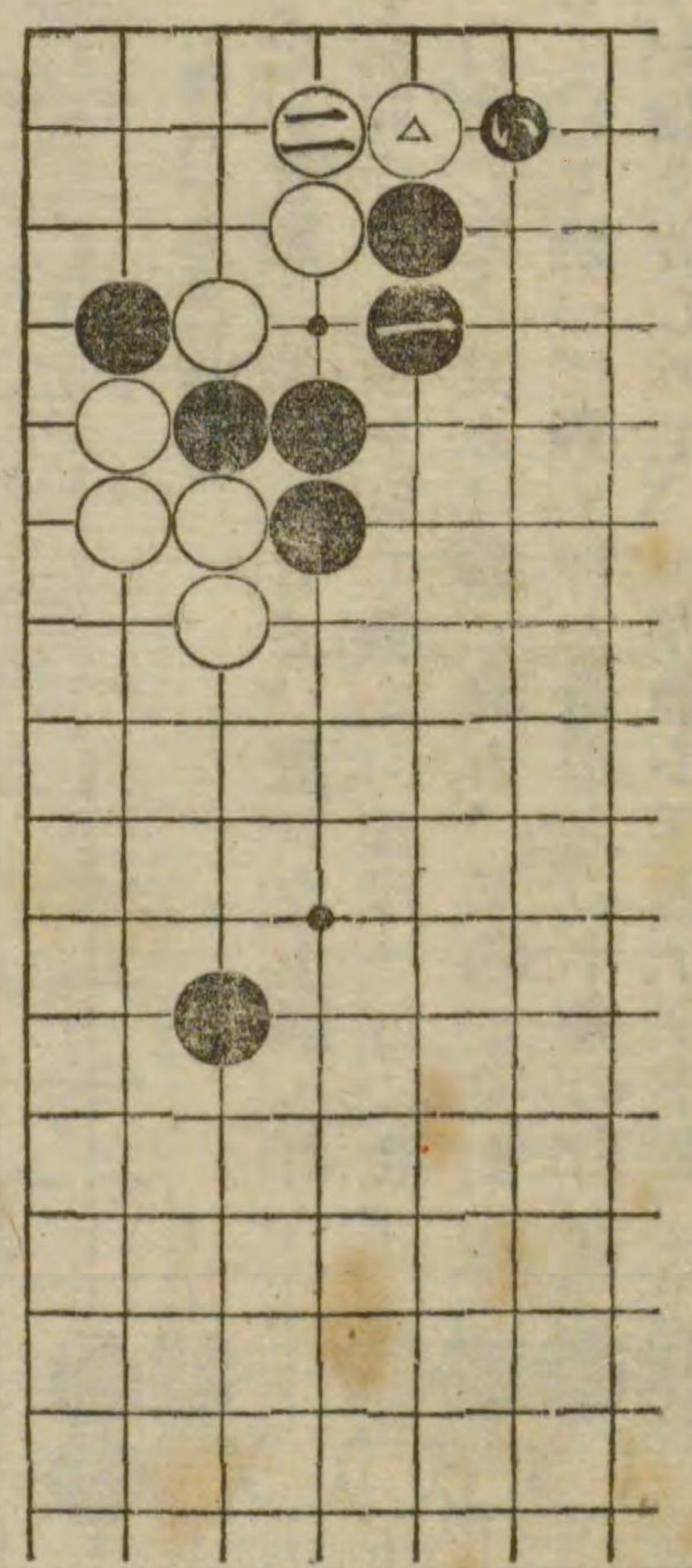
(甲圖)



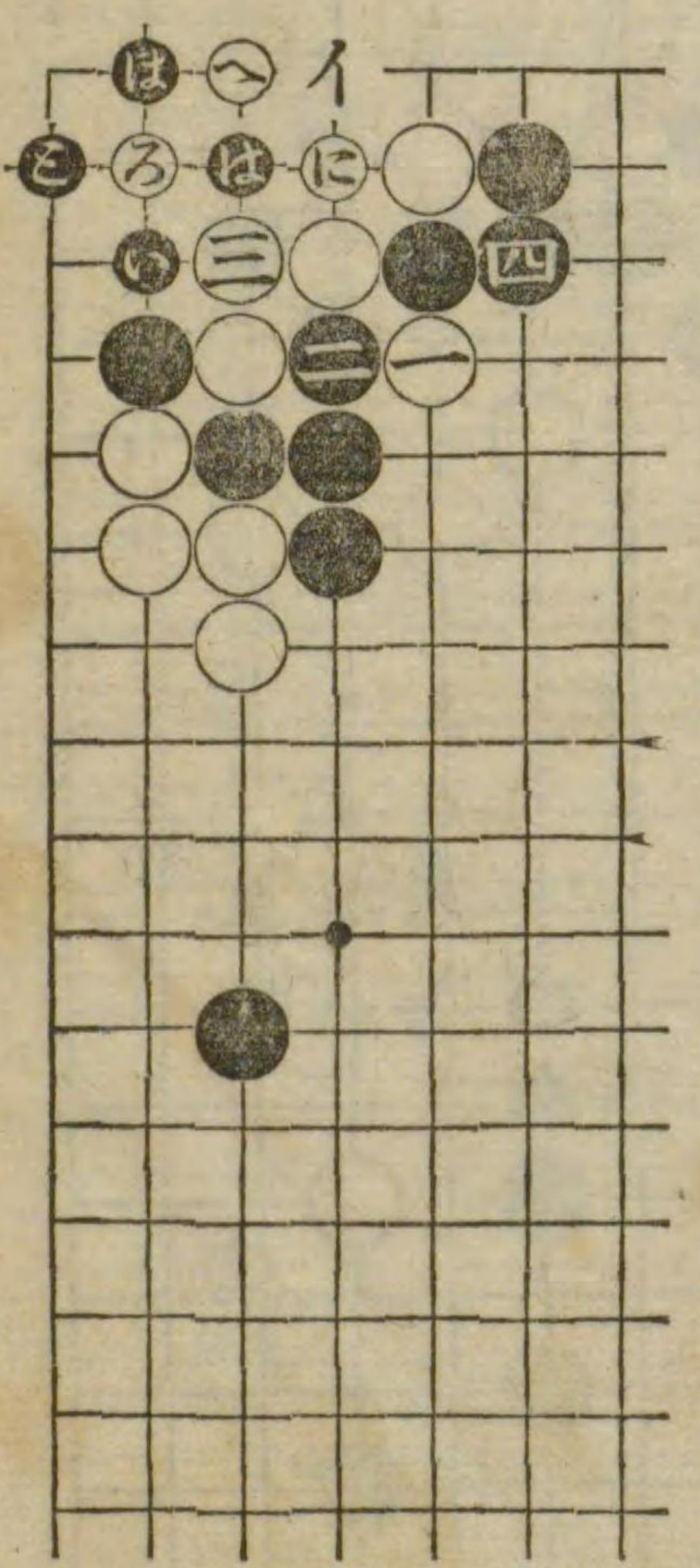
(乙圖)



(丙圖)



(丁圖)



(丙圖) 前乙圖白十と緯ねて來た時黒は●と二段緯せず一と引いて白に二と粘がせて先手を取るといふのも一策である。

(丁圖) 白若し前乙圖の十二と粘ぐ手を以て本圖の通り一と緯出したならば、黒は二とアテ白に三と粘がせて四と打つてわく、然れば後に黒から●と行び以下符號の手順に運んで切とするの味が残つて居る、(切の手順中白若●の手で●の點に下れば黒は(イ)と打つて尙且切である。

要するに本局白四十二の手は參考圖の通り夾むで打つ方が面白い。



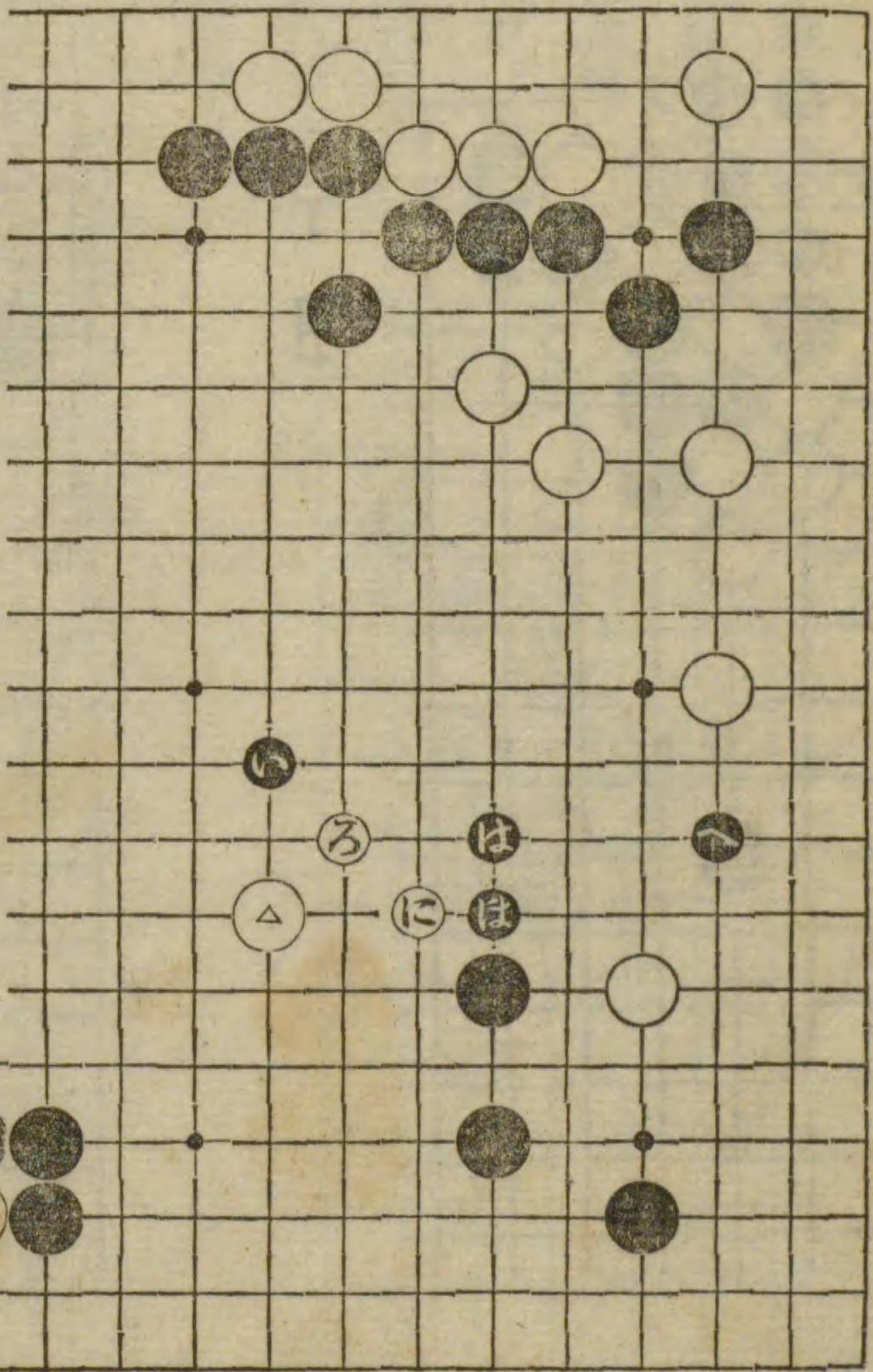
互先第十一局

白二は黒に①と掛らして②、③、④の三點の何れかへ廣く拓かうといふ手である、黒三は此く打も悪くはないが寧ろ⑤と左上隅に打つ方が働きがある。

「註」黒一から⑥に高締があるものとすれば⑦⑧の點は黒からの恰好の拓き場所である又⑨に黒の掛がある後ならば白二を⑩と三間夾するのも右上隅一、⑪の締からの拓きを兼ねた好着點たる事は言ふ迄もない

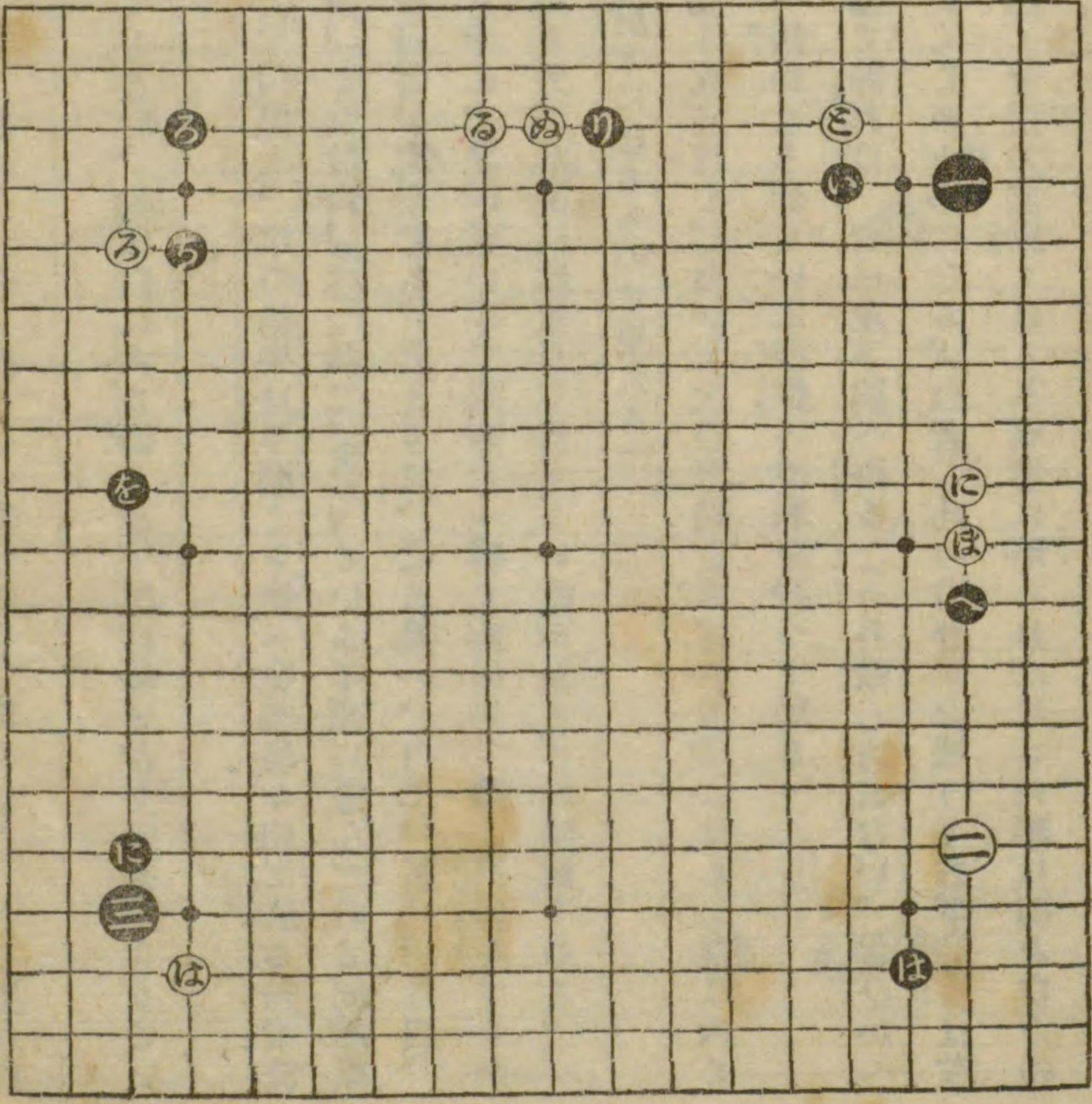
即ち白二が黒に⑫と掛らして⑬、⑭、⑮の何れかへ拓かうといふのも之を反面から見た譯で自ら白二よりの拓きと同時に黒右上隅からの拓きを妨害する手で、つまり兩作用を兼ねた手である  
黒三の手を⑯と左上隅小目に打つのが何故ハタラキがある

\*かといふに、其の時白若⑰と右上隅に掛つて來たならば、⑱と一の高締して⑲と三間夾しやうとの擬勢を示し、白⑳が之に備へて㉑、㉒、㉓の何れかへ打つた時左下の明隅へ着手する手順になる、若又黒三の手で㉔と打つた時、白㉕と掛らす㉖と掛つて來たならば黒は直ちに㉗と左下隅を目外に打つて白㉘の活動を制限する手になる、何故黒一白二黒⑳白㉙の次に黒が㉚と打つ手が白の活動を制限するかといふと、次で白は左下隅に㉛と掛りたくても其は已に黒の期待して居る處で若白が㉜と來れば好機乗す可しとて㉝と打つ手順になる、即ち拓き(側への)よりは隅の締若くは掛が重要であるといふ普通の原則に照しても白は其の掛りを打つ權利を抛棄せなければならぬといふ不便を感じねばならぬ。



(第八十七頁の續き)  
若も之が實戰の際であると、黒は左上隅へ打込む第四十一の手を以て①と(△印)白に迫り、白若②と尖めは③と飛ぶ、又④と尖まらずして⑤と飛べば⑥と押し飽迄之の中央の白一子を煽り苦しめて、一方⑦と打込むの計劃に出づ可きであらう、

第三手迄





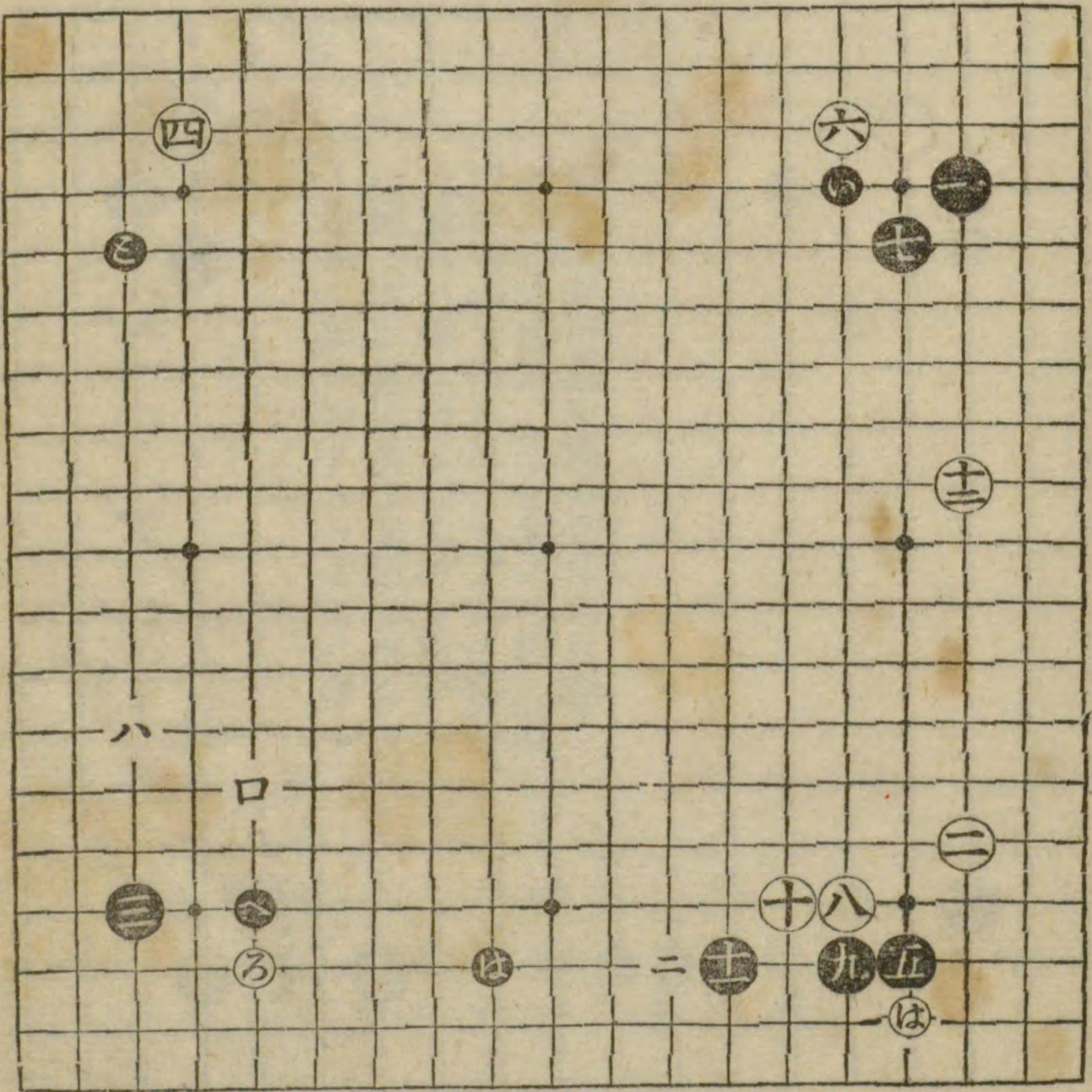
黒五の手は●と右上隅を高く縮るがよい、其は白に⑤と掛らせて●と之を三間夾とし、次で黒八白五黒九と白④と行る趣向である、或は五の手で●と左下隅を高く縮つてもよい、其は白に六と掛らせて黒は●と左上隅へ掛らうといふ手である。

「註」 黒一、白二、黒三、白四、黒五、白六、黒七、迄の結果は手順こそ違へ從來屢々出て居る秀策流の着手を逆に行つた迄で、黒一、白四、黒五、白六、黒三、白二、黒七、といふ手順に運んだのと同結果に歸して終ふたが、此うなると棋の局面が廣くなる、其よりは、已に黒一、白二、黒三、白四、と當初の布石の形が異つて來たのを幸に、黒が五の手で局面を一轉し此の手で●と高縮するかと●と左下隅を高縮するかの二途に出る方が本圖に比較して打ちよい感があるとの師説である。(但し黒五の趣向は手順を秀策流に戻すに在るものと見える)

○更に語を換へて言ふと、黒が圖の通り五と打てば白から次の着點を撰ばれる事になる(白は六と右上へ掛からうか或は⑤と左下隅へ掛からうかといふ撰擇の權利を持つて居る)

其を若し此の五の手で黒が右上を●と縮れば、白は左下隅へ掛るより外致し方はない、言ひかへると黒は白に命令して左下隅へ掛からしめる事になる。(白若し此の命令手を嫌うて右下若しくは左上を縮れば黒をして右上隅と左下隅とを兩方共縮られる不利益に陥らねばならぬ事は明々白々の道理である。(兩縮は白の不利))

第十二手迄



(局先互法石布)

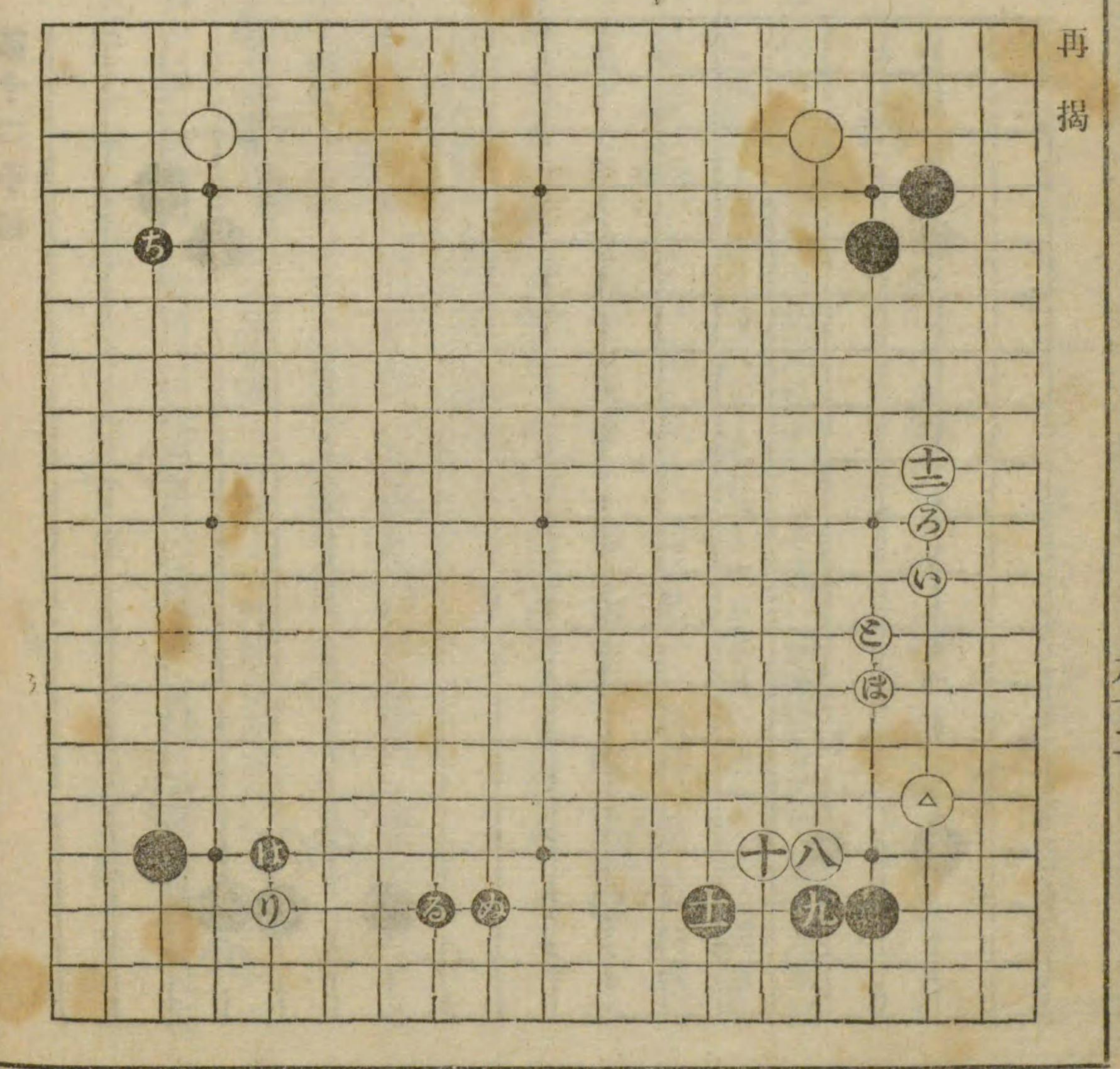
△黒五の手で●と縮り白⑤と掛

り黒●と之を三間夾し次で白の着點が黒左下隅を手拔し得る場合であつたならば黒は八の點に●と、高く右下隅へかゝり白五、黒九となるが、若も白⑤、黒●の次白(ハ)に二間飛すれば黒(ハ)と二間に應じ次に白五と右下隅を縮れば黒は(ニ)と二間拓してをればよい。

白八は單に十二の點に拓くもよいが、すると黒に八の點への尖若しくは十の點への斜走を利かさず、先手で左上隅の掛りを打たれる手順になるから本圖は先づ此の黒の趣向を妨げて八、十と壓しておいて然る後十二と拓いたのである。

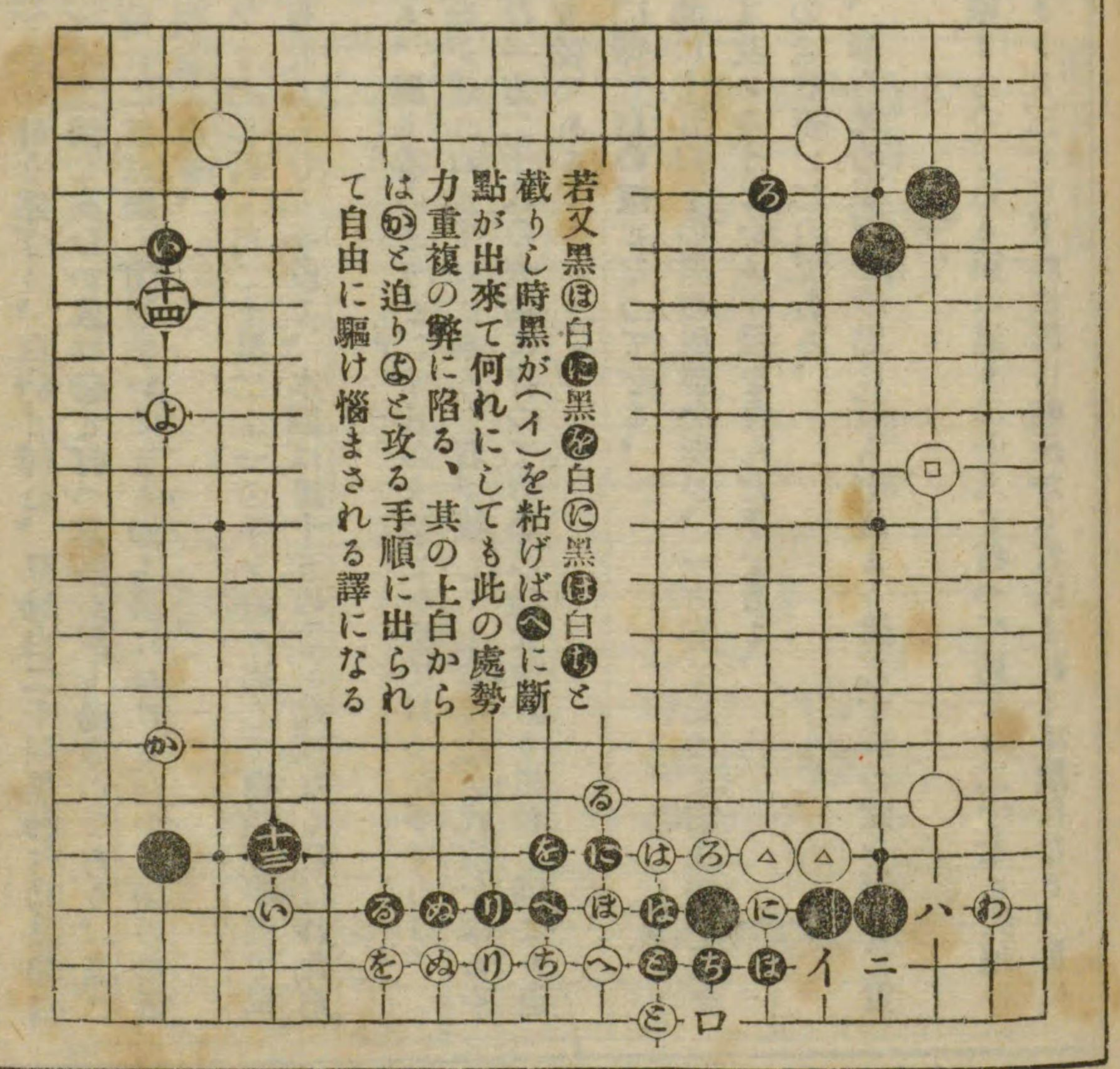


○前圖白八、の手を若しも本圖の①或は②の點に打てば黒は手抜して③と左下隅を締るがよい、次で白が(△印)から八の點へ掛けて來ても已に右側の白の拓きが④と狭いとすれば此の八の掛けはツマラヌ○又白八の手で十二と打ち黒八白⑤となつた時は黒は⑥と締らず⑦と掛るがよい其は白に⑧の掛りを態と打たせるので白⑨の次に黒⑩と夾が極めて好良になる(溯つて白十二の時黒十の點へ斜走せば白⑪、次に黒⑫白⑬の時黒は⑭と二間に夾むのである)



再掲

△前々圖白十二と(□印)へ打つた時(白の勢力の△印に加はつた後は)黒十三を①と左下隅に掛るは危険である、其故は次に白に②と左下隅へ掛られた時此時の局勢として左下隅を應接しては居られぬ先づ一撃を右上の白に③と加へねばならぬ、其時白に④と⑤と押されても黒は⑥と行びた次に⑦と締る事が出來ぬ若締ると白に⑧と出られ黒⑨の時⑩と截られ以下黒⑪白⑫迄の結果となり黒若隅を手抜すれば忽ち白に⑬と走られ死滅の悲境に陥らねばならぬ、若又初め黒⑭と締ねず⑮の點に行ければ白⑯黒⑰の時白⑱黒⑲白⑳黒㉑白㉒黒㉓白㉔黒㉕白㉖黒㉗白㉘黒㉙白㉚黒㉛白㉜黒㉝白㉞黒㉟白㊱黒㊲白㊳黒㊴白㊵黒㊶白㊷黒㊸白㊹黒㊺白㊻黒㊼白㊽黒㊾白㊿



若又黒⑬白⑭黒⑮白⑯黒⑰白⑱と截りし時黒が(イ)を粘げば⑲に斷點が出來て何れにしても此の處勢力重複の弊に陥る、其の上白からは⑳と迫り㉑と攻る手順に不出らねて自由に驅け惱まされる譯になる



黒十五の手は二十二と立つて(△印)白の鋒を遮り、白①と縛ね、黒②白二十四黒③白④黒⑤白⑥と交換を遂げ次で黒は⑦と白(六)を二間に夾むか或は⑧と打つ手段が解り易き形である、(黒二十白⑨以下の應接の後、白が⑩へ曲れば黒は堅く⑪を粘いでをる即ち隅における白から⑫の出截二十一の頂等の味が消滅して非常の利益である、然し黒が此く十五と打つたのは、次で十七と打ち白二十黒二十一の手を迫り出して自然の手順で隅を堅固にし、兼ねて右側の白地を散地たらしむる手段で、本圖は黒十五の策が遺憾なく行はれた形である、

白十六は(□印)白の凌ぎも兼ねてをる、即ち⑬の走りと二十八の大場とを見て打つた手である。

「註」已に黒十五の來侵で右側に大地が造れぬとすれば寧ろ一着手抜して上側に之が代償を求めやう、乃ち⑭と走つて黒の根據を奪ひ一方二十八の大場に打つて形勢の雄大を計り黒若し⑮より迫らば⑯と押して出やうといふ白の策戦である。

白十八は暗に二十六と盤る手即ち(□印)白の援となつてをる、

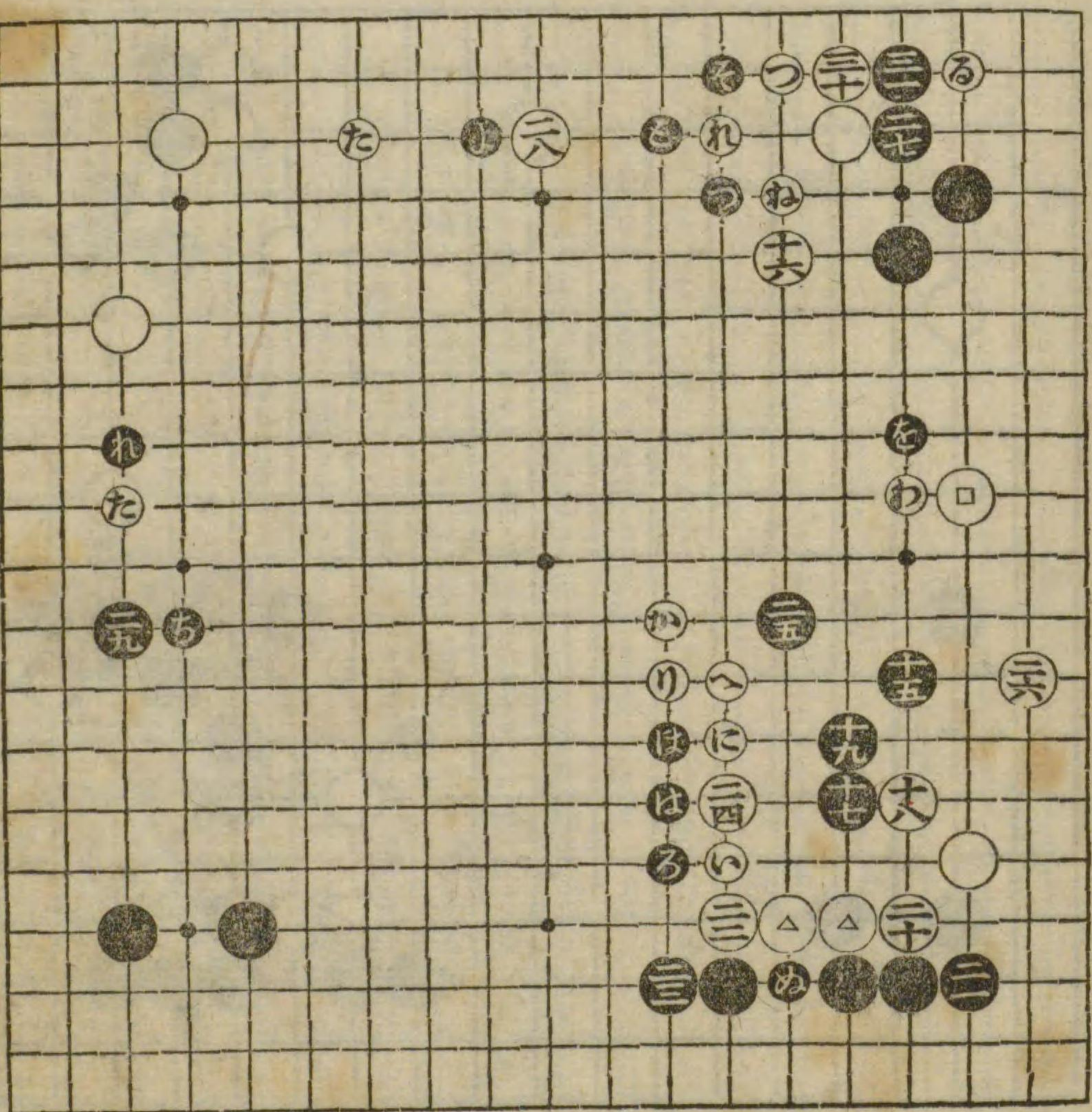
白二十六は上下の白の連絡を計ると共に十五以下の黒の根據を奪ひ、一方⑰と走つて右上隅の黒を中原に誘き、此の上下の黒を兩断して攻めやうといふ手段を含んだ手である、

黒二十七の尖頂は、之に備へて白⑱の走を拒いだのである、

白二十八の手は少し緩慢の嫌がある、寧ろ此の手で⑲の點に打ち⑳邊より黒二十五の頭を壓して策を廻らす方が面白からう。

「註」元來此ういふ處は極めて打ち難イものである圖の通り二十八と打つて見ても二十七と尖頂けられて居る以上餘り面白くないサリトテ三十と下れば黒に㉑邊から打込まれる手順になる。更に

第三十一手迄

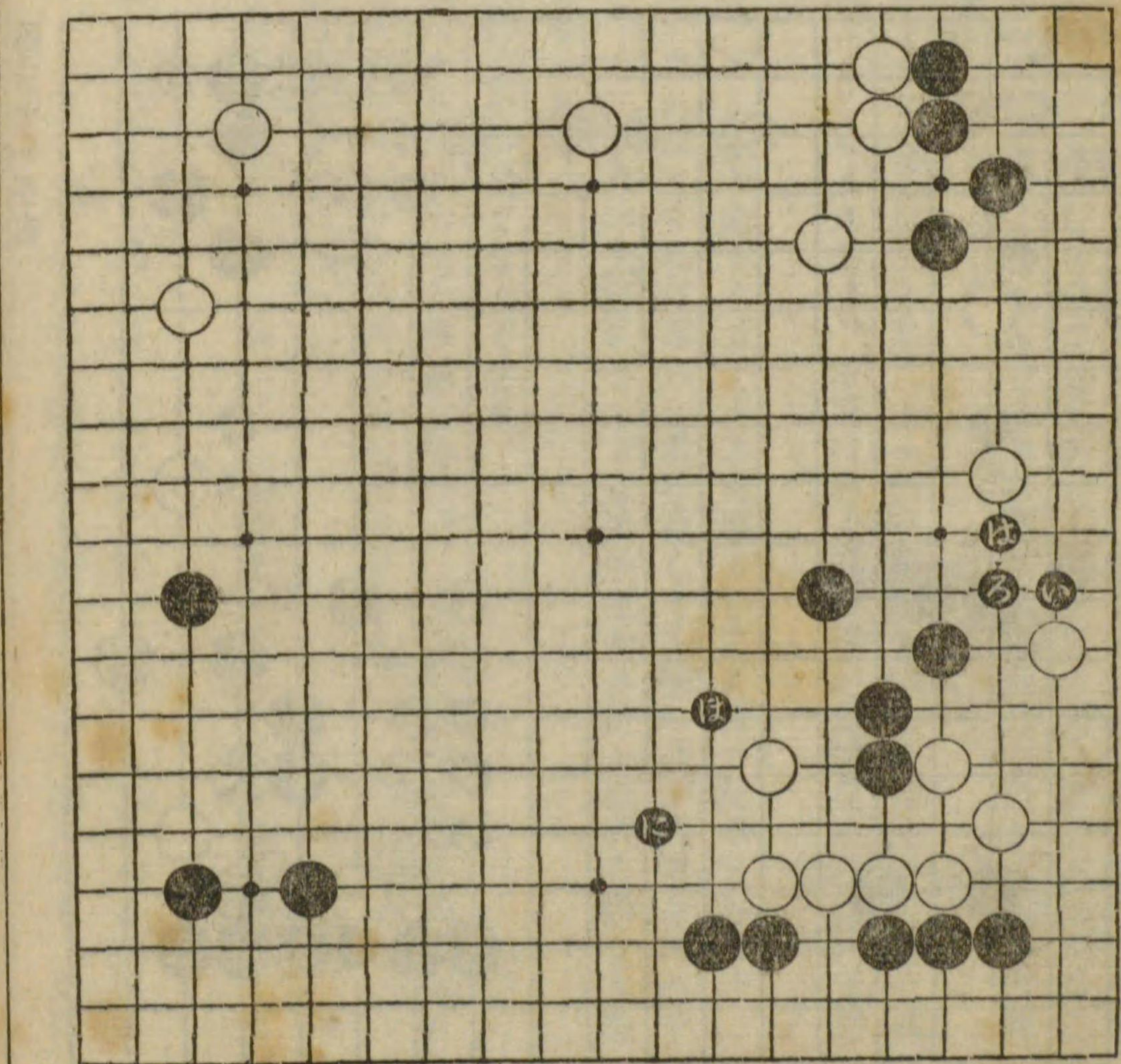


黒の方から言ふと三十に押へてあれば㉑邊の打込もしやすい何故なれば此の下りのない前に㉒と打込めば白に㉓と詰められ黒㉔と二間拓すれば白に㉕と頂けられ黒㉖と縛ね白に㉗と抑へられ黒㉘白㉙と軽く捌かれ三十一への縛迄白から利かされる順序になる、然るに白三十の下りがある後黒に㉚と打込まれ、ば此の下りの白が重くなつて捌きニクイといふ趣がある。

黒二十九を㉛に打つもよいサスレバ左上隅白の位置低いため㉜邊に黒の裾を覗ふのが面白くない、白から㉝と來られぬとする、と後に黒から㉞と運ぶ姿勢が極めて佳くなる。



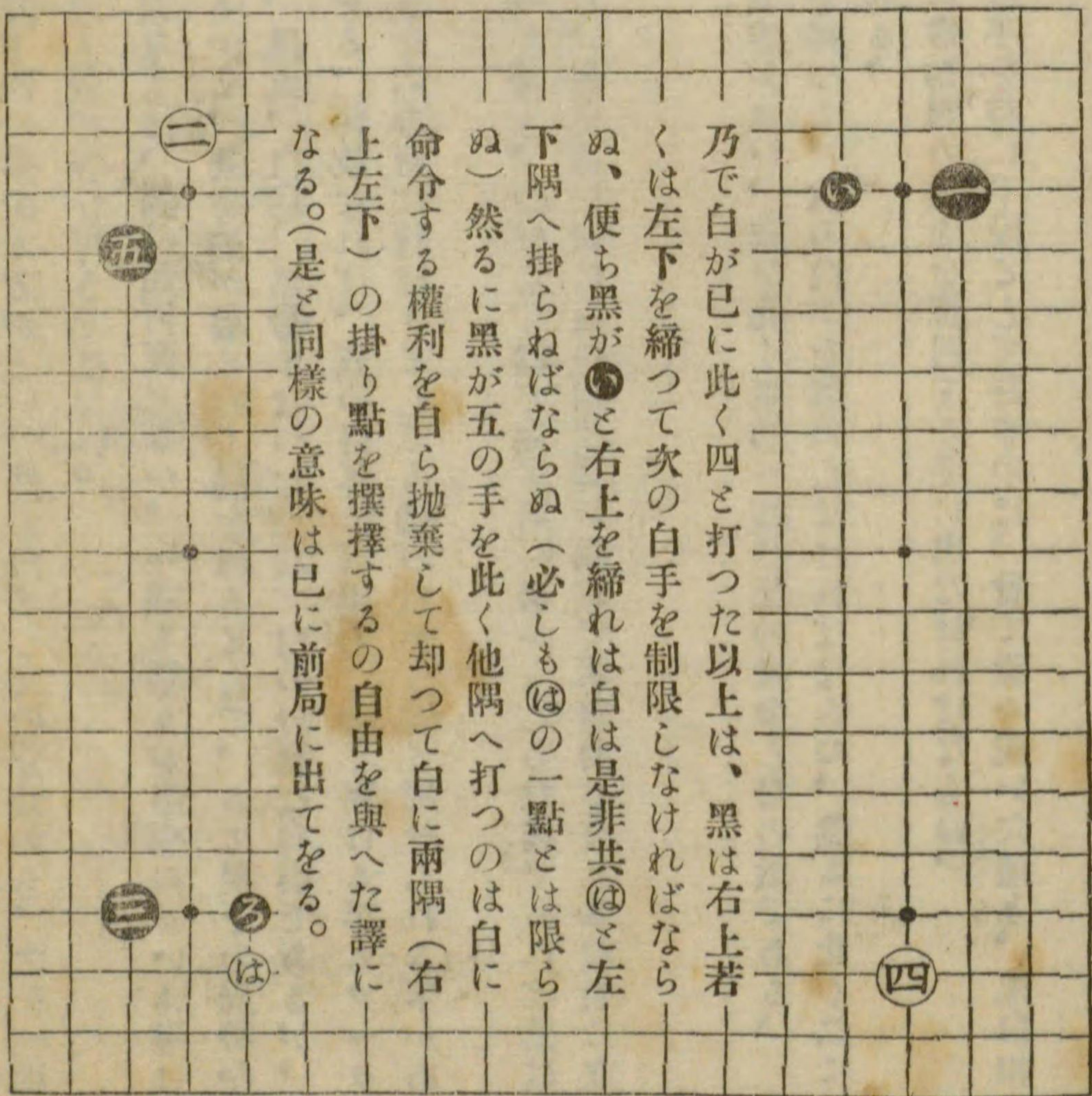
「殘説」本圖右側に黒から  
と頂けて上下の白を兩斷する  
手がある、然し黒は急いで行  
ると何にもならぬ、何故なれ  
ば●と頂けて兩斷するが利か  
或は●、●と打つて活形を造  
るが利かは全局の形勢と此の  
黑白双方の趨勢及び附近の關  
係を能く考察しなければなら  
ぬ、黒の立場から言ふと●と  
頂ける手と●、●と運ぶ手と  
を保留して機會の熟するを待  
つ？或は此の兩途を任意に取  
捨して利益を收むる機を造り  
出すといふ事を工夫せねばな  
らぬ、と同時に白も亦●、●、  
方面に黒の勢力の加はらぬ  
様注意せねばならぬ、若●、  
●、方面に黒影が加はれば決  
して油斷は出来ぬ。



互先 第拾貳局

黒五の手は●か若くは●に高縮  
をして、白に何れかへ掛からし  
て、我も亦、右下、左上の何れ  
かの白に掛かるがよい。  
「註」溯つて論じると白が四  
と打つたのは、「兩縮」若くは  
「縮り合」を認容した道理であ  
つて之は白として稍不利に陥  
る傾があるから、普通は此の  
四の手で右上左下の何れかへ  
掛つて打つ可きは從來の講義  
に屢々繰返してある、茲は白  
若し此く打つたならば黒は白  
の極微の缺點と雖も之を見通  
さず利を占める手段に出なけ  
ればならぬといふ反證として  
之を示したのである、

第五手迄



乃で白が已に此く四と打つた以上は、黒は右上若  
くは左下を縮つて次の白手を制限しなければなら  
ぬ、便ち黒が●と右上を縮れば白は是非共●と左  
下隅へ掛らねばならぬ（必しも●の一點とは限ら  
ぬ）然るに黒が五の手を此く他隅へ打つのは白に  
命令する權利を自ら拋棄して却つて白に兩隅（右  
上左下）の掛り點を撰擇するの自由を與へた譯に  
なる。（是と同様の意味は已に前局に出てをる。



前述の理由より推せば、白六は④と左下隅に掛かる方がよい、然し白としての立場から、之を一種の手段として見れば此く六と夾んだのも敢て咎む可きではない。

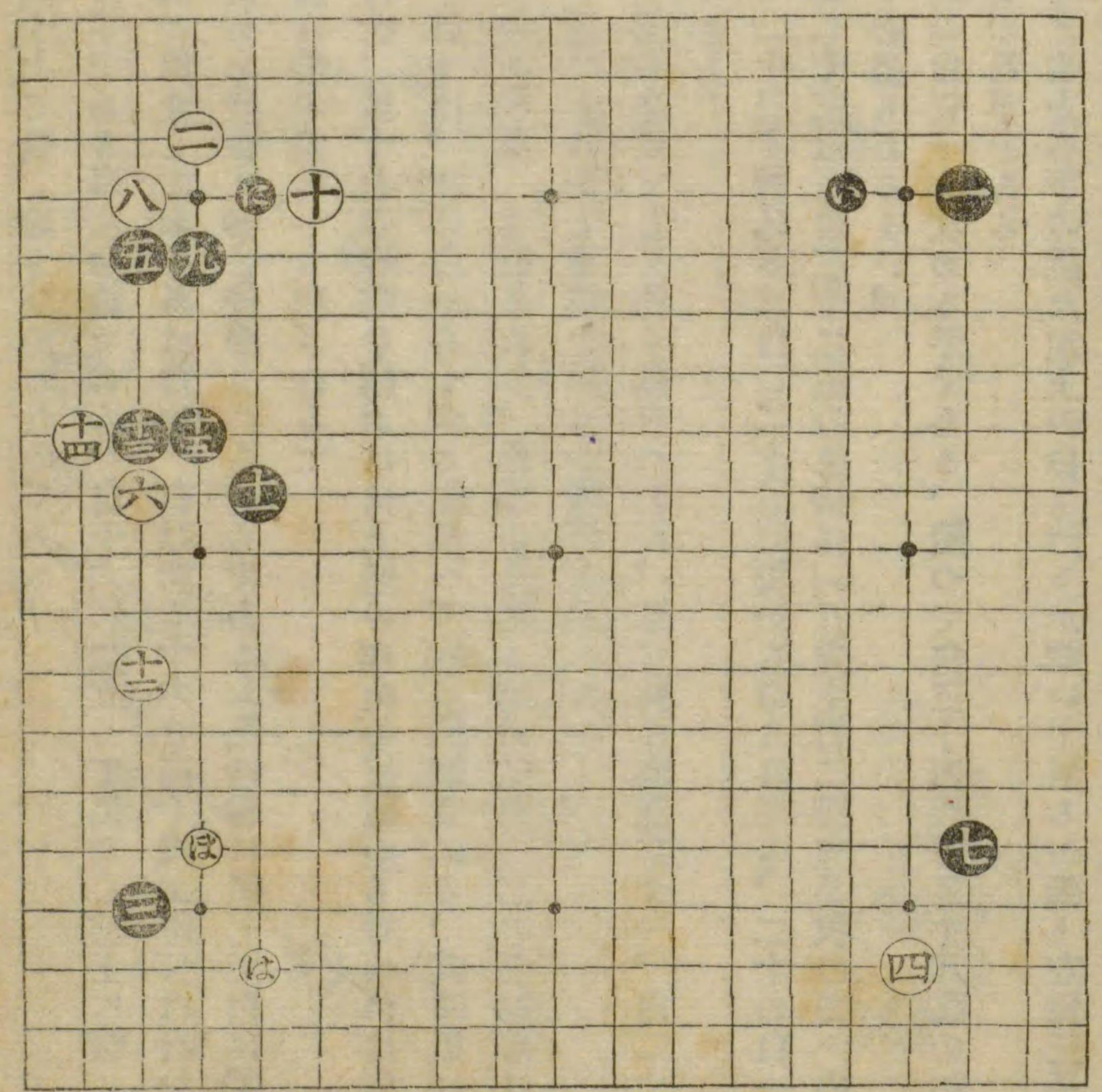
「註」 白に六の手で④と掛かられたならば、黒は如何應じるか、一隅も締りが出来ぬといふ事は黒の立場として極めて不利益であるから、其時黒が⑤と右上隅を締るとして、さて現下の局勢を見ると、(黒一、白二、黒三、白四、黒五、白④、黒⑤となつた現状) 白の行動は自由であるが、黒は如何にも不便の位置に立つてをる、何故なれば、五の目外を利用して⑥と掛ける手もツマラズ、其の掛けの手を含んだ例の拓きを六方面に行はうとしても④の白から③と壓せられる手があるから其は不可能である。

之を溯つて黒が五の手で⑥と右上隅を締り、白をして④と左下隅へ掛からしめた後であれば黒は當然七と右下隅に掛る手であるから、今度は反對に白の四及④が極めて不自由を感じる境遇に立たなければならぬ。

△更に前述の意を概括して言ふと、  
白四は右上隅若くは左下隅に掛かる方がよい、其を此く明隅へ打つたのは少し白の損である、黒五は之に乗じて右上若くは左下を締つて、次の白手を制限しなければならぬ、然るに此く二に掛かつて打つたのは要點を逸して居る、  
白六は之の機に乗じて④と打ち茲に當初四の損失を挽回する手に出なければならぬ、  
といふ事になる、然るに此の白六の手を特に手段として許すのは、曾て屢々説いた通り、黑白相互の立場が違ふからである、  
乃ち互先の棋として黒を持つた時であれば、「我には先着の利がある」といふ確信を以て正々の旗、

堂々の陣で、戦ふ可きで、敢て奇手を弄し權變を用ゐるの必要はない、  
又我が力量の彼に劣る定先の棋としての際なれば、尙更上手に向つて策を弄するのは危険であるから是亦飽迄正々堂々で先着の利を失はぬ様に注意して打たねばならぬ、  
然るに白の立場として見ると互先の棋と然らざるとに論なく、已に一着を敵に譲つて局上に角逐しておるのであるから、或は奇兵を縦ち或は逆襲を施し縦横策を弄せねばならぬのは當然の事である、  
是便ち六の手を手段として見れば、許されるといふ理由である。

(再掲第十五手迄)



(局先互法石布)



白十六と高く一間飛した爲め、黒は十七と低く縮りを施したのである。

「註」 白十六は●の頂越を防いだ手である事は勿論である、白十六に先立つて黒若し右上に○と高縮りがあれば、(白十六の手で○と斜走しておく外はない) 白は此く十六と高く飛ぶ譯には行かぬ、何故なれば次で黒●からの好拓を兼ねて○と侵撃されるからである(此時●に應じて白は○とも打てぬ、サリトテ捨おけば後に●の邊迄へも犯される)

然るに本圖白が十六と高く飛んだ後、黒十七の着點を撰ぶには上述の理由の反面から考へれば判る、即黒若し十七の手を○と高く打てば、次に白から十六と相俟つて○と侵撃される、其時黒は●と應じて居れず、手を抜けば後に○迄へも犯される、此等の意味も已に従來一二ヶ處略解はしておいたが、初心者の誤り易い處であるから重複を厭はず註解を加へておく。

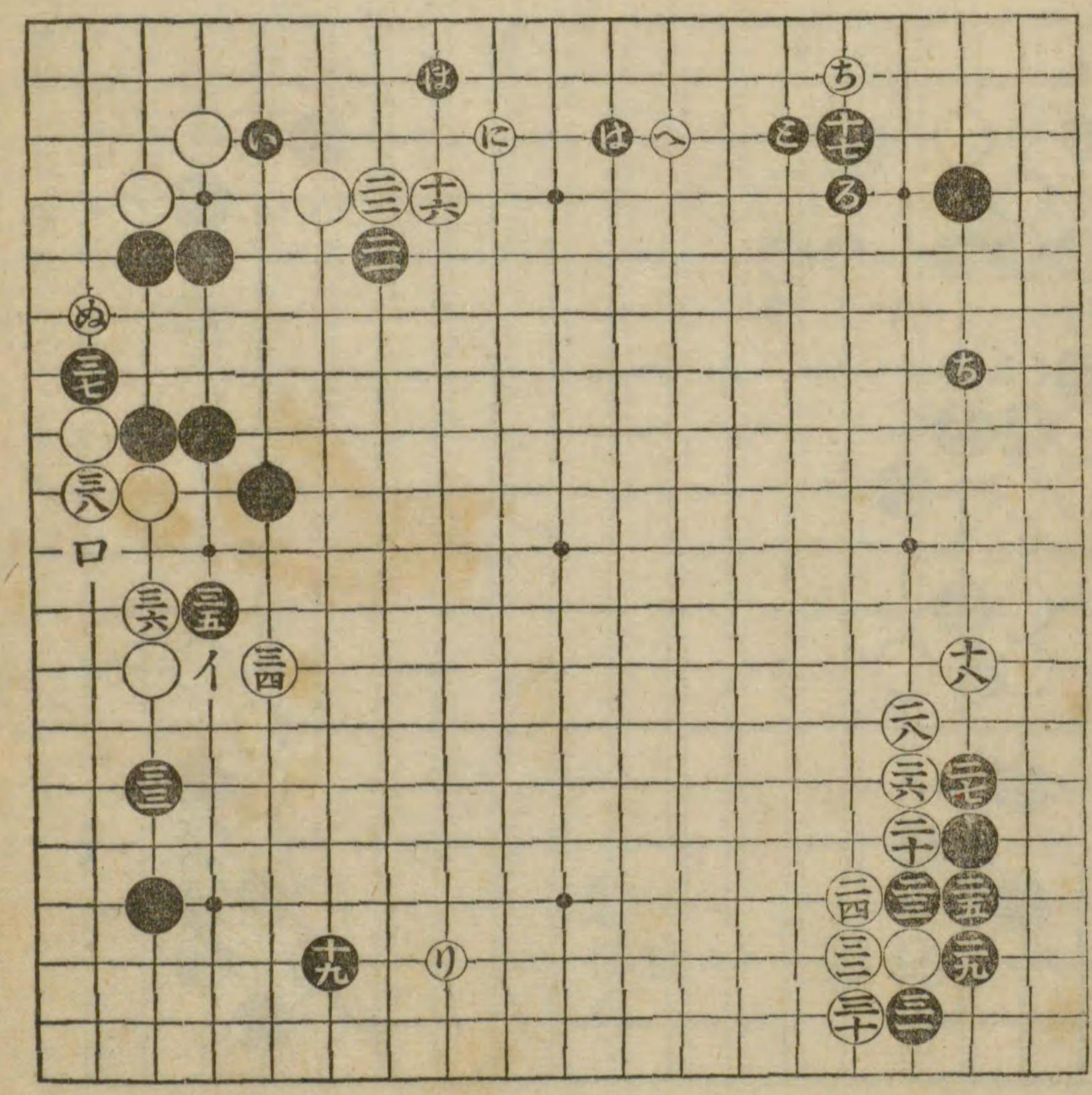
黒二十一は右下隅で二十三と縛込む爲の準備として此くは打つたが、單に此の處黒二十一、白二十の交換として見れば非常な不利である。

「註」 黒二十一の手を打たずして二十三と縛込めば白に二十五の點から截られても、二十の白一子を征に提る事が出来ぬ、此等黒二十三以下白三十二迄の應接は「互先定石二間夾手抜の部」の應用に過ぎぬから更めて詳解する必要もあるまい。

黒三十三は左下隅を守り、兼て左側の白三子を攻める手である、随つて白三十四以下三十八迄の相互の應接は約束手とも稱す可き必要の着手である。

「註」 白三十二迄の現況を見渡すと右上右下の黒及左上の白も治りが就いて居るが獨り左側三子の白はまだ形が熟して居ない、又之に隣つた左下隅の黒も十九と大斜走縮であり且つ右下の白の

第三十八手迄



(局先互法石布)

堅壁は遙に威力を此の隅にも及ぼすから薄弱の嫌がある、乃で三十三と堅く一間して左下の薄弱に備へ同時に三子の白に迫つたので、此際白亦黙止しては居られぬ三十四と飛ぶのは餘義ない手で、次で黒は(イ)及(ロ)の缺點を覗うて三十五と打ち白に三十六と應じさせた後三十七と押へ彼を攻め己を守つたのである。

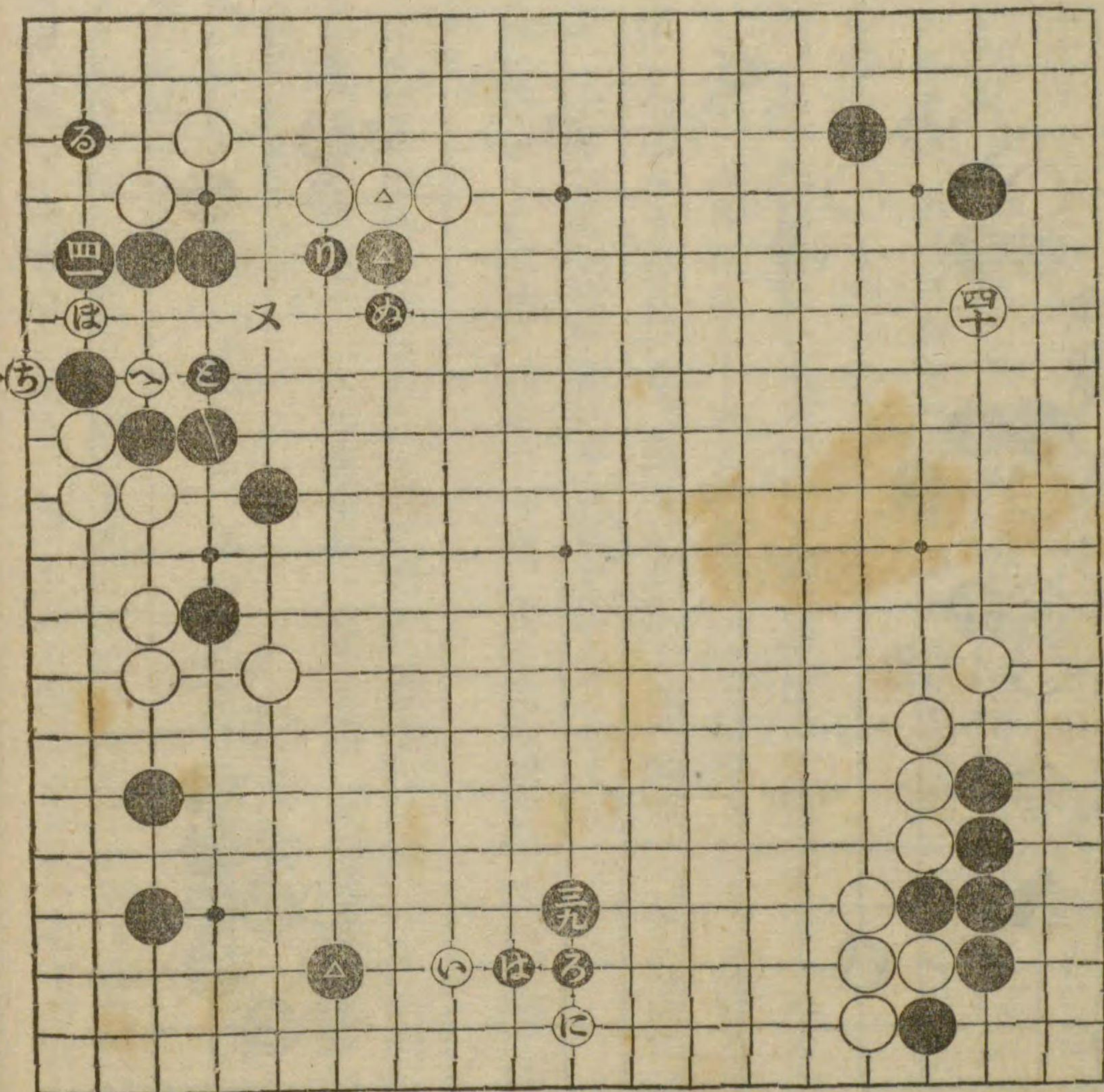
白若し三十八と粘がずして、黒に(ロ)と打たれたならば此の白は根據を顛される譯で非常に不利を讓す事になる、

次で黒若し三十九の手を○と打つてもよい、其時白は○と詰るか○と夾むかの二途である。



黒三十九は右下の堅壁よりする白の活動を制限したのである。  
 「註」 黒三十九は⑤の詰を防いだのである、此の手で⑥と低く打てば、白に⑦と打込まれるサリトテ⑧と二間に狭く拓くのは左の姿勢上面白くない、此く高く打てば白は右の堅壁からしてマサカ⑨と低く走る譯にも行かぬ。  
 白若四十の手で⑩と夾んで来れば黒は四十一と下り白⑪、黒⑫、白⑬と運んで黒は⑭と打つがよい、(若し△印黒白の交換がなければ黒は⑮の手で⑯と打つて白(ヌ)の覗きを拒ぐ)  
 黒四十一は⑰の夾を拒ぎ、白を攻める準備とし、併せて左上隅を⑱と削る手を残すのである。

第四十一手止



互先 第拾參局

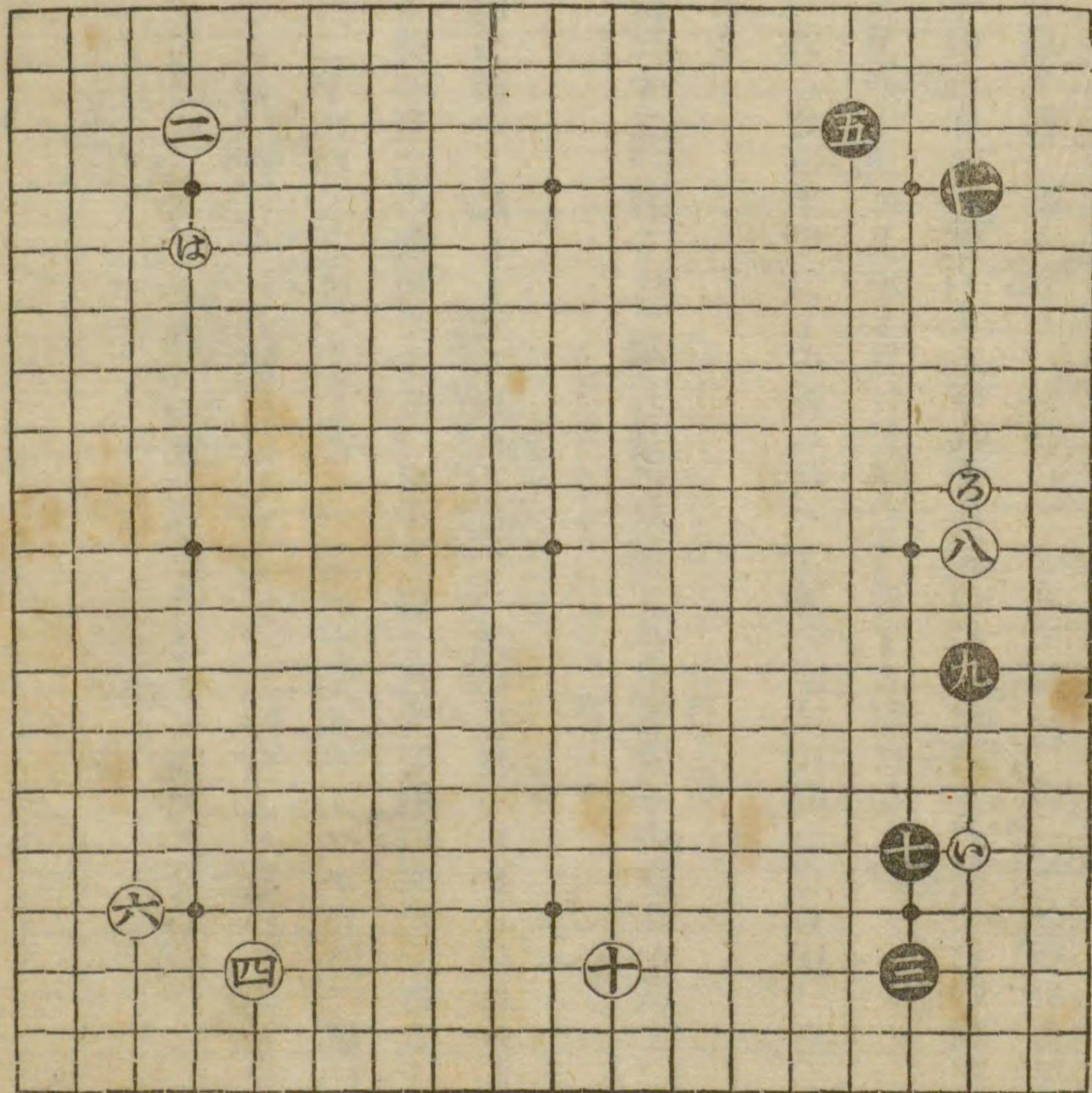
白四は②若くは五の點に掛るがよい、此く兩締の手順に運ぶは(曾て屢々説いた通り)白の不利である。

白若し八の手で、③の點に左上隅を締れば、忽ち黒に八の要點を奪はれる。

白八は一步進めて④の點に打つてもよい。

「註」 白四に對する説は前局と同意である、白八の手は兩見合の點で若黒が上から来れば下へ拓かう、下から来れば上へ拓かうといふ手である。

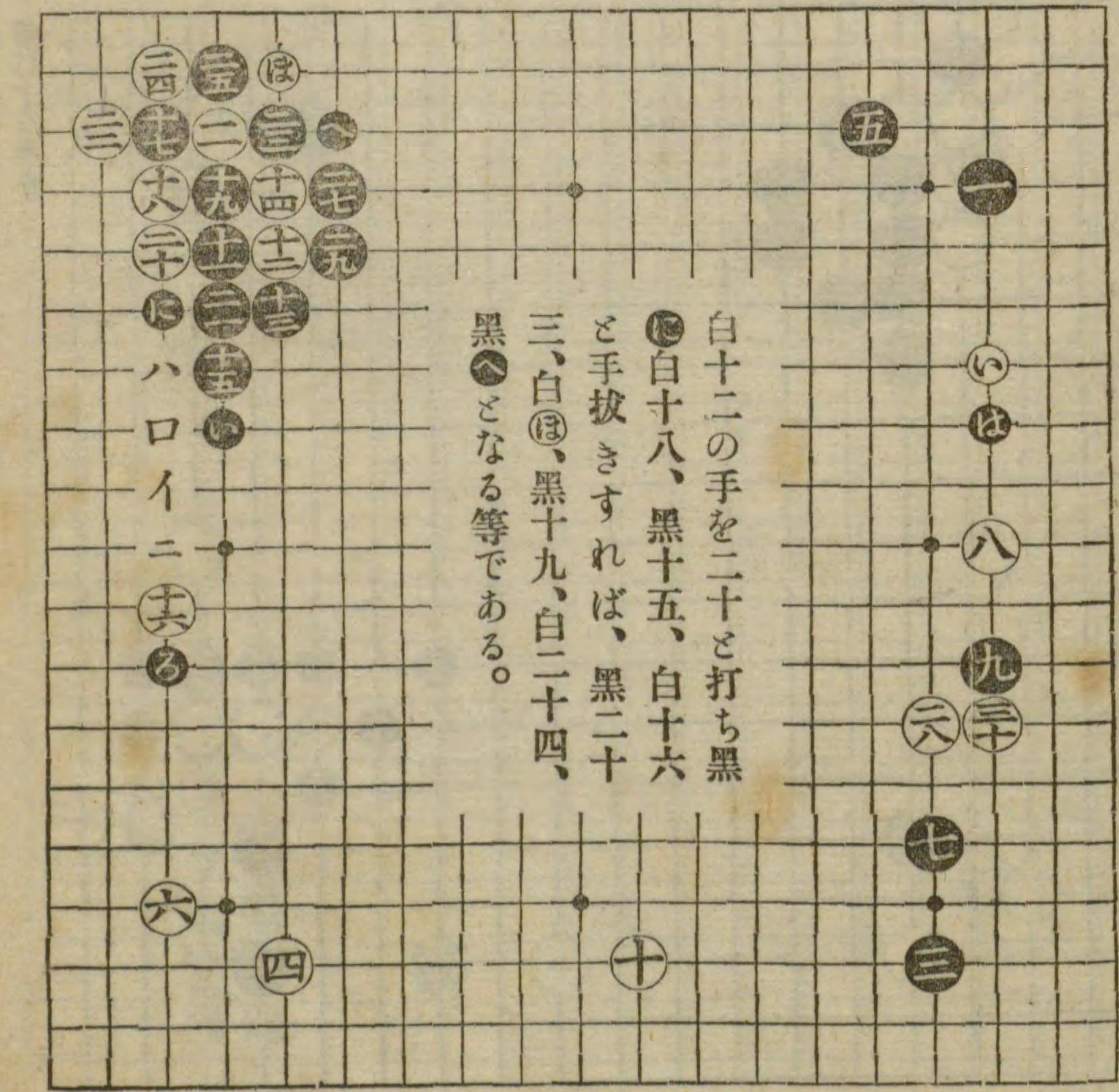
第九手迄





白十は㊦と二間に拓いておくが本理である、  
 黒十一の時白十二の手を以て㊩と打つてもよい、  
 黒十一の手を二十の點に掛かると白に(イ)(ロ)(ハ)の三點の何れかに夾まれて面白くない、  
 白若し十二の手で(ハ)と夾んで來たならば、黒は十三の點に尖むがよい、其時白二十七に斜走し、  
 黒又㊦と斜走に白(ハ)の肩を衝き、白二十と打ち黒は(ロ)と押へ、白が十九とキメツケた時、黒は  
 ㊦と三間に拓いておく、此くなつても先づ互角の對勢である、黒十七以下互先定石の應用である。  
 「註」 白十を㊩と拓けとは、黒に㊦方面から酷しく夾み攻められて、非常に打ちニグイ局になる  
 からである、

黒が十一と高く掛かつた注文は、白に十二、若くは二十の點に頂けさせ定石通りの應接を経て、  
 星下(ニ)の邊へ拓かうといふのである、  
 白十六は黒の此の策を破つたので、若し此の手で二十の點へ打つ普通の應接に出たならば、全く  
 黒の策を遂げしめる譯である、即ち最初十二と上から頂けた手と矛盾する譯になる、  
 白が左上を手抜して十六と打ち、十の一子と相俟つて右下に大規模の地域を造り、黒十七の來攻  
 に應じて十八以下二十六迄の手順を以て軽く振り替り、最後に二十八と征待の一子を利かして  
 三十と遮断し以て八の一子の孤弱に備へた策戦は實に痛快無比の手段である、



二十六は、十七の點をツク第三十手迄  
 白十二の手を二十と打ち黒  
 ㊦白十八、黒十五、白十六  
 と手抜きすれば、黒二十  
 三、白㊦、黒十九、白二十四、  
 黒㊦となる等である。

然し此に對する黒の應接も極  
 めて堅實であつて毫も批議す  
 可き點はない。  
 △問 白が十二と外から頂けた  
 手を次で十六と手を抜く準備  
 として見れば、若此の手を以  
 て二十と下から頂ければ手抜  
 きが出来ぬか如何。  
 ○答 下から頂けて普通(圖中  
 に記す符號の手順)に運んで  
 手抜きした結果白は隅から低  
 く這はされる事になり右上隅  
 の黒の締りと相待つて黒に宏  
 壯を加へさす事になり、本圖  
 二十八と打つた手の様に代償  
 を取るの機會がなくなる。





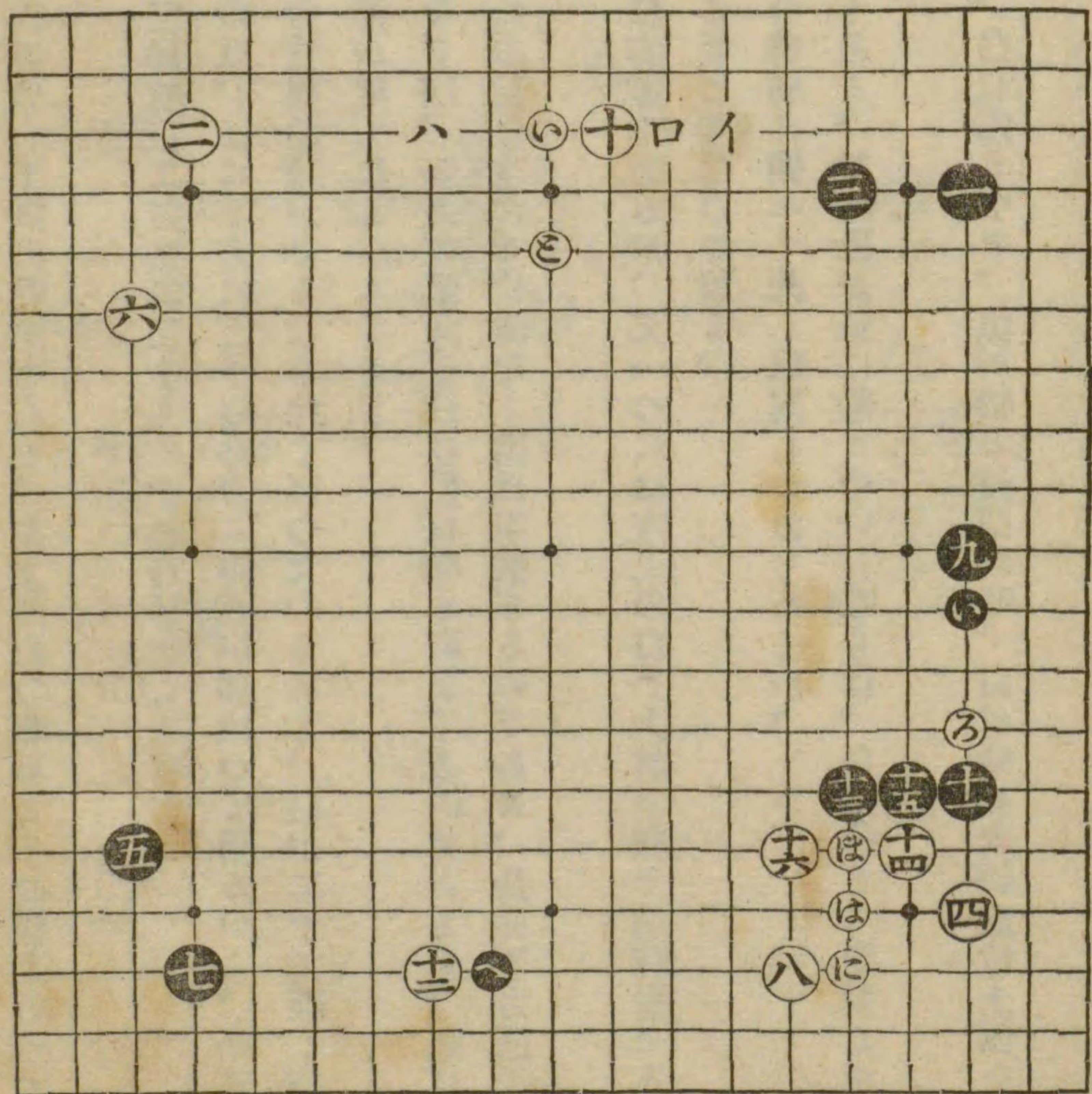


△問 黒九の手を一步進めて⑩と打てば次で十一と詰る手が二間拓となつて姿勢がよくはないか、  
 ○答 詰の手のみに就て考ると其も一理あれど、棋は互に一着宛下すもの故、此の處白必ずしも手  
 抜するとは限らず、且つ四、八の距離廣き故白は之に備へて⑨と二間拓する事も當然の手として  
 豫想せなければならぬ、して見ると白に⑨と詰られた時黒が九とあるがよいか⑩とあるがよいか  
 といへば、無論白⑨に接近して⑩にあるよりは、二路を隔て、九とある方が、白⑨の影響を受け  
 る度が緩慢なだけ打ち易いといふ意味がある。

白十は一路控へて星下⑩の點に打つてもよし、右下隅白八の締りが⑩の「一間高締」か若くは⑩の  
 「小斜走」であれば、黒は十一の手を⑨の點に一路控へて打つがよい、然し本圖は四、八、と締が緩  
 んで居るから一バイに詰めて十一と打つたのである、白十二は單に右下隅一局部に就いて言ふと⑩  
 と備へる處であるが、此場合⑩に打つと黒に⑪と大場の利を占められる事になるから、先づ十二と  
 左下隅からの發展地を奪うておいて、次で黒十三と飛んだ時、十四と覗き十六と備へて、隅への打  
 込まれる味を消し、兼て十二と廣く拓いた下側大地域の防備としたのである。

「註」 白若し十の手を一路控へて⑩と打てば自分の手番に拓けるものとすれば次に(イ)と二間に  
 拓くが恰好の着點ではあるが、若し黒から(ロ)と詰められると餘義なく⑩と一間飛しておらねば  
 ならぬ、何故なれば、若し白十の手で⑩と打ち黒(ロ)と詰め、白手抜なれば、忽ち黒に(ハ)と打込  
 まれる急な手になる、然るに本圖の通り白十とあれば黒が右上隅一、三からの詰として(イ)と打

(再掲)第十六手迄



(局先互法石布)

つのは極めて窄いからツマラ  
 ヌ手になる、

要するに白は、若黒から詰め  
 られたら單關してもよし黒が  
 詰めなければ二間に拓かうと  
 いふ時には十の手を⑩と打つ  
 ておく、が若も黒に詰められ  
 ても飛んでは居られぬと考へ  
 た時は、豫じめ黒の詰手を制  
 限して、本圖の通り十と打つ  
 ておくがよい、

黒十一は十三の飛を豫想して  
 打つた手で、茲に勢力を加へ  
 右側の黒地に厚壯を加へると  
 同時に下側の白に迫つたので  
 ある。



黒十七と此く一路高く第四線に打つたのは右下隅の我が布石と、左上隅白の布石との關係上打つた手である。

「註」此の着手の類例は互先第十三局第百二頁黒第三十九の手を參看せらる可し。

白十八に應じて黒が十九と泳いだのは、已に下方に三子の勢力(棒石)が加はつて居るから、今若し十九の手で三十六と立てば稍勢力重複の嫌があるため此く打つたのである、白が二十と軽く捌いたのは、若し三十八と行びると形が重くなるからである、

白若し二十の手を三十八と行びたならば、普通の場合なれば黒は○と斜走するのであるが、茲は白が二十、若くは三十八と其の何れの點に來たるに論なく黒は手抜するのである、是亦下方三子の棒石の勢力を恃むからである、

黒二十一は十七の一子と相待つて好姿勢であるが、又一つには左上の白が大斜走締で稍疎漫であるから多少之に向つて感じを與へる手ともなつて居る。

白二十二は黒二十一の詰に應じて隅の薄弱に備へて此く單關したのであるが、

或は此の手を以つて○と頂ける手段もある、其時黒が單に○と引いたならば、白は○と一間飛して

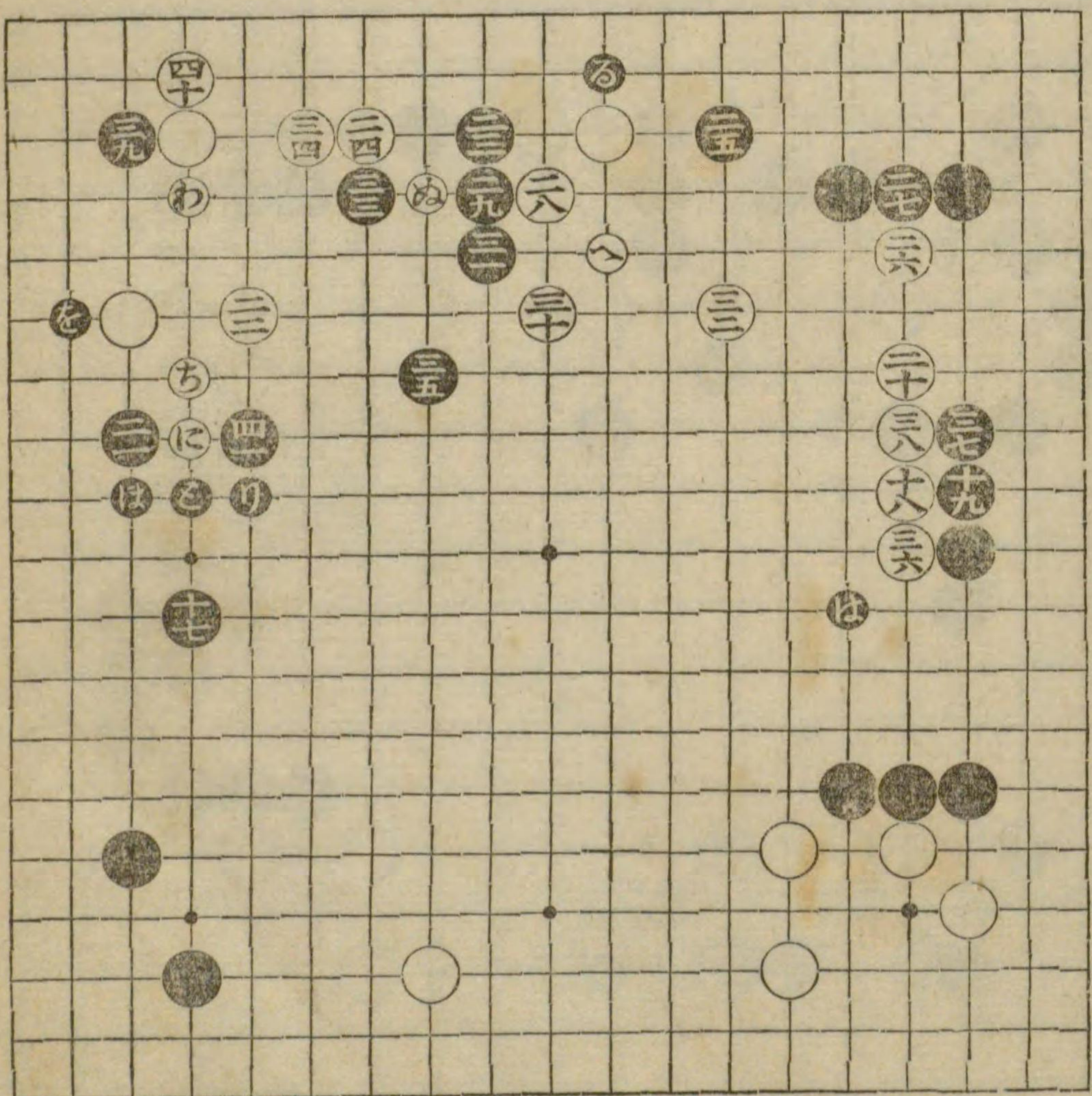
上側の白地に備へを施す手順になる、

若又白○の時黒が○と綽ねたならば、白は○と引き、黒が○と行びた時、白は○と大斜走に上側を

圍うておくのである。

「註」白二十六は已に二十五と打たれて此の隅には何等策を施す可き餘地がないから、二十六と

第四十一手迄



覗き先手を以て十八、二十の

二子の補佐としたのである、

白二十八は黒の盤りを妨げた

ので、若し此の手で○と飛べ

ば必ず○と頂盤られるの恐が

ある、

黒三十三は三十五と中原へ逸

出する準備である、

黒が三十九と頂けたのは隅の

活味を見せて○と侵分で利を

こやうといふ準備である、

白四十は隅活味を消した手で

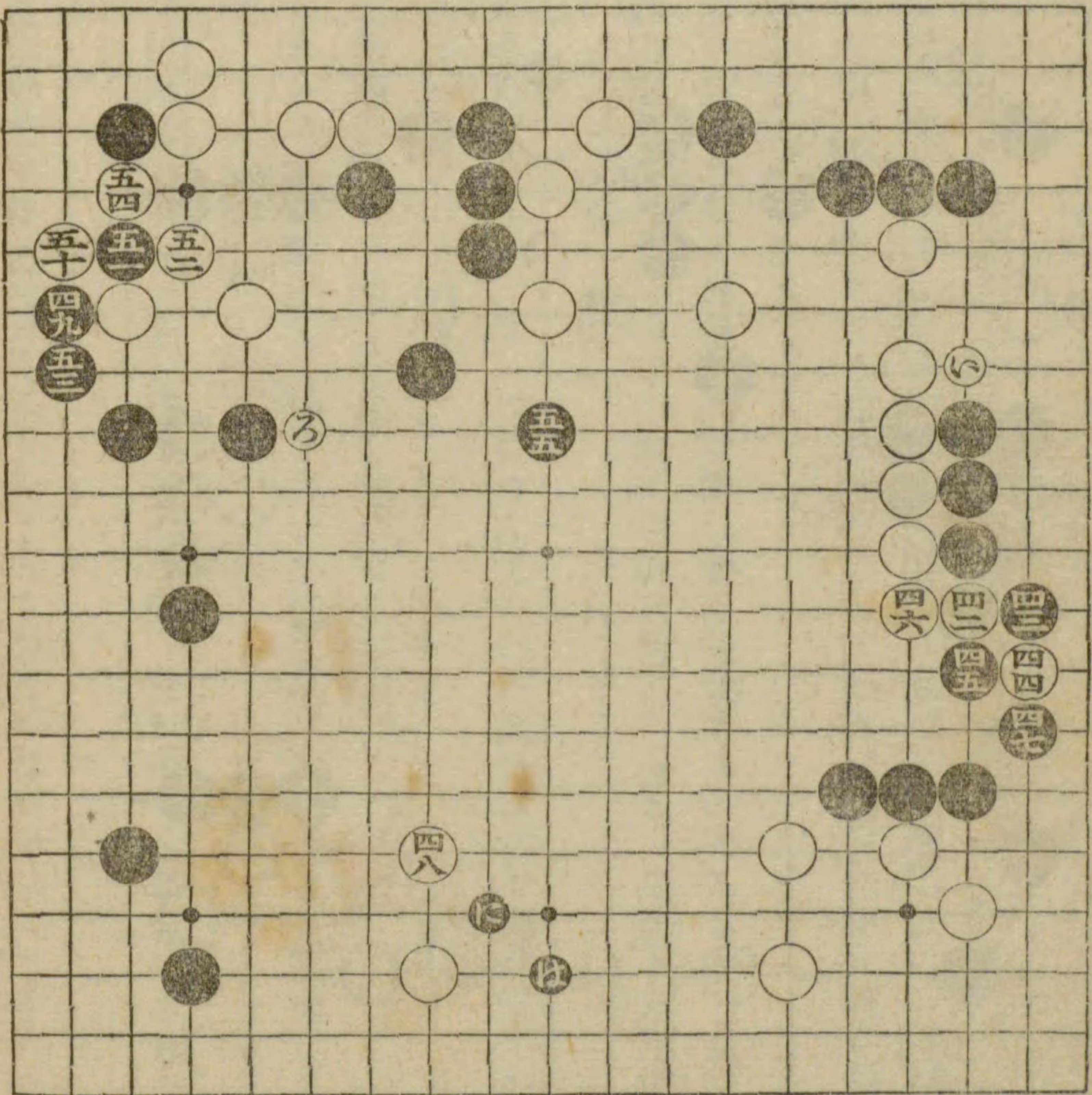
或は此の手で○と打つてもよ

い、但しまだ多少の味は隅に

残る事になる。



第五十五手止



白四十四の二段縛は中原の我石に勢力を加へると同時に先手を以て⑤の抑へを利かさうの手を造つたのである、  
 白四十八の飛びは⑥の打込⑦の消し等の黒の來攻手段を消したのである。

黒五十一の手を此く截らずに單に五十三の處へ引けば白に手拔される、後になつて五十一の點を截つて見ても白に五十四の方からアテられるからツマラヌ、  
 黒五十五は白から⑧に頂出される手を拒ぎ、兼ねて右方の白の厚壯を削つたのである。

互先 第拾五局

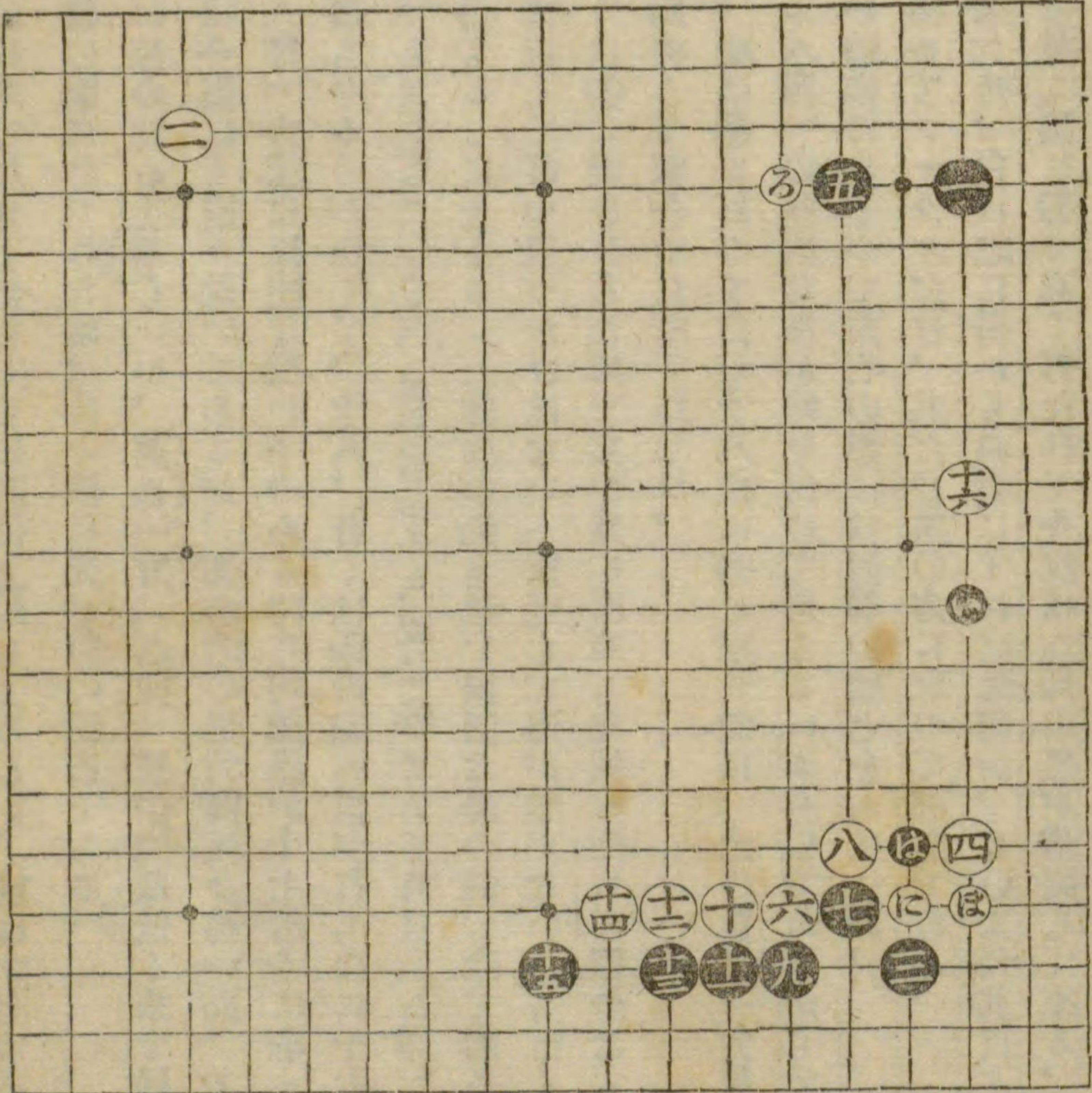
「註」 白四の策は黒に①と夾ませ②の點から掛からうといふにある詳細の理由は、  
 互先第十局の説明を参照せられたし、

黒五はつまり白四の謀を破つたのである。

黒七は③と頂げる例の應接に出る方が普通である。

「註」 黒七の手で④に頂け白⑤、黒七、白⑥と運べは例の大斜百變と稱する定石である本圖黒十三の手で一間飛するは危険であつて、必ず十三と行びた後でなければならぬ譯は、「二子第一局第五頁」に詳解してある。

第十六手迄



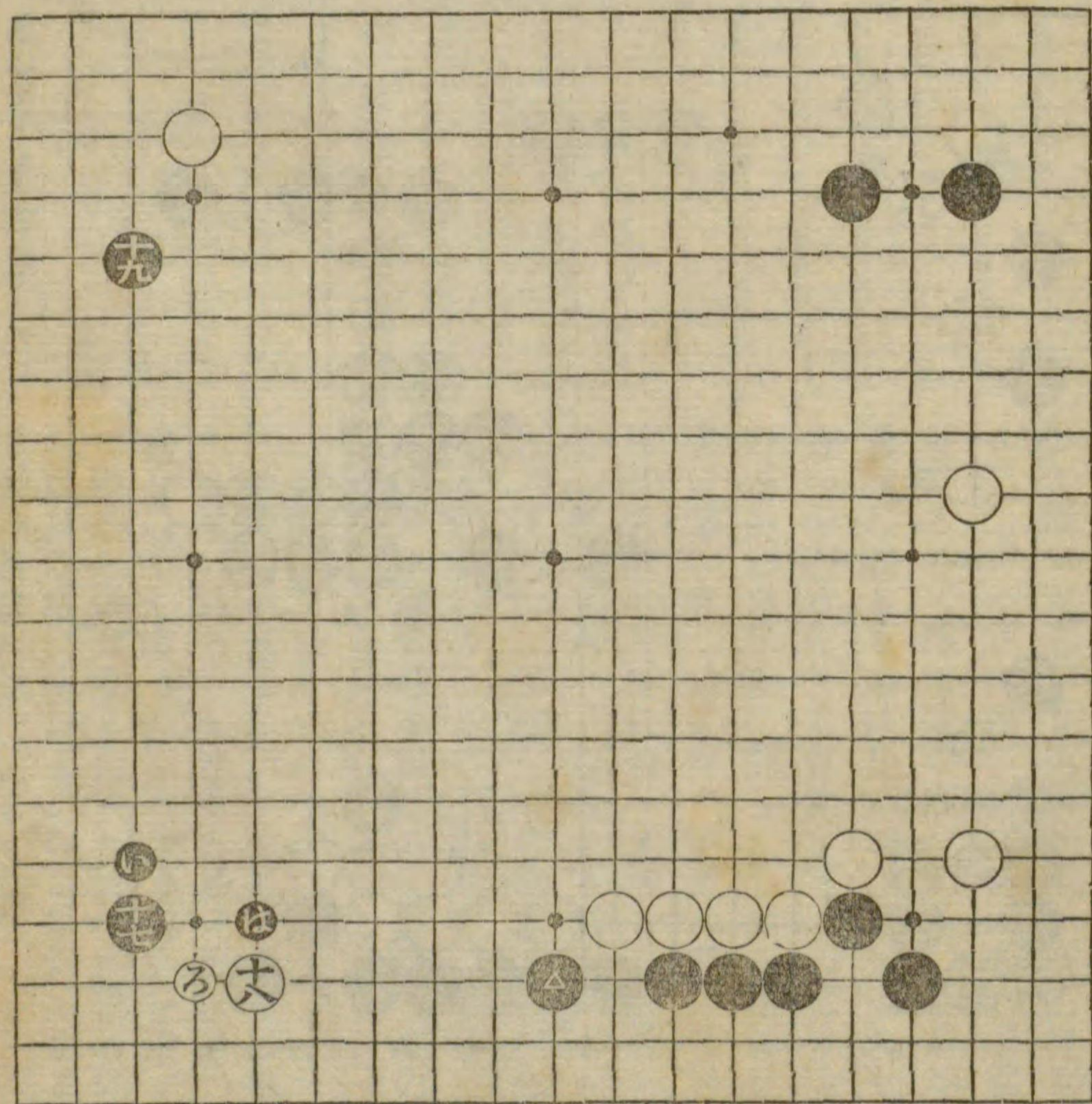


黒が十七と打つて白十八と交換したのは此の場合下側右方との關係上最もよろしい、或は十七の手を●と目外に打つてもよい、若白に○の點に打たれた時は此の隅は先づ白の獨占である。

「註」 何故黒十七、白十八の交換が黒のためよろしいか、其は一方(△印) 黒が位置低く来て居るからである、此ういふ處の意味は今迄にも屢々説いてあるが、初心者の兎角間違ひ易い點であるから特に一言を費やす、右方(△印) 方面に堅固な低い子のある時に何故黒が十七若くは●と打つて、白に十八若くは○の點に掛らせるのが良くて、十八、若くは○の點へ黒が打ち白に十七若くは●の點に打たれるのが面白くないかといふと、黒の石が十八或は○とある時は(△印) 黒と相待つて茲に僅かな地を造り得らるゝに止まる(△印) 黒の如き低い堅固な黒の鋒の來て居る處は、假令打捨て、おいても白が接近して打つ氣づかひはない「接近した處が益がないから」して見ると今此處を一方から十八若くは○と圍ひをした處で其が爲に出来る地域は極めて僅少なものである) 即ち費した子數手數に比例して割合つた話ではない、

之と反對に、本圖の通り黒が十七、或は●と打つて白が十八或は○と來た時は、此の白は一方黒に十七方面から攻られ、一方には(△印) の堅固な黒が鋒を向けて居るといふ有様であるから此の白はいくら動いても其は白自身の防備に止まつて左右の黒には何等の感じをも與へぬ、といふ譯であるから、掛つた白が極めてツマラヌだけ、其だけ黒の方に取つて利益である、然らば、黒が十七、●の何れかへ來た時、白は之に掛からぬ様にすれば如何か、といふに其はイケナイ若し其場合白が手抜きすれば忽ち黒に●と高く打たれて今度は△印の黒が活躍して來る、要するに此場合黒に十七、●等へ打たれては白は手抜きする譯に行かぬ、あまり面白くなくとも

第十九手迄



(局先互法石布)

黒●の高締即彼が將に占めやうとする地域の宏壯だけは破つておかねばならぬ、

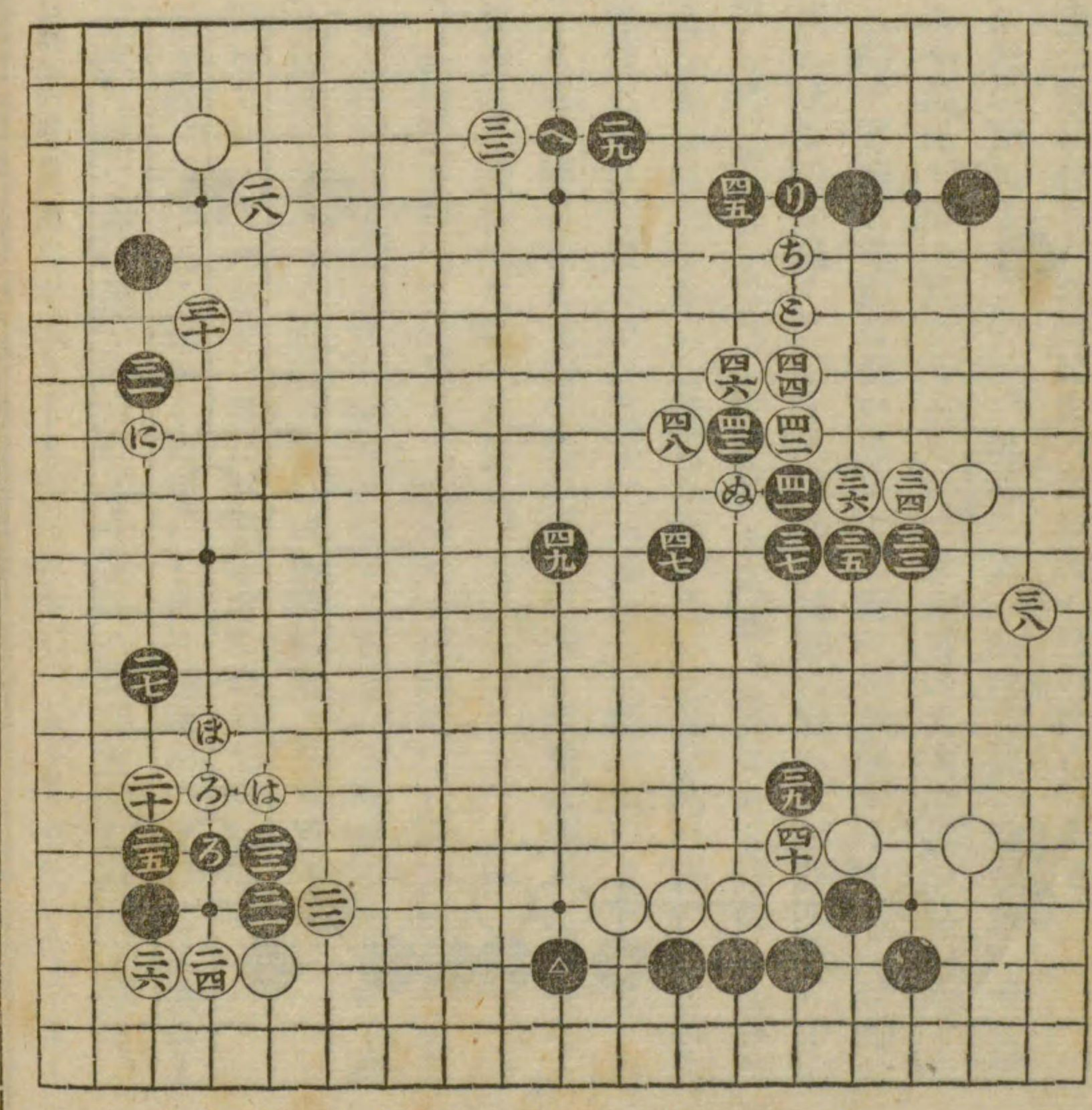
其が反面の理由として白に○と先鞭を着けられては、黒は○の點へ掛つて低く這はされるも苦しいから先づ此の隅は白の獨占と定めねばならぬ、畢竟黒は一方に△印の様な黒の出來た時は其を據として地を造らうといふ考を全然止めねばならぬ(但し宏壯な地が出来るといふはよい)、其よりは或る可く敵の石を導いて我が堅固な石の方へ壓迫し、以て他方に利を占めるといふ策を廻らさねばならぬ。



白二十の意は黒に(3)と尖ませ之を(2)、(4)と押して次で左上の黒を(1)と夾み左側に廣い地を造らうとである、黒二十一は此の白の謀を破つたのである、白二十六の手で(3)と尖めば如何かといふに黒に二十六の點へ抑へられては(△)印黒あるため、大に窮屈を感じねはならぬ、黒二十九は一步進んで(4)と星下に打つてもよい、黒四十五は四十六と押してもよい、其時白が(2)と行ければ黒は四十五に打つ、又白(3)に行びず(4)と飛べは黒は(1)と突當つておく、といふ應接である。

黒若四十七の手で四十八に行ければ、白に(4)の截を覗はれて四十七と打たれ此處愚形になるの恐がある。

「註」 黒四十三の一子が犠牲となつた、め白は四四、四六、四八、と迂回して居る即四十三の働が面白い。

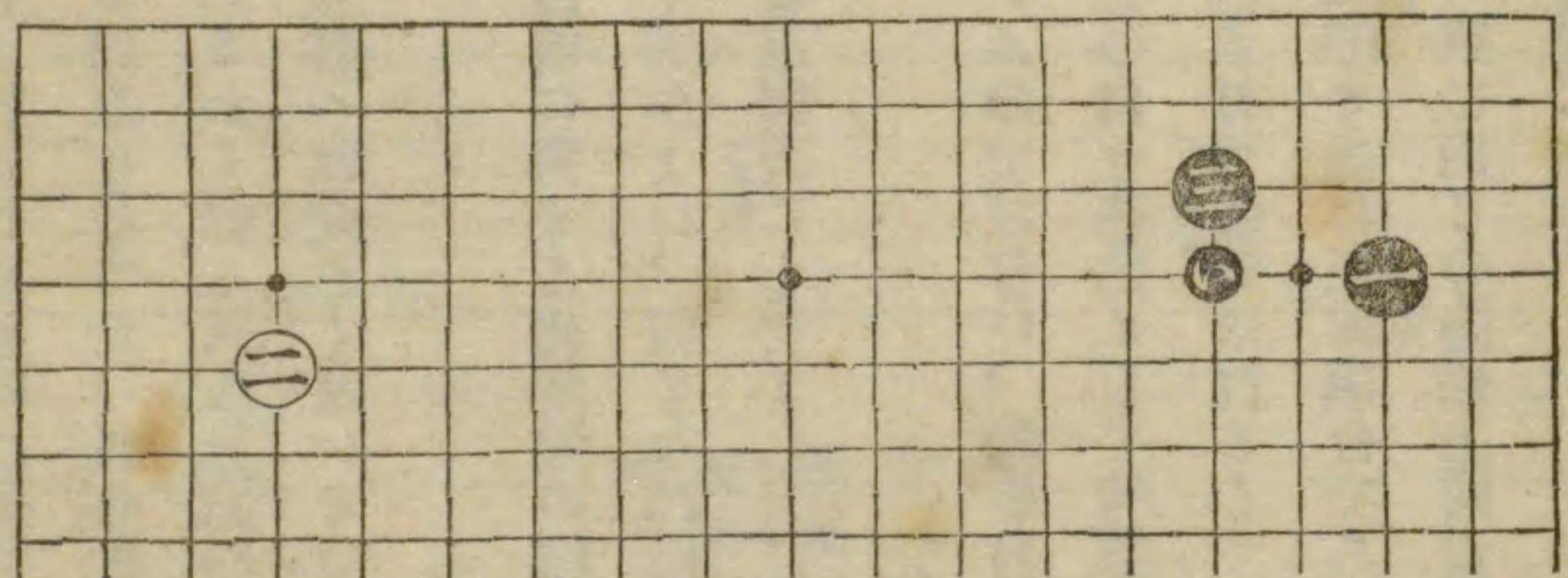


第四十九手止

互先第拾六局

白二が此く高目に打たとして、別に何等の理由も策戦もある譯ではない、強て言へば白の立場として何時も同じ様な打出し、同じ様な形では先着の敵に利を占められる患があるからとでも感じた時、多少模様を更へて打つといふ程の意に外ならんのである、

黒三を此く低く縮るのも、別に白二との関係があるためではないから(1)と一間高縮にしても差支はない。



「附言」 此の事は第一輯の凡例にも断つて置いたし、又何處かで一言した様にも思ふ、が其は此の研究録の布石講義の材料として採る譜の事である、秀哉師の考案に成るものは是は別に問題は無い、古今の石立集から採録するものには今日の進歩した棋理に照らして訂正増補を要する點が少くはない、が更に進んで材を古今名家の打棋に就て求めると無難のもののは極めて少い、過去十五局中にも一、二、打棋から採録したものもあるが其は可成瑕疵の少いものを選んだ、本局以後は往々非難す可き着手ある打棋も其の布石時期だけを其の儘収載する事とし、只其の詳批を師に求める考である、上十五局は軌範が主となつて居る、今後は軌範と龜鑑と相半する考である、雪を畫くに墨を以てする、雪ならざる部分を限るに淡墨を以てするは偶々以て白雪の印象を観者の腦に深からしむる所以である、編者の微意亦爰にある。(絶)



黒五は●に打たねばならぬ、此く五と打つた爲め六と掛(か)かれ、七と三間夾(はさま)した時、八と右下隅を締(し)められ、白に十分の利を占められる結果となつた、假令(たとひ)黒七の手で●と右下へ掛(か)るとしても忽ち白に●と打たれ攻守兩様の策に出られるから益々五の着點の非なる事が解(わか)る。

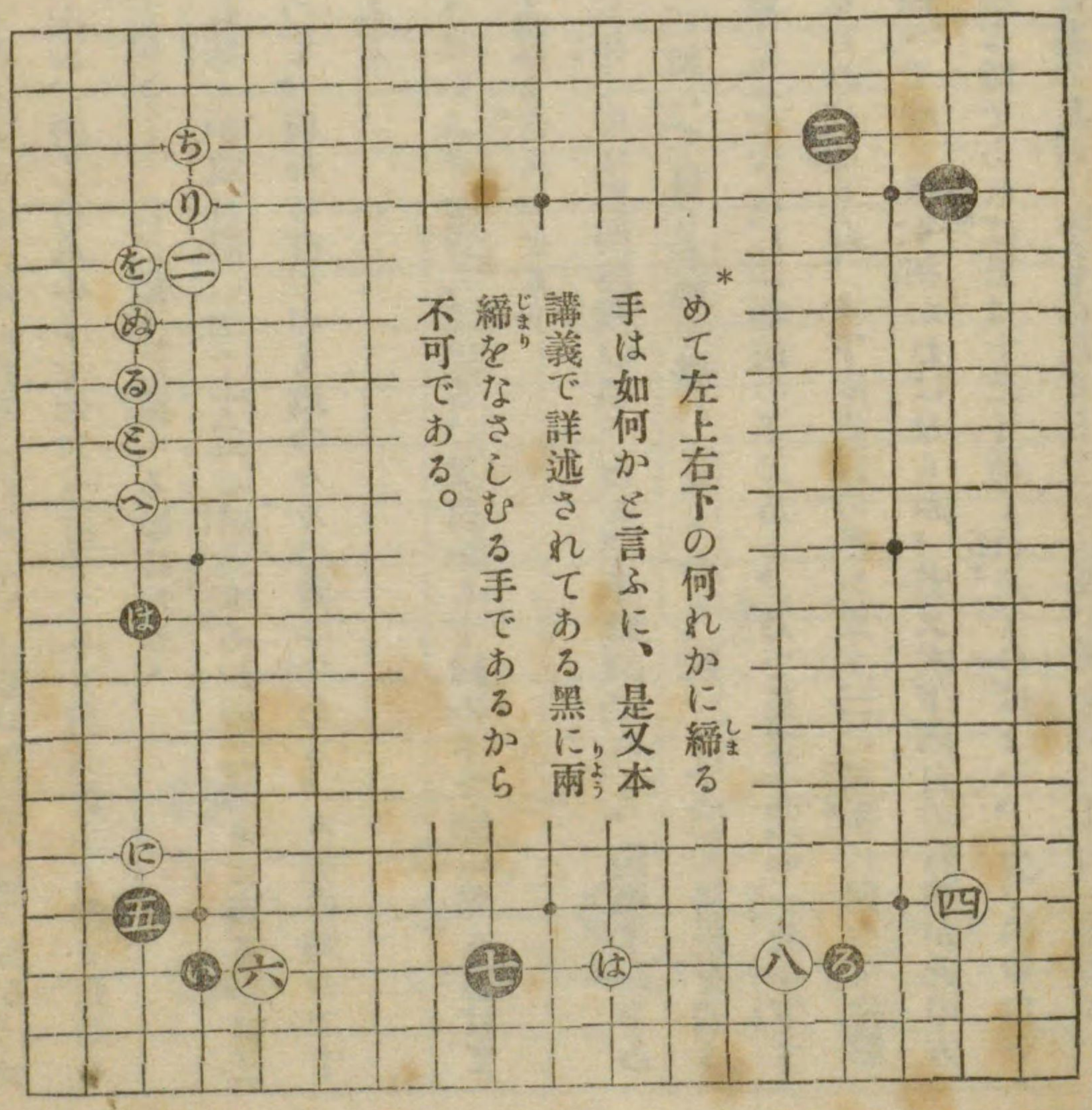
「註」 黒五が此く白四と同姿勢に打つは宜しくないといふ道理は、曾て餘論に於て詳述した通りである、尙一應參看せられよ。

黒五を●に打たねばならぬ理由は白四に對する同姿勢の關係からであるが、此の場合左上白二との關係も、やはり五を●に打つておく方がよい、何となれば、黒五の手で●と目下(もくした)に打ち、白が●と目外(めがはず)に掛(か)つて來た時、黒が之を●と三間夾(はさま)にしたとして、次で白から詰(つ)る點に不便を感じるのである、(二の一子(いちご)が一路高いために)

「註」 今直に詰(つ)る手順になるといふのではない、●の白から●の黒に向つて掛(か)をするか或は其他何等かの趣向を施した後、左上二の白を基點として●若くは●と詰(つ)ると假定せんか、左上隅の締(し)まらない浮薄な二から此く●或は●と打つ姿勢は白として極(きま)て拙劣である、若此の二が●と星下(ほした)に在れば●の大斜(おほし)が好良である、又●と星に在る場合であれば●或は●の詰(つ)が好良の點となる。即黒五を●の點に打つといふ事は、單に四との關係上同姿勢の弊を避けるばかりでなく、左上白二の効力を削(く)るといふ道理にも當る好點である。

「註」 然らば白二が若し●と目外(めがはず)に在つたならば如何かといふに●、●、方面に對する詰(つ)が益々悪い、

然らば黒五の手で●白六の手で●黒●の時白が二から●と目下へ戻(もど)つて締(し)つたならば如何かと言へば、其は極めて無意味である、何故なれば最初●と目下(もくした)に打つて居つたものと假定して、次で●と大斜(おほし)の好締(よしみ)をして兼て黒●の運動を制限し得可きを二と高目に裾(すそ)明(あき)に打つて、却つて黒●から●の點への二間拓(ひらき)を扶(たす)ける様なものである、然らば最初白が黒●に對する●の掛(か)りを止(や)す\*



\*めて左上右下の何れかに締(し)める手は如何かと言ふに、是又本講義で詳述されてある黒に兩締(し)をなさしむる手であるから不可である。



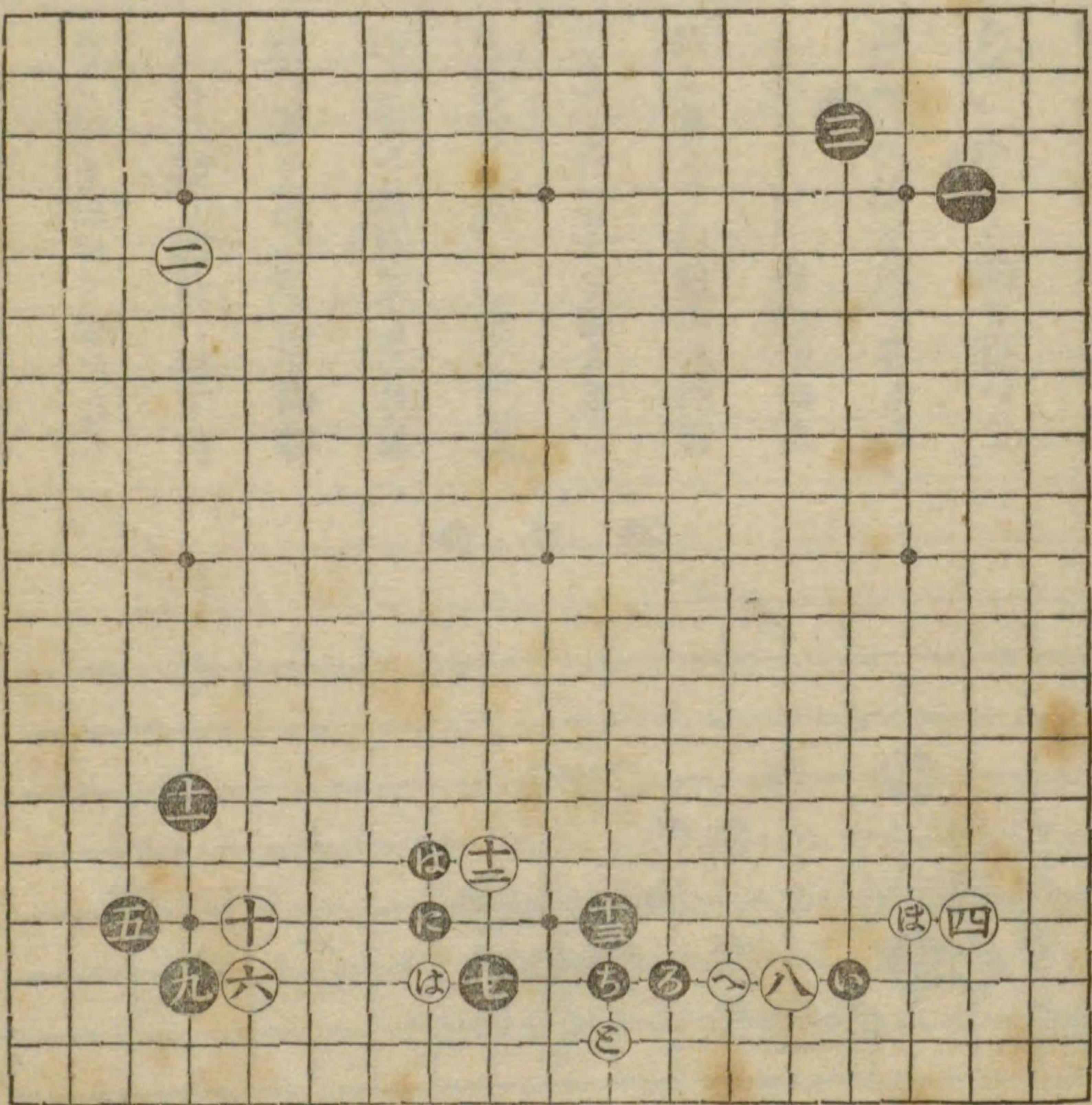
「註」白六の手で必ず此の左下隅に掛を打たねば黒に兩縮されるといふ事は既述の通である、が白八も亦決して手抜する譯には行かぬ、若し白八の手を他方へ着手すると忽ち黒から掛かられ同姿勢を犯した黒の不利は位置が轉倒して白の頭上に墜ちる事になる。

白十二に對する黒の應手は②と二間に拓くか或は圖の如く十三と斜走するかの二通りである事は已に布石講義の内に詳述した通りであつて、何れに打つのも場合々々の着手である、本圖の場合で十三と斜走したのは最も適切な應手である、

黒十三の手には機を見て③と頂げやうといふ手を含んで居る、又白から十四の手で④の點へ頂げて來たならば⑤と綽出して戦はふといふ意も含んでをる。

「註」白十二の時に黒が②と二間に拓くのは自衛防備の手である、受動的である、消極手段である、要するに右下隅からの白の侵襲に備へて自ら姿勢を整へる手である、翻つて十三の斜走を視ると是は②の二間拓と反對で發展進襲の意を含んだ積極的手である、乃で黒は十三の一着を下す前に右下隅の白の配石如何を調べなければならぬ、右下隅の白の形が黒十三の裾明に向つて進襲するのに便利の様な時は黒は之に備へて③と低く拓かねばならぬ、若又右下隅白の状態が此の方面に侵襲するに都合の宜しくない様な時であれば黒は十三と高く斜走すればよい、右下隅の白が若も③と星にでもある様な時なれば其の星の一子を基點として④の點に鋒を向け黒七に迫るとい

ふ(白のための)好點があるから黒は勢ひ②と低く備へざるを得ぬ、然し本圖を見ると白の縮は四、八の大斜であつて、今假に此の八の一子から高く打つてある十三の裾を覗ふとしても殆んど着點に苦しむのである、⑤と行るといふ様な愚は元より出來ず、②と第二線に走つても甚だツマラヌ又②の點に一間飛しても自己の姿勢を重複せしめるばかりでなく黒に③と押されては益々敵を堅固ならしめるのみである、即高く打つても決して裾を覗はれる悞のない本圖の如き場合は此く十三と斜走するに最も適して居る。



布石法互先局

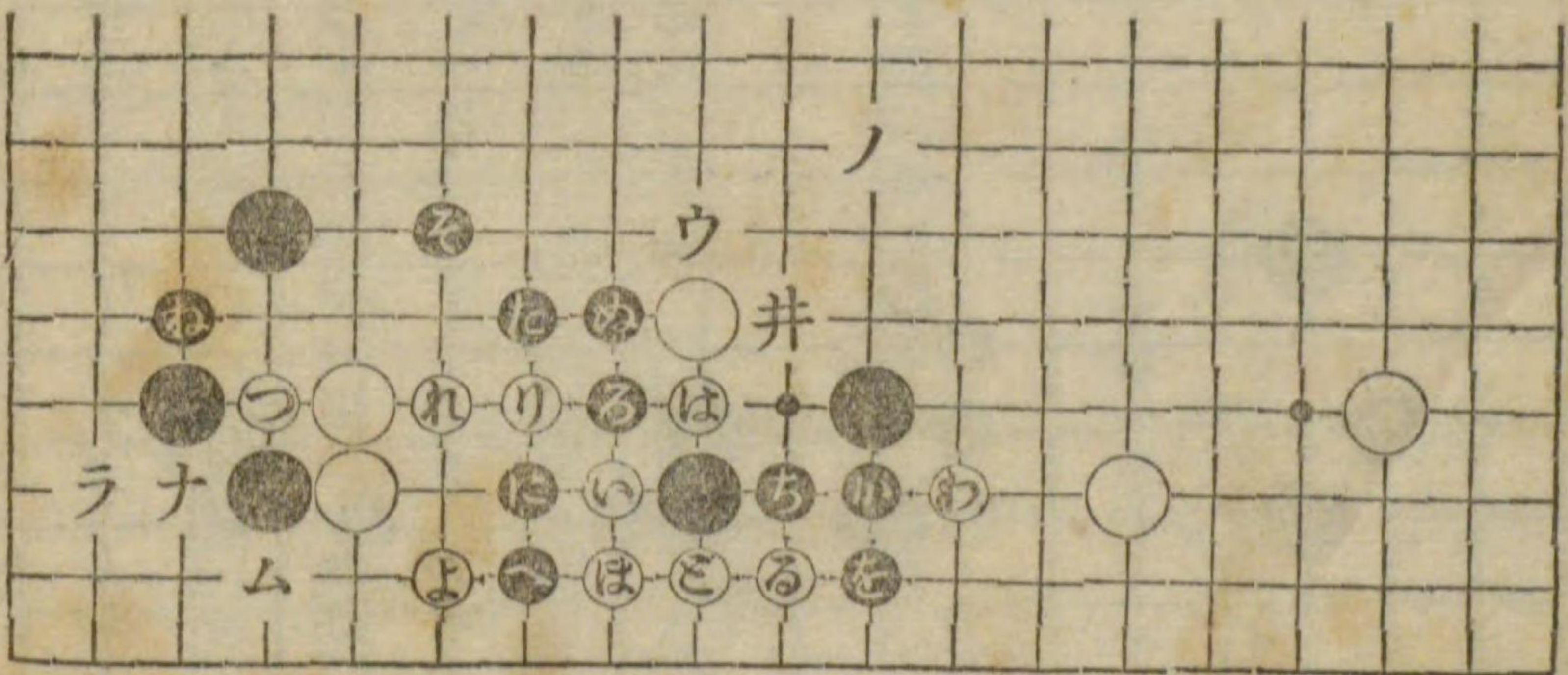


(前圖黒十三の手の残説) 説

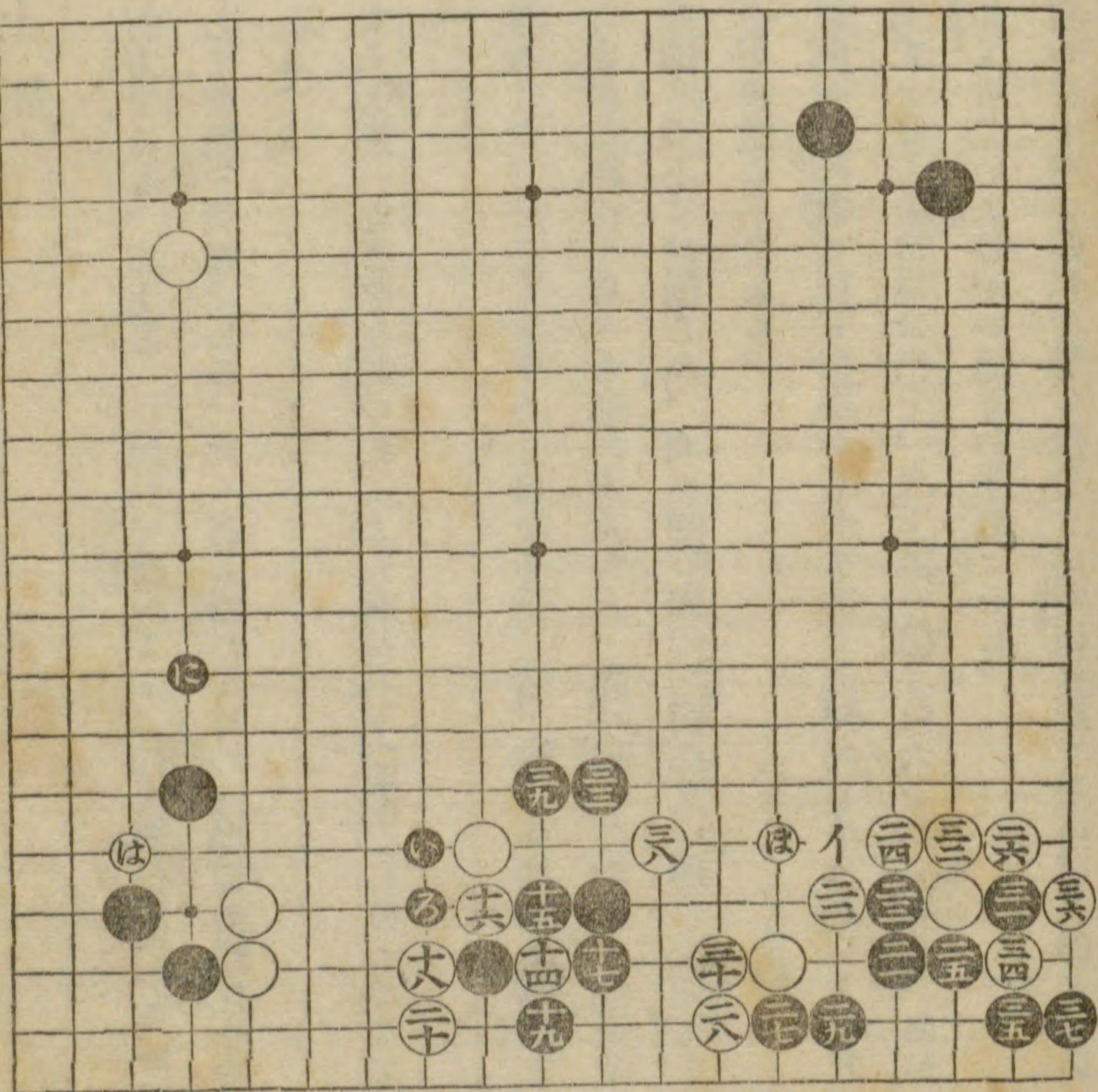
明の符號は次圖を用ふ乃で黒十三の斜走は黒が手を抜けば⑤と頂けやうといふ意であるが然し此の⑤の頂けは必しも直にといふ譯ではない、白が手抜すれば黒亦同じく手抜して居てさしつかへはない、但し白から十八の點へ頂けて來たならば黒は直に⑤と綽出して戦はねばならぬ。  
 (白が十四の手で十八と頂け、黒が⑤と綽ね出した後の手順の一通りを、下に参考圖として示す)

(参考圖) 白若し十四の手で⑤と頂けて來たならば直に⑤と綽ね、以下符號の通り運んで結局⑤⑥の二子を捨石として外部を封鎖し黒(ウ)白(井)黒(ノ)と白二子を捕る手になる此くては白の不利言ふ迄もない、白⑦の時黒は(ナ)の點を粘ぐ事もあるが、やはり⑥と引いておく方が後の味がよい。

(圖考參)



白十四は十八から頂ければ⑤に綽出される、手抜すれば⑤と頂けられる、といふ患があるから之を避け、十四と一子の捨子を投して十六、十八、二十と此の處を治り、暗に④の頂越を覗つて居るのである。  
 「註」 白二十は一見緩い様であるが一方今十四を與へた方の黒の根據を窺ひ一方④の缺點を覗うて自ら治る堅固な手である、黒が白④の頂越を防ぐ手は、例の通り⑤の飛びである。  
 黒二十一は白に一着③と備へられては乗ず可き機會がないから、早きを尙んで打込んだのである、白三十四の先手提此ういふ處も早い方がよい、白三十八は先手を以て(イ)の截を拒いだのである。



(局先互法石布)



互先第十七局

白が最初から四と縮るのは稍變つた打方である、右上黒一に向つて掛かるか、左下黒三に掛かるか、或は右下の明隅に打つかが先づ白として普通の着點である、此く自ら縮つて打つは局面の變化を少くする所以で白のために取らぬ所である、

黒五の手は⑤と高く縮つてもよし、又六の點へ左下隅を縮つてもよし或は右下(明隅)に打つて居ても敢て差支はない、

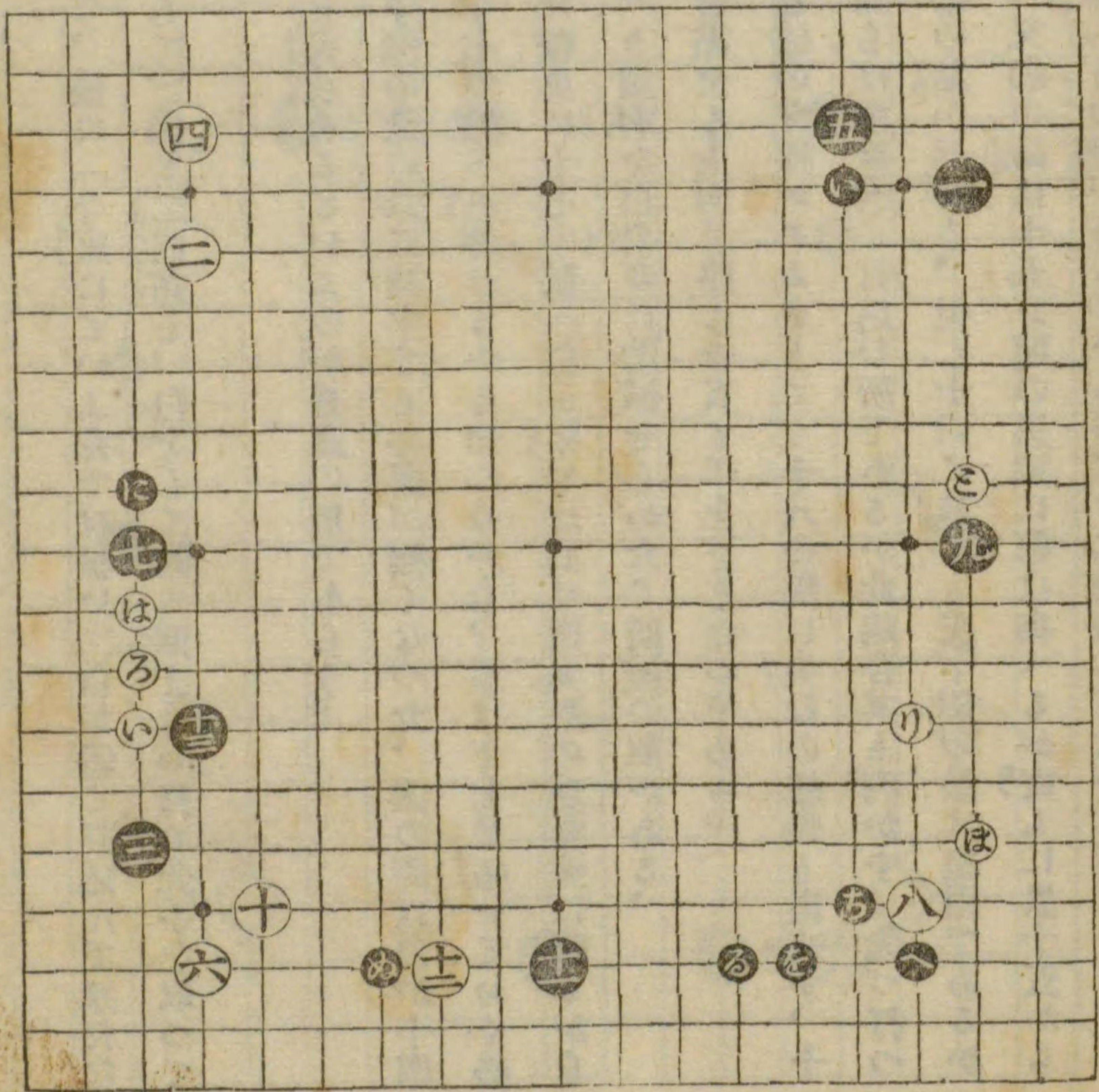
黒七の一手は手抜しても悪いといふ事はない、然し手抜すると白から⑧、⑨、⑩の何れかへ夾まれて自然に二、四、と縮つてある白に宏壯の模様を與へる患があるから、先づ拓いておくが普通である、但し拓き場所は必しも此の七の點とのみには限らぬ、或は⑫の點の三間拓又は⑬の五間拓でも苦しくない、白八は⑬と目外に打つが普通の手である。

「註」白八の手で⑬と目外に打つ趣向は黒に⑭と目下に掛からせて⑮と五間拓しやうといふに在る、次で黒が⑯と尖み白は⑰と我地域を守るの常形に出で、次で黒は⑱と白六を二間夾し、白が十と尖んで來た時黒は十一と二間拓するといふのが一通りの手順である。

黒十三は道理のない手である、今に當つて十三と防備を施す位ならば寧初に於て七の手を⑮と五間

拓にしておくが好たのである。

「註」黒三の目外を基點としての拓きは五間迄は黒の任意であるが、其を極力拓かすに四間若くは三間に控へて打つのは多くの場合、敵に打込まして打たうといふ策戦の時であつて、本圖の様に四間拓して十三と圍といふ様な事は何等か特殊の場合の事である、本圖の如きは何等十三と圍はねばならぬ理由はない。  
即黒十三の手は宜しく⑮の二間拓若くは⑯の三間拓をしておくが適應の着手である。



(局先互法石布)



(黒十三の手の残説)

黒十三を十七若くは①に拓いたとして、後に(今直にといふ意では無い)白が②と打込んで来たならば黒は(左上の締が高いのを幸として)③と二間拓し、白をして④と圍ましめ自ら先手を取つて任意の着點を撰ぶがよい、

白十四は十七の點に拓いて一子の黒を夾攻めるといふのが普通の形であらう。

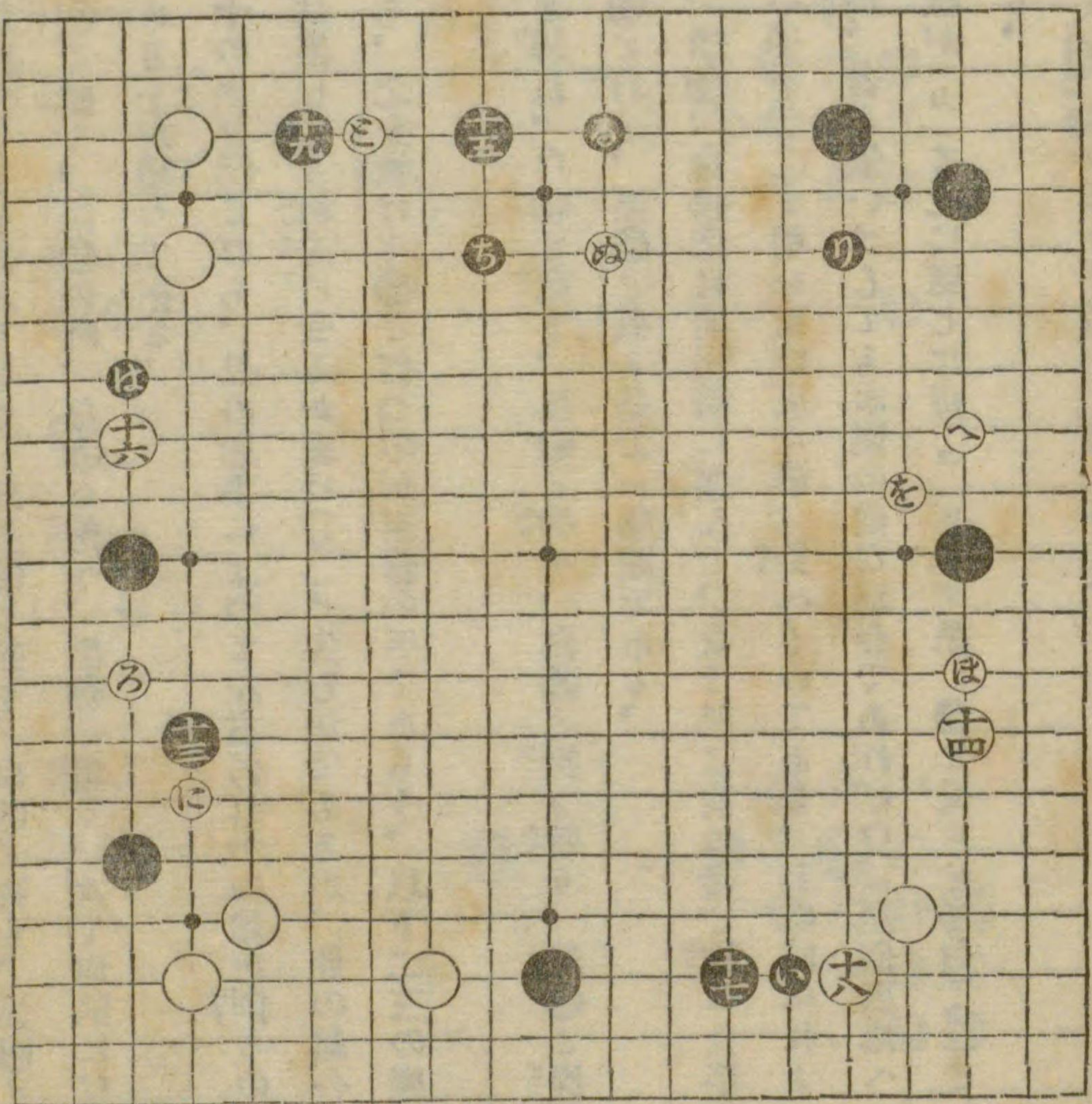
「註」白が十四と右へ拓いたから下側の黒は急に始末する必要が無くなつた、其の譯は白が十四と打つて居ない場合である。何時十七の點へ夾まれるかも知れぬから、黒は十七と拓いておく必要もあるが、此く白が十四と拓いた後更に十七の點へ白が拓けば其は兩大斜の惡姿勢に陥るから十四の拓は偶々以て十七と拓き得べき權利を白自身に消滅せしめたと同様の觀がある、乃で黒は此場合に於ける最大最好の着點たる上側星脇に十五と手を下したのである。

「註」白十六の手を十七に打てば前述の非難があるさりとて十八の點に尖むの緩慢も出來ず、十四の白が若し一路進んで⑤の邊に在らば無論⑥と打込む所であるが此場合其も利かず、先づ打つとすれば圖の如く十六の點か或は⑦の詰かである、但し十六と詰ても左下側の黒は堅固であるから此の黒に感じを與へる事は少い、又⑧の詰は十五方面の黒地に響は與へるが直ちに黒十五から⑨と單關され却つて黒地に宏壯を加へるの嫌があるといふ事だけは覺悟して置かねばならぬ、

黒が十七の二間拓に應じて白十八と隅を締り、次で黒十九と二間に詰めた手は各々の宜しきを得た手である。

黒十九の手で或は⑩と右上を一間飛しておく打方もある。

「註」此の⑩と打つて小斜走締の隅に更に一子を加へるといふ事は普通には無い形であるが本圖の如き場合に當つては一隅を堅實にして左右の大拓を掩護する手である、其の時白は如何打つ可きか、即ち⑪と詰め黒を⑫と飛ばして⑬と臨み黒に⑭と應じさせて⑮から黒地を削るといふも一策であらう。



(局先互法石布)



黒が十九の一着には左上隅の白地を蹂躪する手を含んでをる、即黒(●)と打ち、白(○)と押し、黒(●)と縛ね、白(○)と抑へ、黒(●)と粘ぎ、白(○)と曲り、黒(●)の時、白(○)と抑へ、黒(●)と盤る、次で尙隅には(イ)と夾んで黒地を殆んど消滅せしめる手が残つてをる、

黒が十九と詰めて来た時白は先づ二十の手で(ウ)と打ち、黒の應手によつて左右何れかの地を削るの策を立てるのである、白が(イ)と来れば黒は(カ)と斜走に受るか或は(ヲ)と尖むかであるが、此の場合には右方△印黒の一子が孤弱であるから、之を扶けて(ウ)と打つのが至當の手であらう、以下二三の應接を示さう、

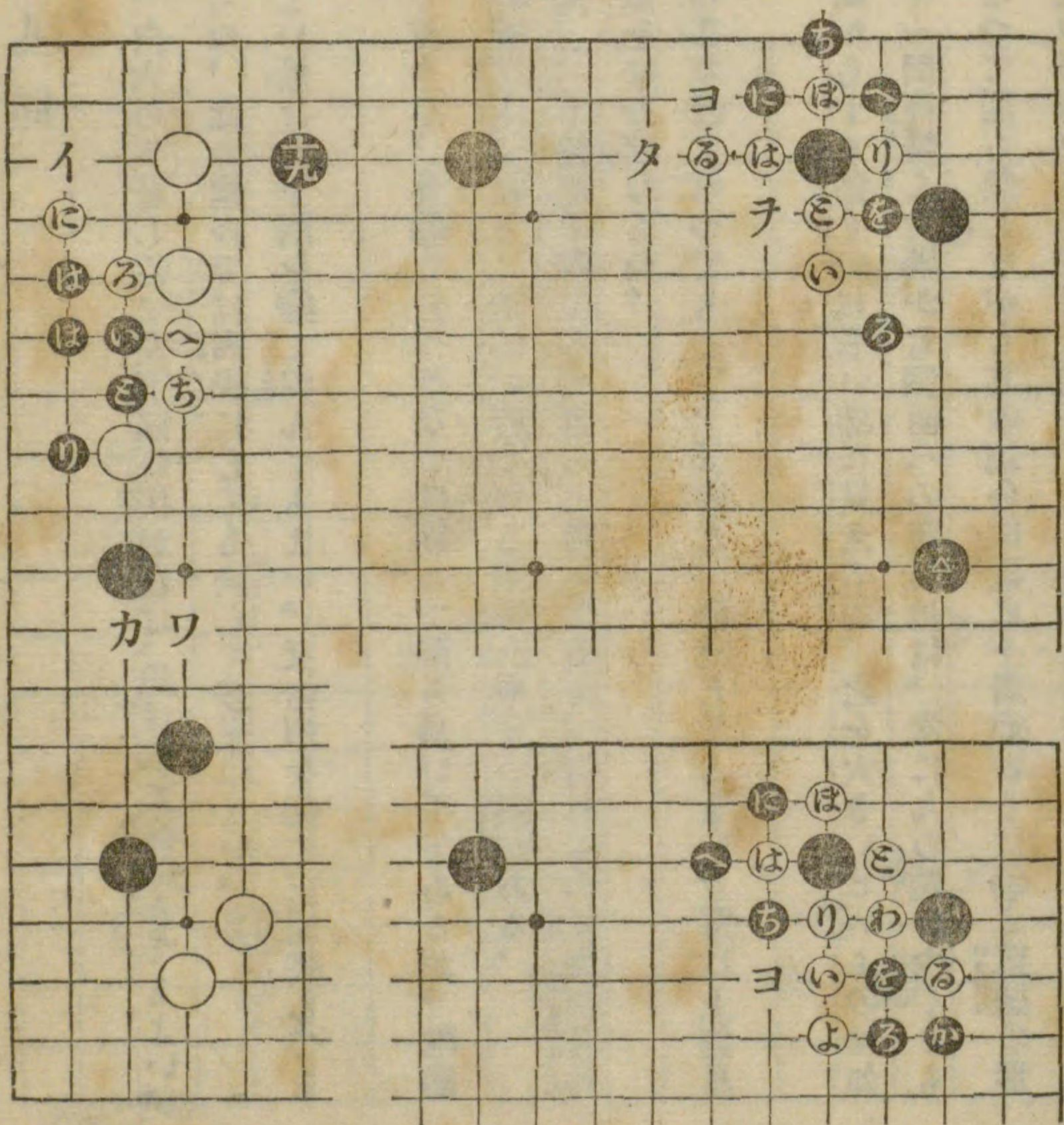
○白(○)黒(●)の次白は(イ)と頂け、黒(●)と縛ね、白(○)と截り、黒(●)と抑へ、白(○)と衝き當り、黒(●)と提り、白(○)とアテ黒(●)の點を粘ぎ、白(○)と行び、黒(●)と截る是で一手順である、

次の打方は同じく白(○)、黒(●)、白(○)、黒(●)、白(○)迄は前同様に運んで、次で黒は前の(イ)と抑へた手を變更して(ウ)の點に縛返し白が(イ)の一子を(ヲ)と引いた時黒は(カ)と抑へるのである、其の時都合よく征の當りがあれば白の僥倖であるが、若し無いとしても本圖の場合であれば白は左側黒地へ向つて(ツ)と一着の征當りを打ち黒が(カ)と之に應じた時(ヨ)とアテ黒に(イ)と提らせて白(タ)と打つて黒(ウ)の一子を征に捕るのである、

此の手順に運ばうとしても、如何にも征當の都合が悪くて困る時は、

白は(別圖)の通り黒(●)と縛ねた時逆に右から(イ)とアテ、黒に(ウ)と提らせて(イ)とキメツケ、黒に(ウ)の點を粘がせて(ウ)と頂越し、黒(●)、白(○)、黒(●)となつた時、白は(イ)と右へ押すか、或は(ヨ)と左へ押すかは解らぬ、畢竟其は白の策戦と場合によつて定めるの外はない、

又此の手順中白が(ウ)と頂越した時場合によつては黒は(ウ)の點を截つて白を(イ)の點に粘がし(イ)の一子を捨る趣向もあるが本局の場合では右側星下の黒が孤弱であるから(イ)と打つて(ウ)の一子を生擒しておくが安心である。



●の手③の點を粘ぐ

(参考別圖)



互先第十八局

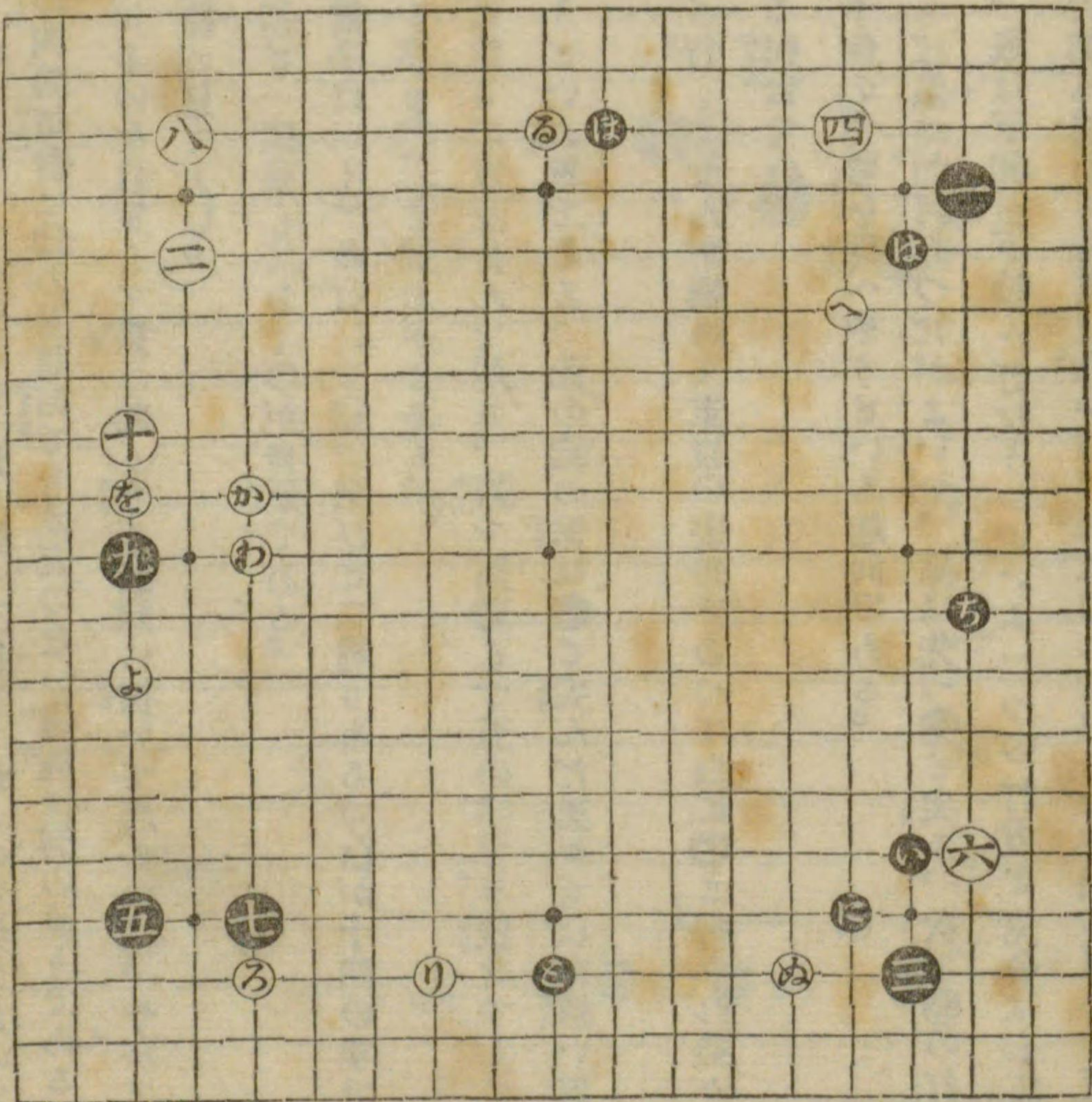
黒五は右下隅を⑤と縮つてもよい、白六の手若し⑥と左下隅に掛ければ、黒は⑦と高縮してもよい、又白の掛り方は必しも目外には限らぬ、此の場合では高掛にしても決して差支はない、黒九の手は右上隅を⑧と尖んでもよい或は右下隅を⑨と尖んでもよい、又白四を④と三間夾しても悪い手ではない。

「註」 黒九の點、又此の手で⑩と打つ手、及⑪と打つ手などは極めて解り易い手であるが、唯⑫の三間夾に至つては白に⑬と二間飛でもされると稍棋が廣くなる即紛れやすい悞がある、次に此の九の手で打つ可らざる點は、下側星⑭及右側⑮の三間夾である、何れも六及四の目外から壓迫される形であるから注意をせねばならぬ。

白十の着手は大場である、然し此の手で⑯と打つてもよい、又⑰と一問夾してもよい、單に上側星下に⑱と拓くのも良い手である。

「註」 八、二と高く縮つて居る處から十と拓くのは窄い様に見えるが、之を大きいといふのは如何なる理由であらうか、元來此く一問高縮した隅から側面への發展地は、常に九の點か少くとも⑲の點迄は擴張し得らるゝ事になつて居る然しながら其の場合は更に一着⑳若くは㉑と單關の形で備を立てなければならぬ、若此の防備を怠れば何時敵に打込まれて折角劃し得た大地域をムザ

ムザ敵の蹂躪に委さねばならぬかも知れぬ（八、二、九、若くは八、二、⑳と拓いた白の大地へ黒が打込まぬとすれば、其は黒の都合で打込まぬ迄であつて、局面全體の利害得失を別問題として是非共打込まうとならば何時でも打込んで地を荒さうと活をこやうと自由である）然るに今此の十と打つた姿勢は一見窄い様であるが其代り是で形が治つて居る、敵に打込まれる隙はないのみならず今度は進んで（自ら顧慮する所がないから）㉒と黒地へ打込む理が出来てきた。



（局先互法石布）



黒十一の尖は右下隅を●と尖んでもよい、白十二の拓は黒に此の點へ三間夾されるのを妨げたのであるが、△印白が目外に在るから④の四間拓若は④の五間拓でも差支のない道理は例の通りである。

「註」 廣く拓かうと思へば廣く拓けるのを自重して態と此く窄く三間に拓いて居るのは、やがて⑤方面から黒に迫まらうといふ伏線と見てよい。

白十四の手は黒十三の掛けに應じて⑥と一間飛しておくのが普通である。

「註」 黒十三の掛けに對する白の應手は(イ)の行びと⑥の飛びと二通りある、白が十四の手で(イ)と行びた時、黒は(ロ)と行びる手と(ハ)と飛ぶ手とある。

白が十四と打つた手はやがて⑥と黒に迫るの意を含んで居る、乃で黒若し十五の手で手拔せずして●と尖んだならば白は⑧と高く打たうといふ考である、此の⑧の裾は●と尖んだ黒からは來難い處である。

「註」 若し黒が⑧の裾に向つて●と行くとせんか極めて重複の姿勢であつて白に⑨と押され益々不利を犯さねばならぬから黒が來る悞はない。

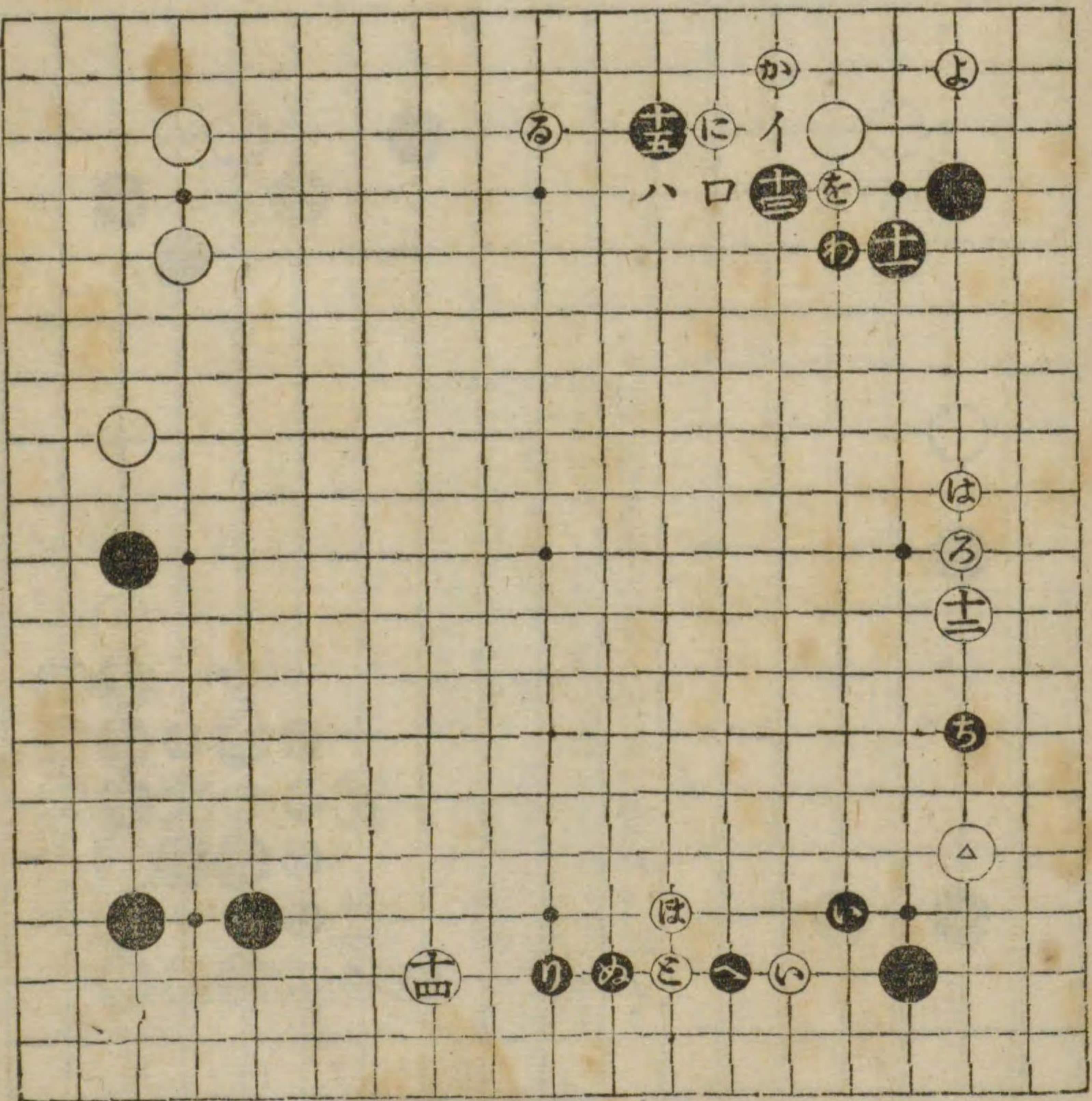
乃で白の手番になつた時⑩と打つて下側の姿勢を調へやうといふ趣向である。

「註」 白十四の手で⑥と飛んだならば黒は如何打つたがよいか、黒は先づ●と尖み、次で⑥の打込を覗つて④の點から詰めやうか、或は下側星下●に打たうかといふ二つの打方を見合はして居るがよい、●の尖を打たずに④の點へ追つても其は利かぬ、何故なれば白に右下隅へ何等か策

を弄される餘地があつて●の打込が利かなくなるの悞があるからである。

黒十五の點は大場である、若し此の手で下側に打つとすれば十四に對して②と二間の詰をする位のものである。

「註」 黒十五の手で(イ)の處へ押へ堅く白の活動を制しておくのもよい、すると白は星下に③と打つて、次に⑥と出黒に⑦と抑へさせ⑧と綽ね活やうといふ理が出来る、尤も此十五と緩んで居るため白は何時でも⑤と隅へ走つて活る手がある。



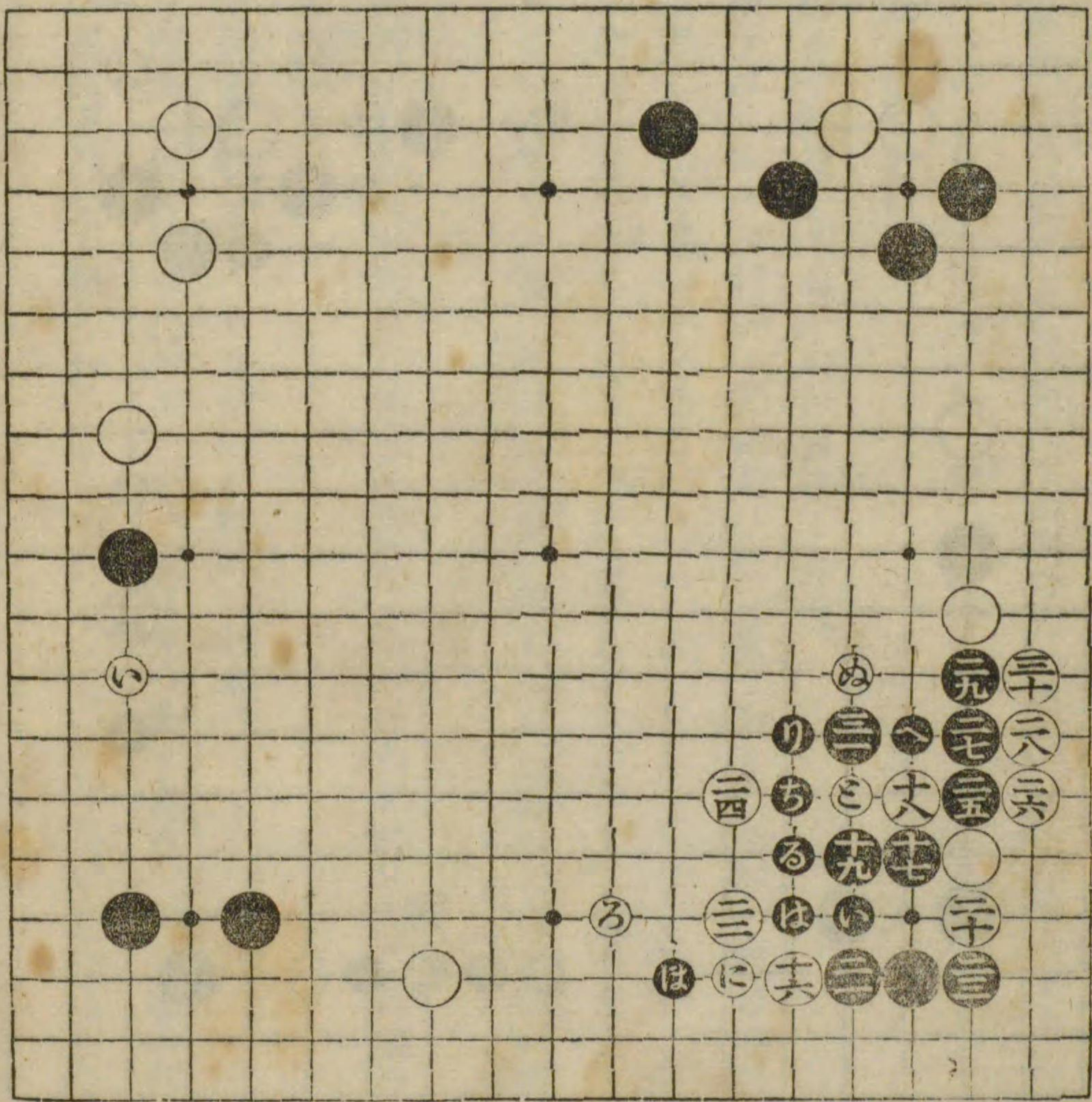
(局先互法石布)



黒十七の手は⑤と尖むが普通である、其時白は⑥の點へ押すか⑦と圍うかである⑧と圍うた時黒若し⑨と押したならば⑩と引くがよい、然るに今茲では三間拓の白であるから之を凝らす意で十七と頂けたのである。

白若し二十二の手で二十三の點に抑へると黒に⑪と夾まれて此の一帶の地はダメとなる、黒に三十一と門された時白は⑫と左側へ打込む手順である。

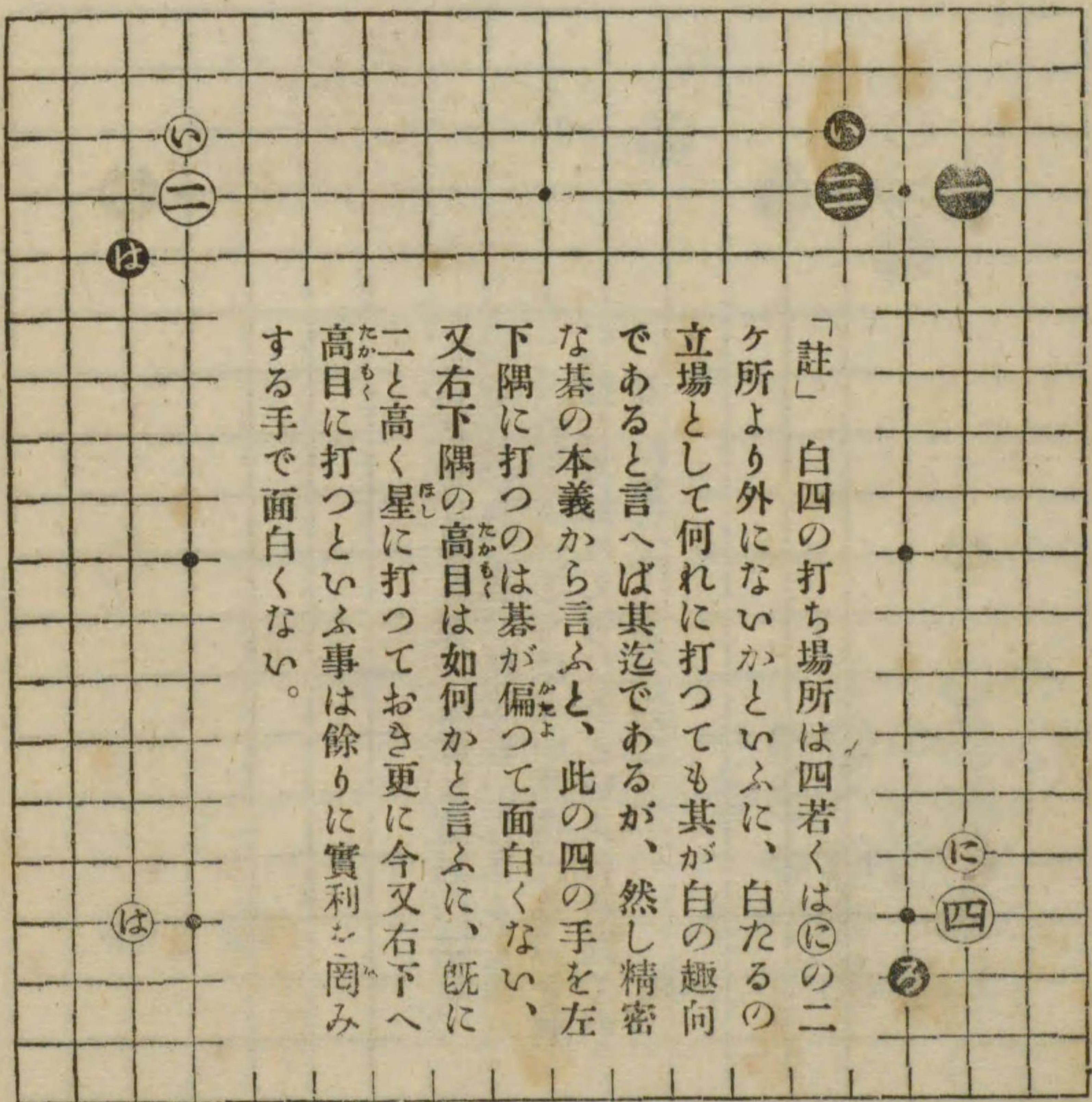
「註」 黒が二十五と截つた時、白が二十七から抑へると、黒二十六へ下り、白二十八へ押し黒⑬と截り、白⑭と出、黒⑮、白卅一、黒⑯、白⑰、と白を押まはして⑱と粘ぐ手順になる。





黒三は●と小斜走縮にしてもよし、或は右下隅若くは左下隅に打つても差支はない。

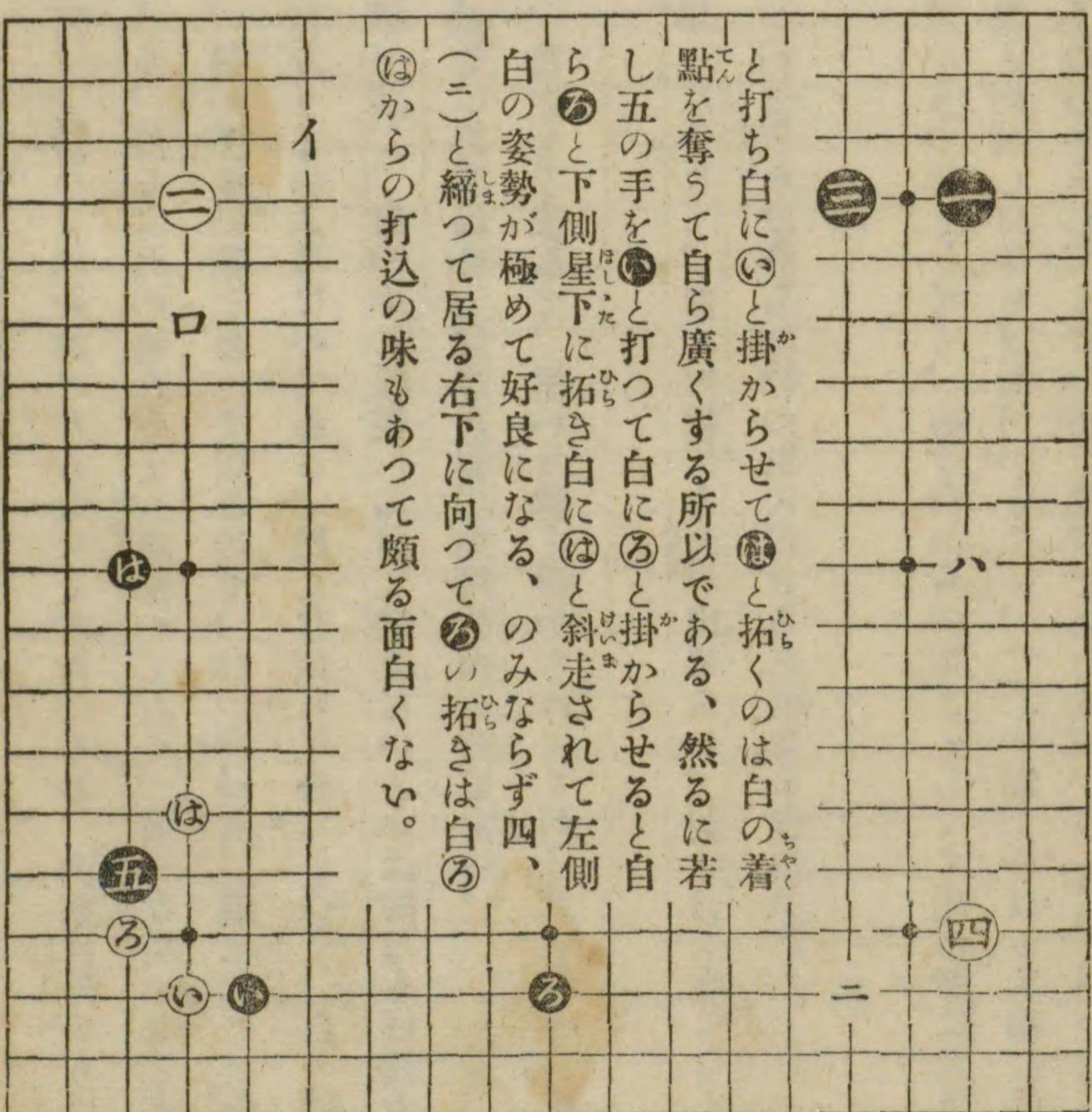
「註」黒二の手を右下へ●と打ち、次に白が左下に○と打つたものとして、サテ黒は何れに打つ可きかといふと、若し白二の一子が○の小目に在る場合ならば之に對して●と掛つたとて敢て悪い事もないが、本圖の様に白が星にある場合は、「掛り」も打ちニクイから、先づ一の隅を三、若くは●と縮る可きであらう。白四は○と目外に打つもよい。



「註」白四の打ち場所は四若くは○の二ヶ所より外にないかといふに、白たるの立場として何れに打つても其が白の趣向であると言へば其迄であるが、然し精密な碁の本義から言ふと、此の四の手を左下隅に打つのは碁が偏つて面白くない、又右下隅の高目は如何かと言ふに、既に二と高く星に打つておき更に今又右下へ高目に打つといふ事は餘りに實利を罔みする手で面白くない。

△問、黒五の手を●と右の目外に打つのと、此く左の目外に打つとの得失如何。

○答、此の二着點の得失の差を比較するには、先づ此の形に於いて、黒が右上の關係からして、(イ)と白二に掛ければ、白は何時でも(ロ)と一間するもの、又黒が(ハ)と右側星下に拓けば、白は(ニ)と右下を縮るもの、と豫想しておいて考へねばならぬ(必らずといふ意に非ず)乃で黒(イ)白(ロ)黒(ハ)白(ニ)の交換が已に行はれて居るものとして五、●の差點を論じると解り易からうと思ふ。  
乃ち黒(イ)白(ロ)の後左側星下●の點は白の發展を策す可き大場である、そこで黒は五



と打ち白に○と掛からせて●と拓くのは白の着點を奪うて自ら廣くする所以である、然るに若し五の手を●と打つて白に○と掛からせると自ら●と下側星下に拓き白に○と斜走されて左側の姿勢が極めて好良になる、のみならず四、(ニ)と縮つて居る右下に向つて●の拓きは白○からの打込の味もあつて頗る面白くない。



黒七は●と廣く打つのはよろしくない、○と窄く打つ方が却つて良い。

「註」 此ういふ處が棋の六ヶしい所で、随つて棋の津々たる趣味も亦茲にある、由來目外からは當然●の廣濶な拓きが出来る所である、然るに此の場合七と一路控へて打つ、若くは更に●と窄く打つ方なら差支へぬといふのは、黒が多少の策を含んで居るので、白が○の尖、或は○の斜走に來ても之に應ぜず手抜して他に打たうといふ考なのである、然しながら場合によつて、白の○若くは○に應じて●若くは●と防備を施し、白の手に服従して居て差支ないといふ時ならば極力廣く●と拓いても悪い事はない、是等は畢竟場合と策戦計劃の如何に由るのである。

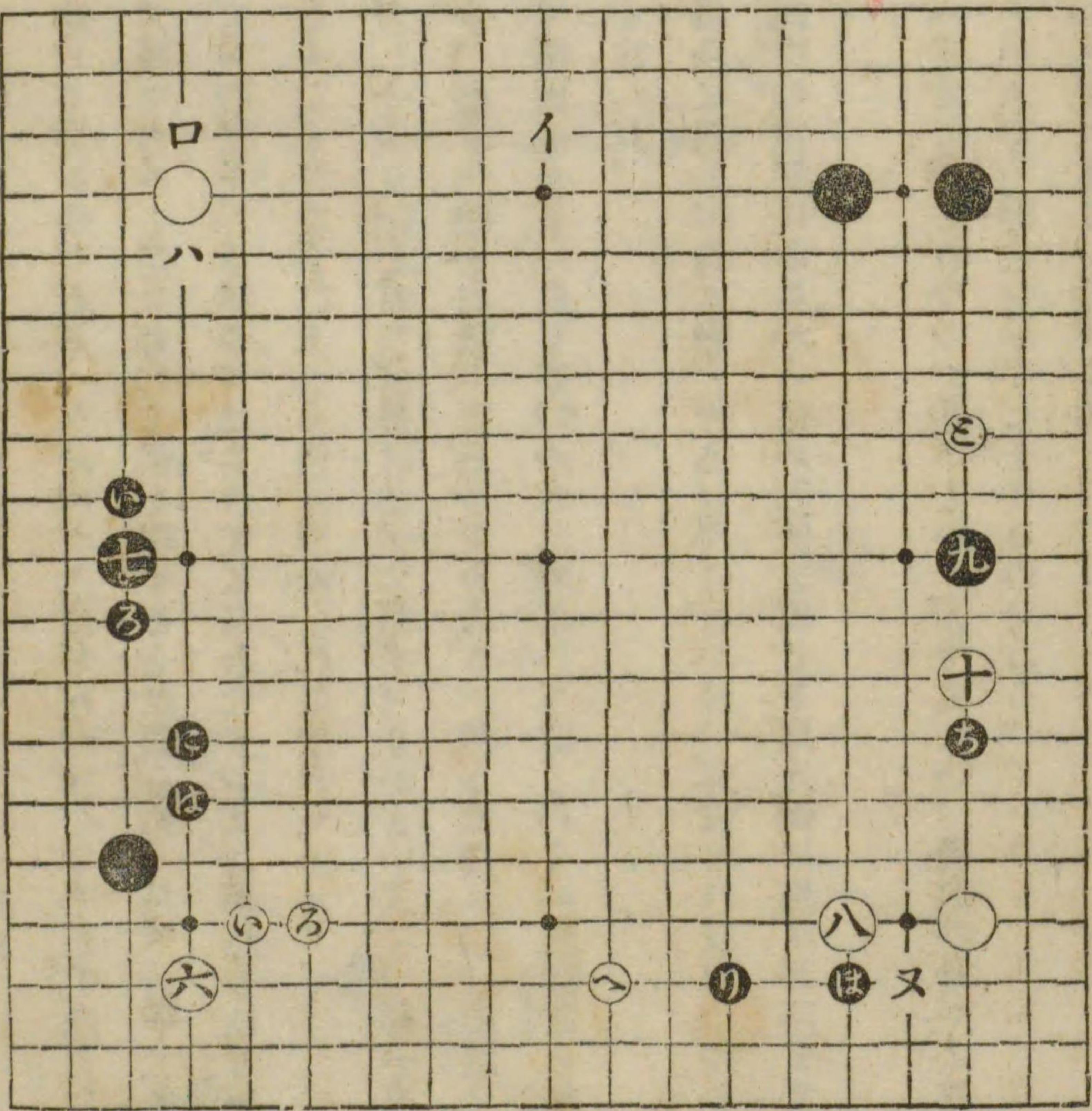
白八は此の場合に於ける大場である、若之を手抜して、黒から●と掛かれても白は之を○と夾む事が出来ぬからである。

「註」 白八を他に打ち、黒が●と掛つたとして、白は何故○と夾が出来ぬか、其は言ふ迄もなく黒五の威力を蒙るからで、若し白が○と夾めば直ちに○の點に掛けられ低地に壓迫される。黒九も亦大場である。

「註」 黒九の大場たる所以は右上黒からの拓としても、右下白からの拓きとしても此の所は天王山である、然らば之を上側(イ)の點と比較したならば如何かとふに、(イ)の點もやはり大場に違ひはない、右上の黒からしても左上の白からしても好い拓き場所ではあるが、左上の白が(ロ)

(ハ)の締でないだけに(イ)の拓きは右下の高締白からする九の點の拓きに比して少しく緊急でない、即ち彼の最も要點とする拓きを妨げて我が完全の拓きを行ふ黒九の點は現下に於ける最大一の要着といはねばならぬ。

白十は右下の我地を手厚くして●の打込を覗つた好着點である若し是を手抜すると黒から●と二間に詰められ、次で●と下側から迫られる手を誘致し、(ヌ)と侵される勢になるから、十は最も大切な手である。



(局先互法石布)



白十二は先づ一着黒の模様を消しておいて、然る後十四と大場の占領に着手したのである。

「註」此の十二と十四とは暗に連絡して居る趣がある、又此の十二は早ければ黒も十三と應じない譯に行かぬが、局勢が更に進んだ後であると黒は必しも低く應ずるとは限らぬ、乃で白十二は一旦此く低く應ぜしめた以上は後に至つて上から圍つて捕られても場合によつては惜しくはないといふ覺悟を要するのである、若し十三と打たずに上から包んで捕られてはタマラヌ。

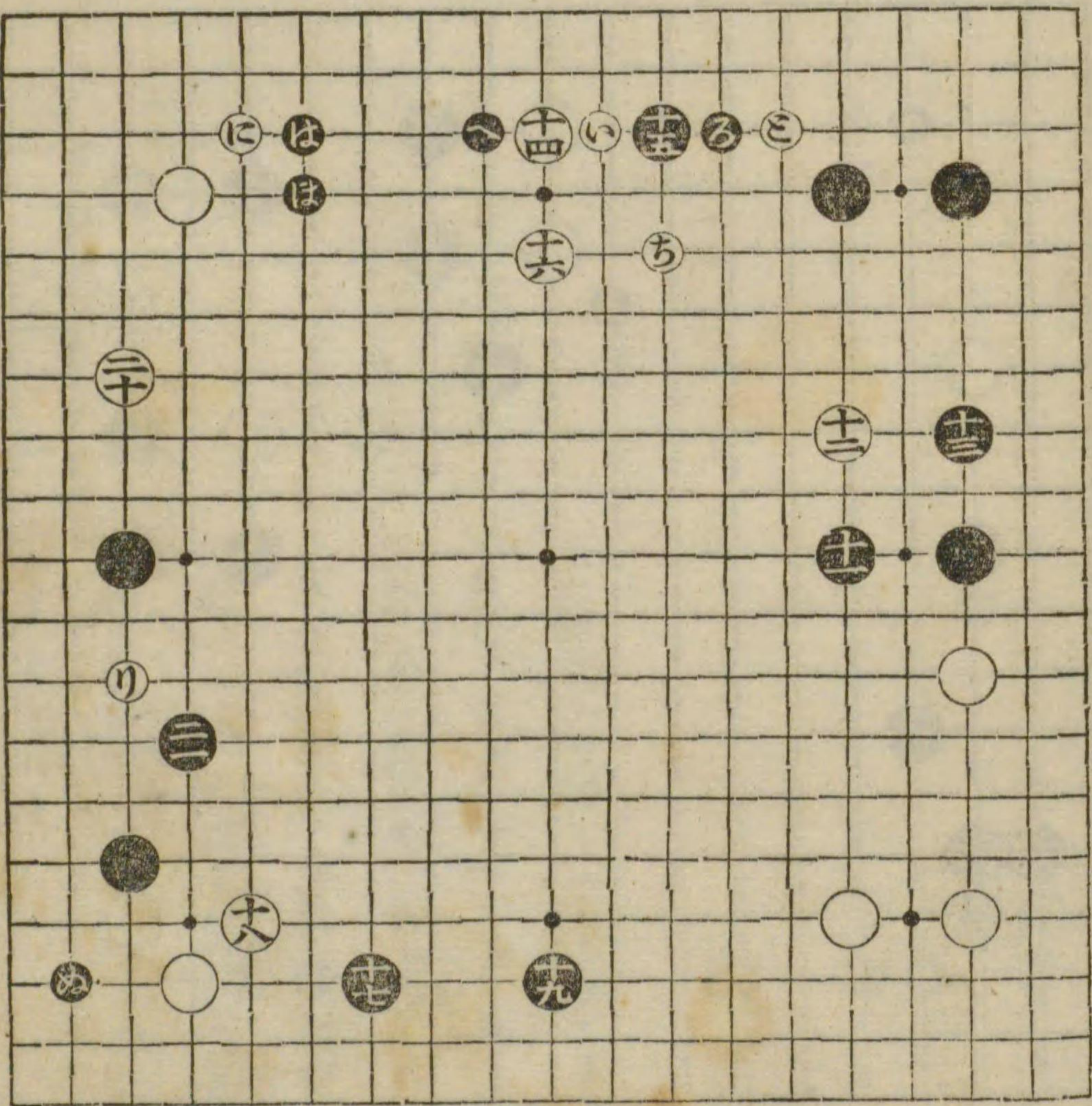
白十四は或は㊦と打つてもよい、白若し十四を㊦と打たば黒は如何に應ず可きかといふに、㊦と應じるは如何にも重復の姿勢であるから、必ずや㊦と白地へ打込むであらう、然らば白に㊦と尖頂けられ㊦と立つても後に㊦と二間に拓く餘地がある、白も亦㊦から二間拓して㊦と行くか或は態と窄く㊦の點に一間する様な手がないとも言へぬ。

「註」此く白が十四と打つて居る場合は黒も容易に㊦と打込む譯に行かぬ、何故なれば白に㊦と尖頂けられて恰ど十四の一子が三間夾の位置にあるから白が利便を感じる反比例に黒は苦痛を蒙らねばならぬからである。

但し茲に言ふ白十四の手を一段右へ寄せて㊦と打つのが悪いといふ譯ではない、善惡の論では無くして、若し此く打てば此うなるといふ形の變化を示すに止まるのである。  
黒十五は單に此の隅を手厚くする上から見てもよい手である。

「註」十五と一勢力が加はると今度は㊦の打込も酷しくなつて来る、又此の十五の一着は左上白地への打込を覗ふと同時に暗に十二の白を隔てる意味をも含んでをる。

白十六は左上の我地域を守ると同時に遙に十二の一子に聲援を與へ且つ㊦と冠して黒地に臨むの勢をも示してをる、白二十は我地域を宏壯にすると同時に㊦の打込を覗つて居る、黒二十一は茲に防備を施しておいて次に白の根據を㊦と顛さうといふ意を含んで居る。



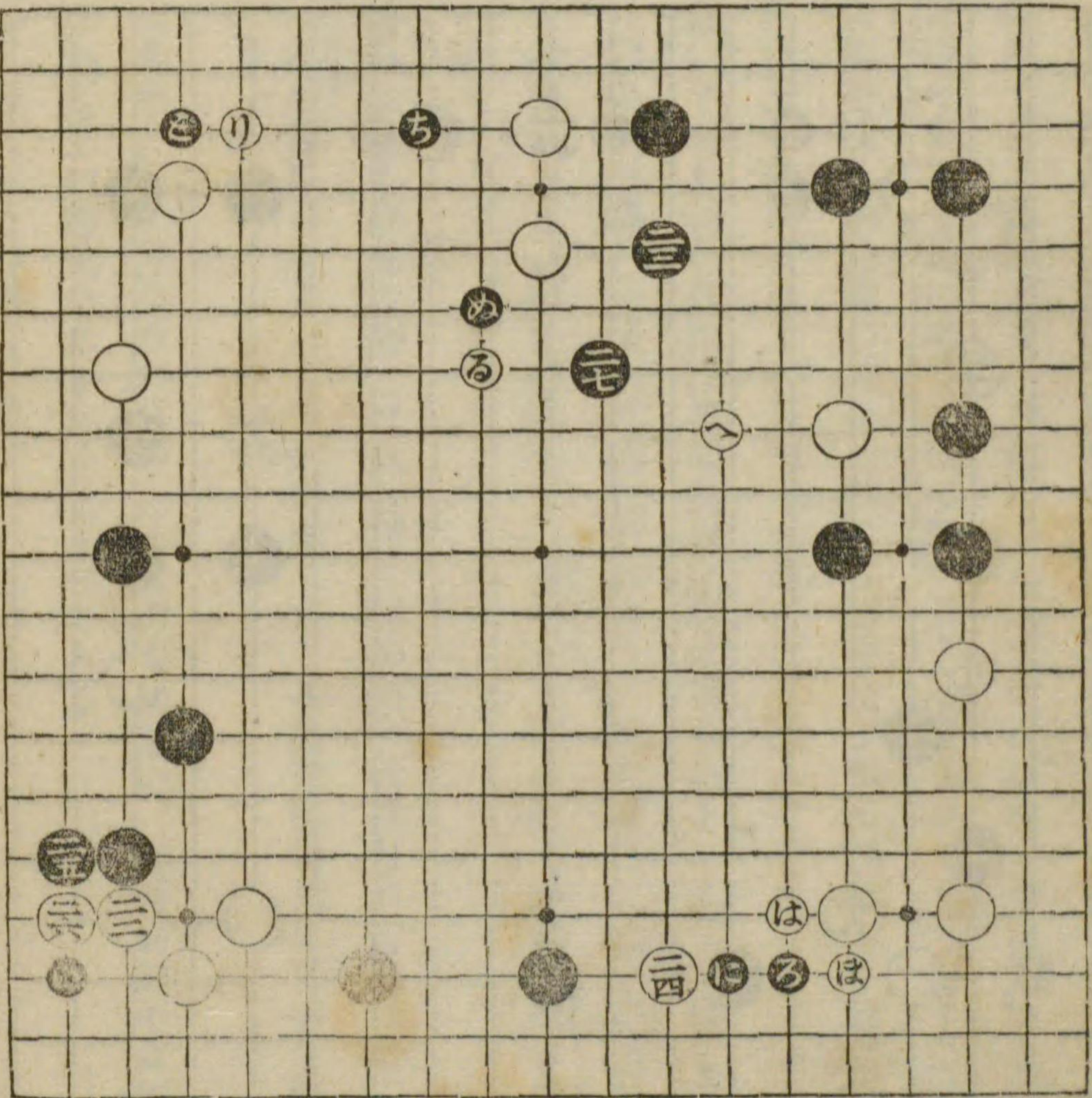
(局先互法石布)



白二十二は黒に㊦と犯されるを  
防ぎ活を計つたのである、黒二  
十三は此の點へ白に來られると  
徒に彼を強くし自ら薄弱を招く  
から之に備へたのである。

「註」 暗に十二の歸路を絶つ  
意も含んで居る。

或は二十三の手で㊧と打つ手も  
ある、其時白が㊨と來れば㊩と  
引く、若又白が㊪と來ず㊫と抑へ  
れば其の際手抜して二十三と打  
つてもよい、黒二十五は白より  
此の點に綽ねて來られては、隅  
の白の勢力を強盛ならしめ其の  
影響として下側二間拓の黒は苦  
痛を感ずるから、茲に自ら守り  
隅の白を抑制して暗に下側の黒  
を掩護して居るのである、白二  
十六は必しも打たねばならぬ事  
はない、此の手を以て㊬と打つ  
か或は二十七と打つもよい。

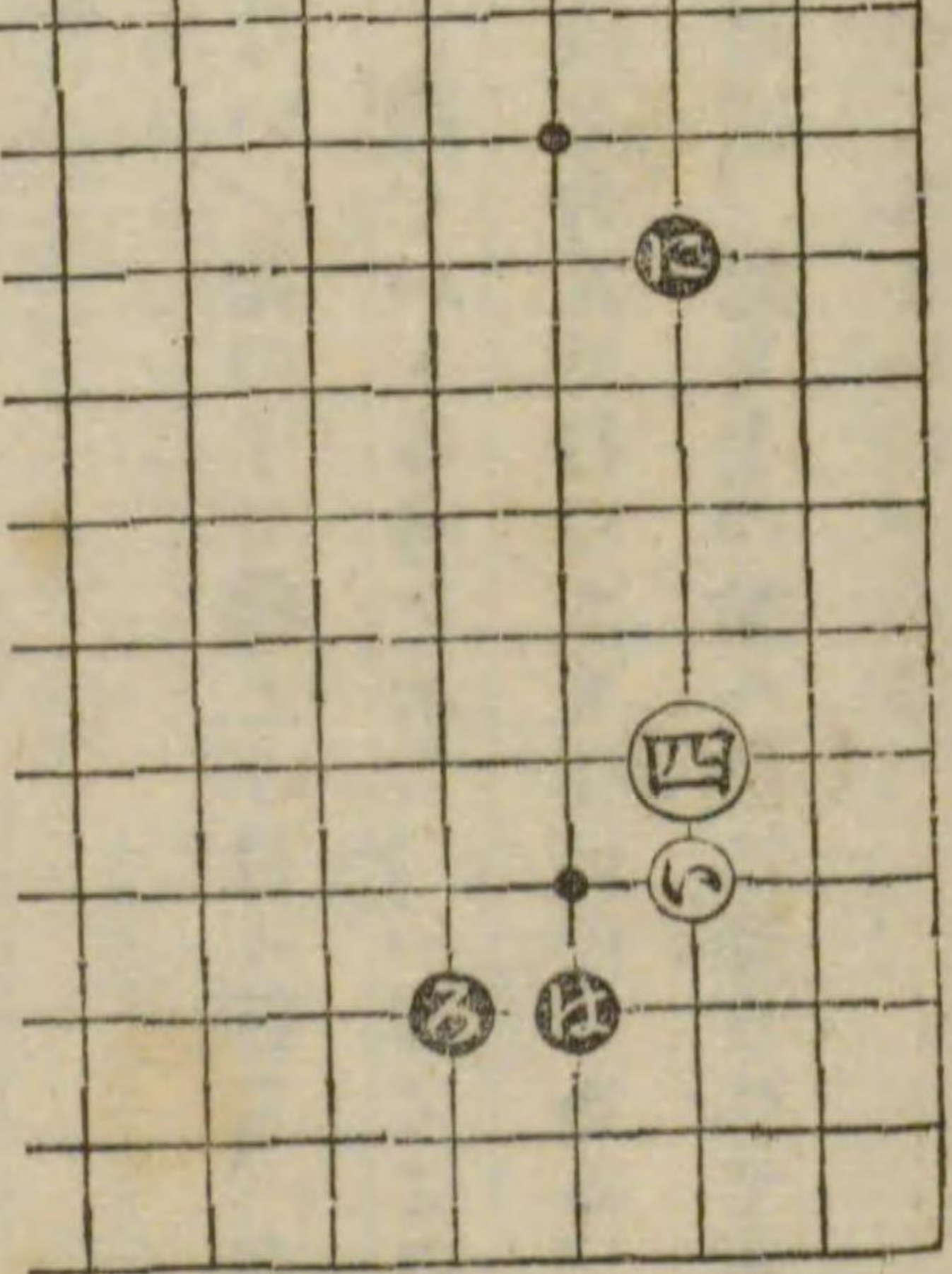
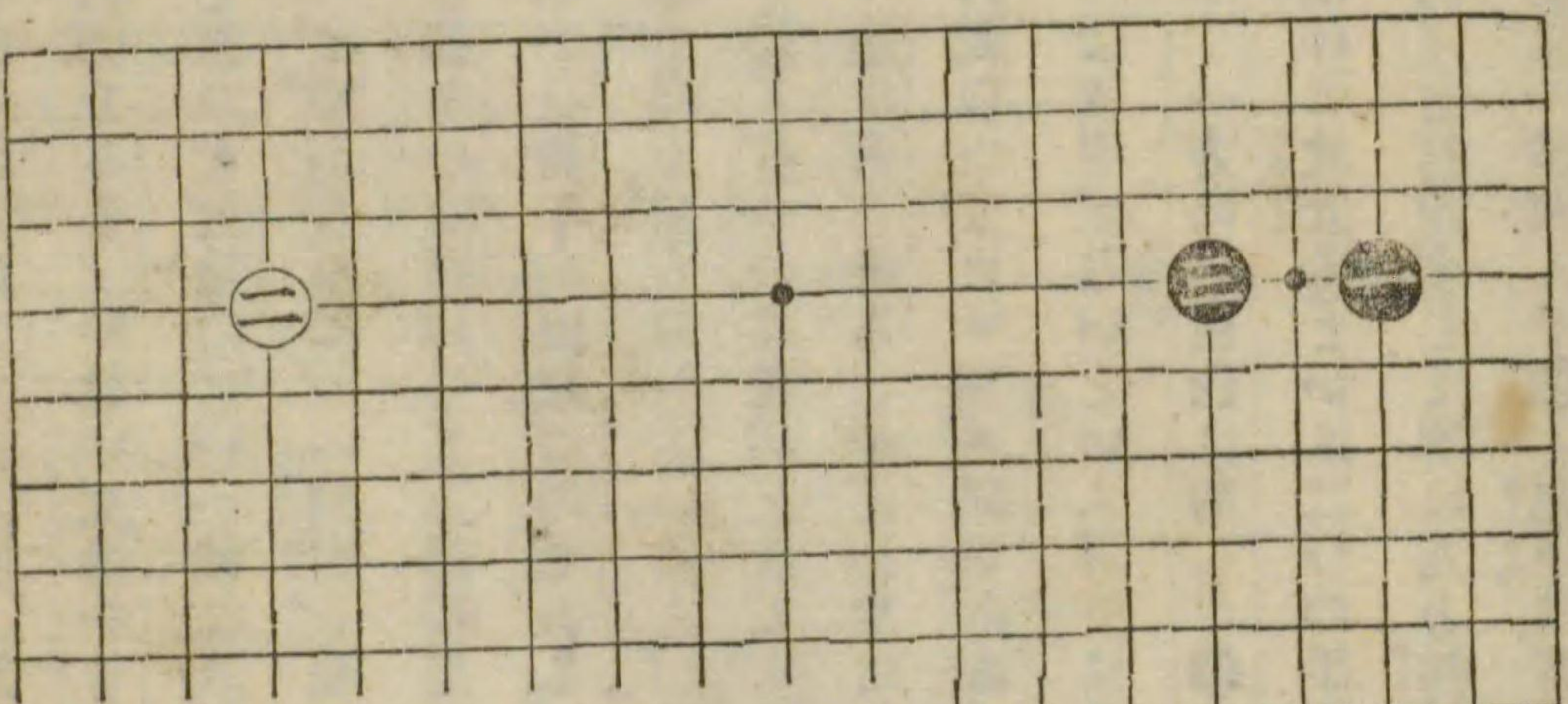


黒二十七は㊭と頂ける手若くは  
㊮と打込む手もあるが、此く二  
十七と打つ方が紛れなくてよい、  
次で白が二十八の手で㊯と隅を  
要領すれば、黒は㊰と侵入して  
行く、若又白が㊱と備へずして  
㊲と防禦すれば其時左上隅へ打  
込む手段を講じるがよい。

(以上第十九局講解)

### 互先第二十局

白四を此く目外もくぼしに打つたのと、  
前局の様に小目こもくに打つたのとは  
何れだけの差があるかと言ふと  
此の四を㊳と小目こもくに打つて居る



場合は黒から㊴と掛つて來ても  
手抜して差支ないが、此く四と  
目外もくぼしに在る時は黒に㊵と掛られ  
ては白は手を抜く譯に行かぬ、  
何故なれば、手抜すれば忽ち黒  
に㊶と三間夾さんまきまにされる手が急に  
なるからである。

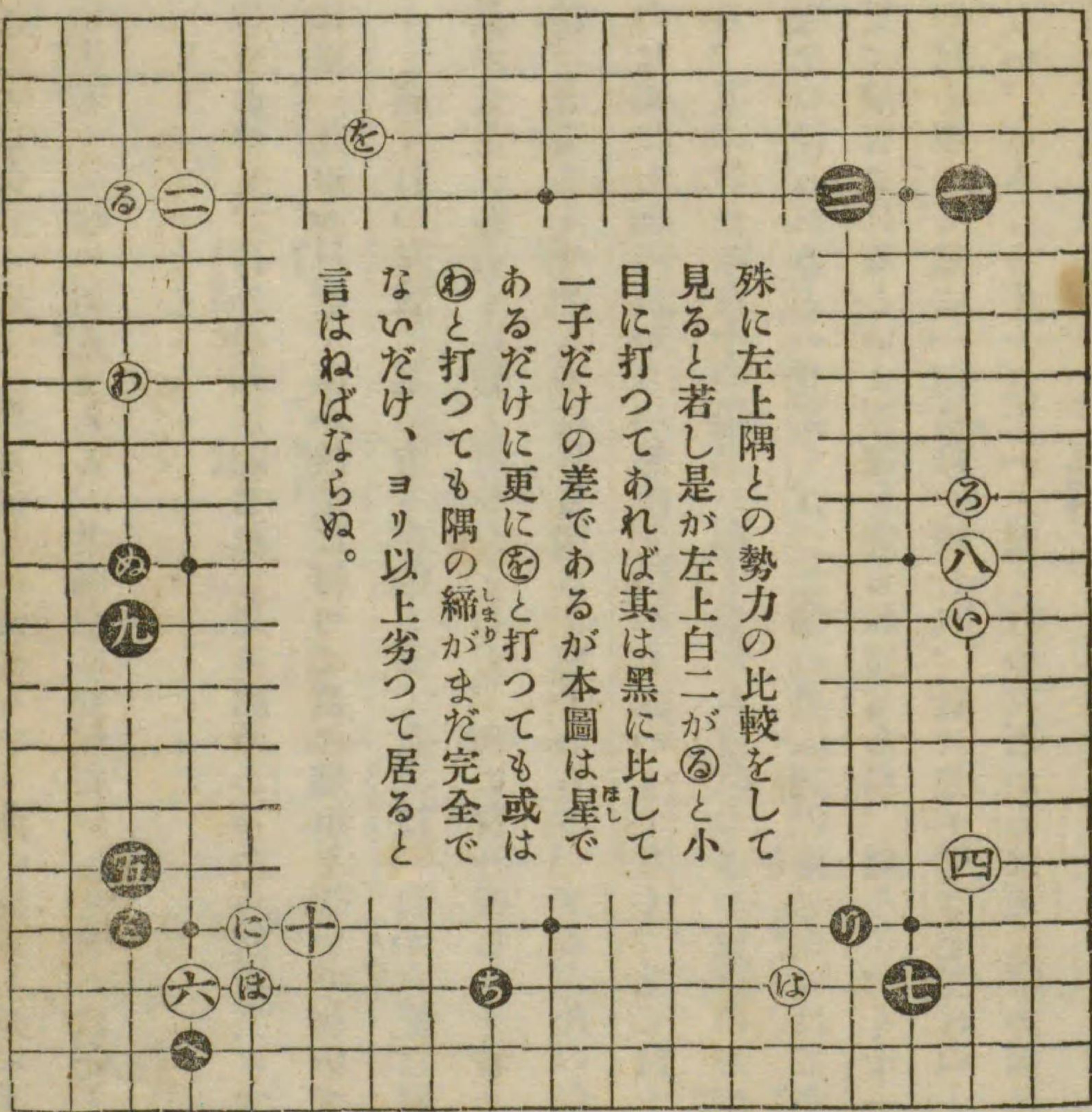


前頁で白四の手の説明をした其の反面の理を以つて言ふと、黒五は何故直に七の點に掛らぬか、この議論も出るであらう、一應尤の次第である、が黒の立場からして言ふと、又左様はイカヌ理由がある、其故は若し黒が五の手で七と打つと無論白は⑥か或は八かの何れかに拓く、然る後黒が五と目外に打つても今度は白は六の點へは掛からぬ④の一間夾を覗つて高く③と掛るに違ひない、して見ると黒が五の手で急いで七の點に掛るのは適以つて「白③黒六白④黒⑤白⑥」と運ぶ不利の形勢を後日に醸す素因となるから、輕卒には着手が出来ぬのである。

「註」然らば白は六の手で何故③と高く掛らぬかといふと、其はまだ右下隅の運びがついて居ないから、此の場合に白が六の手を③と打つのは實利を捨て、虚勢を取る様なものであるからツマラヌ、さりとて白が此の手で七の點に若し縮るとせんか黒に六の點へ縮られ、黒のみ兩縮の利益を獨占する事となるから、白は尙更以つてツマラヌ譯である。

然し黒は必しも此く五と目外に打つより手がないといふ譯ではない、此の手で⑤と小目に打ち、白が③と掛つて來た時④と三間に夾み、一方には白四に對して⑥と高くかゝる勢を示し、一方には白③に對して⑦の黒から六の點へ尖頂けて攻立るといふ二つの手段を含んで打つてもよいのである、黒七は最も必要の手である、此の掛りを打たずして單に九と拓けば、忽ち七の點へ白に縮られて不利を招かねばならぬ、黒九の手は更に一步進んで⑧と星下に打つてもよいのである。

「註」此の場合の局勢を見ると碁盤半面の相互の布石状態が殆んど同一型に出來上つて居る（黒九を②に打てば全く同型であるが、然し此く九に在るも白の四、八と對抗して決して遜色はない、何故なれば一路②と廣ければ其だけ薄弱になるから此場合の三間拓と四間拓とは大差ないと見てよい）然らば黒白の差は黒は右上に堅固なる一間高縮をして居るに比し、白は左上の星一子だけの勢力であるから其だけは確に黒先着の優勢を持して居るといふ事が出来る。



殊に左上隅との勢力の比較をして見ると若し是が左上白二が②と小目に打つてあれば其は黒に比して一子だけの差であるが本圖は星であるだけに更に②と打つても或は④と打つても隅の縮がまだ完全でないだけ、ヨリ以上劣つて居ると言はねばならぬ。

碁盤半面(局先互法石布)



白十は或は㊦と尖んでもよい、其時黒十一は矢張り此く二間に拓くの外はない、此の處若し黒の手番で先鞭を着けるとすればヤハリ㊦の尖若くは㊦の斜走である、其時白は如何打つかと言へば㊦と二間に拓くが最上策である。

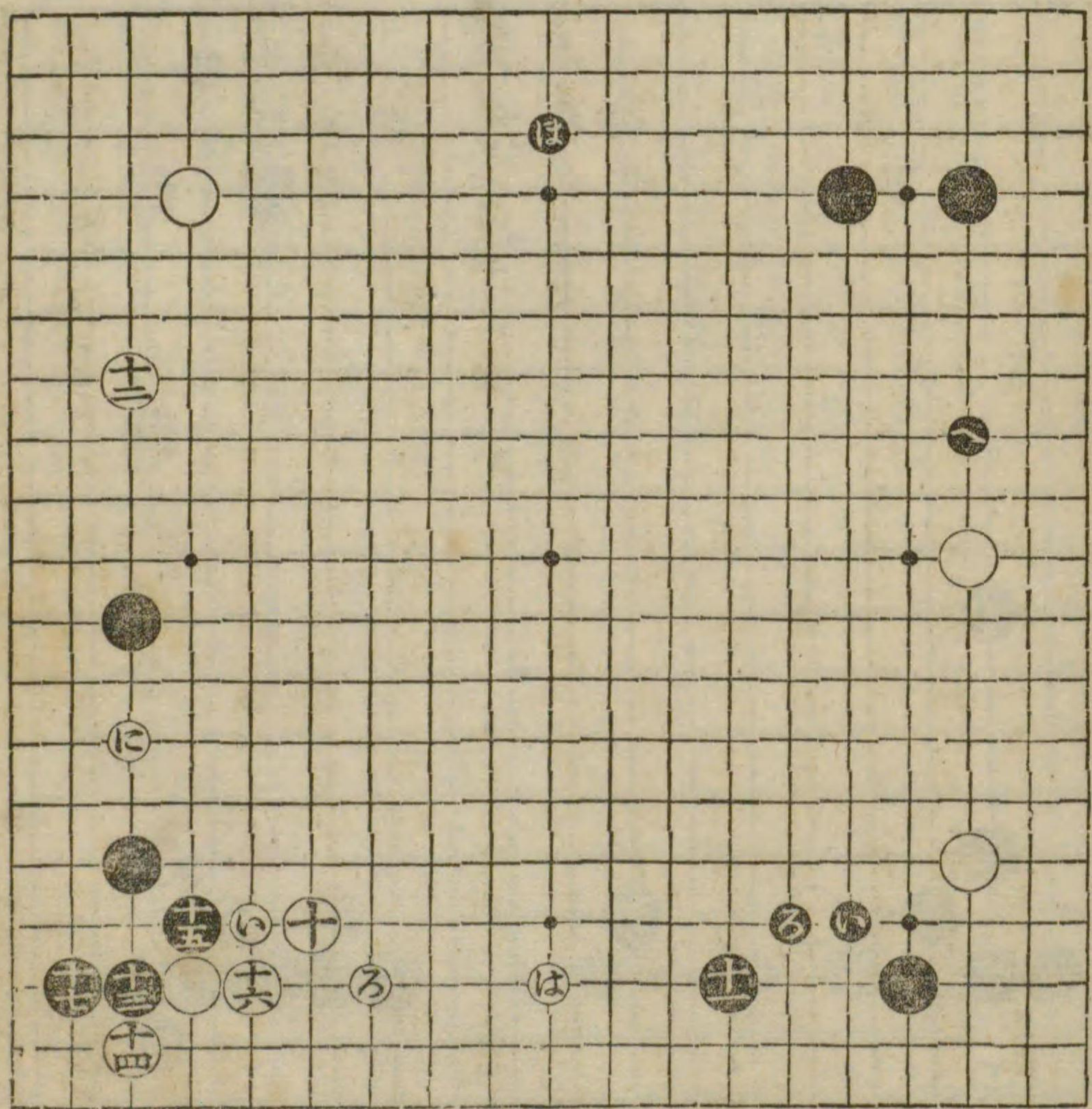
「註」此處は黒も白も共に小目の位であつて、目外の敵に睨まれて居る處であるから雙方共に大拓きは出来ぬ、若し拓かうとするには一先づ小目若くは小斜走に打つて敵の壓迫を拒いでおいて然る後の事である、處で白が此く十と高く打つた後に黒の方も亦㊦と高く打たば、白から直に㊦の邊迄廣く拓かれる、其と同じく黒が先きに㊦若くは㊦と打つたとして、次に白亦同じく十若くは㊦と高く打たば、黒から直ちに㊦の邊迄進んで来るのは自ら明なる處であらう、すると此の白十に對して十一と低く窄く備へるのは單に右側の白からの壓迫を悞れるばかりでなく、兼て白十からの㊦の詰を緩めておくのである、其の理由は白十の後黒が㊦と高ければ㊦の邊が雙方の好拓き場所であつて已に白から㊦に先鞭をつけられると一旦高く打つた㊦の黒は其の裾を覗はれて窄く應じる譯には行かず、應ぜねば更に侵害されるといふ苦痛を蒙らねばならぬ、然るに此く十一と低く堅く備へておけば、白十から㊦と來ても黒は一向痛痒を感じぬ、既に黒が響きを受けぬとすれば白も急いで着手する必要がない、のみならず一旦十一と低く打つた石からは更に㊦方面に歩を進めるといふ事は如何にも調子が悪くて出来ぬ、更に括約して言ふと、

白十黒十一となつた場合は  
黒からは位地が低くて㊦方  
面に進みニクイ白から㊦方  
面に進んでも黒に響を與へ  
ぬ此の理由を以て此の處は  
雙方共着手を急がぬ。

黒白共に此ういふ機微を互に  
利用して暫く時機の熟するの  
を待つて居る所が面白。

白十二は十と相待つて㊦の打込  
を覗うて居る、黒十三以下の數  
着は㊦の打込に備へたのである  
が、之を手抜して㊦若くは㊦に  
着手しても差支はない。

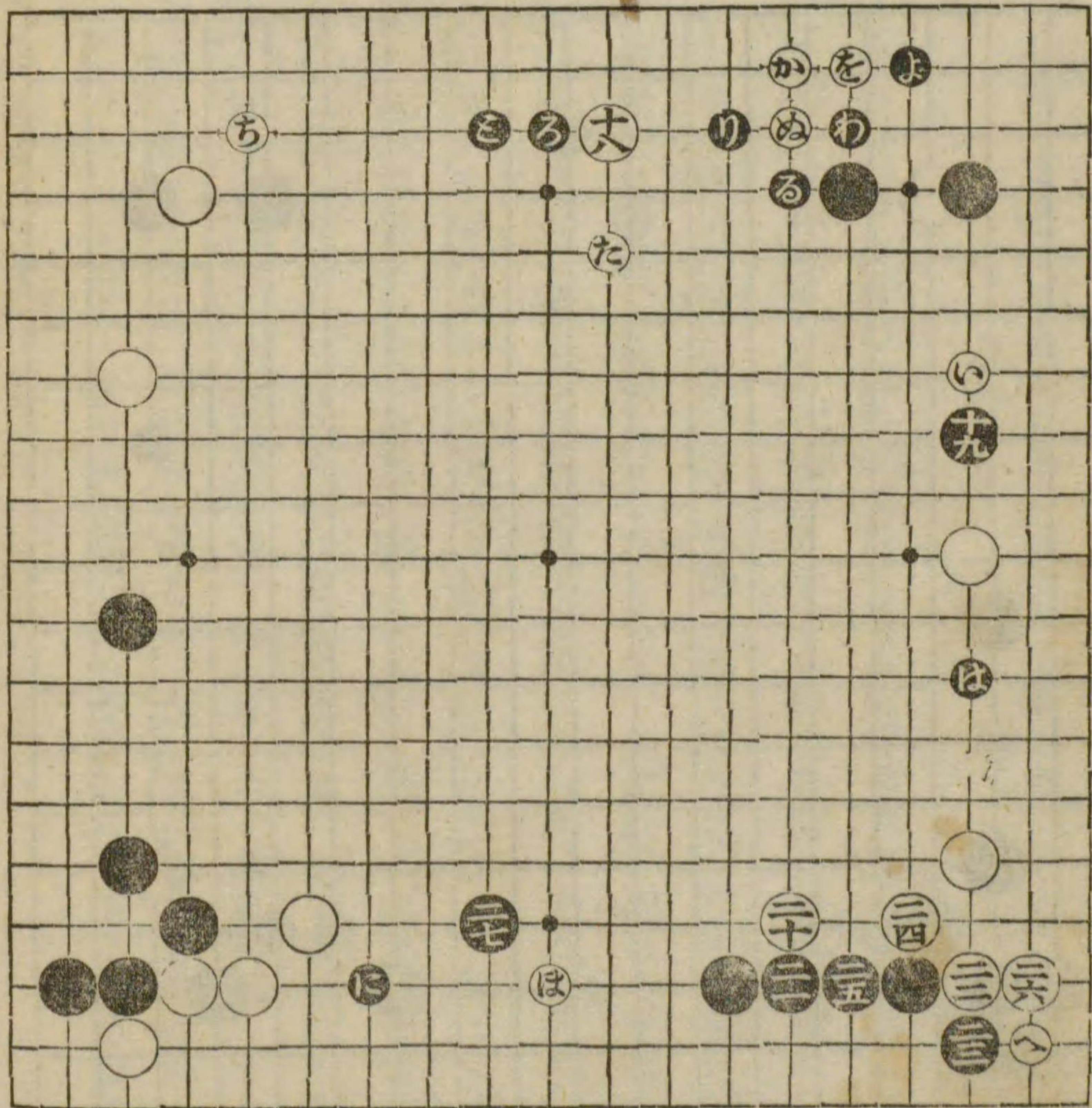
(白十以下殘説あり後に再録す)



（局先互法石布）

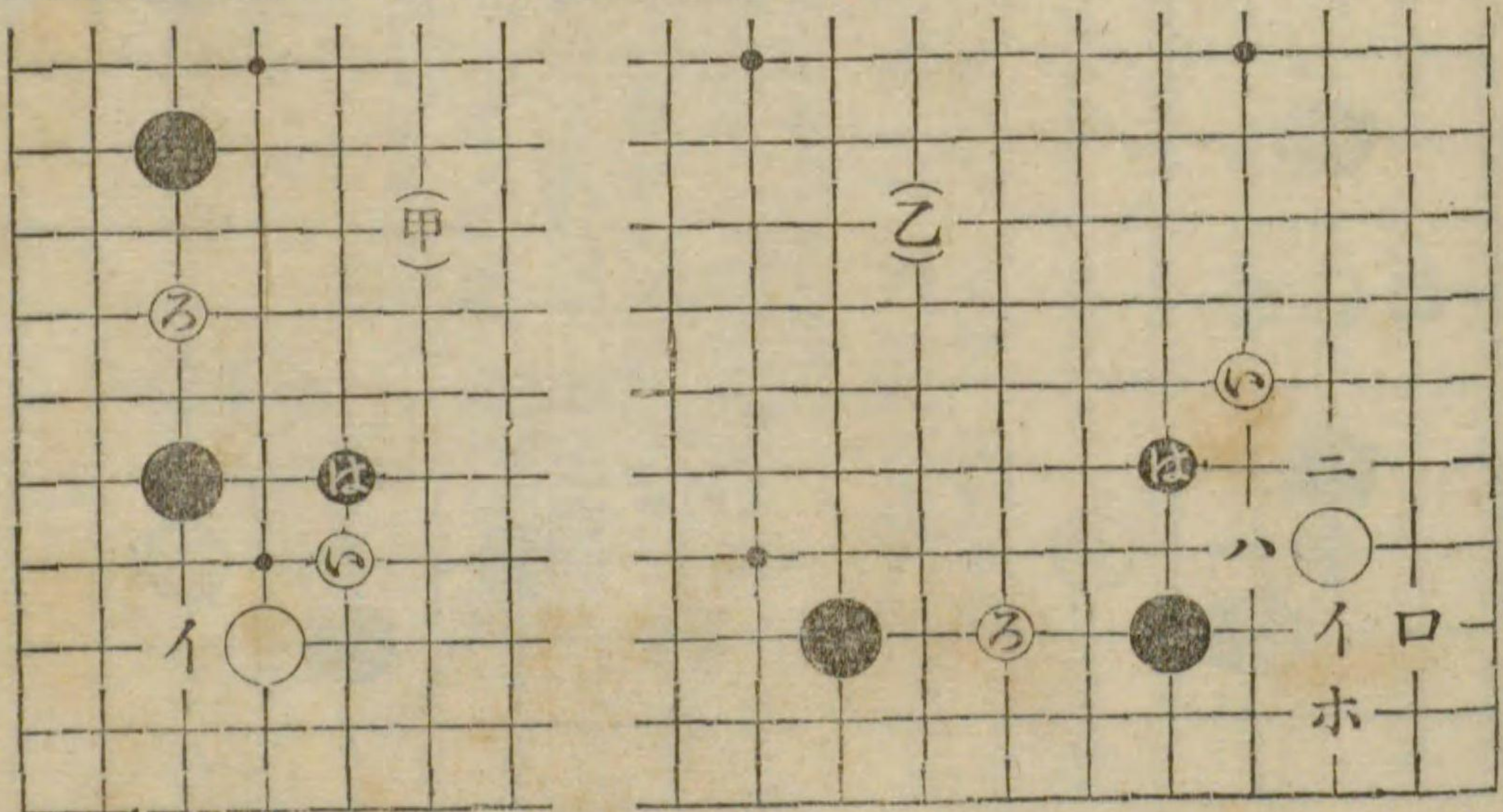


白十八は㊦と二間に詰めて居てもよい、其時黒は㊧と上側星下に打つ手順である、然し此の場合に於て十八の點は先づ大場である、黒十九の詰は自らの地を擴めると同時に㊨の打込を覗う良着である、  
 白二十から二十六迄の着手は低き黒をして更に姿勢の重複（俗に言ふ凝形）を犯さしめ茲に自らの勢力を加へて、一方㊩の打込に備へたのである、  
 二十七は次に㊪と迫らうとの意を含んだ良着である、白からは手の出し様はない。



「註」 若し黒が此の二十七の手を打たぬ場合白から茲に着手するとせば星下㊫の點であらう、若し白の手が㊬と運んだ後は、白に㊭と隅へでも曲られては黒は非常に壓迫を感じ、乃で黒二十七があれば自然に㊮の打込も利く譯であるが、若し反對に白の㊯があれば㊮の打込は利かぬ。  
 黒二十七を以て㊰と上側に打込手もある其時白が㊱と備へれば黒は㊲から攻て行く、若又黒㊳の時白が㊴と來れば黒㊵白㊶黒㊷白㊸黒㊹と運ぶ例の手順である。

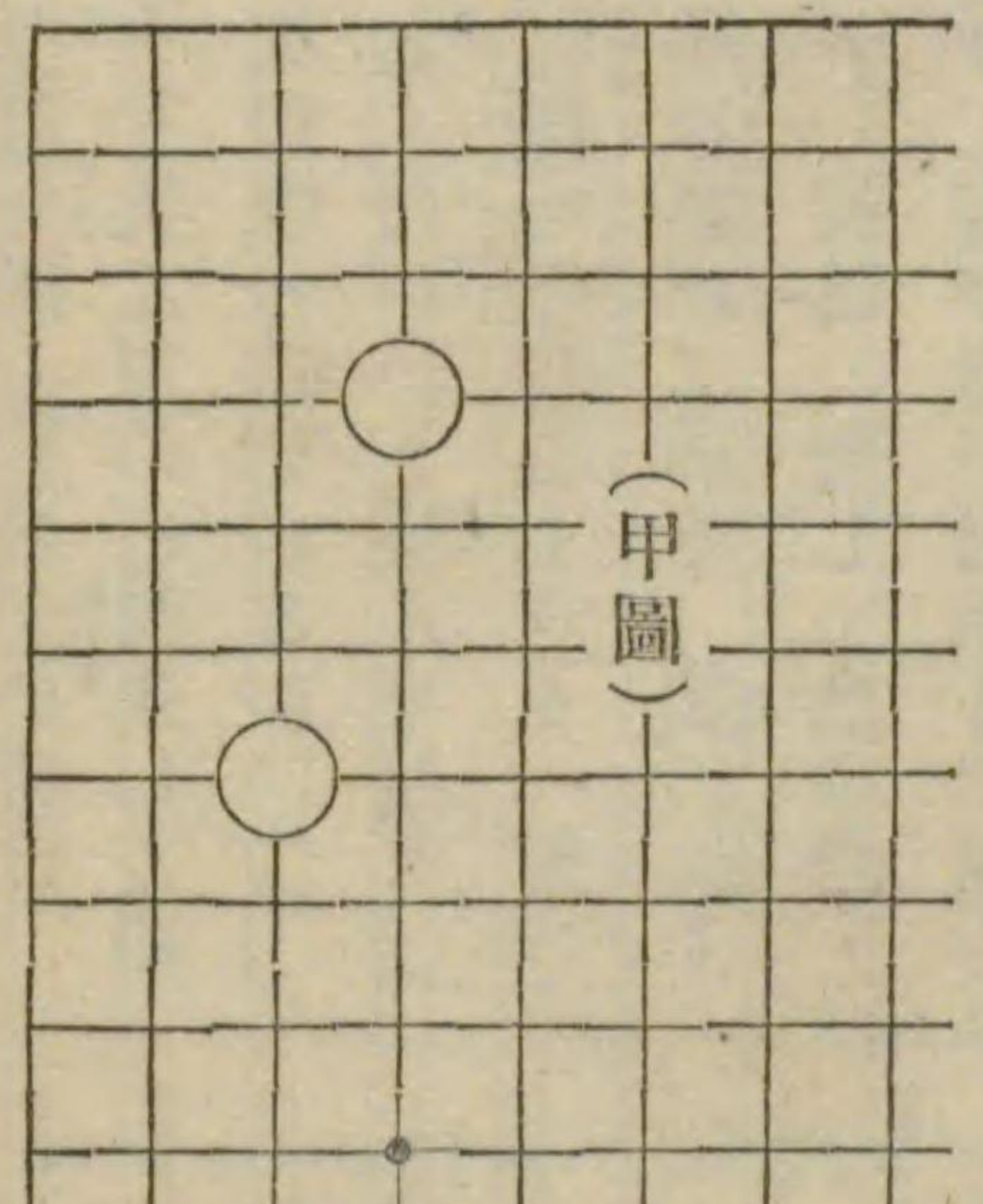
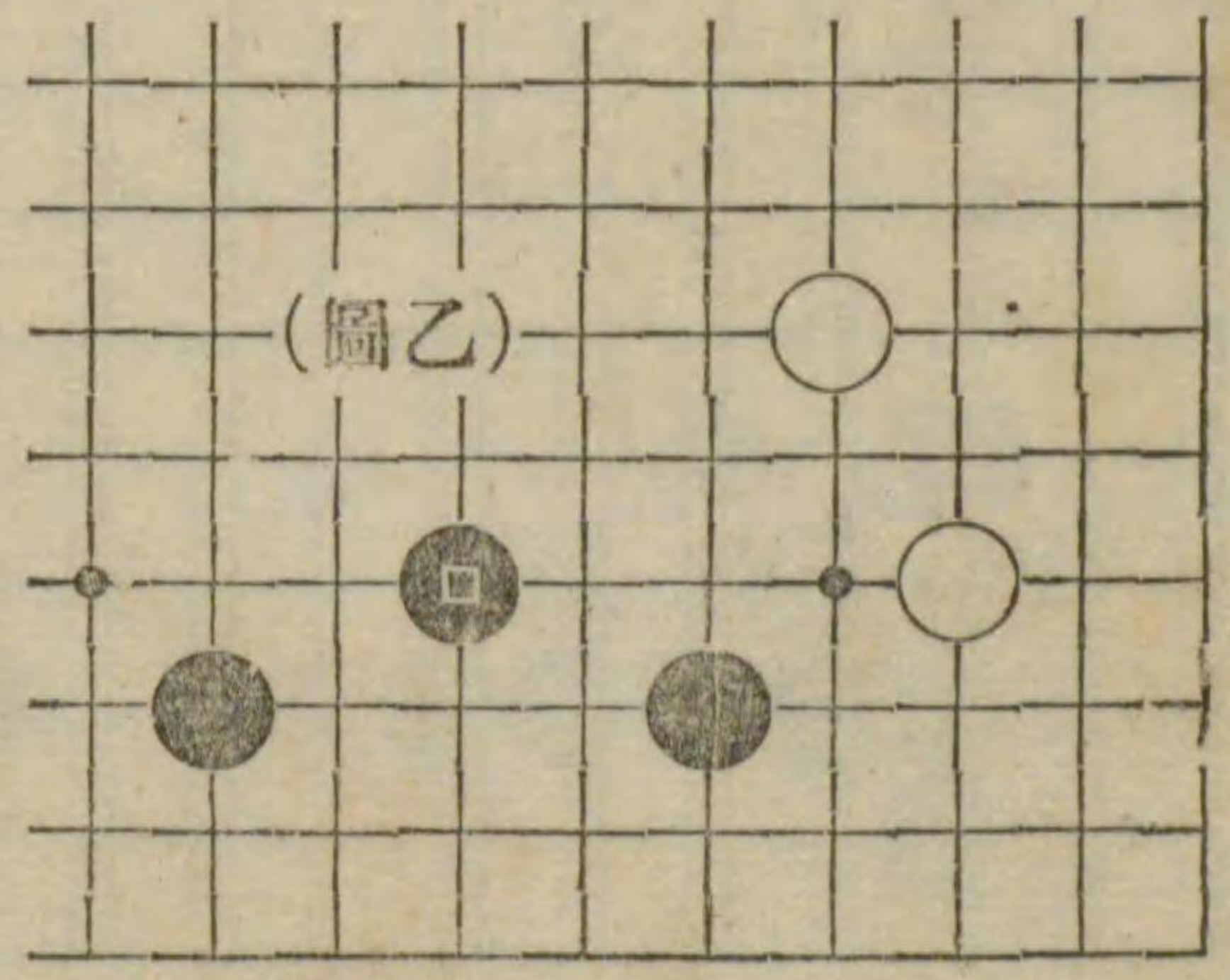
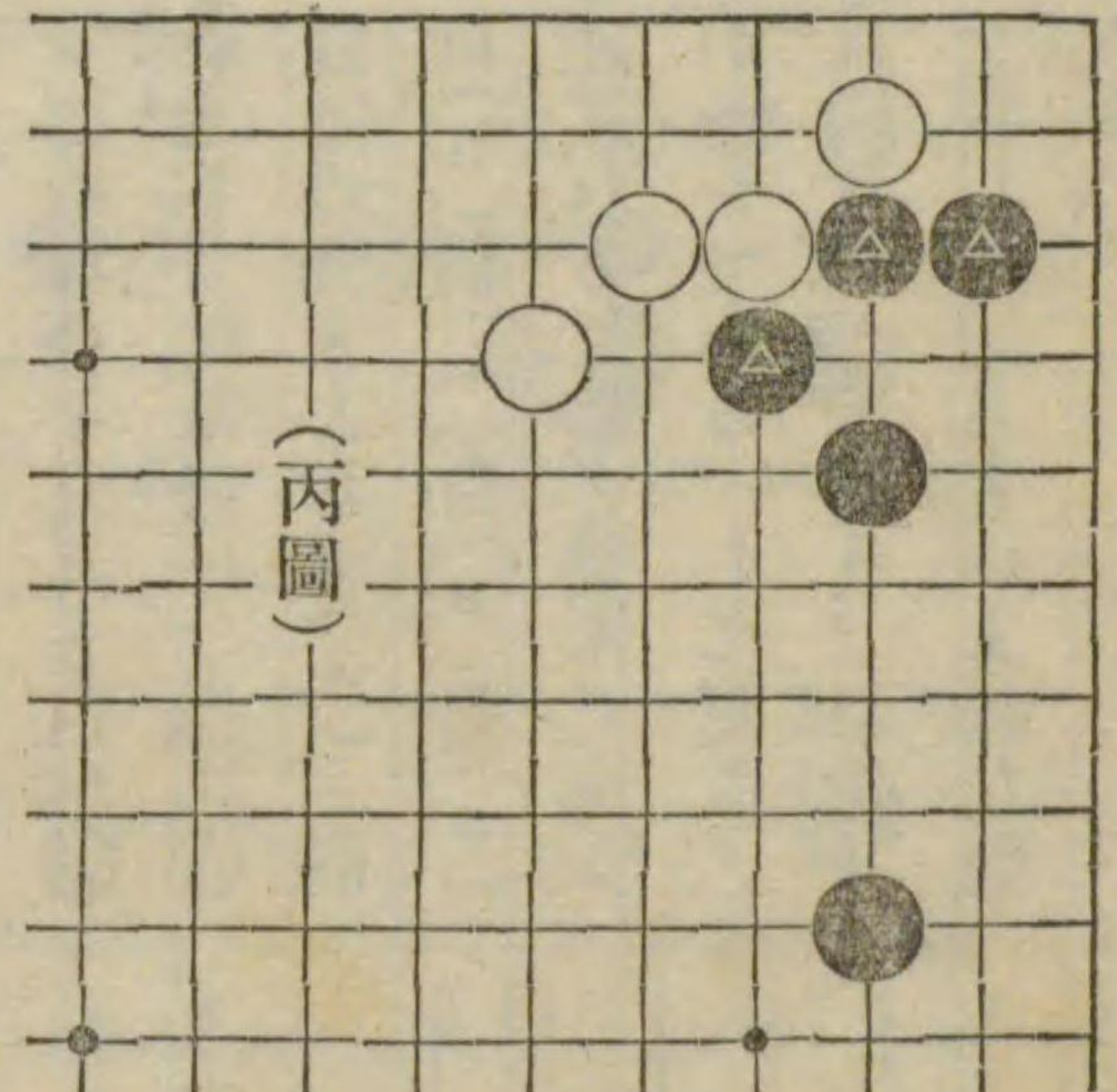
△前第一四七頁白十の殘説白十を尖んだのと斜走したのとは何程の差があるか、(甲)の如く白が㊱と尖んで居れば後に黒から(イ)と三々へ頂ける手は妨げて居る、其の代り白㊲の打込に對して黒は㊳と頂けて凌ぐ事が出来る。然るに(乙)の場合を見ると白が㊴と斜走して居る時は、黒は㊵の打込の凌ぎとして(イ)と頂け白(ロ)黒(ハ)白(ニ)黒(ホ)と運ばれるが㊶と飛んで出る手がヘンである、して見ると尖は隅を制して居り、斜走は上を制して居るといふ様な趣がある。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~


△前第一四七頁白十二の殘説
黒十三以下を手抜にして他に轉
じたる後の得失。

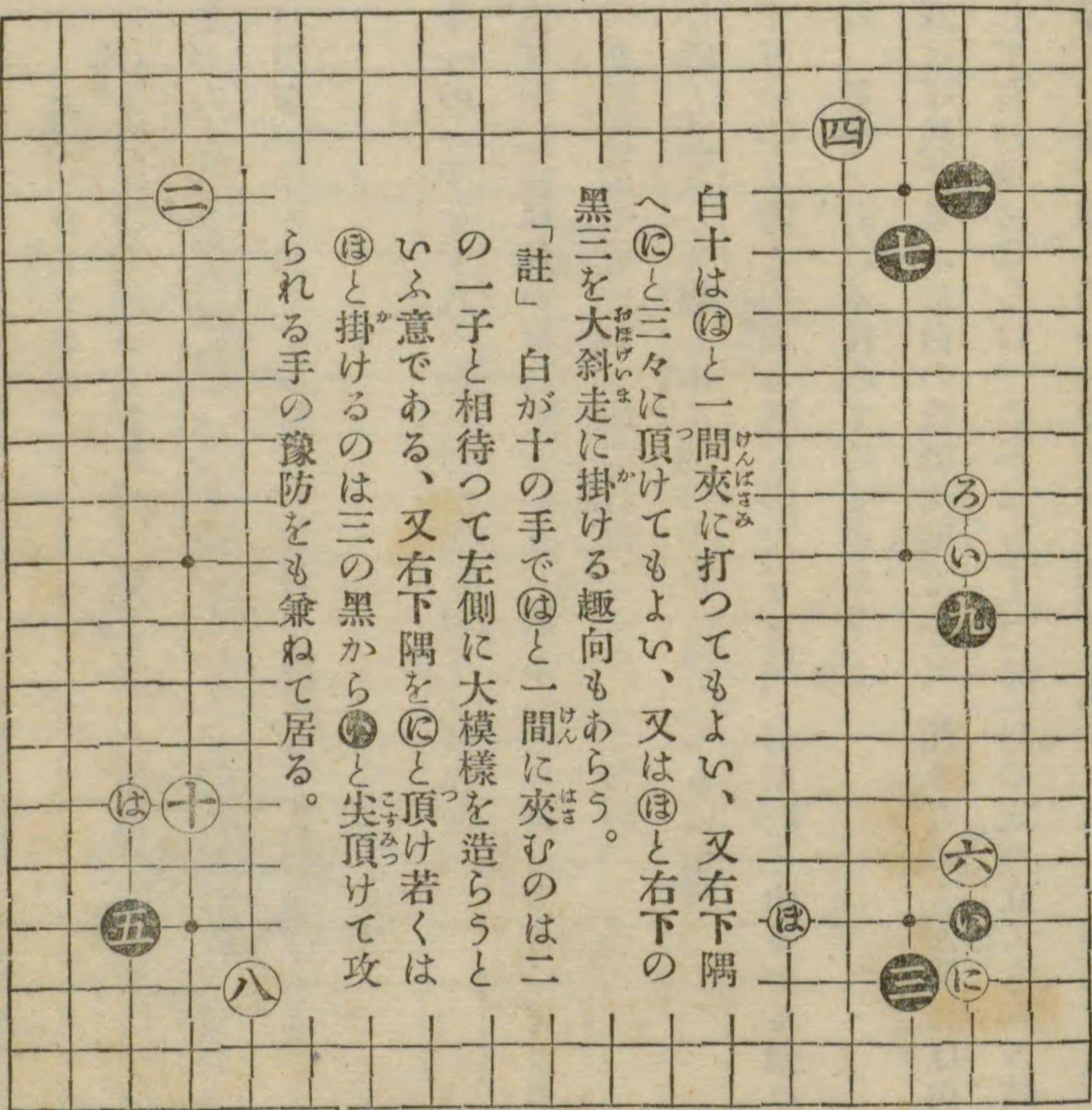
(甲) 黒が手抜した後、白に④
と打込まれた時は⑤と下へ頂け
る位のものとする、而して後に
此の味を消すには更に一着⑥の
夾を要する譯である、して見る
と此の白④と黒⑤と各一着を差
引無いものとして計算すると、
(乙)の如き形になる、更に之を
一四七頁の結果である(丙)に對
照して見れば其の損害の度を知
ることが出來やう、即(丙圖△
印)の如く外に向つて膨脹す可
き手を(乙圖□印)の通り内に向
つて窄き三間拓きの上に圍うた
結果となつたからである。



互先第二十一局

「註」 黒一より七迄の布石大
意は從來已に述べ盡してある
(只白二が小目に在るか圖の如
く星に在るかの相違である。)
黒九の點は此の場合に於ける最
大要點である。

「註」 是亦從來屢々説いた處
で、一、七、からの拓と白六
に對する攻撃と兩様にハタラ
ク手であるから大キイといふ
のである、此の理から溯つて
言ふと白は八の手の時に九の
點若くは④⑤の何れかに備へ
ておく方がよいといふ道理に
もなる。



白十は④と一間夾に打つてもよい、又右下隅
へ④と三々に頂けてもよい、又は④と右下の
黒三を大斜走に掛ける趣向もあらう。
「註」 白が十の手で④と一間に夾むのは二
の一子と相待つて左側に大模様を造らうと
いふ意である、又右下隅を④と頂け若くは
④と掛けるのは三の黒から④と尖頂けて攻
まれる手の豫防をも兼ねて居る。

~~~~~(局先互法石布)~~~~~



征の關係がよくて(△印)白一子を提る事が出来れば黒十五の手を以て十六の點を粘でもよいが、本圖の場合は右上隅の白の援けがあるから其の手は行はれぬ。

「註」此の事は已に今迄に此の形の行はれた局で説いてあるが、要するに之は損得問題ではない。右上に白の援けがなくて黒十五の手を十六とつぎ(△印)白一子を提るといふ手順になれば、實利といふ上から見ると多少損であるが、局面が分り易くなる即ち言ひ換へると「碁が打ち易くなる」といふの傾を呈するのである。

▲問 本圖の場合で白十六の時黒が十一の一子を十八の點へ行び出したならば如何。

△答 元來此の形で十一の一子を行出す手は紛れ易い形になるから、黒としては好んで打つ可き手ではない、且つ本圖の場合も右下の黒の位置が低いから此の行出しは良しくない。

▲問 黒二十五を手抜して●と尖頂け○と立たして●と煽る例の手順に出たならば如何。

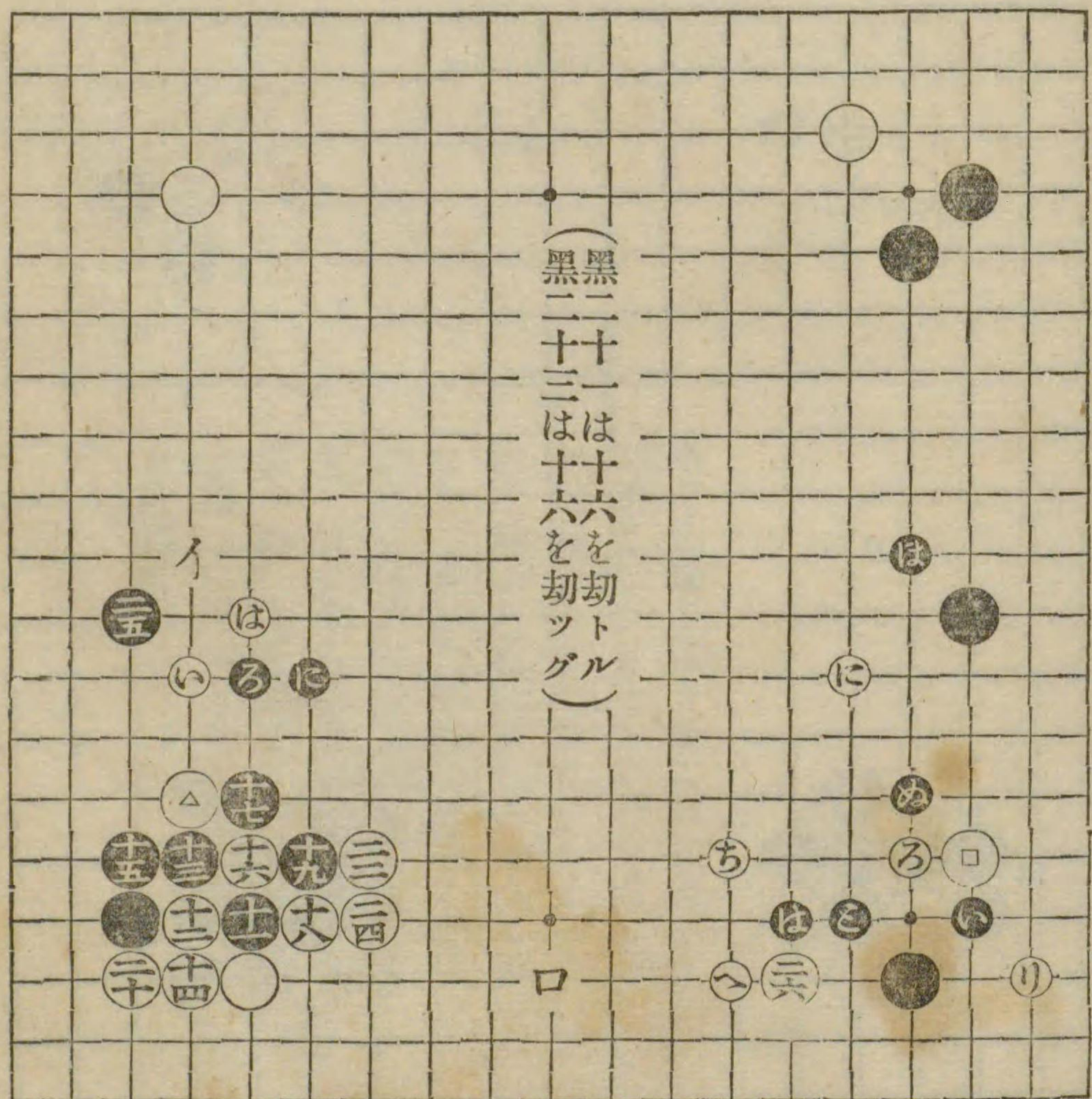
△答 其も一策である、若し黒が二十五の手で●と尖頂る手に出たならば、白は○と迫るかも知れぬ、其際黒は●と頂け、白は○と縛ね、黒●と行びる位のものであらう。

「註」次で白は(イ)と掛け粘るか或は手抜するかは白の策戰次第である、然うなると左側には白の模様が出来る代りに、下側は大して白の地にならぬ、のみならず(□印)白の攻め立てられる結果として右側の黒地も治りのつく事になる、即一得一失であつて精密な比較は決して容易でない。

白二十六は○と二間に夾返してもよい、其の際黒が●と尖んだならば、白は○と飛ぶ手と○と隅へ斜走する手とある。

「註」本圖の如く左下に堅固な白石の出来て居る場合は、白二十六で○と二間に夾返しても次の着點は決して(ロ)とは拓かぬ、先づ○と高く一間に飛ぶか或は○と隅へ走つて黒に○と掛けさせて打つかの二途である。

(詳細は互先定石三間夾二間夾返の條を参照せよ。)

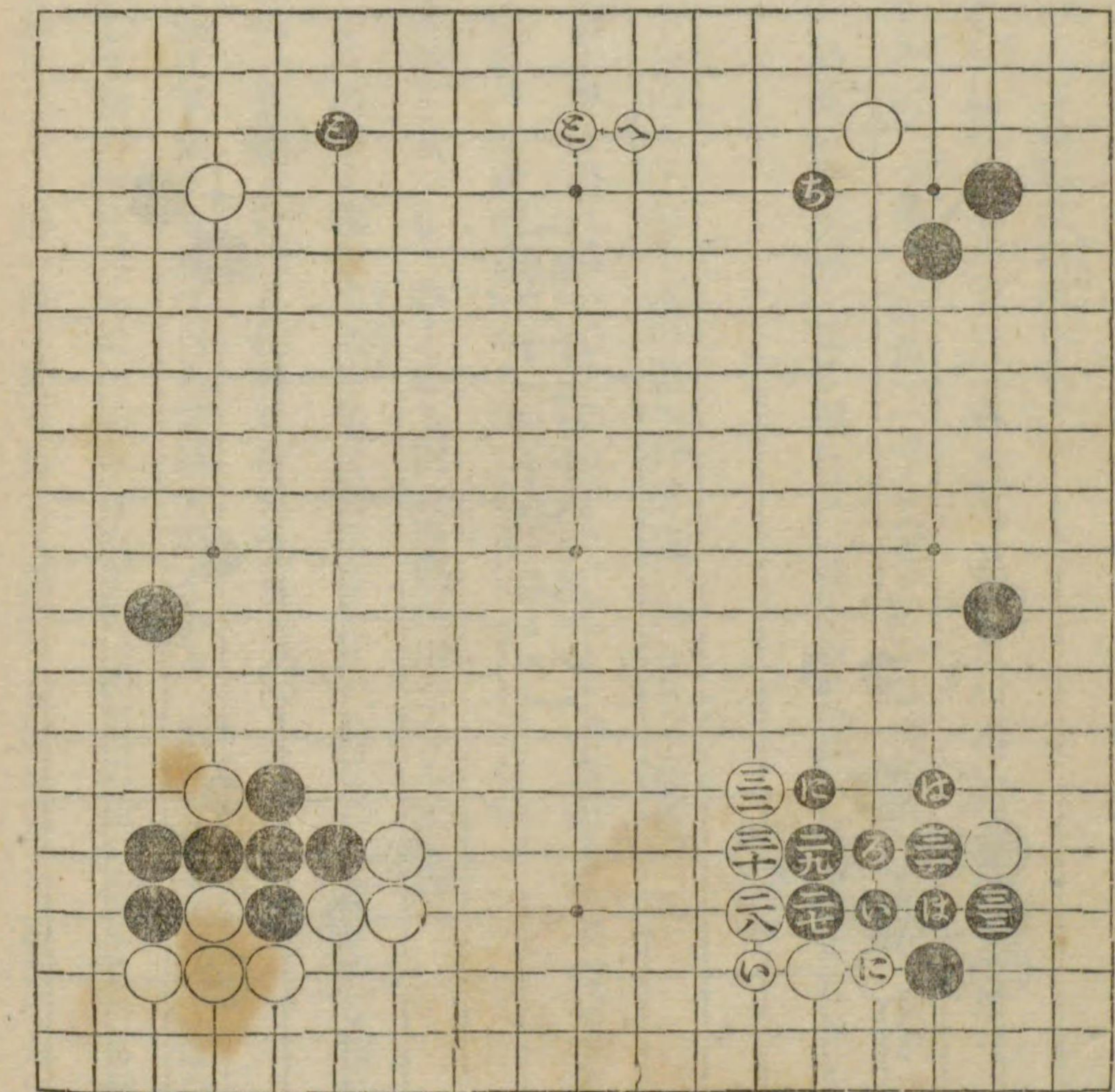


~~~~~(局先互法石布)~~~~~


黒二十七は普通●に尖み、白が二十七と押した時○と行るか○と掛けるかの手であるが、本圖は左下の白が堅固であるから少しでも白地を窄める意で二十七と頂けたのである。

黒二十九は●と引いてもよ、其時白は○と堅く粘げば黒は○の飛であらう、若も白が○と粘かず三十と行ければ黒は○の點を截つて白の一子を捕るがよい、白三十の手を○と行ければ、黒は○と行びる手である。

本圖の後白が○と打てば黒は○から掛りを打つ、若又○と打たず○と打てば黒は直ちに○と壓して行くがよい。



黒五は普通の着手である。

△問 五の手で七と右下隅を一間高締にするか、或は(イ)と小斜走に締らば如何。

▲答 敢て其の必要はない、何故なれば若し右下隅を白に掛かられて困る場合ならば、早く締つて置かねばならぬといふ道理もあるが、此の場合は右下隅は急を要する所でないから、ヤハリ明隅に此く五と打つがよい。

白六の掛りも尋常の着手である、

黒七は次で(ロ)と打ち白六を三間夾にしやうとの意を含んでをる、

白八は(ハ)の三間夾を豫防した手である。

「註」 白八の着點は例の通り(ロ)八の三點の内孰れでもよいのである。

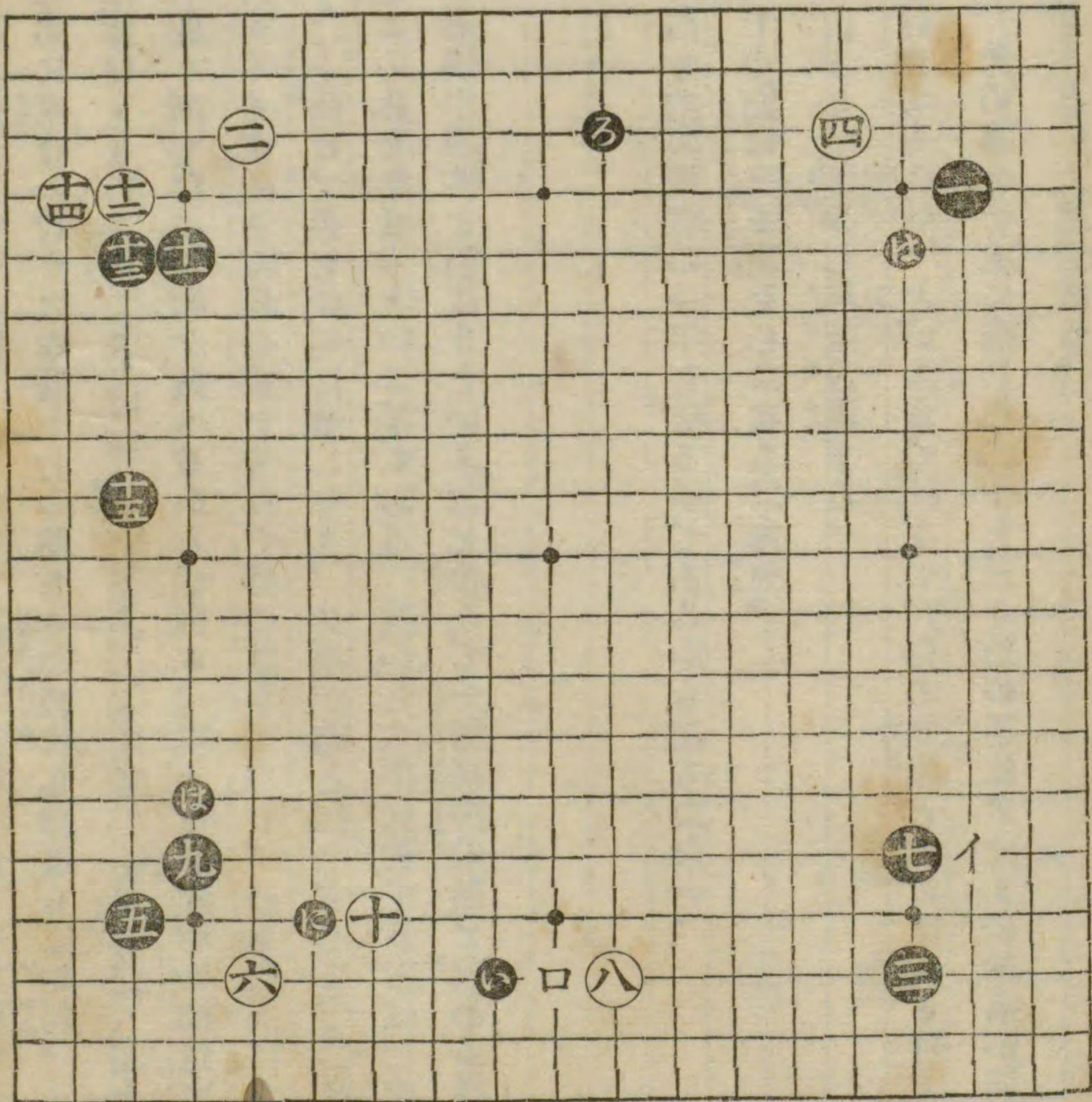
黒九は白から掛けられる點に先鞭をつけて、次で(イ)と打込まうか(ハ)に掛けやうかといふ擬勢を示したのであるが、其の眞意は白に十と圍はして此の處の「キマリ」をつけやうといふ手である。

「註」 黒九の點は白六からして掛け得らるゝ點といふ迄で、必しも白が掛けるものとは決して居ない、掛けると掛けぬとは白の策戦如何にあるのである、唯此く九と尖んだ限り白からの掛は絶對に無くなつたといふ意味である、

其から「白に十と圍はして「キマリ」をつけやう」といふのは白の「ハタラク」を制限するの意で、此く治つて終へば變化が少くなる、即ち白の策戦の餘地を縮小さすといふ道理になるのである。

黒九は或は(イ)の斜走でもよい、但し(ロ)から(ハ)の「掛け」は出来ない、(イ)の打込ばかりである。

黒十一は(イ)と打つて白四を三間夾にするか、或は(ロ)と尖んでおく手もないては無い、然し此の手で十二の點に低く掛かるのは良くない、何故なれば此の處を低く掛かると折角一方で五、九、と尖んだ姿勢を無効に歸せしめ(假定黒十二の手に對して)「掛」とか「夾」とか種々の手段を白から弄される患がある、
黒十一の高掛は命令手である、白は絶對に手拔は出来ぬ、乃ち此くして十三と押し白に十四と下らせて、十五と拓く手が左下五、九の尖と相俟つて好姿勢を形づくる所以である。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



△問 前頁に於て黒十一（本圖に示す△印黒）の手を●と打つて白（△印）を三間夾にしても可いといふ説なりしが、其の手で●と二間に夾むか若くは本圖十七の點へ一問夾にしたならば如何。

▲答 其は三間に限る、一問、二間は面白くない、何故ならば其の夾む手が右上方面へ寄るだけ、左上からの白の拓き、詰め、兼用の手が廣く來て白に便利を興へるからである。（以上前頁説明の補遺）  
白十六は右上に對する意味と右下に對する意味と兩様の策を含んで打つた手である、乃ち右上に向つては黒が若し●と詰めて來れば（イ）と掛けて黒を低地に壓しやう、又黒が●と詰めて（イ）に尖まば二十四と打つて次で（ロ）と迫るの味を含まうといふ手である、其から右下に對する方は、次で二十六に迫つて更に●若くは●と黒隅の根據を覗はうといふ意を含んで一問高締の黒を攻める手である。

黒十七は●と二間に堅固に拓いてもよい。

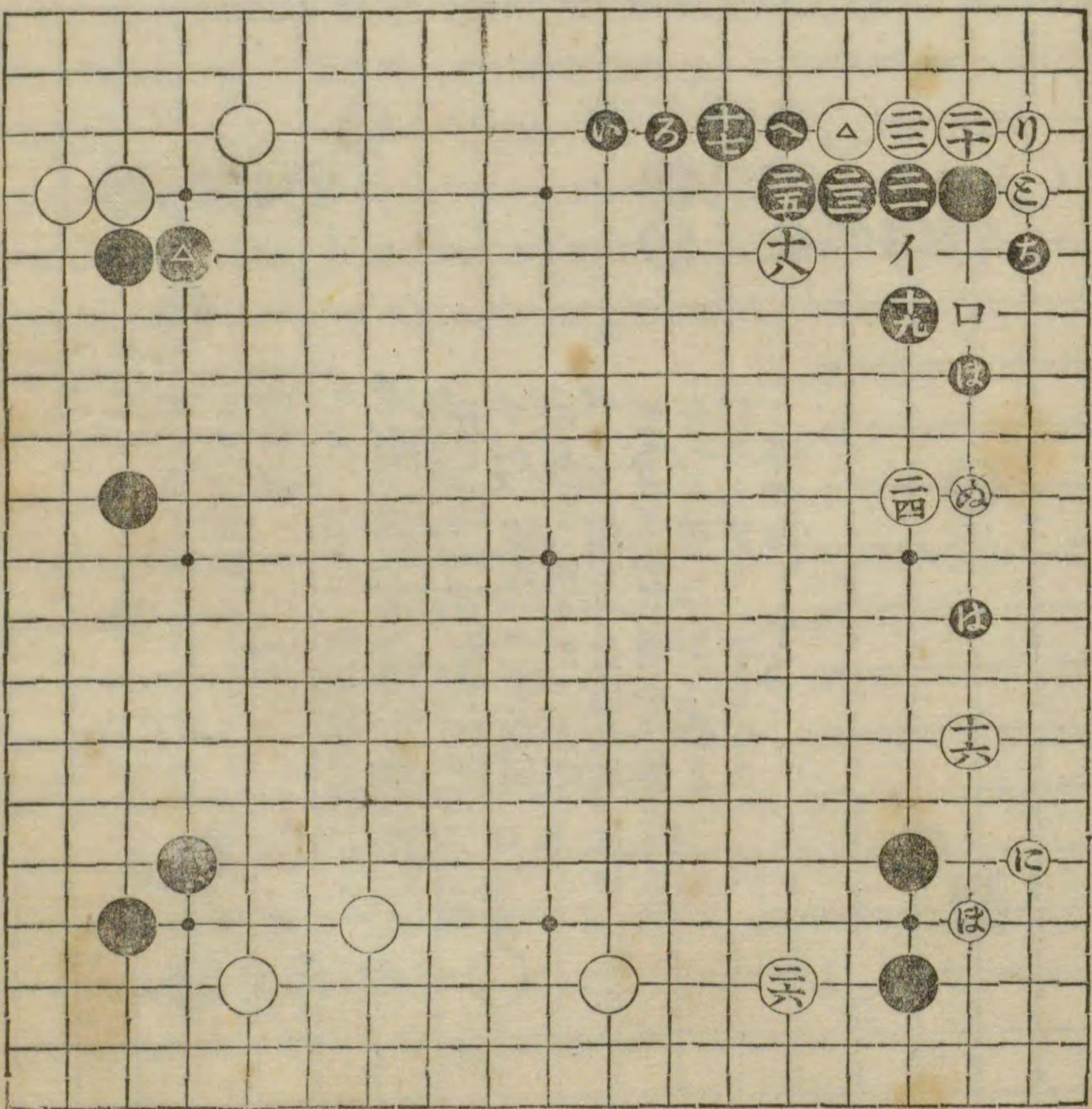
「註」 ●の二間拓は前着に述べた白十六の策戦の一半を破る手であるから其も面白い。

△問 白十八の「跳出し」を以つて二十の點に三々頂をしたならば如何。

▲答 敢て悪いといふ事もないが、白としては少し眞面目過ぎる。

「註」 是は「白は不眞面目な手を打つてもよい」といふ意ではない、白の立場としては成る可く局面を紛争させる必要があるのに、此の場合十七に應じて二十と三々頂の手はアマリに結果が明瞭で紛れ様がない、即ち平凡に過ぎるといふ意である。

（白十八から黒二十三迄の應接の趣意は「互先定石一問夾第四十六頁」以下を参照の事）  
白二十四と高く打つたのは黒に二十五と打たさうといふ手である（黒二十五は手拔は出來ぬ）若し黒二十五を手抜して白に此の點へ來られた時、黒が●と截れば白に●と縛ねられ黒●と抑へば白●と粘ぐ手順になると其の結果黒は左右に勢力を隔てられ非常の不利勢を醸さねばならぬ。  
△問 白二十四を一路低く●と打つは不可なりや。  
▲答 すると黒に●と打込まれた時捌き難い。

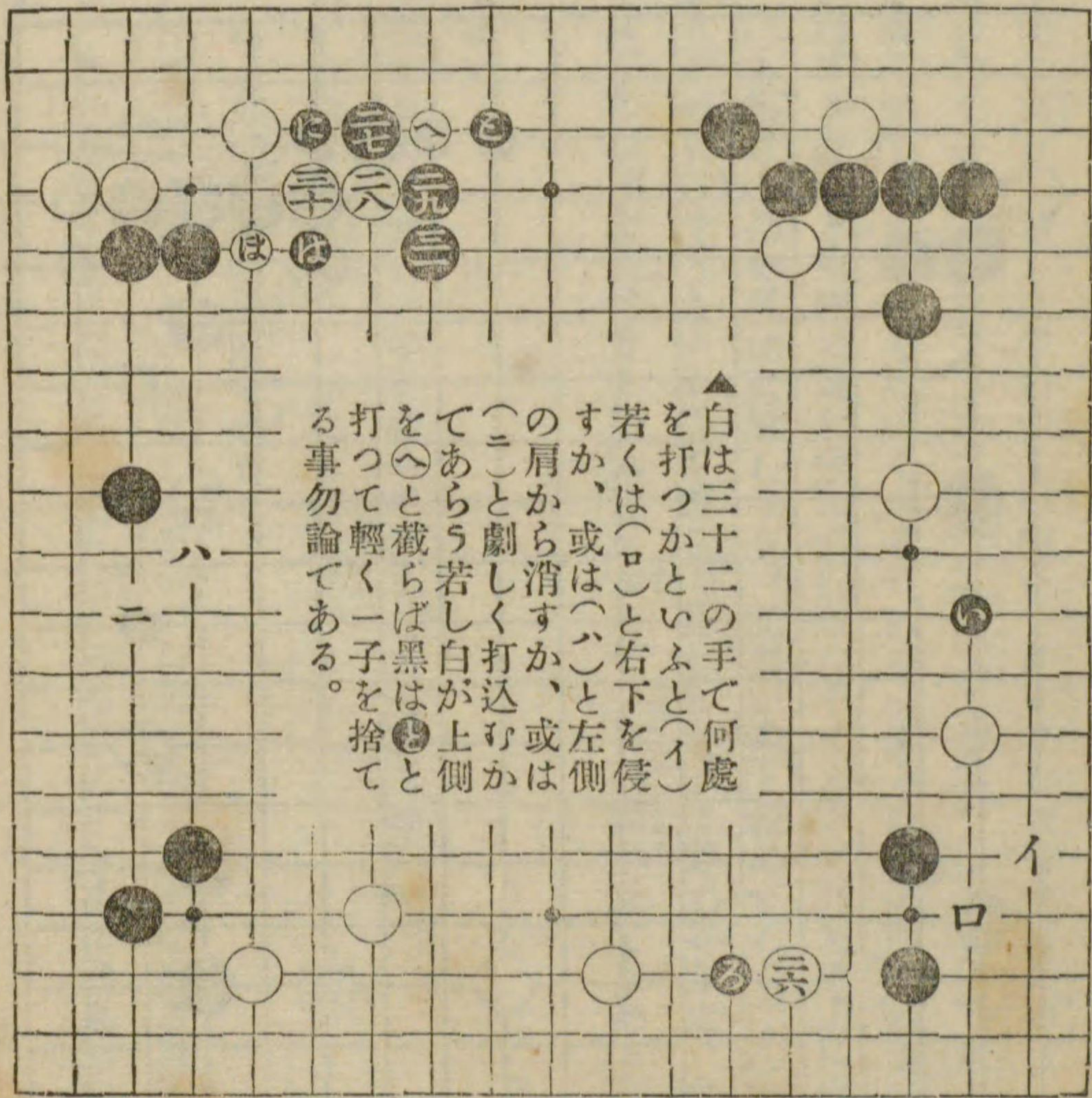


~~~~~(局先互法石布)~~~~~


白二十六は此の場合最良の着點である、即右下隅に迫つて暗に⑤の打込を牽制して居る。

「註」 白が若し二十六の手を閑却したならば、黒は⑥と詰めるか或は急に⑦と打込んで猛烈に戦ふ手である。

白が二十八と頂けたのは黒から一手で⑧と鎖されるのを嫌うた手である、此の二十八の手で⑨と衝き當り黒を二十八の點に立たせて⑩と出る手も常に行はれる形であるが、本圖で然う打つと上側黒地を益々厚壯ならしめる惧がある。



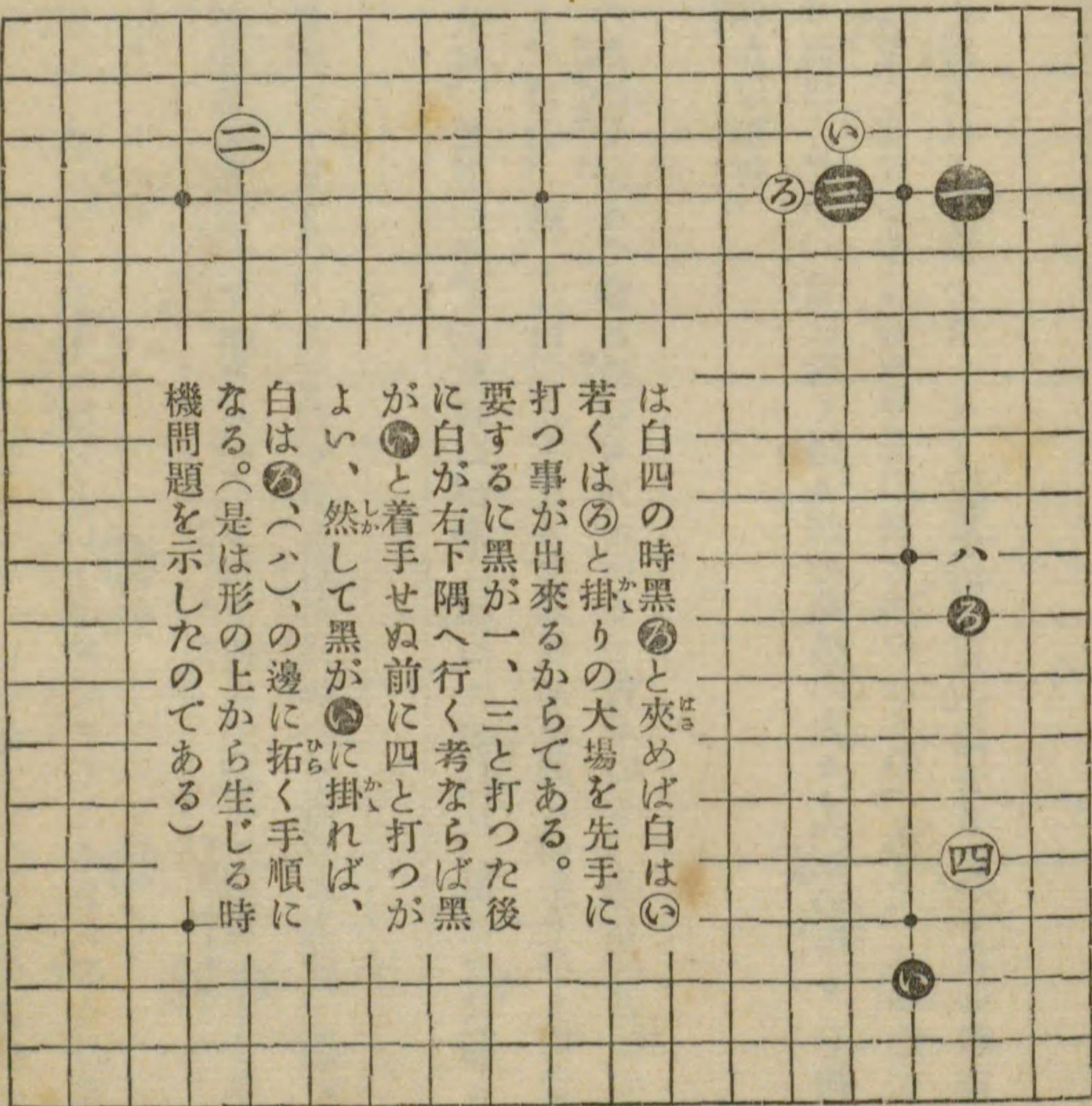
▲白は三十二の手で何處を打つかといふと(イ)若くは(ロ)と右下を侵すか、或は(ハ)と左側の肩から消すか、或は(ニ)と劇しく打込むかであらう若し白が上側を(ハ)と截らば黒は(イ)と打つて軽く一子を捨てる事勿論である。

互先第二十三局

黒三は前局の説明の一半を見るがよ、

白四が若しも左下の明隅に打たば、黒は①と小目に打つがよ、乃て白の立場から言うと、黒に②と打たれた後からては四の點へは行き難い。

「註」 此は前局の初期の講義を熟讀すると思半に過ぐるものがある、已に黒の布石が一、三、④とある所へ白が四と行けば、黒に⑤と夾まれるは自明の理である、が黒三の飛がなく単に一、②とばかりの時なれば白も四と打てる、其故



は白四の時黒⑤と夾めば白は⑥若くは⑦と掛りの大場を先手に打つ事が出来るからである。要するに黒が一、三と打つた後に白が右下隅へ行く考ならば黒が④と着手せぬ前に四と打つがよい、然して黒が⑤に掛れば、白は⑥(ハ)の邊に拓く手順になる。(是は形の上から生じる時機問題を示したのである)

黒五は此く左方目外に打たねばならぬかといふに、必しも左様でない、或は●と右方の目外に打つてもよい、即黒五の手で●、白○と掛り、黒は十と左上へ掛るといふ手順になつても別に悪くはない、只向きが變つて来るばかりである。

或は黒五の手で○と小目に打ち、白が●の點に掛つて來れば●の高掛を含んで●に三間夾をする手になる、又黒五の手で六の點に小目に打つてもよい、次て白が五と目外に掛つて來たならば、●の高掛を含んで●と夾む手になる。

「註」●の高掛を含んで●と夾むとは、黒五の手で○次に白が●と掛つて來れば、黒は直に●と三間夾をして、次て●と高目に掛り、白七、黒(イ)白(ロ)となる黒のため有利な形勢を造り出すといふ擬勢を示すのである、●の高掛を含んで●と夾む云云というてあるのも、是と同意味である。

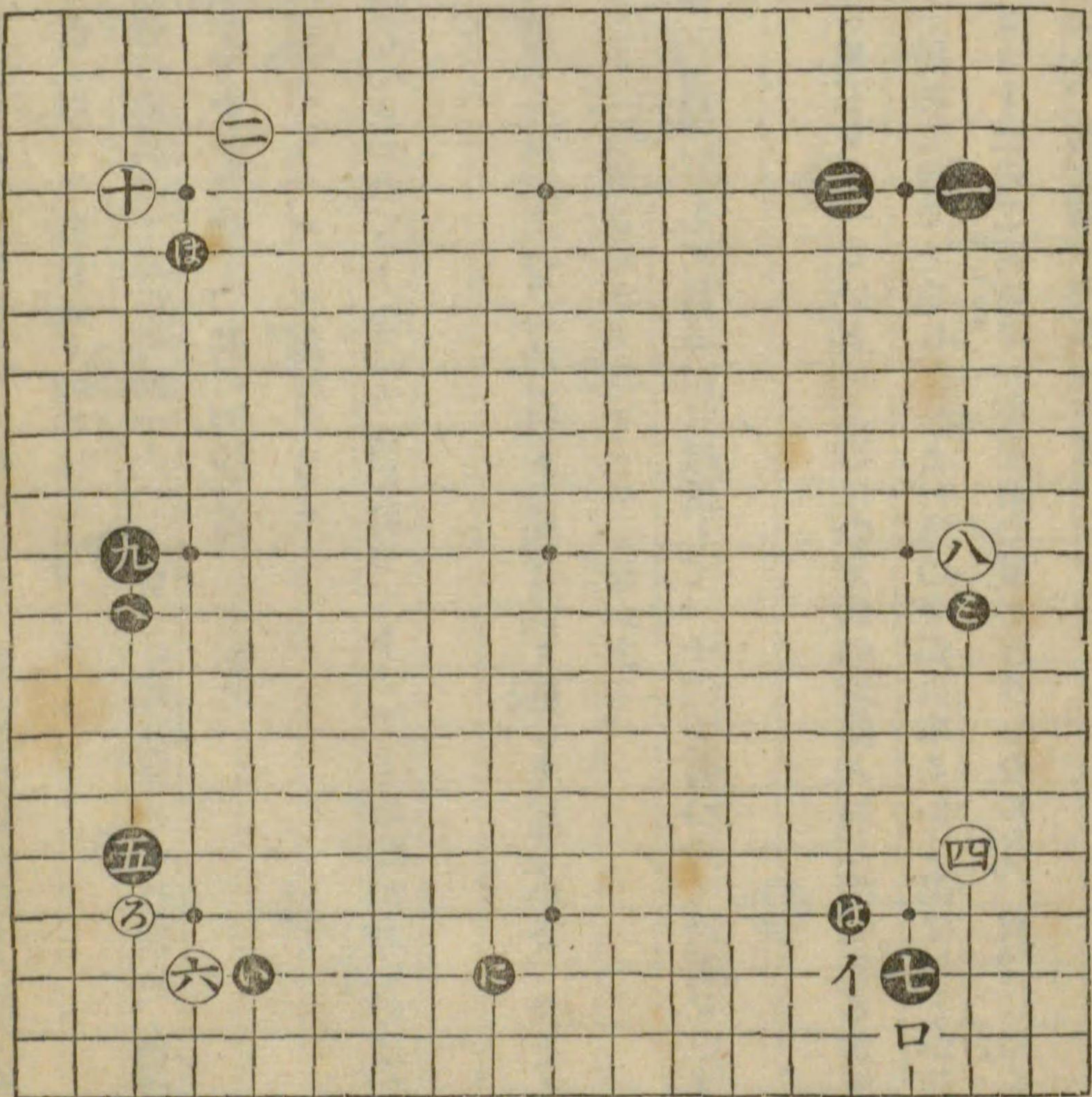
△問 黒七と掛かる手を以つて九と拓かは如何。

▲答 其は直に白に七の點へ縮られて面白くない、常に説く通り利害關係の大キイ「隅の掛り」を捨て、あいて急務でもない「側邊」の「拓き」をするのは輕重緩急の別を誤つたものである、且つ黒七の手で九と拓き、白に八の手で七と縮られると棋が廣くなり(變化の區域が擴大され)て白の利益を増させる結果になる。

△問 白が八の手で●と夾んで來れば黒は如何應ずるや。

▲答 黒も亦●と夾んで對抗姿勢を取るがよい、即ち然うなつた結果は黒の有利なる事一見明瞭であらう(黒が一、三と高縮して次て●と夾んだ姿勢は少しも間然する處がない然るに白が單に二と目外の一子のみで、次て●と夾んだ姿勢は極めて緩んだ形で「モノ」になつて居ない)

白十迄の結果を一見すると黑白殆んど同一姿勢である、只黒の一、三の縮が「二間高」であるに比して白二、十と「小斜走」であるの相違で、先手一着を黒は何處迄も執持して居る。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~



黒十一が此く斜走に高く打つたから白は堅固に二間拓をしたのである、若し反對に白から㊦若くは㊧の點へ高く打たれた後ならば黒は㊨と堅く二間に拓くの外はない。

「註」此の左右黒白の打着點の關係は前第二十局第四百十六、七頁を反覆熟讀せられたい、彼處の説と茲とは黒白左右の位置が更つてをるだけで、其の理論は同一である。

黒十三の二間詰は或は㊩と右側の白に迫つて一バイに詰めてもよい。

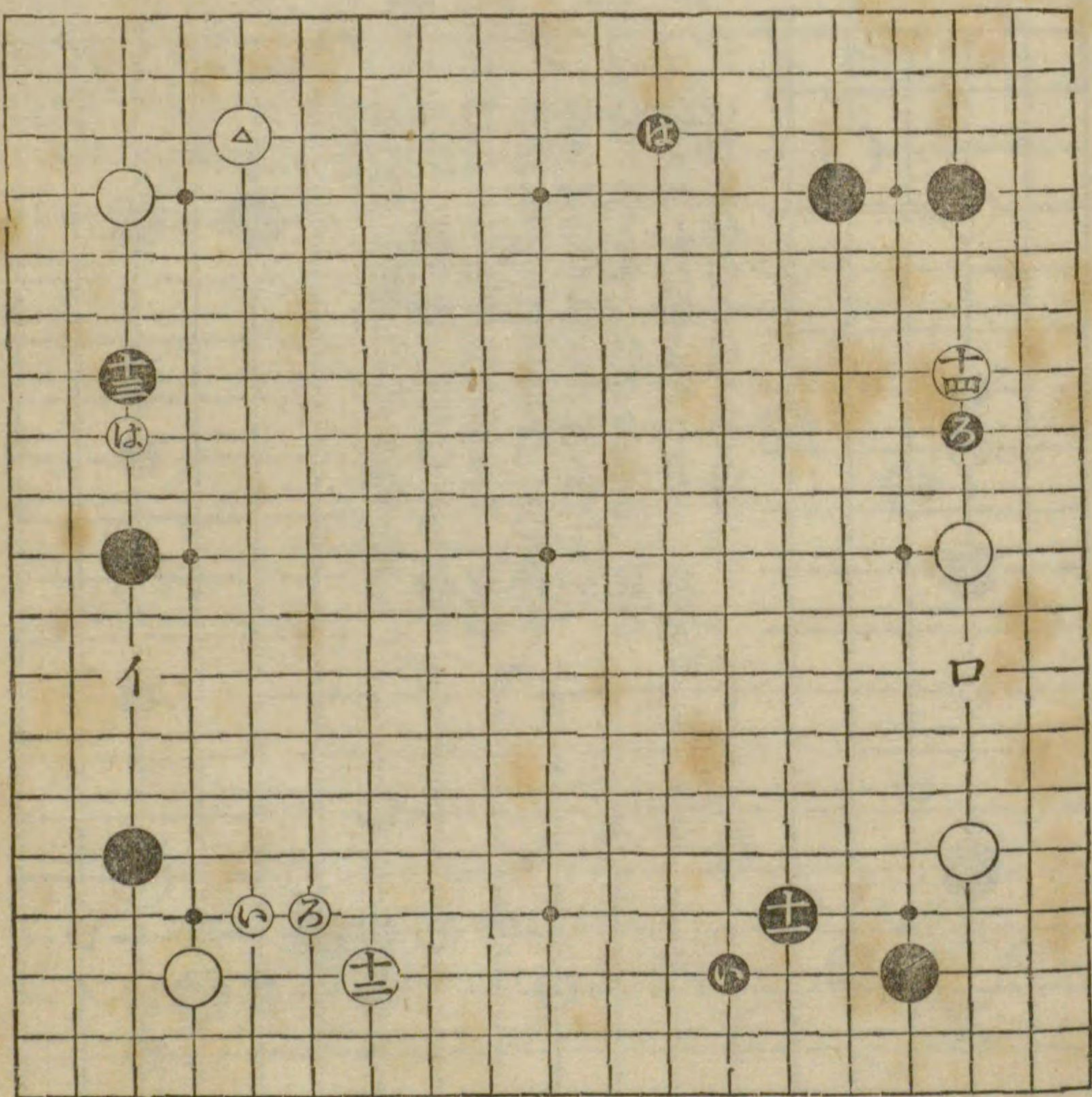
△問 「十三を㊩と右側に詰めてもよい」とのみで「上側㊪方面に打つてもよい」との説が無いのは如何なる譯なりや。

▲答 上側㊪方面は不急である、何故ならば左上の(△印)白が堅固に低く締つて居るから、たとへ黒が㊫方面に着手しても其の影響は白に及ぼさぬから緩いといふ嫌がある。

△問 然らば黒が、左上隅堅固な「小斜走締」をして居る白に接近して、十三と打つのも緩著にはあらざるか。

▲答 黒十三の一子が左上隅に痛切な感じを與へないといふ事は㊬方面の着點と同じ様であるが此の十三の點を打たずして白から㊭と詰められると直に(イ)と打込の手が出来るから黒は何とか防衛手段を講じなければならぬ、つまり十三の二間拓は左側黒地の壁を厚うしたのと、尙㊮に詰られては白に少からぬ地を造らせるから、其を妨げた事になる。

「註」要するに十三と十四とは同價値であるが更に詳細に比較すると、右側へ黒が㊯と詰めるのは、次で(ロ)と白地へ打込む手になるから攻撃的積極的の手である、左側へ十三と拓くのは彼の地を窄めるといふ事にもなるが主として白から迫られぬための、防禦的消極的の手である、又左側へ白に㊰と來られたならば退嬰自衛の手より打てぬが、右側を白から十四と來られても、黒は之に應じて上側㊱方面に發展する餘地が充分あるから差支はないといふ様な趣がある。

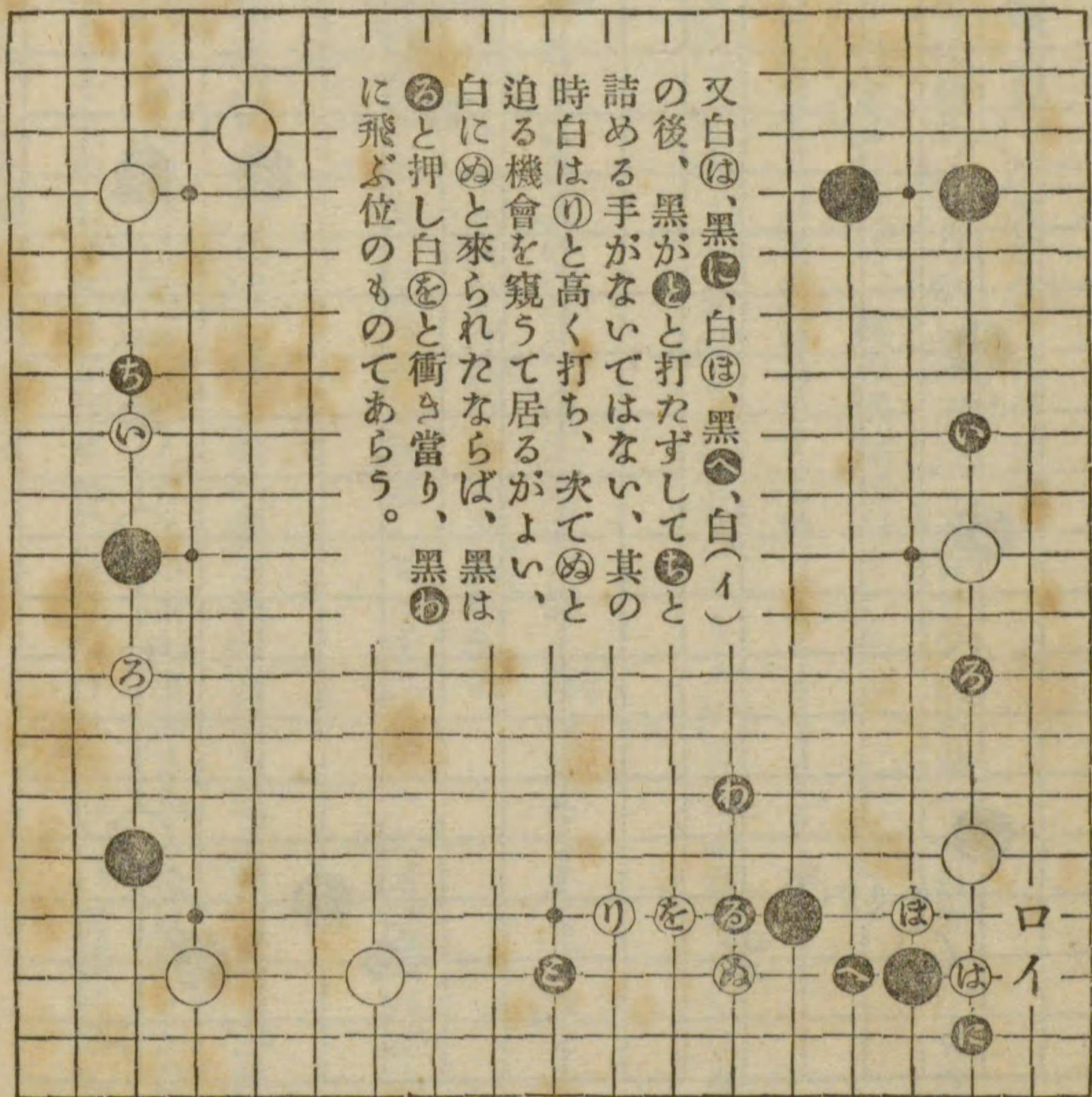


~~~~~(局先互法石布)~~~~~


「黒十三白十四の兩着交換の影響と其の趣意」

△(参考甲圖) 黒が十三の手で
●と右側を詰めて來れば、白亦
之に對抗して○と左側を詰め、
黒が●と打込んで來た時、白又
○と打込んで差支はないが局
面は非常に紛亂して來る、
又初黒●の時、白は○と打込ま
れる凌ぎとして○と右下隅三々
へ頂け、黒●、白○、黒●、白
(イ)と下り、黒が●と打つて形
を整へた時、白は○と詰める手
順となつてもよい。
又白は○と頂け、黒●、白○と
膨らみ、黒●の時、(イ)と下る
手を省略して○と詰め、右下隅
は若し黒から(イ)と縛ねて來れ
ば(ロ)と抑へて却に受けやうと
いふ覺悟で打つ手段もある、

(圖 甲 考 參)



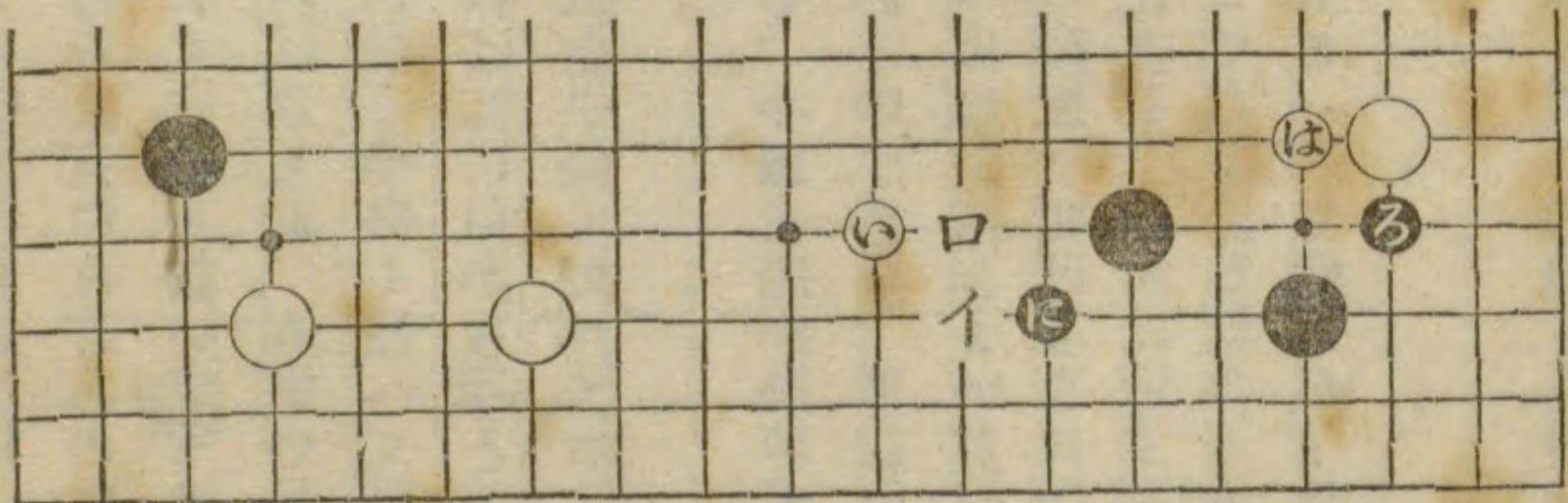
又白○、黒●、白○、黒●、白(イ)
の後、黒が●と打たずして●と
詰める手が無いではない、其の
時白は○と高く打ち、次て●と
迫る機會を窺うて居るがよい、
白に○と來られたならば、黒は
●と押し白○と衝き當り、黒●
に飛ぶ位のものであらう。

「次頁所載白十六の手の良好なる参考説」

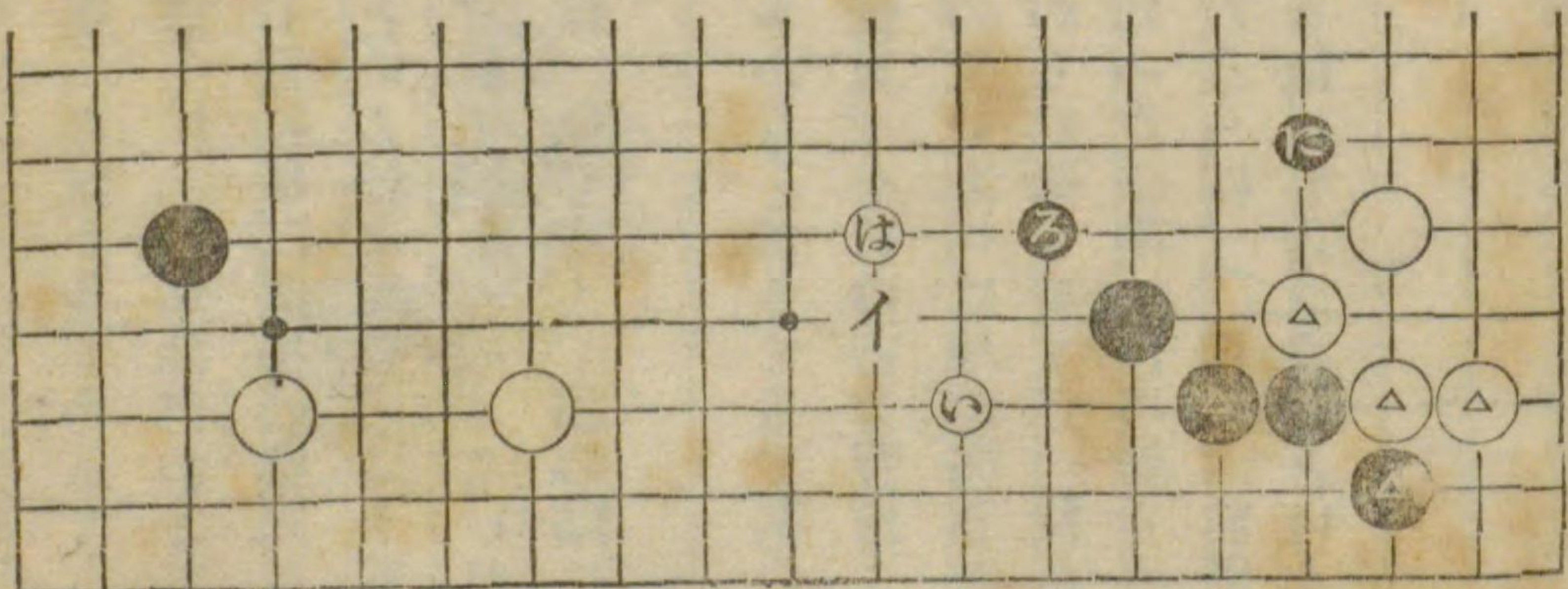
△(参考乙圖) 次頁白十六の手を本圖に示す
(イ)の點に打つたが何故良いかといふに、此
の處を黒が始末するとせば、先づ●と尖頂け、
白を○と立たして○と尖む位のものであらう
が、此く●と尖頂けられた時、白は(ロ)と立
つて非常の好姿勢になる、が若し之に反して
十六の手を(イ)と打たずに○と高く打つてあ
ると、黒に●と尖まれた時應じ方に困る。

△(参考丙圖) 然し是が若も右下隅が△印の
黒白五子が互に運んで圖の如き形になつた後
であれば、白は決して低くは打たぬ、必ず本
圖(イ)の點に打つ、若し此の形で白が誤つて
低く○と打たば黒に●と尖まれ、白は(イ)の
點に掛けられる手を防いで○と打つた時●、
から壓して打たれる手になつて太だ拙い。

(圖 乙 考 參)



(圖 丙 考 參)



~~~~~(局 先 互 法 石 布)~~~~~



△問 黒十五は少し窄い様なり、更に進んで●若くは◎と拓かば如何。

▲答 此の場合害ありとも決して益はない、廣く拓けば只白に打込の隙を與へるばかりである。

「註」 右上隅黒一間高締の黒の姿勢からして、◎若くは◎と拓いても敢て差支はないか如何かと言ふ事は一に附近の白の布石關係から打算しなければならぬ、本圖の様には二間拓の堅固な白が迫つて居る、又左上には小斜走締の△印白か低く手堅く控へて居るといふ様な場合には十五と打つのが限度であつて其以上の廣い拓きをすれば直に白から◎と打込まれて禍を惹起さなければならぬ、更に翻つて言ふと今茲で自重して十五と手堅く備へておくのは、他日進んで◎の點に迄も一パイに詰め得られる準備になるのである。

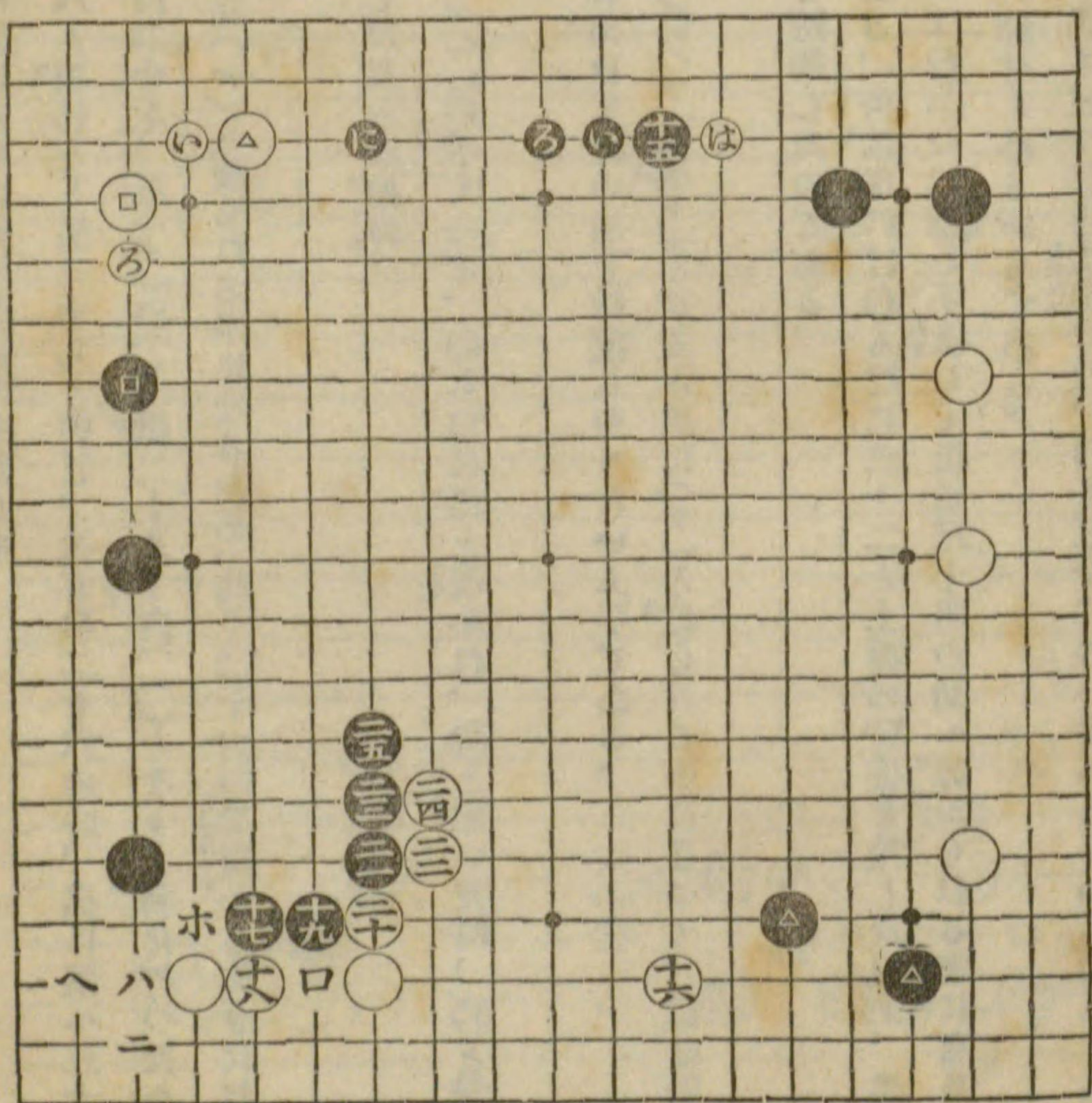
尙念のため記しておくのは小斜走締の方向である、小斜走締が堅固であるからと言つても、其の石の向き方によつて其の方面に及ぼす力に差があるのである、即説明の便宜上小目の方を背面と呼び、目外の方を正面と呼んでおく、即背の方へは地が拓きよいが正面の低い方へは地が拓きニクヒ、随つて地の拓ける方へ鋒を進めるのは彼の發展を妨げる事になるから意味をなすが、彼が來ぬ處へ行くのはツマラヌといふ意がある、更に之を具體的に示すと、此の左上隅の白の締り方が、若も□印小目が◎に在り△印目外が◎と打つてある様な場合であつたならば、□印黒(前圖十三)が二間に詰る事が愚であると同時に、十五の一子は◎と星下邊迄も進んで差支ないといふ事になる。

黒十六は此の場合最も好點である。

「註」 此の理由は前百六十七頁參考乙、丙の兩圖と其の説明とを參看せらる可し。

黒十七以下の手は白の十六が低いから此く打つてキマリをつけたのである、然し此の十七の手で十九の點に掛け、白に(ロ)と打たせて(ハ)と頂け、白(ニ)黒(ホ)白十八黒(ヘ)と運んで治まれば隅に於ては慥に利益であるが上方が手薄くなる、本圖十七以下二十五迄の様運べば、隅に白から打たれる餘地はまだ残つて居るが上の方は頗る厚壯な姿勢に成つて居る。

「註」 本圖の結果白十二と十六との間が廣い程十六の一子がハタライてをる、此が一路でも左へ寄れば寄るだけ白不利である、又白に二十二、二十四と押されて黒が二十三、二十五と行ければ行びるだけ黒は利益が確實になる。



~~~~~(局先互法石布)~~~~~


△問 白二十六を二十八から先きに頂けぬのは如何なる理由なりや。

▲答 白二十六の手を以つて二十八と頂けると黒二十九と應じ、次て白二十六の時、黒に隅へ三十三と緯ねられ、振替を打たれて、白二十七、黒(イ)白(ロ)黒二十八、白(ハ)となり、初に打つた△印白一子の効力が薄らぎ、次て黒に(ヌ)と曲られる手になるため、此く二十六の尖頂から先きに打つたのである。

△問 黒三十一を(ニ)と一間に飛出したならば如何。

▲答 其は左右何れへも利かぬ「ハンマ」の手である、即ち白に(三)と覗かれ、(四)と粘いだ時、(五)と飛ばれては何にもならぬ。

黒三十一の尖は、次て(六)と白の肩に掛けて此の地を蹂躪しやうといふ手である。

「註」 黒に(七)と掛けられ、白(ホ)黒(ヘ)白(ト)となると黒に(チ)と截られる手になつて、白は限りなき損害を受けねばならぬ。

白三十二は黒に(八)と壓せられる手を防禦したのである。

黒三十三は先手で眼形をしたのである、何故なれば白も已に三十二と上面の防備を施した以上、黒三十三の尖頂に對して手拔する譯には行かぬ、若し手拔して黒に三十四の點へ緯ねられる事になると、折角圍うた三十二の効力を空に歸せしめるからである。

「註」 白が三十二と圍うたから、黒も三十三と尖頂けた、白も三十二の一手があるから黒三十三

の尖頂けに應じて(リ)とは立

たずに三十四と下つたといふ

相互の意味は『布石二子第十

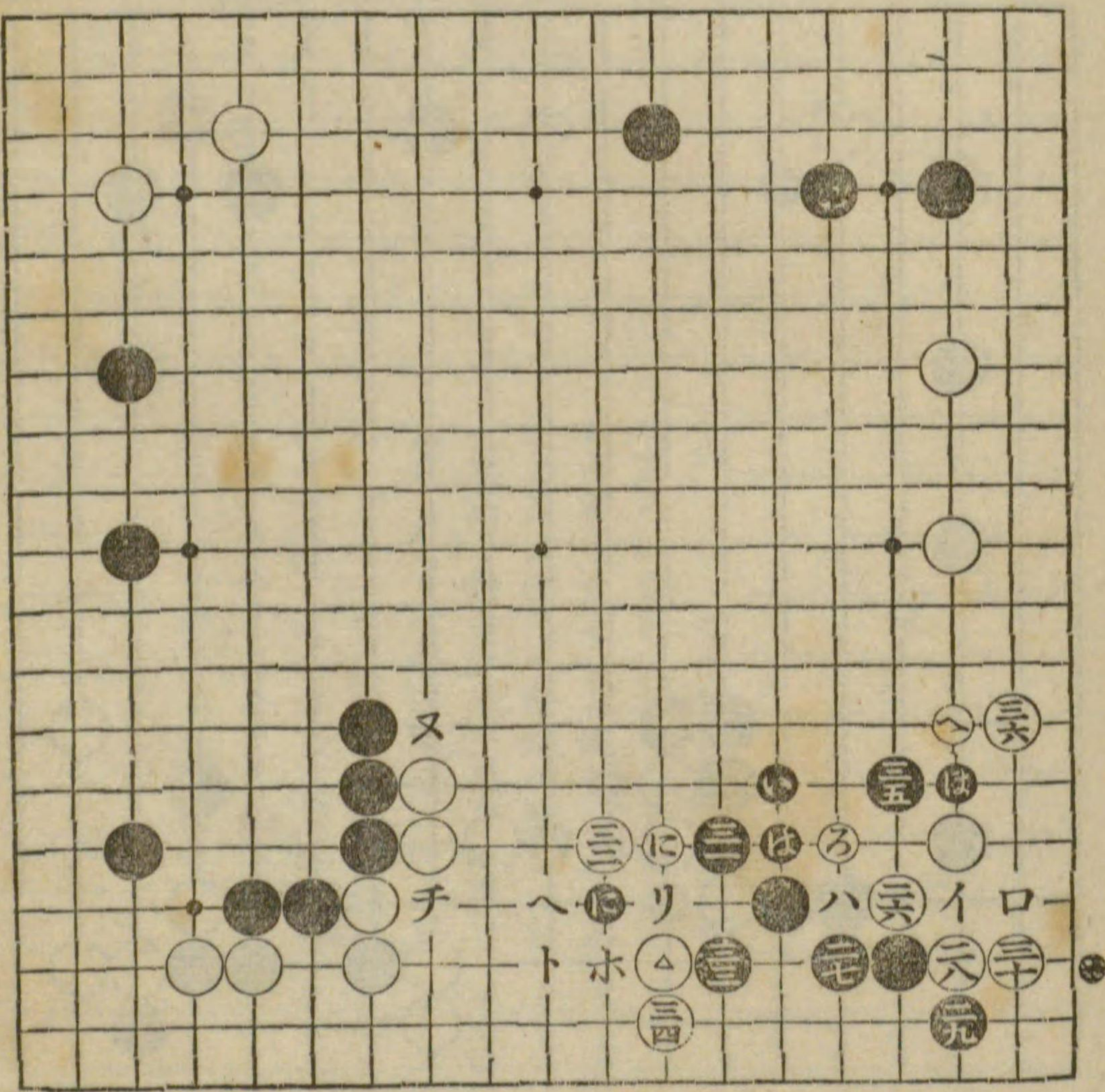
四局第八十一頁黒十六』の手

の説明と同一意である。

黒三十五は、若し白が手拔すれば直ちに(九)と斷ち截うといふ手である。

白三十六の盤りは普通である、が此の場合(十)と飛んで盤るのも敢て差支はない。

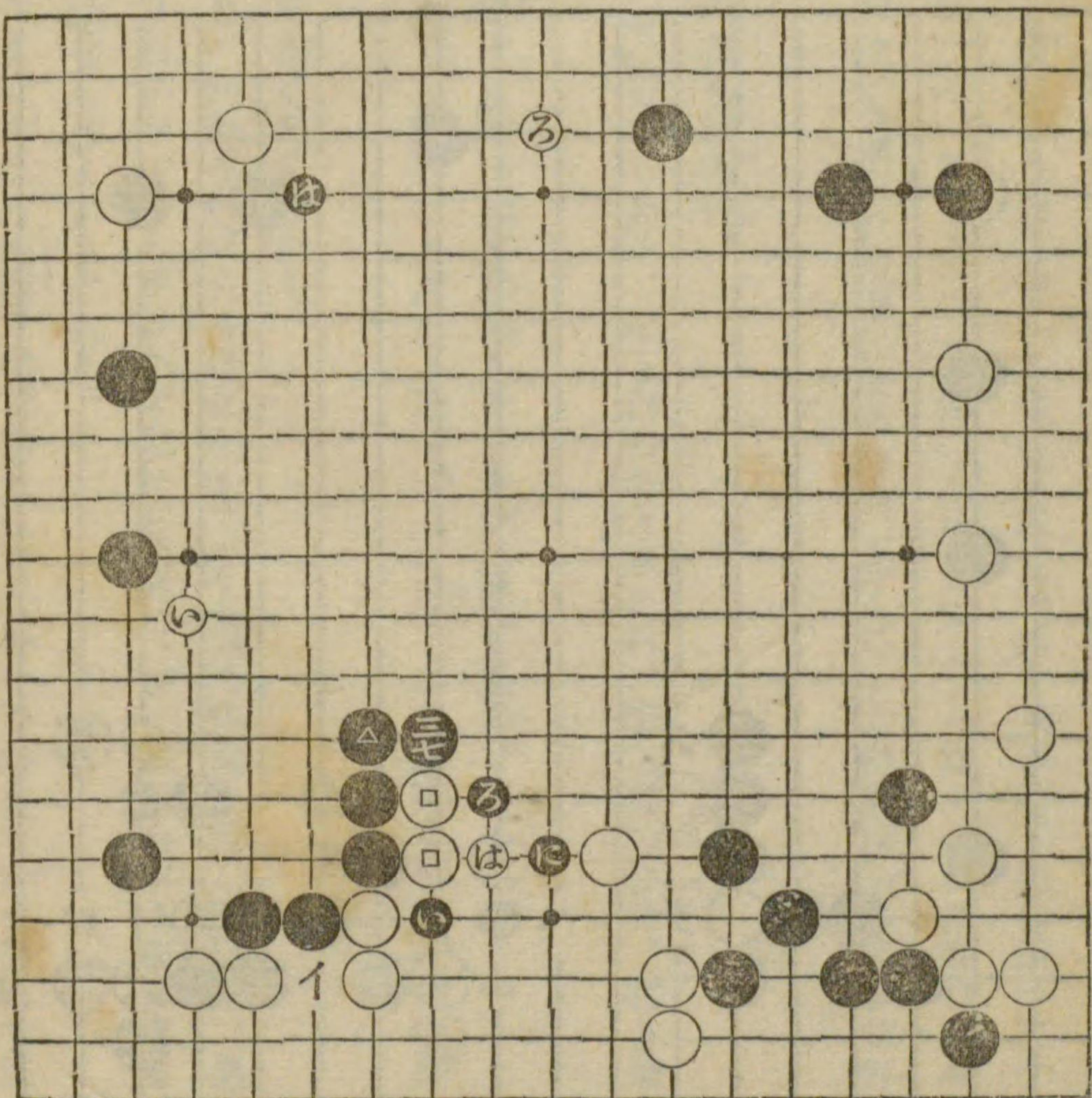
「註」 黒に三十五と來られた時(十一)と飛んで盤るも差支ないといふのは、此の處白が堅固である爲め截られる恐がないからである。



(局先互法石布)

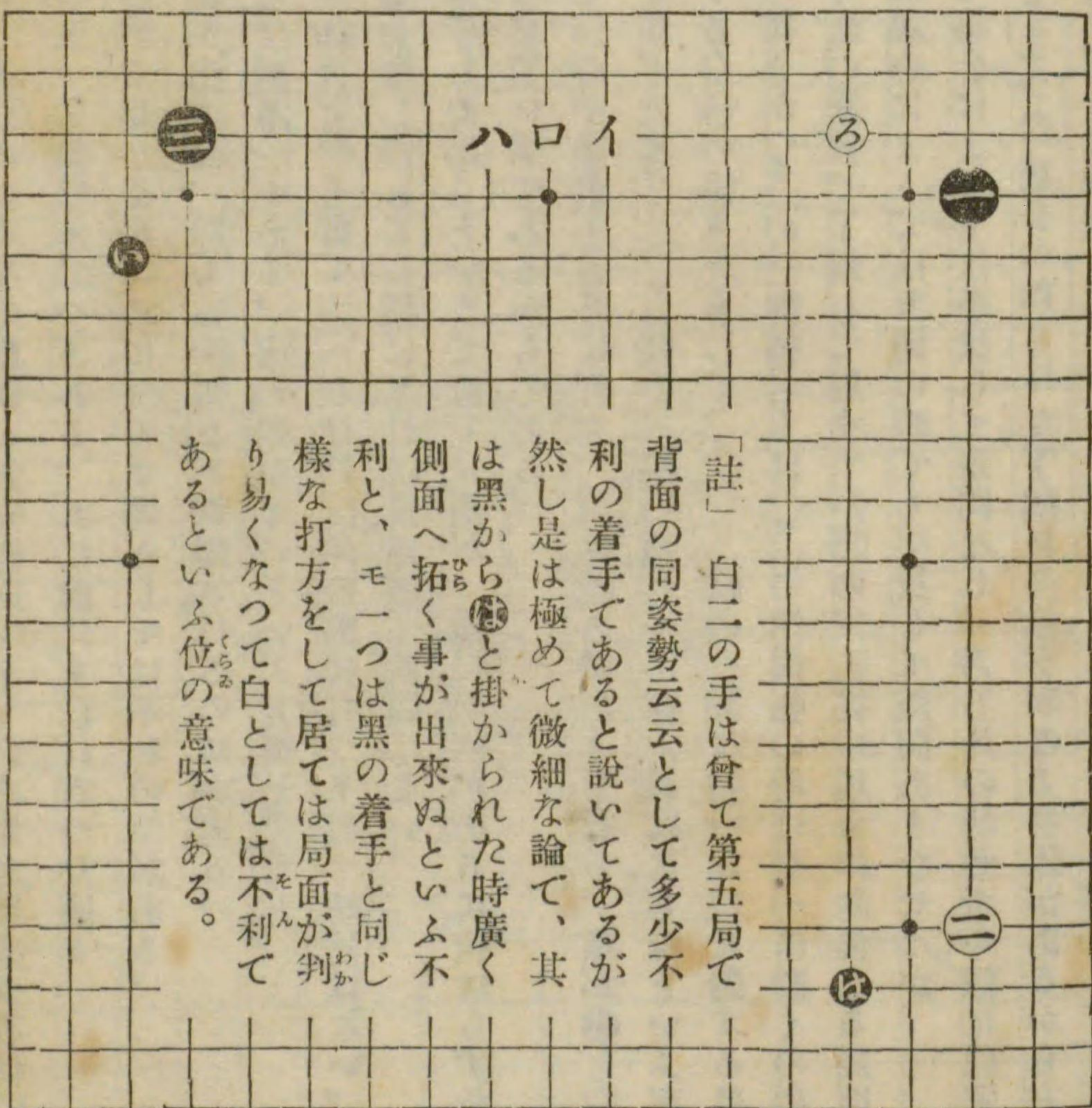
黒三十七は左側の我が地を手厚くして、兼て□印二子を「ダメヅマリ」とする手段である。

「註」 △印黒及三十七と黒の勢力が加はれば、白は容易に○の邊に進む事が出来ぬ、又□印白二子が此くダメヅマリになると、黒からは(イ)の突出を保留して、●と截る手もあり、或は○の截を見て●と綽ね、白が○と應じれば●と猛烈に綽込む様な手もある。
△問 白が三十八を○の邊に詰めれば黒は如何應ずるや。
▲答 黒は○の邊から消す位のものであらう。



互先第二十四局

黒三は普通の着手である、が或は●と目外に打つてもよい、若し黒が此の三の手で●と打つたとすれば白は○と掛かり、黒は三の點へ締る手順となる、さうなると今度は黒から(イ)に夾まれる酷しい手が出来る故、白は此の夾を防ぐため(イ)(ロ)(ハ)の三點の孰れかへ拓かねばならぬ、乃て黒は先手を取つて左下隅即ち明隅へ着手する事が出来る順序になる。



「註」 白二の手は曾て第五局で背面の同姿勢云云として多少不利の着手であると説いてあるが然し是は極めて微細な論で、其は黒から●と掛かれた時廣く側面へ拓く事が出来ぬといふ不利と、モ一つは黒の着手と同じ様な打方をして居ては局面が判り易くなつて白としては不利であるといふ位の意味である。

~~~~~(局先互法石布)~~~~~



此の背面で敵の着手と同姿勢に打つた白の二の手の精評を茲に繰返すと、白の爲めに多少不利の傾のある意味が二つと、差問ないといふ意味が二つとある、其は前にも已に言つた通り

- 一、同姿勢の結果は自然に局面が判り易くなる爲めに白の立場としては不利の傾がある。
- 二、黒に掛かれた時廣濶なる拓が出来ぬ、即ち多少拓きを制限されるの傾がある。

といふ此の二つが不利の側に屬して居るのである、次の差問ないといふ方面を言ふと

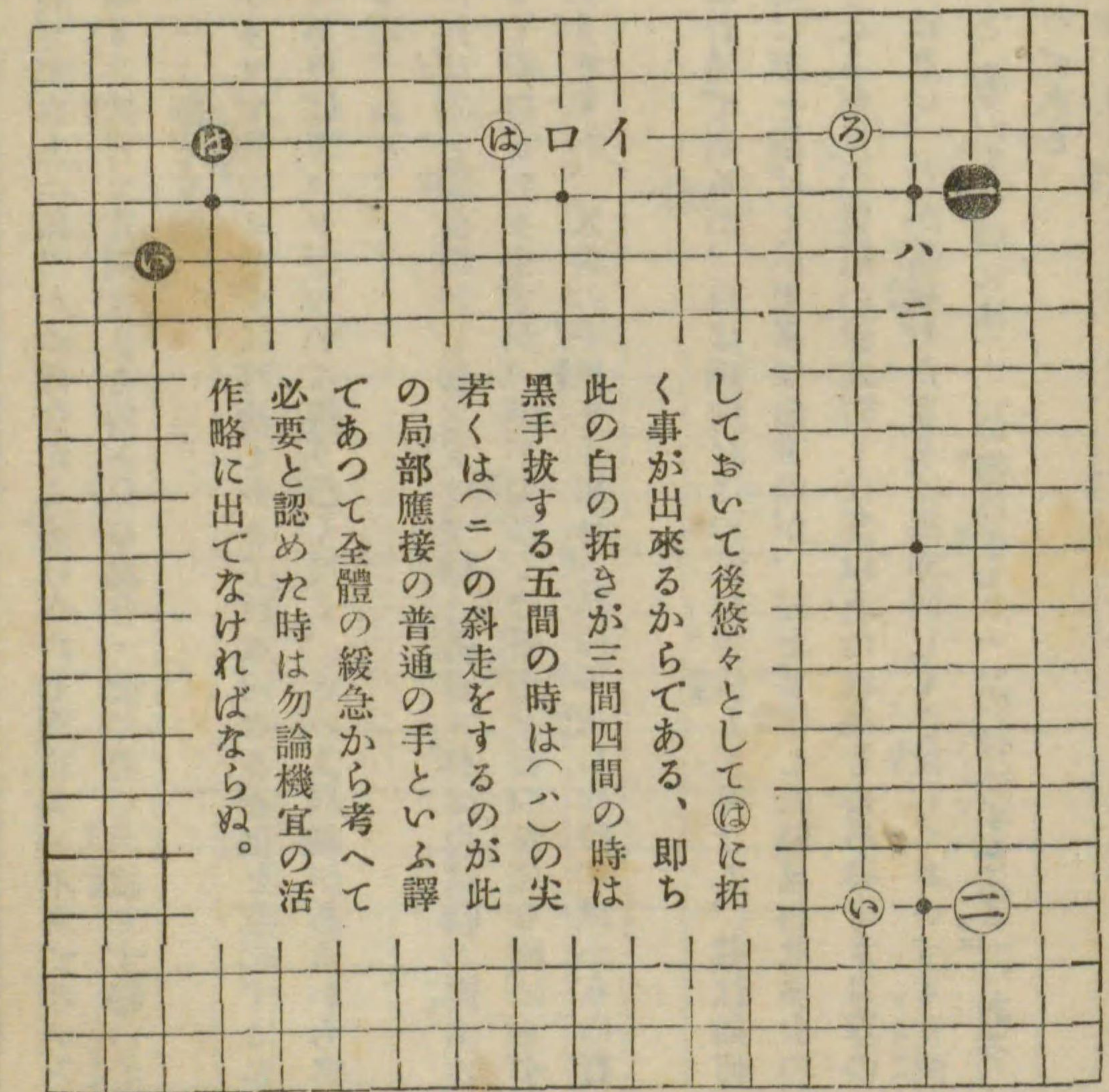
- 一、白が二と打つ當初に於て廣い拓きをする考てさへなければ此の點に打つも敢て妨げはない。
- 二、又自然の手順で白が⑤と高締をなし得らるゝ様になれば是亦敢て差問はない。

何故なればたとへ白が此う二と着手したからというて直ちに黒が、他に明隅があるに拘はらず此の二に掛つて來るといふ事はあるまじい手であるからである。

□問、前述黒三の手に就て。黒若し三の手を⑥と目外に打ち、白は⑦と掛かりを打ち、黒が⑧と左上を締つた時、白は黒からの夾を拒ぐため(イ)(ロ)④の三點の孰れへか拓かねばならぬといふ事は解りました、又此の黒一に對する白②の掛りからして(イ)(ロ)④の三點に拓いた時に對する黒一の動きかたとして、白③からの拓きが(イ)の三間拓若しくは(ロ)の四間拓の時は黒一は動くの要がない、手拔する、といふ事は今迄の講義で了解して居ますが④の五間拓の場合は如何なる局面でも黒は手拔は出來ませんか、又場合によりては五間の時でも手拔して差問ありませんか。

○答、白の拓が④の五間の時と雖も場合によりては手拔して差問なし、乃ち此の局面否今茲に假定する黒一白二黒③白②黒④白④となつた場合の如きは左下隅に全然有利なる明隅があるから右上を手拔して此の左下の明隅に着手するは機宜を得たる手である。但し手拔するに決つては居ない尖若しくは斜走を打つて居てもよい。

(注及質問應答の參考圖)



して置いて後悠々として④に拓く事が出来るからである、即ち此の白の拓きが三間四間の時は黒手拔する五間の時は(ハ)の尖若しくは(ニ)の斜走をするのが此の局部應接の普通の手といふ譯であつて全體の緩急から考へて必要と認められた時は勿論機宜の活作略に出でなければならぬ。

□問、白③④の五間拓の時黒一の隅を手抜して白から(ハ)の點へ掛けられ低地を這はされる事になると非常な不利益ではありませんか。

○答、此の局部に就ては不利の如きも棋は全體の比較より打算するもの故、此の圖の如き場合は必しも差問なし、何となれば黒が掛けられて不利といふ事は反面から言へば白の有利といふ事になる、若し白から掛けるが絶對の有利であるならば、白は何時でも掛け得られる即ち先づ③と拓く手で(ハ)の點に掛け黒一を壓迫



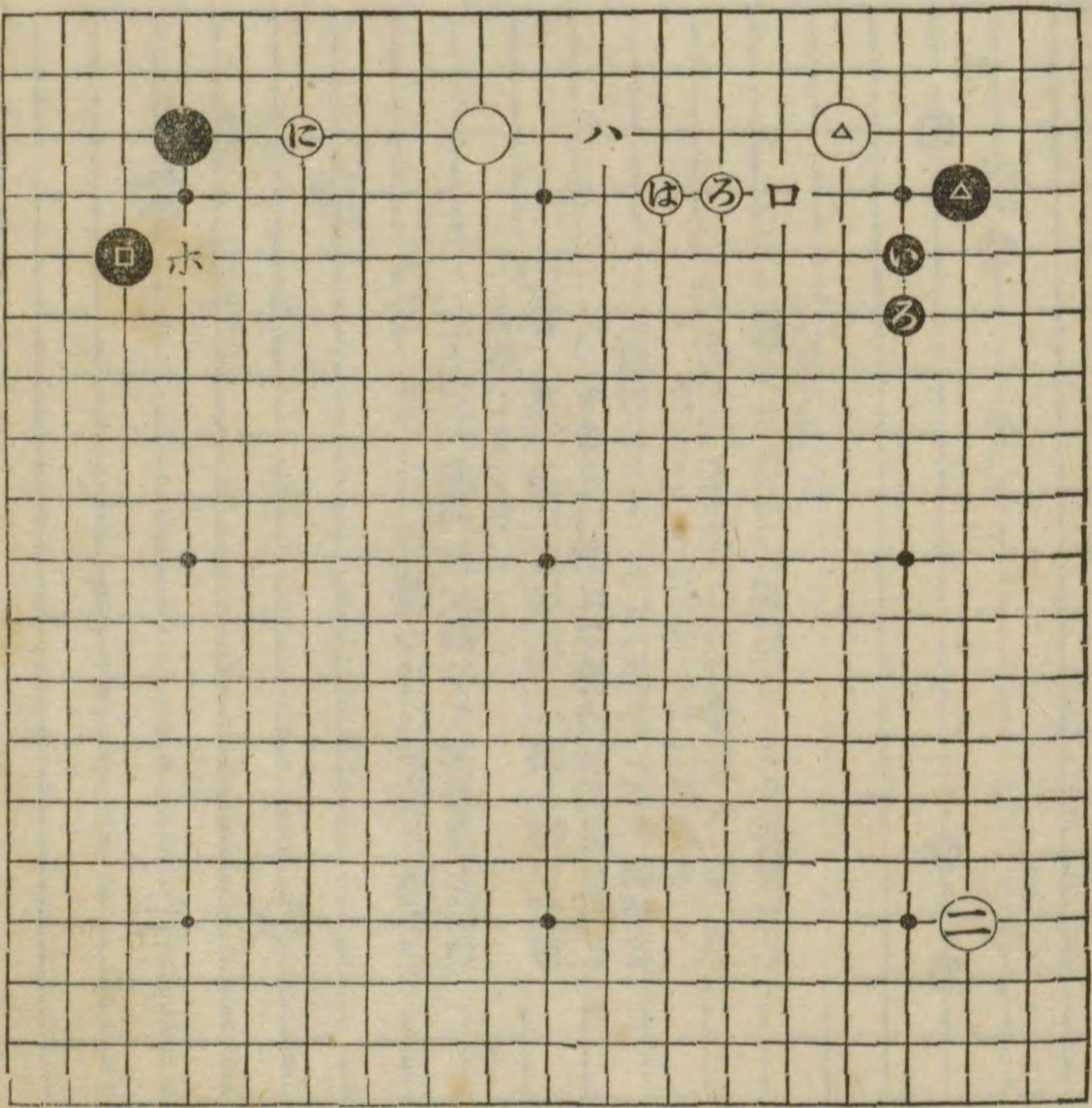
□問、参考圖の如き場合と否とを論せず右上△印黒が△印白から掛けられる事絶對に不利でないとするれば即ち（白の五間拓の時と雖も手抜して差間なきものと見る場合）此の黒を手拔せず⑤の尖若くは⑥の斜走に打つ意味は如何いふ譯ですか。

○答、白に五間に拓かれて黒が尖みもせず斜走もせず打捨ておきては如何なる變化を惹起するかも知れぬが、尖若くは斜走をしてあげばキマリがついて解り易くなる、といふ利益があるから多くの場合黒は尖若くは斜走をするのである。

□問、白五間拓の時黒が④と尖めば白は⑧と圍ひ黒若し⑥と尖まず⑦と斜走すれば白は⑨と圍ふのが常であるとは従來の講義によつて明白であります、黒が尖若くは斜走を打つたにも關はず白は全然此の處を手抜する事もありますか、又其の手抜する場合と其の手抜した時の黒からの打方及び其の結果は如何ですか。

○答、白が⑧若くは⑨と應じるのは普通であるが、白は趣向によつては手抜してもよし、其は如何なる場合であるかと一々具體的に茲に形を擧げて示す事は出来ぬが、茲を手抜した結果白は多少の不利を蒙るとも他に其の代償となるだけの策戰の餘地若くは其以上の利益を占め得可き目算の立ちたる時、とても言うておく外はない、白が手抜したならば黒亦同じく手抜しておいても差間はないが若し此の處を打つとすると、⑤の尖の時には（ロ）の掛け手と（ハ）の打込手との二つある、又⑥の斜走の時（ハ）の打込手一つである。茲に一つ附記しておかねばならぬのは白手抜して黒に（ハ）と打込れた時、白は左上へ向つて⑩と

（参考圖第二）



（局先互法石布）

二間拓するものとして、其の時左上既着の黒の配石が本圖の様に□印の小斜走縮てあれば此の二間拓の白は餘り苦しくもないが、若し黒の縮が一問高縮即ち（ホ）の點にある時は⑩と二間に拓いた白は痛切な感じを受けねばならぬ。乃て白は此の五間拓を手抜するかせぬかといふ事を考慮する初に當つて先づ左上の黒の配石の状態に注意を拂ふの必要がある、附近の敵状をも察せずして漫然として着手し若くは手抜するといふ事は大に慎しむ可き事柄である。

■左上の縮が低ければ抜いても差間ない高ければ抜けぬ。



□問、黒三の手で●白○黒●白

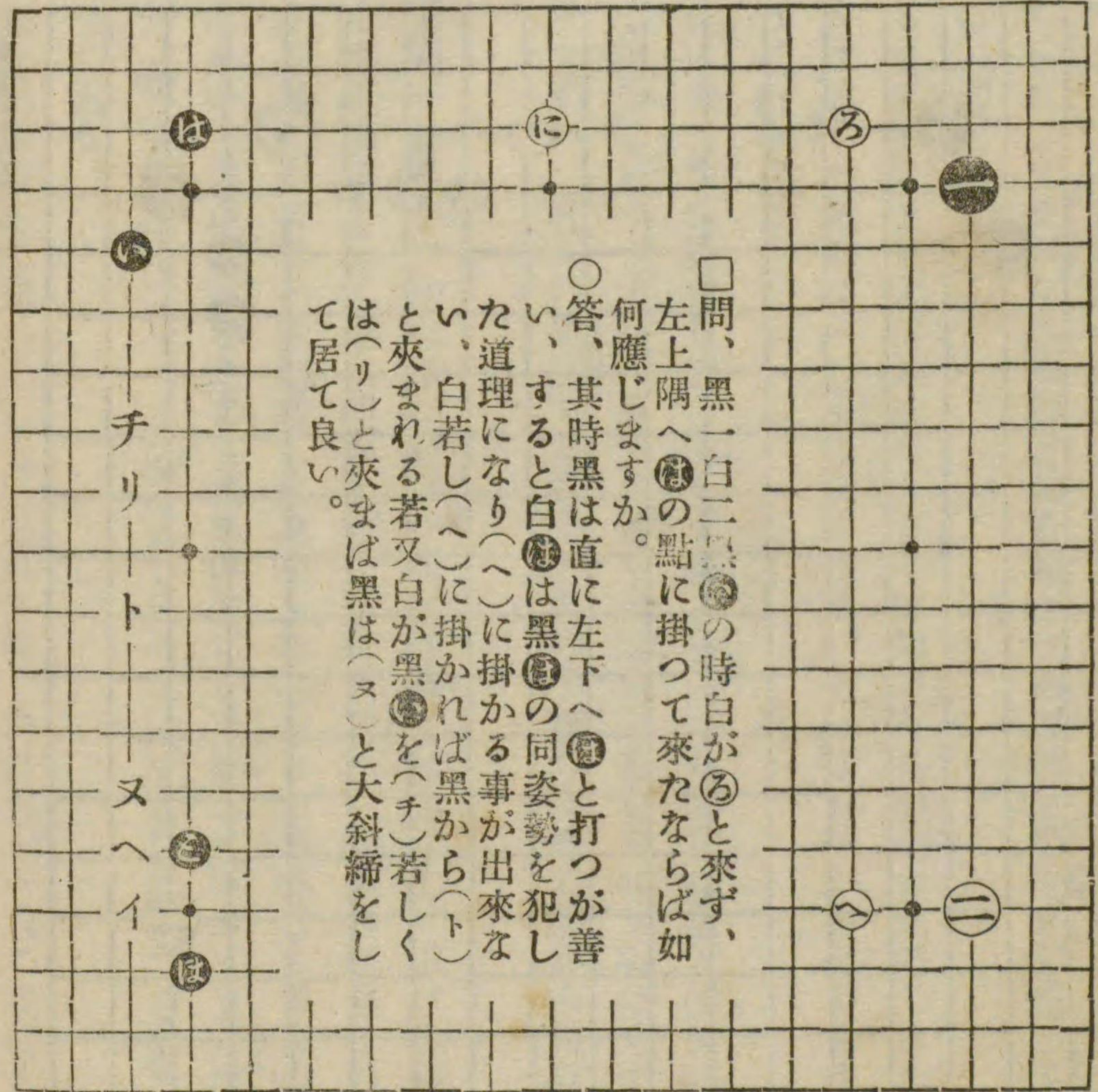
○となつたと假定して其の時  
黒着手す可き點は左下隅の何  
れてしやう。

○答、(イ)の點を避けさへすれ  
ば他は何れでもよろしい(イ)  
の點は白二と同姿勢を犯すの  
みならず、左上の低い●との  
均衡上面白くない。

□問、黒が●と打つたと假定し  
て、其の時白は何れへ打つが  
よいのですか。

○答、●に對して掛りを打つ外  
はない、若し○と右下を縮ら  
ば直ちに黒に●と左下を縮ま  
られて「縮り縮り」となる白  
の不利は從來屢々説いた通り  
である。

(參考圖第三)



□問、黒一白二●の時白が●と來ず、  
左上隅へ●の點に掛つて來たならば如  
何應じますか。

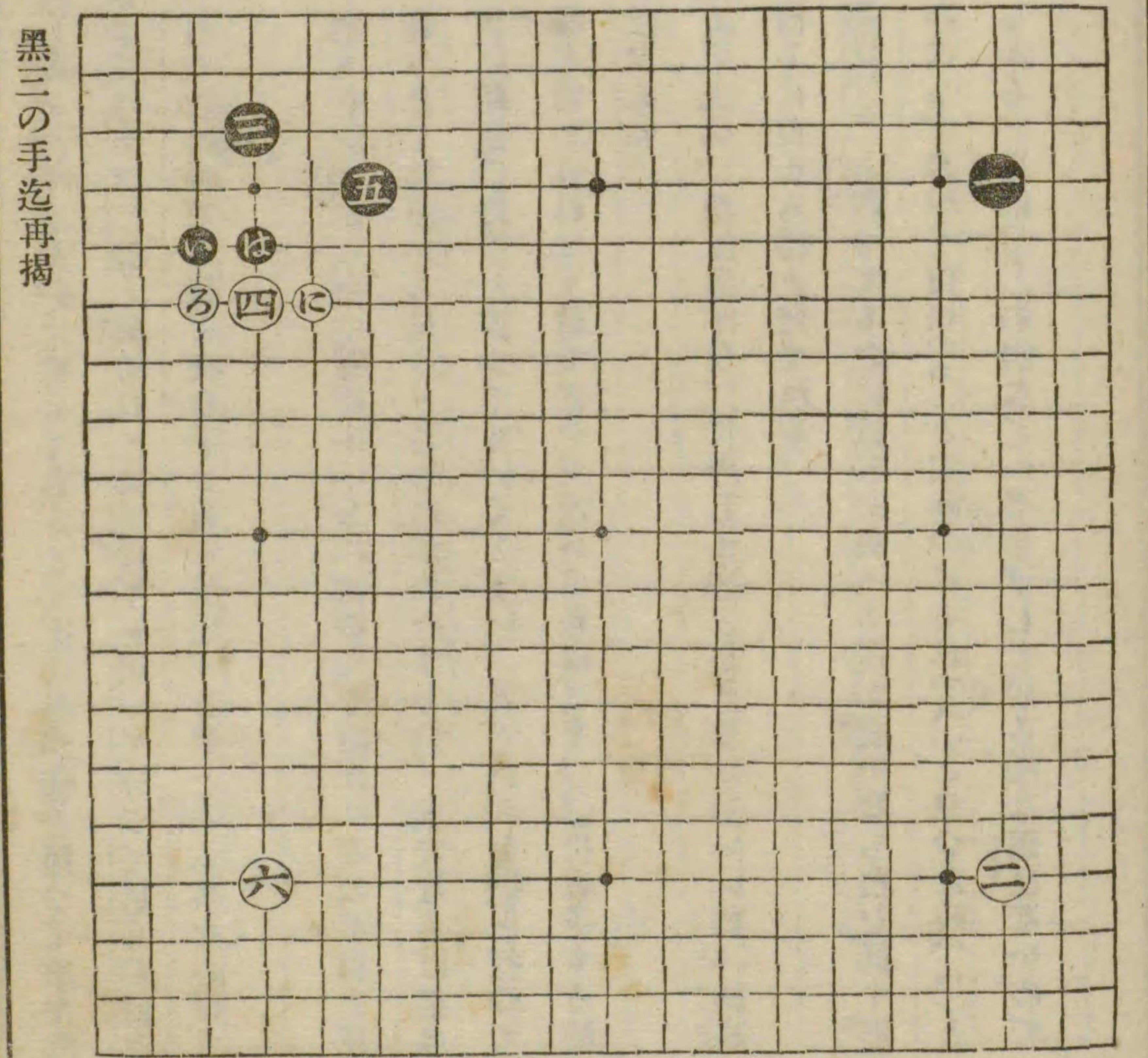
○答、其時黒は直に左下へ●と打つが善  
い、すると白●は黒●の同姿勢を犯し  
た道理になり(へ)に掛かる事が出來な  
い、白若し(へ)に掛ければ黒から(ト)  
と夾まれる若又白が黒●を(チ)若しく  
は(リ)と夾まば黒は(ヌ)と大斜縮をし  
て居て良い。

(布石法先局)

(本圖)黒三は普通の手である。  
白四は策略のある手で面白い、  
乃ち黒に五と應じさせ黒の勢力  
を偏重させておいて先手を取つ  
て左下隅の要地を六と占めやう  
といふ手である。

□問、然らば此際黒は白四の命  
に應じて五と後手をとるの外  
はありませんか。

○答、黒五は普通の手である、  
然し強いて先手を取らうと思  
へば五の手で●と打ち白○の  
時●と押し白○と立つた時黒  
は左下隅へ着手する事も出來  
る。すると此の左上一隅では  
白を強くさせて多少不利の様  
であるが、其の代り左下の明  
隅に先鞭をつけ得らるゝの利  
益がある。



黒三の手迄再掲

(局先互法石布)



白六は小目に㊦と打つてもよい、然し此の六の手が㊦に打つてあると、次に黒が㊦と掛つて來た時其を㊦と夾む事が出來ない、若し夾めば忽ち黒に㊦と掛られて㊦と後手を引いて守つて居らねばならぬからである、即ち六の時に㊦と打つのは次の黒㊦を夾む手を自ら制限する手といふ事を心得ておかねばならぬ。

「註」 白㊦黒㊦白㊦黒㊦の時白手扱すれば黒から㊦の點に掛けられ低地に壓迫されるの不利を見るは今更言ふ迄もない所である、即ち之を反面から見ると若し白が六の手を㊦來たならば黒は直ちに㊦と右下隅に掛かつて來べきは確定の着手と言つておいてもよい、其で白六を㊦と打つても差問題ないといふのは「次で黒に㊦と掛かれても敢て之を夾攻める考はなく、他に着手する策戦の時に限る」と記憶しておかねばならぬ。

本圖の如く白六が高く星に打つてある以上は、黒は右下白二に對して㊦と掛る事は悪い（但一間高掛ならば可なり）何となれば掛れば直ちに白から㊦と夾まれる。

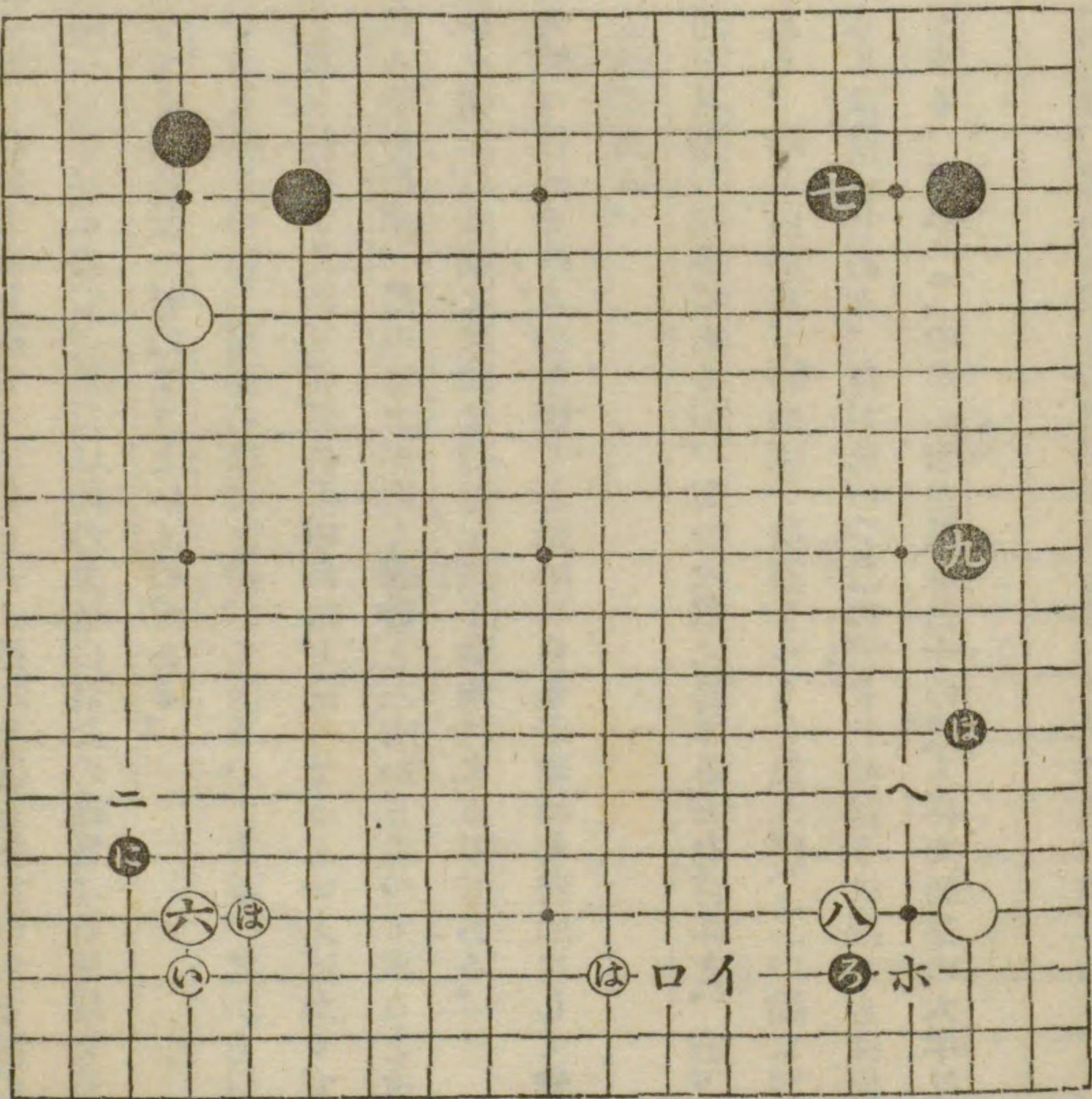
「註」 今度は白六が一路高いため黒は（ニ）と打つても之に感じを與へる度が緩い即ち白を低く這はさうといふ様な手が利かぬ、のみならず却つて白に（ホ）と尖みつけれ（八）と立つた時（へ）と煽られる例の酷しい手が残つて居るから、黒は（ニ）の邊などへ手を下して居る様な邊はないのである。

尙圖の如く白六が星にある場合、黒が㊦と右下隅へ掛つた時は、白は策戰次第で㊦の三間夾の外（ロ）の二間夾若くは（イ）の一間夾孰れなりとも任意の行動を開始してよいのである。

黒七は已に右下隅に㊦と掛つても白を攻める事は出來ず却つて黒自身が攻められる境遇に立たねばならぬ故、先づ自己の地域を守る最大場たる右上を此く高締りとしたのである。

白八も亦重要な點である。

黒九は右上一間高締りと相待つて側面發展の好位地で次で、㊦の邊に鋒を進めて己が地域を拓くと同時に右下隅の白に迫まらうといふ手である。



（局先互法石布）



白十は三種の意味を含んでをる、即ち第一は此の所を捨て、おくと次で黒から●と拓かれ右下隅の我地は悪影響を受けるから先づ之の拓きを妨げるので、第二は此の手は白自身の確實なる地域を造る手になる、第三は右上の黒地へ向つて十三の點へ打込まうといふのである。

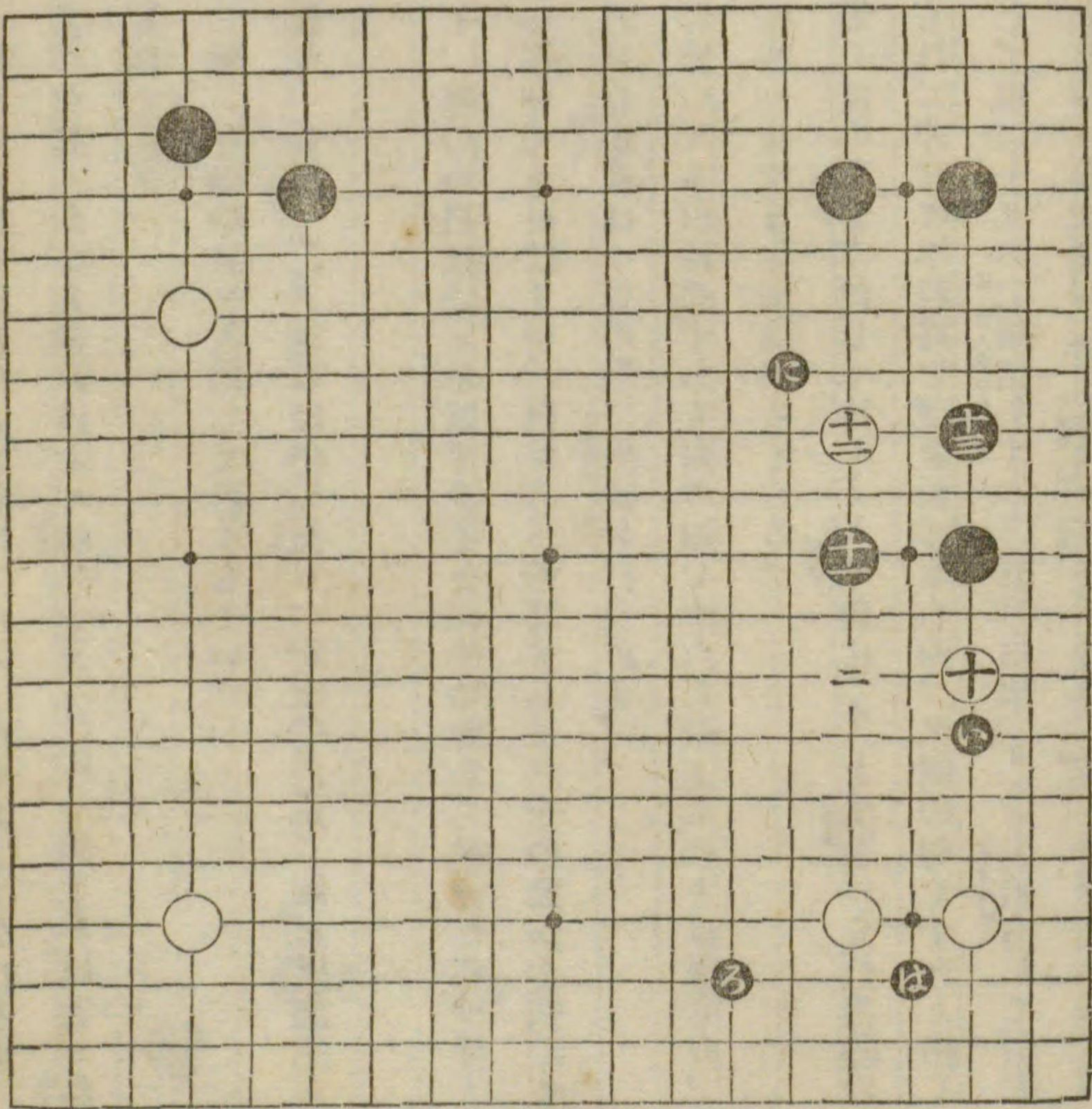
「註」 一見窄きに似たる此の十の一着も此くの如き重要な任務を帯びて居るのである、其から白が此の手を打たずして若し黒に●と來られると其は單に彼れ黒の地域を造らせるといふばかりでなく、次で黒に●方面から迫まられる手が出來、黒の勢力が此く●●と左右から迫つて來ると次には●●に打たれて右下隅の白は死命を制される様な危殆な形勢を醸す動機になるのである。

黒が十一と單關したのは、白に十三の點へ打込まれるのを拒ぐと同時に自らの地域を宏壯にして兼ねて右下隅の白地を侵略しやうといふ手である。

「註」 黒十一はヤハリ攻防の二作用を具備した手であるが、其の攻撃に屬する方を言ふと、右下の白の厚みを消さうといふ着手である、即ち白が右下の地域を防護しやうと思へば(ニ)の點に同じく單關せねばならぬ、然しながら其は後手である、白が此の(ニ)の飛をせぬ限りは黒からは何時でも(ニ)の點に鋒を進める事が出来る、黒が(ニ)の點へ來た限り白十の贏ち得た利益の大半は空に歸する譯である。

白十二は黒の地を消さうといふ着手である、此かる場合に黒が十三と應じるは普通の手である。

「註」 白十二は單に此の一區域の黒地を侵害するといふのみでなく、種々の味を他日生ずる手である、或は上側黒の大地へ打込む伏線とも見る事が出来る、又局勢の進行上左下隅で征ても出來れば此の一子が如何程活躍するか判らぬ、又此の白十二がなければ黒は●の邊に一着を備へて此の大地は治まる所であるが、此の一子ある以上之に牽制されて容易に治りはつかぬ、又白から言へば已に低く彼の地の中へ十三と應じさせた以上はモ早此の一子を提られても惜しくはないといふ意味も生じて來る。



布石法互先局